

【悲報】 ケモナー嫌悪民のワイ、ケモノに墮とされる

生牡蠣

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

転生してモテモテになるはずが、周りはケモノだらけでした…

## 目次

### 番外編

番外編：ワイ、スペックを晒される | 1

ほんへ

ワイ、幼馴染のネコに墮とされる | 5

ワイ、幼馴染のネコと博物館でやる | 15

ワイ、ギャル風オオカミとイチャラブする | 24

ワイ、ギャル風オオカミとお医者さんごっこする | 33

ワイ、キツネにカチコミを仕掛ける あと踏まれる | 45

ワイ、迷探偵なウサギに手コキされる | 56

ワイ、迷探偵なウサギの王子様になる | 67

ワイ、エジプトネコにマツサージされる | 78

ワイ、エジプトネコがママになる | 88

ワイ、大人なオオカミに監禁される | 100

ワイ、大人なオオカミをわからせる | 112

ワイ、修羅場る ※ふたなり注意 | 125

ワイ、ハーレムる ※ふたなり注意 | 138

ワイ、デザイナーなゾウと再会する | 152

ワイ、デザイナーなゾウをベッドにする | 164

ワイ、たぬきをハメる | 178

ワイ、おっとり系オオカミのモデルになる | 192

ワイ、おっとり系オオカミとベッドでイチャる | 202

ワイ、お嬢様なヒツジの婚約者になる | 214

ワイ、お嬢様なヒツジをモフる | 224

ワイ、ツルみみたいなダチヨウにセクハラする | 237

ワイ、ツルみみたいなダチヨウの羽毛を堪能する	248
ワイ、ラブドールを釣り上げる	258
ワイ、はにわウサギの中に出る	268
ワイ、ほっぺカエルに舐められる	280
ワイ、ほっぺカエルとぬるぬるする	290
ワイ、キザ男ナリスの家に転がり込む	301
ワイ、キザ男ナリスをわからせる	311
ワイ、ロリロリナリスとデートする	323
ワイ、ロリロリナリスのハジメテの雄になる	333
ワイ、ハロウィンにクイズ大会をする	345
ワイ、アスリート系ウマむ〇めのトレーナーになる	357

## 番外編

### 番外編：ワイ、スペックを晒される

皆さーん、楽しいケモシコライフを送れてますかー？

たまくに本編にも出てるケモナー……失礼、転生の神です。

今回は番外編ってことで、タロー君のスペックやその他裏設定なんかをちよつとだけ教えちゃうぞ☆

タロー君のスペックは気が向いたら更新する予定だよ

それじゃ、行ってみよー!!

## ○プロフィール

名前：タロー

年齢：???

(この作品的に18歳以上なのは確定)

出身地：GC村

(ゲームでキューブな村に住んでいた。住民はタロー君一家以外は獣人だった模様)

種族：人間

誕生日：???

性格：エッチ

口ぐせ：ファツ!? ンゴ クレメンズ その他なんj語

家族構成：一人っ子

特技：オナニー

将来の夢：ハーレム(人間の!)

座右の銘：エロは人類を進化させる

転生特典：絶倫 他

好きなコーヒーの種類：強いて言うなら雪○のコーヒー

好きな服：自分の着るものには無頓着だからジャージとか着やすいものを好む。

(女の子にはエッチな服装を求めるけど、周り見られるのは嫌という面倒な人)

好きな服の色：特になし

(下着はピンクがお好み。余談だけど、ブーケちゃんの下着はピンク率が高い)

好きな音楽：どすけべ音頭 炎の孕ませシリーズのあれ

好きな性癖：基本エロければ何でもいける

嫌いな性癖：ケモナー NTR 女の子がひどい目に合うもの全般

見た目は普通の人間。たまにやきうのおにいちゃんっぽくなるらしい。

前世では模範的なんじ民で、非モテ男子。趣味は読書(なろう系)とエロい事全般

Fラン大学卒業後、ブラック企業に就職して、なんやかんやで退職。「明日からニート生活満喫するでえく♪」とウキウキしながら帰宅途中、車に轢かれそうになっていた青い毛並みの猫が目に入り、咄嗟に庇った結果、ガードレールに頭をぶつけてそのまま死亡(本人は轢かれて死んだと思っっている)

彼の死後に建てられたお墓には、ずっと青い猫が近くにいたそうです。

……余談なんだけど、その青い毛並みの猫は天寿を全うした後、同じく青い毛並みの獣人に転生して今は好きな人とラブラブで幸せなんだって！

なんで今言ったかって？……さあ？

転生後は、ケモ……転生の神によって転生。

本人は人間ハーレムを築くと意気込んでただけど、運悪く獣人のいる世界に転生しちゃったんだって。いやー運が悪いねえ！

生まれ育った村は獣人ばかりだった為、現実逃避をするかのように

幼馴染の青い猫獣人とずっと一緒に居た（何故か最初から好感度はMAXだったんだって。なんでだろうね？）

村には学校はなかったから、汽車に乗って離れた学校に通ってたんだって。そこには人間の女の子も通ってたんだけど、タロー君はなぜか避けられてみたい（当時の女の子に聞いたら「ブーケが……なんでもないです」だって。何があったんだらうね？）

高校卒業後、現実に絶望してしばらくニートやってたみたいなんだけど、マツマが持って来た無人島移住のチラシを見て、無人島でホームを築くと思いつき立ち、ケモシコ島に移住。そして現在に至る。

ケモシコ嫌いを公言してるけど、関係を持った女の子達に対しては、無意識に嫁認定してるよ。

島に住む子たちもタロー君のことが大大大好き♡みたい（ぶっちゃけ、ゲーム版では好感度に上限あるけど、上限なくなったら病んじやうくらいちゅきちゅきになるよなあ…）

### ○ケモシコ島

絶海の孤島の島なんだけど、空港とか博物館とか割と施設が整ってる。

噂だと、島の代表が気まぐれで遊園地を建てたり、温泉旅館を建てたり、気が変わって建て壊したりで島の景観の立ち変わりが激しいんだって。

島の大きさはゲームより大きいから10人以上生活できる。

住民の男女比率は1:9で女の子がかなり多いよ。男の子も昔は結構いたんだけど「代表の周りが甘々、ヤンヤンで見るだけできつい…」と引越して言った模様。

余談だけど、近々病院や学校ができるかもしれないんだって。

今公開できる情報はこのくらいかな？

他に見たい情報とかがあったら、リクエストあったら更新するかもね。

それじゃ、楽しいケモシコライフを!!

お相手は転生の神でした!!

拝啓、母上様

最近、わたしの個人情報にネット上に晒されているようです。

誰が私の情報を書き込んでいるかは知りませんが、これは立派な犯罪です。私は犯人を見つけ出し、断固として戦います。

母上様も、トラブルの元なのでネット上に個人情報を上げるのはやめましょう。

息子との約束です。

敬具

P・S

ブーケが最近「アタイって前世からタローと結ばれる運命だった気がするんだよねえ…」と言ってきます。

ブーケにいいお医者をお勧めした方がいいでしょうか？





世界にする』と言ってくれた。優しい。

そんなわけで神のおかげで転生できたワイ。ワイはその神に怒りを燃やすことになる

話は変わるが、ワイは女の子が好きだ。

美少女、お姉さん、妹、ギャル、ロリ、熟女……とにかく守備範囲が広いと自負している………モテなかったからそういう妄想するしかなかったんや………

だから、次の人生ではこの絶倫チンポでモテモテえちえちハーレムを築いたる！と意気込んでいた。

転生後、意識がはつきりしていくとワイは誰かに抱きかかえられながら泣いていた。どうやら赤ん坊からスタートするパターンらしい。

「はぁーいお母さん！元氣な男の子ですよー!!」

そう言つて俺を抱き上げた看護師は——ゾウだった。

………ん??なんでゾウ？ワイのマツマは動物園で俺を産んだんか？

そうしてワイの視線を下にやる。下には息を切らしながら横になつている女の人がいた。どうやらこの人がワイのマツマらしい。

だが問題は、マツマの横には手術着を着た二足歩行のイヌやらワニやらカンガルーやらが口々に「がんばりましたね!」「もう安心ですよ!」とマツマに声をかけている。

………あれ、これもしかして………獣人がいる世界じゃね………?

!! ……ちくしよめえええええ!!よりによつて獣人かよ

ワイは数多のエロ作品に触れてきたが唯一ケモノーものは毛嫌いしていた。

だつてそうだろ!?あいつら動物なんだぜ!?いくらなんでも動物を性の対象には見れねえよ!!

これがケモミミ系とか身体つきがモロ人間とかなら別に文句はない。でも見た感じ身体つきも獣つて感じだな……体が毛で覆われて

そう……うげえ……

ワイはけ○のフレ○ズはイけるけどズー○ピアはマジで無理なんだよおおお!!!

そんなこんなで転生してから長い年月が経った。

どうやらワイは種族的には人間らしく、マツマとパツパも人間だった。これが唯一の救いか……

しかし、ワイの周りに親以外の人間は居らず、ネズミやカエルやトリが人間のように二足歩行をし、言葉を話す環境だった。

……人間の女の子近くに居ないとか絶倫の意味ないやん!! ちとらいつでもモテモテになれるようモテるテクニックとか勉強してきたんやぞ!!

はあ……はあ……まあ、そんな感じでワイの転生環境は最悪。現実逃避をするかのように毎日幼馴染の青い猫獣人と遊んでいた……えっ獣は苦手じゃないのかって? ワイはケモシコが無理なだけで動物は好きなんだよ! 好きじゃなきゃわざわざ車から猫助けんわ!!

そんな感じで悶々と毎日を過ごしていたら、ある日マツマが無人島移住についてのチラシを持ってきた。どうやら、無人島に移住しスローライフを送れるツアーをやっているらしい。

そのチラシを見てワイはいい考えを思いついた。

「せや! 無人島開発して女の子集めたる!!」

こんな獣人だらけの田舎に住んでいても人間の女の子なんて来ない。それなら自分で人間の女の子が殺到する土地つくったるわ!!

思い立ったらすぐ行動、ワイはその日のうちにマツマとパツパを説



………なんでこうなったのか、思い出してみる。

たしか、引越しの計画立てるときにブーケが突然「新しいアロマキャンドル買ったから一緒に試すチエキ！」と押しかけてきたんだっけ？

そうして流れてアロマキャンドル炊きながらいつも通り駄弁つていたら頭がボーつとしてきたんだ。

体調不良かと思い、今日はもう寝た方がいいと考えてブーケに帰るよう声を掛けようとした時「はあ…♡はあ…♡」とブーケも息を荒くしているのに気が付いた。

具合でも悪いのかと思い心配して「大丈夫か？」と声を掛けたら、いきなり床に押し倒されて——キスされた。

突然の出来事に目を見開き驚いたが、それに気が付いていないのかブーケはワイの口に舌を入れ始める。いわゆるディープキスだ。

ザラザラとした舌がワイの舌に絡みつき口内を蹂躪していく。

「うん♡…ちゅぱッ♡…レロ…ん！…はあ〜♡♡♡♡♡」

ひとしきりキスを楽しみ、満足したのか顔を離すブーケ。

目をトロ〜ンとさせて、だらしなく口から唾液を垂らしていた。目の中に♡が浮かんでいるのは気のせいだと思いたい。

「はあ…♡はあ…♡タローが悪いんだよ…？アタイの気持ちに気づいてるのに知らんぷりして、焦らして、色々な女の子侍らせて、嫉妬させて…♡」

ブーケが何か言っているような気がするが、ワイも脳がボーつとしてよく聞こえない。

「………本当は、もっとじっくり関係築き上げて、ゆっくりラブラブして♡初々しくてロマンチックなえっち♡にしたかったんだけど、アタイ、もう我慢できないよお…♡♡♡♡」

そういうとブーケはワイのズボンを脱がせてくる。

すると、ポロン！という擬音が似合いそうなワイのペニスが顔を見せる。

「！！…／／／／／これがあ、タローの♡お、おち、おちん…ちん…



乳首。

そして、独特に香りを放つ汁を垂れ流している割れ目おまんこ

獣の体の中に、人間のエロさがある。その背徳感でケモナー苦手民であるはずのワイのペニスがさらに大きさを増す。

「…♡タローの♡ここ、さびしそうでかわいそう…♡アタイので、包んであげるね♡」

ブーケが横になっている俺にまたがる。そして、ワイのペニスを持って自分のワレメにあてがう。

やばい!!それをやってしまったら。戻れなくなる!!!

「ブーケ!!やめ——」

「ねえ、タロー——」

赤ちゃん、つくろ♡♡♡♡♡♡♡♡

ずぶん!!!

そんな音とともにワイの全身に先ほどまでとは比べ物にならないほどの快樂が襲ってきた。

「にゃ、あ、あ、あ、ああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡」

ブーケも叫びに似た声を上げているが、それはどこか歓喜しているようにも聞こえた。

「にゃ…♡やつと、一緒になれたね…♡♡♡」

ワレメから血が滴っているのが見える。おそらくブーケも初めて

なのだろう。しかし、ブーケは痛がるどころか、頬を染め嬉しそうな表情を浮かべている。

「…じゃあ、動く…ね♡」

「!!ちよま」

ワイが制止しようとする前にブーケが俺の上で上下運動を始める。

ぐちよ♡ぐちよ♡という水音が部屋に鳴り響き、お互いに気持ちよさから淫靡な声を漏らす

「あっ……やばいつて……!!」

「あん♡…チエキ♡タロー♡好きちゅいいいい♡♡♡♡♡♡」

ブーケはまるで本物の獣のように我を忘れて腰を振っている。

ワイはワイでペニスが包み込まれている気持ちよさと腰が当たるたびに肌に当たるブーケの体毛で体をくすぐられ、もうめちやくちやになっっていた。

ぐにゆ♡ぐちよ♡ぐにゆ♡ぐちよ♡

ポフ♡パフ♡ポフ♡パフ♡

部屋の中に響き渡る肌と肌がぶつかり合い、色々な汁が混ざり合う音がだんだん激しくなってくる。

ワイも、もう限界であり今にも金玉からあつい汁が出そうで亀頭が膨らんできたのがわかる。

「にゃん♡タローの、膨らんできたよ♡んっ♡出そうなの?♡いいよ♡いっぱい出してえ♡♡」

ブーケはワイがいきそうなのを理解し、さらに腰のスピードを速める。

あ、あかん…これ以上は、もう出ちまう…!!

「ぶ、ブーケ…出るから、離れ…!!」

「いくや♡アタイ、タローの赤ちゃん♡産みたい♡タロー、アタイを、あん♡ママにしてえ♡♡」

さらにスパートをかけるブーケ。

もう無——



どびゅ♡どびゅ♡

「チエキイイイイイイイ!!!♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

どびゅどびゅという音とともにワイのペニスから精子が発射され、それと同時にブルーケもイったように獣の遠吠えのような声を上げる。あまりの気持ちよさに、ワイも目を瞑って声が出ないように耐えるのに精いっぱいだ。

びゅ…♡びゅ…♡

やがて精子をすべて受け止め切ったブルーケはワイの身体に倒れ込む。その際、すぽん!と俺のペニスがブルーケのまんこから抜かれる。

「はぁ…はぁ…♡ついに、やっちゃったね♡♡タロー♡…これでもうアタイ、タローのお嫁さんだね♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」  
倒れ込んできたブルーケがワイに耳元でささやく。

そのささやきがやけにエロく感じてしまいゾクツと来てしまう…

………いやゾクツじゃねーだろ!!

ワイケモナー無理って言ったよな!?!なんて獣とやってんだよ!?!?

しかもワイ童貞やぞ!?!何が悲しくて獣で童貞卒業せにゃあかんねん!?!

………でも、不思議と嫌悪感はなかったなあ…実は意外と俺って……

………いやいやそんなわけあるかい!!ケモナーはダメだ!異常者だ!  
大体見ろ、ブルーケの毛むくじやらの身体をよお!!あんなツ……あんな

な…なまめかしくて……やらしい……エッチだ………じやなくて?!?!?  
そんなことを考えていると、またムクムクとペニスが巨大化を始める。

クソッ！あんだけ出したのに……まさか転生の時にもらった絶倫能力のせいか……!?

「あっ♡♡タローったら本当にえっちなんだからあ♡♡♡♡♡♡」

ワイが再び勃起したことに気が付いたブーケが舌をチロツと出しながら、ワイのペニスで再び手遊びを始める。

「あっ、ブーケ……まっ」

「………もう一回、シよっか♡」

この後、5回追加で出した。

拝啓、母上様

お元気ですか？無人島生活は大変なことも多いですが、住民も増えてきて、楽しいことばかりです。

去年の正月に帰らなくてごめんなさい。今年の正月は帰ろうと思います。

その時に、新しい家族ができそうなので紹介しますね。

それではお体に気をつけてお過ごしください

敬具

P・S 転生の神とか名乗る奴を見かけたら教えてください。ぶちころがします。

## ワイ、幼馴染のネコと博物館でやる

「……………はあ……………どーしよ……………」

ワイは今、頭を抱えてうなだれていた。

理由は昨夜のこと、幼馴染のブーケとセックスしてしまったことであつた。

あれから5回も中に出してしまい、そのまま寝落ちして起きたのは次の日の10時を過ぎた頃であつた。

「あ、あはは……………昨日は、色々あつたね……………その、これからもよろしくね……………」

起きてすぐにブーケが顔を真っ赤にして「チュツ」つとキスをする。

その顔が魅力的でまたペニスが固く……………つて違う違う！

ワイはケモナーじゃないんや！ブーケとやったの雰囲気になんか飲まれたからや！ワイは畜生に性感感じる変態やない!!……………ぜえ……………ぜえ……………あかん、興奮しすぎたわ ……

そういえば、昨日急に頭がボーっとしたのは何故だったのかと気になりブーケに聞いてみたら、

「昨日のアロマキャンドル、つねきちさんの所で買ったんだ。エツチな雰囲気になる匂いが出るんだって♡効果てきめんだつたね♡チエキ♡」

だだよ。

あのきつね野郎……………今度この島に来たら贋作の美術品と一緒に船ごと燃やし尽くしてやる……………!!

それにしても、これからワイどーすんねん……………雰囲気とはいえ、幼馴染のブーケの処女を散らし、中出ししてしまったのは事実。

「責任」の2文字が重くのしかかる。

……………元々、えちえち人間ハーレム島を作ろうとしていた俺だが、まだ責任を取る覚悟はない。おまけに相手は幼馴染。ブーケの両親とも小さい頃から顔を合わせている。これ、地元帰ったらどんな顔で会えばいいのだろうか……………家隣だから嫌でも会ってまうぞ……………

そんな感じで悩んでいると、ワイの目の前をモンシロチョウが横切る。

上を見ると、モンシロチョウの他にアゲハチョウやモンキチョウ、様々な蝶がひらひらと飛んでいる。部屋の中心には噴水の周りで舞っている。

ここは島の博物館。蝶々を展示している部屋である。色々1人で考えたくて、静かになれる場所に行こうと考えここを選んだ。

ここの博物館はそんなに住民が来ないし、管理人のフータもフクロウだから昼間は眠っている……それでいいのか管理人……

さて、これからどうしようかと噴水のベンチに座って考えていると「ポンポン」と肩を叩かれた。

叩かれた方向に振り向くと「プニィ」と頬に固いものが当たる。

「やくいー！引つかかった引つかかった〜♪」

そう言っただけで愉快そうに笑っているブーケがいた。

どうやら、ワイの頬にはブーケの指が当たってるらしい……ああ、子供の頃よくこういういたずらし合ったな。

「……………ブーケ、お前なんで……」

「フフ……タローは何か考え事するとき、一人になりたがるからね。絶対ここだと思っただよ♪」

そう言っただけで俺の隣に座るブーケ。

あー……確かに一人で考え事してる時、よくブーケに見つかってたな。

「うわ〜！ここちようちよいつぱい飛んでるね〜。懐かしいなあ♪よ〜く小さい頃、一緒にちようちよ追いかけたよね〜？」

そうだった。小さい頃はよく一緒に野山を駆け回り、虫なんかを追いかけていたっけ？

……………昨日、そんなコイツとワイは……………

……………そういえば、なんでこいつ俺のいる場所わかったんだろ？

「なんで居場所が分かった？そう思ってるでしょ？」

「!?……………な、なんで……」

なんでわかったんだ!?まさか、こいつエスパーなんか!?

「わかるよ。だって、ずっとタローのこと見てたんだもん♡タローのこと、何でも知ってるよ?好きな食べ物も、好きな家具も……………」  
オナニーするときのおかずも♡」

耳元で囁くように耳打ちされる。

うつ!?!…………いかにいかに、ワイは生前ASMRでよくヌいていたからぶつちやけ股間に響く。ムクムクと股間が大きくなっていく。

あ、アカン。これはブーケにばれないようにしなければ…!!

「…………タローのえつち♡」

ブーケがそう呟いた瞬間、俺のペニスが何かに触られた。

股間に目をやると、ブーケのしつぽがワイの股間をズボンの上からくすぐっていた。

「タローったら、ここをこんなに大きくして♡アタイじゃなかったら変態さんとしておまわりさんに捕まっちゃうよ?」

こちよ こちよ こちよ こちよ

ブーケのしつぽがワイの股間を刺激する。

フサフサの毛がペニスを優しく撫で、気持ちがいいのと中途半端な刺激でイライラするので2つの感情で変な気分になっていく。

「ブーケ、ここではまずいって…………」

「だいじょくぶだよ♡フータさんは眠ってるから気が付かないよ。で・も♡」

そういうとブーケはワイのズボンをずり下げる。

ぼろんと飛び出るペニスをブーケは優しくつかむ。

「タローが大きな声出しちやったら、さすがに気が付かれちゃうかもね♡」

しゅこ♡ しゅこ♡ しゅこ♡

ブーケがワイのペニスを手コキしてくる。

手のひらのぷにぷにの肉球がペニスを締め付け、まるでまんこに入れているかのように気持ちがいい。

「うつ…………くつ…………」

「フフ…♡おちんちんしゅこしゅこ♡肉球まんこでしゅこしゅこ♡気

持ちいいねえ♡♡」

フータにばれないように声を殺すワイ。

そんなワイをまるで赤子をあやすかのようにささやきかけるブーケ。

「肉球まんこ気持ちいい？タローいつもアタイの肉球触ってたもんね

♡今、大好きな肉球におちんちん包まれてるんだよ♡」

ブーケの手の動きが段々早くなる。

それに合わせてワイのペニスも射精の準備を始める。

「も、もう、出…！」

「出しちゃえ♡肉球まんこ孕ませちゃえ♡」

ビューー！

ドピュ！ドピュ！

我慢できずに音を立てながらブーケの手のひらの中で果てるワイ。

ワイの精液がブーケの手を汚していく。

「うわっ…♡いっぱい出したねえ♡おちんちんさん、お疲れ様」チュ

♡

ブーケは手についた精液を愛おしそうに見つめた後、ワイのペニスを労い、キスをする。

唇の柔らかい感触がワイのペニスを快楽で襲う。

「あくあ♡タローってばこんなにあタイの肉球汚して♡これじゃお外歩けないチエキ♡…はむ♡…じゆる♡じゆる♡…ズズズ♡…ペロ♡」

手を拭くようにポケットティッシュを渡そうとするが、何を思ったのかブーケは手についた精液をなめとり、飲み始める。

「ん♡…ん♡…はあく♡タローの濃いのが、ごちそうさま♡♡」

そう言って口を「アーン」と開けながら口内の精液をすべて飲み干したことをアピールしてくる。

そのいやらしい姿に、射精して満足していたはずの股間にイライラを感じる。

「ああ、犯したい」

相手は獣だというのに何の抵抗もなく、その考えが頭の中を支配する。

「あは♡おちんちんさん、まだイライラしてるね♡ごめんね、アタイのせいだよね♡だから――

そう言つて、スカートの中に手を入れ、パンツだけを脱ぎ捨て壁に手をつくブーケ。

スカートがまくれ上がり、*プリッ♡*としたかわいいお尻と切なそうに涙を流しているおまんこが丸見えになる。

アタイでイライラ解消して♡♡♡

フリフリとお尻を振つてワイを誘惑するブーケ。

あ、アカン……昨日は事故みたいなものやらなんとか言い訳ができるが、ここで自分からブーケを襲つたら、ワイは………!!

「ほくら、フリフリ♡フリフリ♡ここにおちんちん入れたら、ものすごく気持ちいいよ♡アタイにタローのイライラおちんちんさん、ご奉仕させてほしいなあ♡♡♡」

ブーケがこちらを挑発するようにワイを誘う。

ダメだとわかつていのに、ワイは一步、また一步と足を踏み出してしまい、とうとうペニスとまんこがくっ付きそうな位置までやってくる。

「ぶ、ブーケ！ワイはもう……！」

「タロー………来て♡♡♡」

ぶつちー——ん

ブーケの一言で何かが切れ、ワイはペニスをブーケのまんこに突き刺した

「にやあああああん♡♡♡」

ブーケが大きめの声を上げる。

ここは博物館だ。いくら昼間は眠っているフータでも起きて様子を見に来るかもしれない。

だが、今はそんなこと考えられない。

ワイはバックの体制のまま一心不乱に腰を振り始める。

「チエキ♡タローが♡自分から求めてくれた♡嬉しい…♡♡♡♡♡」

ブーケが涙目になりながら喘ぎ声をあげる。

くそ…なんでコイツこんなに…！！

「ああん…こんな、博物館でなんて♡♡変態すぎるよお♡♡♡」

「誰のせいや…！」

ワイのイライラチンポがブーケのまんこを出入りしている。

まんこの中にあるひだの一つ一つがワイのチンポを撫でまわし、まるでイライラしているチンポをひだ達が「いいこ♡いいこ♡」となだめているような錯覚を覚える。

「タロー、気持ちいい？」

「……………ち…よ…！」

「ん♡きこえなく♡はつきり言ってくれないなら、やめちやおつかなく♡♡」

「……………あくもう！気持ちいい！気持ちいいよ！！」

「あん…激し♡アタイも、気持ちいいよ♡タローのおちんちん、だあいちゆき♡♡」

クソ！クソ！こいつは獣なんや！畜生なんやぞ！！

なのに、なんでこんなに…！！

こんなにも、愛おしいんや！！

「あん！早くなってきた♡イキそうなの？…いいよ♡おちんぽイライ



ラさせてる悪くいお汁、いっぱい出しちゃえ〜♡あん♡」

ブーケの言う通り、行きそうになっているワイはピストン運動を早くする。

その時、ワイらの真上に蝶の大群が空中で集まっているのが見え  
た。

「チエキ♡ちようちよさん達に、エツチな姿♡見られてる…ん♡あの時は、追いかけてるだけの遊びだったのに♡うん♡今は、こんなエツチな遊びしちやってるよお〜♡」

「ブーケ！出すぞ!!」

「出して♡タロー出して♡タローのイライラ、全部アタイにぶつけてえ♡あん、イク♡ちようちよさんに囲まれて、タローとのエツチ見られながら♡イツちやう♡イク♡イクイクイツ…:…:…:…:…:…:…:クうううううう!!♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

どぶぶぶぶぶぶぶう!!!

激しい音を立てながらブーケのまんこに射精する。

「ああん♡出てるう!♡タローのイライラ♡アタイに注がれてるうううう!!♡」

ビュー♡♡ビュー♡♡ビュー…:…:…:

射精の勢いが弱くなり、ペニスを抜く。

どぼお♡

ペニスを引き抜くと、ブーケのまんこから精液が垂れてくるのが見

える。

「はあ…♡はあ…♡タロー、イライラ、すつきりした？アタイは気持ちよくて、すつきりしたよ？♡♡♡」

「ああ…ワイも…気持ちよかった…………」

「よかったあ♡♡♡……えへへ／＼アタイ達の変態なところ、ちようちよさん達に見られちゃったね♡♡♡」

ブーケがはにかみながら言った。

……ほんとにどうかしてる。

今度はワイからやってしまうなんて…ワイはケモノが苦手やっただけなのに…

でも、ワイは最後、自分の意志でブーケを犯した。

ブーケが尻を向けて誘惑した時に、確かに「犯したい」と思ってしまったのだ。

…アカン、さっきの光景思い出してまたおつきしてきたわ。

「…あんなに出したのに♡タローってほんとにえっちだよね♡」

ワイの股間を見ながらブーケは笑う。

「でも、ダメだよ♡えっちばかりしてたら、アタイもタローもバカになっちゃうからね♡」

「だから、お預け♡」と言って服を着るブーケ。

……いや、別に残念がってないし…これで解放されてせいせいす「かわりに♡」ギョツ

!?ブーケがワイの手に何かを握らせてくる。

それを見てみると、ピンク色で穴が3つ開いた布——ブーケがはいていたパンツであった。フリフリのフリルと真ん中の小さなリボンが可愛い。

「貸したげる…アタイだと思って使ってたね♡……次に会った時、どんな状態でも、それ履いてあげるね♡」

ウインクした後、「じゃあね♡」と出口から去っていくブーケ。

ワイはしばらく放心状態であったが、はっとして手に握られているパンツを見る。

…なめやがって……！ワイがそんな変態みたいなことするわけな

いやろ！

「次に会った時、どんな状態でも、それ履いてあげるね♡」

こんな布切れ一枚で…！少しいい匂いがするからって…！

「どんな状態でも、それ履いてあげるね♡」

こんな…！こんな…！こんなのに、負けるかあああああ！！

「それ、履いてあげるね♡」

家に帰ってぶっかけまくった。

後日、それを履いたブーケがエロすぎて3回中に出した。

拝啓、母上様

今日は博物館に行きました。

蝶々たちが集まってきて幻想的な光景を楽しめました。

博物館で、ブーケと少し悪いことをしてしまいましたが後日お詫びとして館長にお菓子を持って行ったのでチャラですよ？

それではお体に気を付けてお過ごしください

敬具

P・S 悪いことをしている間、館長は眠っていてなにが起こっていたのかわからなかったようです。この博物館はもうダメかもかもしれません。

## ワイ、ギャル風オオカミとイチヤラブする

『……アーアー……本日はドードーエアライズをご利用いただき、誠にありがとうございます。本日のパイロットはロドリーが担当させていただきます。当機は現在——』

ワイは今、ドードーエアライズの飛行機に乗って離島に向かってる。

どこの離島かって？ 知らん。別にワイも離島なんぞに行きとうないわ！

では何故飛行機に乗っているかって？……ぶっちゃけ、俺が今住んでいるケモシコ島とよから離れられればなんでもええんや……てか改めて島の名前ひどすぎひんか……？

ワイが島から離れたい理由は、察しが付くと思うがブーケのことだ。

あれから、ブーケがワイの家に来る頻度がやばい。ほぼ毎日ワイの家に来るのは前からだが、ワイに断りなく勝手に入ってくるようになった。

ワイの寝床は2階にあるんやが、朝起きて1階に降りてくるとブーケが朝食を作ってくれていたりするのだ……ワイ、鍵渡した覚えはないやけど……怖ッ（その時、ブーケの裸エプロン姿に興奮して朝食どころではなかったのだが）

朝だけでなく、外出から帰ってきたらすでに居る時もあるし、寝ようと思ったらベッドの中に潜り込んでいた時は思わず声を上げてしまった。

それだけならまだいい（良くない）、あれから雰囲気流されてブーケと関係が続いているのだが、最近セックスの時に首筋を噛んでくるようになった。そんなに痛くはないのだが、何度も噛まれているうちにすっかり跡が残ってしまった。

何故そんなことをするのか聞いてみたら

『こーやって跡を残しておけば、アタイの雄わとこって証明になるでしょ』

だってよ……やだ、この娘重くない…？

このように、最近ブーケが重すぎて怖くなってきたので、どこかの離島で息抜きをしようと考えたのだ。

いやーそれにしても最近マイルの出費がかさんでたから、マイル旅行券がタダで手に入ったのはラッキーだった。ただでゲットできた理由？それは――

「アハッ！もうすぐ着くみたいだよ！一緒に思いっきりエンジョイしようね!!」

隣からそう話しかけられ、思考の海から帰還する。

隣に目をやると、オレンジ色の毛並みで、パインがらムームー”を着こなした蒼い瞳がこちらを見つめていた。

コイツの名前は、”モニカ”

同じ島に住んでいる島民の一人で、オオカミの獣人だ。

モニカとの付き合いは意外と長く、無人島ツアーに最初に参加したメンバーの一人だ。

最初はその恰好から『ファツ!?パリピおるやんけ！関わらんとこ』と思いなるべく避けていたのだが、モニカは人懐っこく誰にでも明るく接する性格なため、ワイを含めた島民とすぐに仲良くなっていた。それ以来、一緒に島を盛り上げようと頑張ってきた仲である。

今回の小旅行も『チケットが2枚とれたんだー♪タローちゃん、一緒にいこー♪』と誘ってくれたのである。わざわざワイみたいなのを誘うとは、オタクにやさしいギャルって本当におったんやなあ…まあワイとしては少しの間だけでもブーケから離れられるからありがたいが。

「タローちゃん、島についたら一緒に泳ごうね！アタイ今日のために新しい水着買ったんだー♪」ギョツ

そんなことを言いながらワイの腕を”ギョツ”と抱きしめる。

……これが人間の美少女なら勘違いしてまうが、残念ながらワイに獣の趣味はないからなびかんわ。えっ、ブーケ？…あいつは…：まあ、うん…

…とにかく!!ワイにケモノー趣味はないんや!!これは揺るがぬ事

実や!!

「そうだよ…この旅行で…一気に恋人まで…キヤツ♡」

…  
なんか急に顔手で覆ったり、足バタバタさせたり忙しいやつちな

…モニカは誰にでも優しいから話しやすいんやが、どこかれ構わず抱き着いてきたり、歩くときにナチュラルに手をつないでくる（しかも恋人つなぎ）から流石に距離感見直してほしいわ…ワイじやなかったら勘違いするでほんま…

「あー魚全く釣れんわ…」

あれからしばらくして離島について。

離島についてすぐに、ロドリーが通信機をいじり始めたかと思うと慌てた様子になり

『申し訳ございません！どうやら近くで救難信号を発信している人がいるようなので私はそちらに向かいます！夕方までには戻ってきましたので、それまで離島をお楽しみください！…ではモニカさん、後はよろしくお願いします』

『ありがとーロドリーさん…後でお金振り込んでおくね♪』

と言って飛行機はどこかへ行ってしまった。

…なんか、出発前にモニカとコソコソ話してたような気がしたがなんやったんやろ？

…まあええわ。とにかく今日の夕方まではブーケから解放されるんやし、のんびり釣りでも楽しむわ。

「タローちゃん！お待たせ〜!!」

そんなことを思っていたら、遠くからモニカの声が聞こえてきた。

…そういえば、島についてからすぐに姿が見えなかったな。

「おう、どこ行ってたんやモニカ…!?!」

声の方を振り向いたワイは絶句してしまった。なぜなら

「タローちゃん！アハハッ！」ばるんばるん♡

モニカが水着に着替えていたからだ。

モニカの水着は水色を基調としており、所々にパイナップルの絵がプリントされたビキニであった。

こちらに走ってくるからかその…どことは言わないが…：…ばるんばるんしおる!!

「も、モニカ…その恰好…」

「アハツ♪飛行機の中で言ったでしょ♪新しい水着買ったって。どう？アタイ、似合ってる？」

モニカはそう言いながらグラビアアイドルのようなセクシーポーズをとる。

モニカはモデルのような体系で出る所は出て、引っ込んでいる所は引っ込んでいる、所謂ボン！キュツ！ボン！であり獣とはわかってはいるが、エロいと感じてしまう。

…：…おっぱいおつきい…♡

「あれ♡タローちゃん、なんだか目がやらしくなくいい♡」

「ツ!?ち、違わい！馬子にも衣装と思っただけだわ！」

つぶねく！もう少して揉むところだったわ…：つてちゃう！ワイは獣の乳など揉みとうないわ!…：…でも、気持ちいいんやろなあ…：だああああ!!ワイは頭おかしくなったんか!?

「ふくん♡…まあそういうことにしといてあげる！そんなことよりオイル塗ってくれない？潮風で体毛が痛んじやうからさー！」

そう言って小瓶を渡してくるモニカ。

なんでワイが…：と思ったが、ここに来れたのもモニカのおかげやし、それぐらいしやーないか…

「…：…ええで」

「アハツ♪ありがとー♪じゃあさっそく…」

そう言うと、モニカはビーチにうつ伏せになり、ビキニトップの紐をほどき…：つておい!

「なんで脱ぐねんー！」

「えくだって体に塗るのに、ビキニの紐は邪魔でしょ？」

そ、それはそうやけど…

「……そ・れ・と・も♡タローちゃんはアタイの背中に欲情しちゃう変態さんなのかなあ♡♡」

「ツ!?そ、そんなわけないやろ!よっしゃ!やったるわ!!」

そう意気込んで、小瓶の中の液体を手に垂らす…ん?なんかどっかで嗅いだことのある匂い……?」

「どくしたのタローちゃん?」

「あつ、なんでもないわ」

とにかく早く終わらせるわ…こういう液体はそのまま塗ると冷たいから、まず手に馴染ませて…体温と同じにして…よし!これでええわ!

「ほらいくど〜」

「うん…ん♡」

モニカの背中にオイルを塗り始める。

モニカの背中の毛並みは、よく手入れされているのか触っているだけで気持ちがいい。

「うん♡…あ♡…そこお♡いい♡」

オイルを塗っているだけなのに、変な声を上げるモニカ。

…なんだろう、ワイもなんだか変な気分になってきたわ……

背中にオイルを塗っていると、ふと、視線が下の方に向いていく。

そこには、モニカのお尻があった。

水着がぴつちりと張り付いており、それがお尻の肉付きをさらに際立たせている。

これを思いつきり揉んだら、気持ちいいんだろうなあ…♡

「あん♡どうしたの、タローちゃん♡お尻がまだ手付かずだよお♡」

「フアツ!?で、でも…」

「いいよお♡これはオイルを塗ってるだけ♪だから、エッチなことじゃなくて、普通なことなんだよお♡」

せ、せやな!ワイは、オイルを塗っているだけであって、決つつつとしてやましい気持ちがあるわけやない!これは普通のことなんや!!

そう自分を正当化してワイはモニカのお尻を触る。

ぷるん♪



触った瞬間、まるでプリンのような柔らかな感触に驚く。

モニカの尻は肉付きが良いだけでなく、柔らかくて触っているだけでいい気分になってくる。

「ん♡タローちゃんじょうずー♡オイル塗ってるだけなのに気持ちいいよお♡♡」

モニカが気持ちよさそうに声を上げる。

…あかん、段々勃ってきておった!?これ以上はマジでフル勃起になってまう!!

早く終わらせなくては…!

「やあん♡タローちゃんがつつきすぎい♡そんなにアタイのお尻好きなの?♡」

モニカが喘ぎ声に近い声を上げ始めるが、知らん…無心や…何も考えずに、ただぬりぬりするだけや…:触り心地とか考えるな…!

ワイはなるべく何も考えずにモニカの尻にオイルを塗り続ける。

そして、ようやく尻を含めた背中全体にオイルを塗ることができた…あつぶねく、半勃起で何とか耐えたわ…

「はあ♡…はあ♡…ありがとねタローちゃん♡気持ちよかったよ♡」

そんな股間に響く声出すなや!

やばい…ここはいったん離れてどつかで抜いて落ち着かせ「じや

あ、今度は前、お願いね♡」

…:はっ?

モニカの発言が理解できず、硬直していると、うつ伏せになっているモニカが寝返りを打つ

おい…おい!今のモニカはビキニのブラ外してんねんぞ!?今寝返りを打ったら…!!

「モニカ!アカ『ブル〜〜ン♡♡♡』?!?!?」

ワイが止める前に、モニカが仰向けになってしまった。

ワイの目に写った光景は――

モニカが顔を真っ赤に染めて息が荒い様子

引き締まった身体に綺麗な毛並みの体毛

体毛に隠れているがチラリと見えているセクシーなヘソ

そして、〃ボーン♡〃という音が聞こえてきそうなほど大きく、形の整った2つの果実——おっぱい

先程までビキニに包まれていた胸はあらわになっており、ピンク色の乳首が〃ツンツ♡〃と勃っている。

「タローちゃん、オイル塗るのうまいから、前も頼んじやうね♡おねがーい♡」

モニカがおねだりをするような声色でワイにウインクしながら言った。

「早く早くう〜♡」と急かすように体を揺らし、その度にモニカのおっぱいも〃ブルンブルン♡〃と揺れ動く。まるでおっぱいそのものが意志を持ち、「さわって〜♡」と甘えているかのようだ。

ザツ：ザツ：

…!!?!なっ…!!?

いつの間にかワイは歩みを進めていた。

まさか、ワイは無意識にあのおっぱいを鷲掴みしようとしたんか：

!?

だ、だめや！相手は獣、相手は獣、相手は！獣!!

獣のおっぱいなんて「タローちゃん♡」!?

「大丈夫♡これはいやらしいことじゃない、普通のことだよ♡それにアタイ：タローちゃんになら、どんな事されてもいいよ♡♡♡♡♡」

モニカがはにかみながら言ったその一言が、ワイの理性を消し飛ばした。

「も、モニカ：!!」お手てワキワキ…!

「タローちゃん…どーぞ♡」ばるんっ♡

ワイは少し近づき、ついにモニカの乳房に触れた。

〃もにゅ〜♡〃と形を変えるモニカのおっぱい。

「あん♡…そんなに乱暴に掴んじやだ〜め♡もっとう優しく揉まないと、おっぱいに嫌われちゃうぞ♡」

「!?!…わかった…」

ワイの頭の中は、「おっぱいに嫌われたくない!!」という考えに支配

され、優しく揉み解す。

手のひらから伝わる柔らかさと押し返してくる弾力が心地よく、幸せがあふれてくる。

「ん♡そう、そこだよ♡…そこが女の子は気持ちいいんだよ♡♡♡  
…あん♡その調子で、おっぱいもつと触つてえ♡♡♡」

モニカの蕩けそうな声に興奮し、揉む力が強くなっていく。  
揉むたびに体毛のフカフカ感も楽しむことができ、最高だ。

段々とモニカの乳首が固くなっていくのを感じる。モニカも興奮しているようだ。

そんな乳首が可愛かったため、つい指先で引つ張つてしまう

「~~~~~♡♡♡やん♡♡乳首♡そんなに強く引つ張られたら、アタイ♡あたいたい♡♡…アアオオオオオオオン!!♡♡♡♡♡」

まるでオオカミの遠吠えのような声を上げながら、足を「ピンツ」と伸ばすモニカ。

その瞬間、「ブシヤア!!」つという音を立てながらビキニのパンツから、液体が噴出した。

周囲にメス臭い香りが充満する…これは、モニカの愛液か…?う

そう、モニカは乳首を摘ままれただけイってしまったのだ。

「…♡…♡…はああん!!…もう、タローちゃんたら♡…えっちないたずらしちゃめっ!!おっぱいもプンプンでタローちゃんのこと嫌いって言ってるよ♡♡」

モニカが怒ったようなセリフを言う。

その顔はニヤニヤしており、怒っていないことは明白だが、「おっぱいに嫌われた!」と言われて思わず泣きそうになる。

ヤダ!おっぱいに嫌われたくない!!もつとばいばいとえっちなことしたい!!

ワイは幼児退行したように泣きそうになる。

「…アハツ♡嘘だよ♡おっぱいはえっちなタローちゃんのこと大好きだつて♡ごめんね、不安にさせちゃつて♡ほくら、仲直りしよ♡♡♡」  
モニカがワイの手を掴み、再びおっぱいを揉ませってくる。

ああ…♡…♡…♡モニカのおっぱい♡♡♡ちゅき♡ちゅき♡仲直りするう〜♡

「あん♡…タローちゃんのおててきもちい…♡…♡あれえ？♡タローちゃんのココ、腫れちゃってるよお〜♡♡」さわさわ♡

そう言ったと思うと、ワイの股間に急に快感が走る。

股間を見ると、そこは膨れ上がっており、いつの間にかフル勃起してしまっていた。

モニカがワイの勃起ペニスを手でいじっている。気持ちよすぎて、今にも射精しそうだ。

「ん〜♡これは、毒蛇に噛まれたのかもしれないなあ〜♡すぐに触診しましょうか♡♡♡♡」

まるで今からお医者さんごっこが始まるかのようにモニカが言う。

離島でのバカンスは、まだ、始まったばかりだ…♡

ワイ、ギャル風オオカミとお医者さんごっこする

「シコシコ♡シコシコ♡…んん♡熱くて硬くなってますねえ♡これは一度毒を出さなくてはなりませんなあ♡」サワサワ♡

モニカはワイのズボンを脱がし、チンポをシゴきながら囁く。

モニカがワイの竿を上下させる度に全身に快楽が走り、力が入らなくなる。

いつもとは違うモニカの口調にギャップを感じて、それが快感に程よいアクセントを加えている。

「おやあゝ…ここも腫れちゃって辛そうですねえ♡ここもほぐしておきますかあ♡」モミモミ♡

!?

モニカがワイの金玉をモミモミし始めた!?

パンパンの金玉を弄ばれて、少し痛みを感じるがそれを上回る気持ちよさにより金玉の精子工場は絶賛フル稼働中である。

「チンチンシコシコ♡キンタマモミモミ♡さあおちんちん君♡遠慮なく毒を吐き出したまえよ♡」

シコシコ♡モミモミ♡

竿と玉を同時に刺激される。

ああ、気持ちい♡

すると、ワイの亀頭から先走りの汁が出てきた。

「おおー先っぽから毒が出てきましたよ!!これは吸い出してあげなければ…♡♡」

モニカはそう言って口を「がぱあ♡」と開けると

バクンツツ♡♡♡

ワイのチンポを一気に口に啜えた!

「うおお…♡」

あまりの衝撃に思わず声を上げてしまう。

イヌ科生物特有の長いマズルによるフェラは、ワイのチンポがすっぽりと納めてしまう。ワイのチンポは結構デカいはずなのに：モニカのお口に全部入ってる♡

「じゅろ♡じゅぷ♡ズズウ♡チュパチュパ♡  
どーれすかふあるーちゃん♡どくはれそーでひゅか♡」

モニカがフェラチオをしながら口を動かすことで、フェラにアクセントが加わり刺激をさらに強める。

顔がだらしなく緩んでいるためか、ワイの口から唾液が垂れる。

「うふふ…♡ひもちよしやしよ♡…なら♡これはどくお♡」  
!?!?

モニカが舌をチンポに絡ませてきた!?

イヌ科生物は舌で舐めるのは得意なのか、チンポの気持ちのいいところを的確に舐めてくる。

モニカの舌はまるでワイのチンポと交尾しているかのように絡んでくる。

だ、ダメだ…!もう…!!

「びゆるびゆるびゆるくくくく!!!」

ワイのチンポはモニカの口に思いつきり精液を出した。

「むん!…♡ん♡…くくく♡」

モニカは一瞬だけ驚いたように目を見開いた後、そのまま愛おしい物を飲むかのように精液を体内に流し込む。

やがて、汁を全て飲み終わりワイのチンポを吐き出す。

ワイのチンポはまだ勃起していたが、ずっと舐められていた為か皮が少しふやけている。

「…ペロツ♡毒は全部吸い出しましたよ♡これでもう安心ですよ♡頑張りましたね♡」などで

モニカは甘やかすようにワイの頭を撫でてくる。

まるで保母さんのように“いいこ♡いいこ♡”してくれているが、その視線はワイの勃起チンポから離さず、狩人の目をしていて。さらに反対の手でワイの背中を押さえつけており「絶対に逃がさない」という意志を感じ少し怖い。

「ああ♡タローちゃんの服汚れちゃったねえ♡さあヌギヌギしましよ♡ね♡」

モニカは蕩けそうな上げながらワイの上着を脱がしていく。

「——へえ」

突然、服を脱がせていたモニカが地の底から響いたような冷え切った声でつぶやく。

思わず“ビクッ”っとしてモニカの顔を見ると、モニカはある一点を見つめ続けており、先程までの“ラブラブ♡ハッピー♡”という顔が嘘のように無表情になっていた。心なしか、目から光もなくなっているようであった。

…えっ怖ッ。

そう思いながらモニカの視線を辿ると、ブーケがワイにつけた噛み跡があった。

なぜかそれについて弁解しなければと思い、口を開こうとすると—

“ガブッ”

モニカが、ワイに噛みついてきた。

ブーケにつけられた噛み跡を、まるで上書きするかのように

あまり痛みは感じないが、この強さならブーケの跡よりも根強く残るだろう。

モニカが噛むのをやめ、顔を離す。その表情は、先程よりも“とろろ♡”としておりいかにも発情したメスの獣という印象に少し身震いしてしまう。

「はあ♡タローちゃんっておいしい♡こんなの理性がなかったらパクションムシャムシャしちゃうよお♡」

そう言つて笑うモニカの口から鋭い歯がちらりと見え、少しタマヒユンしてしまう。

「…なあ〜んて、冗談だよ♡大切なタローちゃんをアタイが食べるわけないよ♡…:…あの雌猫…アタイのもんなのに…!!」

…?モニカが何か呟いた気がするが、よく聞こえなかつた…なんて言つたんだ?

「モニカ」そんなことよりタローちゃん♡アタイともおろつと楽しいこと♡しよ♡」ヌギツ♡

!?

モニカがビキニの下を脱いだ。

脱いだ瞬間、モニカの秘所から「たら〜り♡」と愛液が垂れ、地面を濡らす。

…:チンポを舐めただけで、あんなに濡らしたんか…エツチな娘やなあ…♡♡

モニカは地面にもう一度仰向けになると、両腕で足を抑えM字に開脚させ、指でおまんこを「くぱあ♡♡♡」つと開く

「見えるタローちゃん?あたいのおまんこ、さつき飲んだ毒のせいで苦しくて泣いちやつてるよお♡♡♡タローちゃんのお注射で治療してえ♡♡♡」

モニカのおまんこはパクパクと動き、まるで生きているかのようだ。

そのおまんこを、モニカは指で弄くりオナニーを始める。

「ああん♡苦しいよおお♡たろーせんせえ♡♡早くおちゅーしやで治療してください♡おまんこが♡おまんこが熱いいい…♡♡♡」クチュ♡クチュ♡

いやらしい水の音があたりに響き渡る。

その姿と音がワイの耳を刺激して、理性を奪っていく。

ワイは膝立ちの姿勢になり、モニカの秘所にチンポを当てる。

「あん♡」つと小さい声を上げるモニカを無視し、まんこの周りをチンポで焦らすようになぞっていく。



汗と汗が混ざり合い、独特ないい匂いがあたりに充満し脳を麻痺させる。

い、入れてはダメや…！ブーケだけならまだしもモニカにまで手を出したらワイは…入れちゃだめだ、入れちゃだめだ入れちゃだめだ入れ…:たいい♡

「たろおせんせえ…:たすけてえ♡♡♡」

「ブチイイツツ!!」

もう、全部知らねえ…!!

「ずぶう♡♡♡」

「オ、オ、オオオオン、ン、ン、♡♡♡」

挿入したの瞬間、モニカが野生の獣のような声を上げる。

ワイもモニカのまんこの気持ちよさに、歯を食いしばる。

すると、モニカの股から、「ツ—」…と紅い液体が垂れてきた。

これは…血か…!

まさかモニカ…あんなパリピみたいな格好してるのに…処女…:

!?

「も、モニカ…」

「ああん♡あげちやった♡タローちゃんに、大切な処女♡ついにあげられたあ♡♡♡」

モニカはワイの声が聞こえていないようで、うっとりとしている。

「ビキビキビキい…!」

モニカのバーズンを奪った。その事実がワイのペニスをさらに大

きくする。

しかし、モニカは処女。相当な痛みのはずだ。ここは優しくゆつくりと…

「タローせんせえ♡早く動いてえ♡アタイの中の毒、全部かき出してえ♡♡♡」

こ、こいつワイが心配してるのに……！

…ええい！もう知らん！ワイの好きにさせて貰うわ!!

「パン！」 「パン！」 「パン！」

ワイは乱暴に腰を動かす。

モニカの上から覆いかぶさり、ちんこを叩きつけるように動く。

所謂、種付けプレスというやつだ。

「お♡お♡♡初めてののはずなのに、気持ちいい♡♡アタイって、変態さんだったんだあ♡」

ワイがモニカを突く度に「ブルン♡ブルン♡」とおっぱいも踊りだす。

こんのお…♡生意気な乳めえ…♡

ワイは挑発的なおっぱいにお仕置きをすべく、モニカのおっぱいを揉みしだく

「ひゃああん♡おまんこ突きながら、おっぱいさんいじめちゃだめえ♡上も下も気持ちよすぎるのおお♡」

モニカが何か言っているが、知らん！

もみもみもみもみ♡♡♡

モニカのおっぱいの弾力を楽しみながら腰を打ち付ける。

手のひらにも下半身にも快感が広がってる♡♡し、幸せえ♡♡

「う♡ううん♡♡ふ、膨らんできたあ？♡出そう？♡出そうなの？♡せ・い・え・き♡」

モニカの言う通り、ワイのチンポは今にも精子をぶちまけよう準備を始めている。

キンタマも精子製造を止めることなく、これ以上は破裂してしまいたいそうさ。

や、やばい…！さすがに中には出せん…！もうワイはブーケの中に

出している。さすがにモニカにまで出すわけには…!!

そう思い、ワイはモニカの膣内からチンポを引き抜「ガシツ！」：!  
!?

「だゝめ♡タロー先生♡お注射はちゃんと中に出してください♡♡  
♡」

引き抜こうとした瞬間、モニカが両足でワイの身体を押さえつけてきた…!?

くっ…このオオカミ、力強くて振りほどけん…!?

「も、モニカ…中はさすがにー」

「出してえタロー先生♡アタイのおまんこにおくすりちよーだい♡ー

ついでに赤ちゃんもちよーだい♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

ブボボボボオオオオオオオオオ  
!!!!!!  
”

ついにワイは耐えきれず、轟音を上げながら射精してしまった。

「んゝっ♡♡ぬゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ♡

♡♡

モニカは快楽に耐え切れず、大声を上げる。

そして、アへ顔のまま白目をむいて気を失ってしまった。

ここが人がいない離島でなければ、多くの住民が集まってきた事だ

ろう…

ああ…やってしまった…モニカにも中出ししてしまうとは…  
ブーケに何といえ…ってちやうやろ!!ワイはケモシコ大っ嫌いな  
んやぞ?!それなのに2度も…!!

………2人とも、えつちで可愛かったなあ…♡

……と、とりあえず!!終わったことはしやーない!切り替えてこ!!  
そう自分に言い聞かせ、ワイはチンポを引き抜いけな

よく見ると、モニカの足はまだワイを捕えており、力も抜けていな  
い様だ。

な、なんで…!?!

「うううううう♡♡♡フ————♡♡♡フ」

—♡♡♡—

ワイが藻掻いていると、モニカが意識を取り戻した。

しかし、何だか様子がおかしい。息遣いが荒いし、目もギンギンと  
鋭くなっている。

「ち、チンポ…!チンポもつと!!もつとよこせ♡精子もつとよこせ♡  
チンポ♡チンポオオオ♡♡♡」

モニカはそう叫びながら足を動かし、ワイの腰に上下運動を強要さ  
せる。

こいつまさか…野生化してる!?

「お、おちけつモニ…」

「チンポ♡タローチンポお♡好き♡大好き♡孕む♡タローの子ど  
も絶対孕むううう♡」

だ、ダメだ…!?!聞こえてない!?

モニカに強制的に動かされ、いったばかりのチンポがまた発射の準  
備を始める

……こうなりややけだ!!

「モニカ…モニカ…!!」

「はあん♡出せ♡ザーメン出せ♡ありったけ出せ♡赤ちゃん溺れちや  
うぐらい出せ!!!♡♡♡♡♡♡」

「ビュル!ビュルビュル~~~~~!!!」

「おっっっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

再び中に出すと、モニカは短く、しかしそこに快感の感情を全て込めた声を出し、アへ顔のまま余韻に浸り始めた。

「おっおん♡タローの赤ちゃん孕んだあ♡タロー、だいすき♡幸せな家庭つくるう♡♡♡♡」

うつろな目で独り言を喋り始めるモニカ。

や、やっと終わったく……気持ちいいんだが疲れたあ……

空を見上げると、まだ昼になったばかりの様だし、飛行機が来るまで木陰で休——

「ふ、二人目え♡♡♡二人目、つくろ♡双子でもいい♡何でもいい♡チンポお♡♡♡」

モニカがまた復活し、第3ラウンドが始まる。

な、何回続くねえええん!!!

その後、夕方になるまでモニカは正気に戻らず、2人で快樂の海に沈んだ。

中出し回数？10回超えたあたりで数えるのやめたわ…

「あゝゝゝひどい目にあったわゝ……」

ケモシコ島に戻ってきたワイは帰路へと着いていた。

あれからロドリーが迎えに来るギリギリまでモニカとセックスしていた。

正気に戻ったモニカは

『…もう、こんなにアタイを汚して……♡……タローちゃんのすけべ  
／／／』

と言ってきやがった。

あのクソギヤルオオカミ……！お前のせいやる！！  
てかよく見たらあのオイルつねきちのマーク書いてあったし、そんなやばいもん持つてくんない！！

…まあ、ワイもノリノリだったし、今回はええわ……

……そういえば、ロドリーに遭難者は無事だったんかと聞いたら

『？……！！は、はい！遭難者は無事送り届けましたよ！！』

と気になる間があったな……ほんまに遭難者無事なんやろか……

ケモシコ島に帰ってきた後、空港の入り口でモニカと別れたんだが、その時に呼び止められて振り向いたら……キスしてきた。しかも舌入れられた。

『アハッ♪今日は楽しかったよ♡また一緒に気持ちいいことしようね♡♡♡♡♡』

モニカはそう言って去って行った。

去っていく途中、振り向いて手で輪っかを作り、その中に舌を入れフェラをするように舐める姿を見せつけられたな……

“ムクムクムク♡”

その光景を思い出し、またチンポが大きくなってきたが今日はもう腰痛いから休むわ……

もう夜10時か……まめつぶのとも閉まってるだろうし、今日は夕飯なしでええか……

そう考えながら家の扉を開けると、何かに引っ張られて入り口に倒れさせられた。

泥棒か!?と思い目を開けると……ワイの上にブーケが乗っかってた。  
いた。

「……ブーケ 今日、どこで何やってたか、言え」!?!」

ブーケは無言を言わず、ワイに問いかけてくる。

表情は無く、目も濁っており、なんか怖い

首元になんか固いもの当たってるなあって思ったら、ブーケが爪を首元に当てていた。爪は鋭く、頸動脈を捕えていた。

な、なんか知らんが、言い訳をしなければ……

「正直に、言え」

その後、ブーケと朝まで仲直りツクスした

拝啓 母上様

今日は離島で友人とバカンスをしました。

夕方まで激しい運動をしたので全身筋肉痛です。

運動に夢中で魚が取れなかったので、ヤシの実を送ります。多めに送るのでブーケの家にも分けてあげてください。

それでは、お元気で。

敬具

P・S

魚を取っていないのに機長が「大量だったようですね！イカの匂いがここまで来ますよ！」つと言っていました。おかしい人ですよね





ワイ、キツネにカチコミを仕掛ける　あと踏まれる

「……………死のう」

ワイ事タローは絶賛うつ状態や。

理由？そんなのブーケとモニカのことに決まっつとるやろ!!

離島から帰ったあと、なんか知らんけどマジギレしたブーケに朝まで犯された。でも、ブーケの圧に負けずにモニカとのことは誤魔化せただからええやろ！

……………なんかその後

『…………タローはすげべだから、浮気はしようがないよね…アタイは良い奥さんになるから、ある程度は許すよ…でも、アタイが一番なんだからね…?』

と言ってきたが…ま、まあバレてへんやろ!! (なお、その時の上目遣い+ウルウルおめめのブーケに欲情して押し倒した模様)

ただ、あの日からブーケが求めて来る頻度が明らかに増えた気がするなあ…求めて来る頻度と言っても直接的に求めてくるのではなく、耳元で淫語を囁いてきたり、さりげなくポコチンにフェザータッチしてきたりなどこちらを誘惑してくることが多くなった。

この間なんてタヌキ商店で一緒に買い物してたらしつぽを巧みに使ってチンポを弄ってきやがった…声出さないように必死に耐えているワイをまめつぶコンビが「?」って顔で見えてきたのは今でも記憶に残つとるわ…その後?言わんでもわかるやろ…

ブーケだけならまだいい(良くない)。モニカはモニカで出会ったら抱き着いてくるのは当たり前、酷い時はキスマまでしようとしてくる。おまけに2人きりの時はすぐに暗がりやりに連れて行こうとする。あいつワイより力強いから抵抗できへんわ…

後、最近「タローちゃん」呼びから「ダーリン♡」呼びになった…勘弁してくれ…

そんな感じで2匹の獣に毎日のように搾り取られて身も心もすり減らす毎日にワイは疲れ切っていた。

ハーレムだろ羨まっつて?あいては人間じゃなくて獣やぞ…ワイは

こんな望んどらんわ!

……もう嫌や…これ以上は自分が自分じゃなくなつてまう希ガス…それならいつそ海にでも身投げするか…でも怖いからやつぱやめとこか…どないしょ…

『みなさ〜ん!〜こんにちは!!ただいまのケモシコ島の時刻は〜』

ああ、もうしずえちゃんのアナウンスが聞こえる時間か…最後に聞くのがしずえちゃんの癒しボイスつてのも悪くないなあ…

『では、本日のお知らせです。近頃、この辺りの島に出どころ不明の美術品を売りさばくあやしい人物が〜』

ワイはビーチまで全力疾走した。

「おつ!タローさん!今日は早いでs「死ね」つてうわわわ!!急にいしのオノ振り回さんでください!!あつぶな!!」

「やかましいわ!!お前んとこの商品でワイは…ワイは…!!」

ワイはビーチに停泊している船に乗り込み、中にいたキツネの獣人に斧を振り下ろす。

こいつはつねきち。よく島々を周ってインチキ商品や贋作を売り回っている詐欺師みたいな奴や。ワイもこいつにはよく贋作をつかまされた苦い思い出がある。

しかし、今回はそんなのどうでもいい。問題はこいつがブーケやモニカによくわからんろうそくとかオイルを売ったことや!!

「お前があんなもん売るかr」なんや知りませんが、これで勘弁してもらえまへんか?」

そう言つてつねきちはワイにDVDディスクを渡してくる。

こんなDVD1枚でワイが許すわけ〜

『ドキッ♡人間(女の子)だらけの水泳大会!! ポロリもあるよ♡』

「お前はワイの親友や!!」ガシッ!

「おおきにおおきに!!……それはそうと、なんで怒ってたか聞かせてもらえますう?」

「なるほど……ワタシの売った商品が原因でご婦人方に(性的に)襲われたと……いやあく役得でしたなあー! つてうわあ!! 冗談ですからそのてつのオノ仕舞ってください!!」

ワイはつねきちにこれまでの経緯を話した。

この野郎……ニヤニヤしやがって……!!

「言葉に気をつける。ワイは今、冷静さを欠こうとしている」

「わ、わかりましたって……にしても、はたから見ればモテモテで男冥利に尽きるシチュエーションだと思いますけど……」

「ふざけんなアホ! ワイは人間の女の子にモテたいんや!!」

……はあ、ダメや……これ以上は血管切れそうや……!

「……とにかく、もうあんな商品売るなや……せめてブーケとモニカには売らんでくれ……」

「んー……いくらお得意さんのタローさんの頼みでも、こワタシ最近生活苦しくて、そう簡単にはできまへんなあ……あー! こんな時、誰か美術品でも大量買いつけてくれたらいいんだけどなあー!!」

「……今日ある美術品、全部買うわ。贗作でも言い値で買う」

「ほんまでつか!! いやーさすがタローさん、男の中の男や!! よっ! 大統領!!」

このきつねえ……!

だが、生活とか出されたらこつちも強くは言えん……必要経費やと思つて割り切ろう……ああ、ワイの9万ベル……

「ああ、なんでしたっけ…あー！そうそう！わかってますよ、もうブーケさんやモニカさんにはあんな商品売りません!!」

…まあ、これでブーケやモニカ正気に戻るやろ。

そう思えば、9万ベルも痛くはないわ。

「マジで頼むで…お前もいい加減あの商品売るのはやめーや。これ以上、望まぬ相手と致してまう女の子増やしたらあかんで…」

「……は？それどういう意味です？」

「…いや、だってエログッズの効果が必要りや、ワイみたいなのとあんな事せえへんやろ」

ワイはケモナーではないが、ブーケやモニカが可愛くてモテるタイプの女の子だということはわかる。

あんな娘たちが望んでワイみたいなのと関係持つわけがない。あのよくわからん商品のせいでワイと関係を持ってしまってるんや。

さっさとあんな商品から足を洗って、他のイケメンとか金持ちとかと結ばれて幸せになってほしいわ。それこそ、ワイのことなんか忘れるぐらいにな。

「………あんさん、それ本気で言うてます？」

…？…なんや？つねきちが珍しく細い目を見開いてこちらを見つめている。

その顔は、まるで「こいつマジか…」と言っているような表情をしていた。

「なんやねん、ワイの発言におかしいところあったか？」

「いや、おかしいところだらけって言うか…ああ、もうええです。タローさんが正しいってことでもうええです…そりやこの商品アホみたいに売れるわ…」

マジでなんなん？自分から言うてきたのに…

…まあ、ええわ。ワイはさっさと帰って、DVDでも楽しみますかね♡

「ああ、待つてくださいいタローさん…ちょっと携帯出してください」

ワイが帰ろうとすると、つねきちが呼び止めてきた。

「なんだ？」と思いつつ携帯を出すと、何かのデータが送られてきた。

「なんか…タローさんの周りがかわいそうなんで、それサービスしますわ…せいぜい有効活用してください…」

…?なんや周りがかわいそうって…?

まあ、貰えるもんは貰つとくか。さて、何のデータなんかなくと期待半分不安半分でスマホを確認する。これは…DIYレシピか?なんのレシピ——

- ・リモコンバイブ
- ・アナルビーズ
- ・デイルド
- ・ふたなり薬

………  
………  
………

………エログッズやんけ!!!

「エログッズやんけ!!!」

あまりのことに、心の中で思ったことをそのまま叫んでしまった。

「はい!それで色々楽しんでいただこうかと…てわあああ!?!無言でキャンプファイヤー始めんでください!?!ほ、ほら!?!これからタローさんの前にもこれを使える人間さんが来るかもでしょ!?!その先行投資ですよ!!」

………まあそういうことならいいか…

フフ…ワイの元にもいつかこれらのエログッズを使える女の子がいつぱい来てハーレム状態に…♡…おおう、股間がムズムズしてきた

わ…♡

「……………ほんまこの人アホちゃうか…?」

「あん?なんか言うたか?」

「いえ、なにも。ほら、早く帰ってDVD楽しんでください!D・V・D!!D・V・D!!」

「おう!せやな!ほな!…もうあの2人に変なもん売るなよおく!」

ワイはそう言い残し、つねきちの船から去って行った。

「ええ、もうあの2人には売りませんよ…あの2人には、ね」

「ふう〜〜〜ん……………『ドキッ♡人間(女の子)だらけの水泳大会!!ポロリもあるよ♡』…ねえ……………」

突然だが、ワイは今、全裸で正座させられている。

目の前には、例のDVDを持ったブーケが椅子に座ってこちらを冷めた目で見下ろしている。

ここまでの経緯を簡単に説明しよう。

ワイ、帰宅

←

ワイ、DVDセッティング

←  
ワイ、オナニーのために全裸になる

←  
ワイ、リモコンがないことに気が付き、リモコン探す

←  
「ここチエキ」「おう、ありがとなブーケ!…ブーケ?」

←  
仁王面のブーケ「タロー、正座」↑今ここ

…おわかりいただけただろうか?

なんでワイの家にナチュラルにブーケ居るねん!?

マジで休まらんで!!

こうなつたら家にバリケードを「タロー、反省してないね」

「してます!!すんませんでした!!」

ふえええ…ワイの幼馴染が怖いのおお…思わず謝ってしまった。

そんなワイを見て、ブーケは「はあく…」ため息をつき、呆れた顔になる。

「……タローはえつちなこと好きだから、浮気は許すって言ったよ…でも、目の前にいつでも抱ける女の子がいるのに、ガン無視でオナニーは流石にないんじゃない?」

「い、いやあ…さすがに連日付き合わせるのも悪いかなって…」

……何弱気になつとんねんワイ!!

何もビクビクする要素ないやん!今こそガツンと言って、この関係を終わらせるんや!!

いい加減ワイもハーレム計画始動させたいし、何よりブーケのためや!!

「……ブーケ!!ワイはもうこんな生活うんざりや!!もうお前とはエロい事しようないねん!!!いい加減帰ってくれ!!」

…我ながらひどいと思うけど、しゃーない。これでブーケもワイに関わろうとせんはずや……

そう思い、ブーケの顔を見ると——ブーケはニヤニヤ笑っていた。

「…タローって嘘つくとき声が裏返る癖、全然治ってないね…♡」  
え、マジで？

自分の癖初めて知ったんやけど

「嘘ってことは、アタイとえっちな事、いっぱいしたいんだよね…♡う  
れしい♡…考えたただけでお股がキュンキュンしちゃうよお♡♡♡」

「ち、違ッ「仮に本当だったとしてもおっ——」

フミい♡

タローのおちんちんさんはそうは言っていないみたいだよお♡♡♡

ブーケがワイのチンポを踏みつけてくる。

ワイのチンポはこんな状況だって言うのに、大きく固くなっている。

…それでええんか息子お!?

「ふふふ…♡タローのおちんちんさんは踏み踏みされただけで興奮し  
ちやうマゾちんちやんだったんだね♡ほらほらあ♡もつと踏んで  
あげるよお♡」

フミ♡フミ♡フミ♡

ブーケがワイのチンポを踏みつける。

力加減が絶妙で、痛みは感じず快感が全身に走る。

足の裏の肉球の弾力が、勃起チンポと押し合って気持ちがいい。

「ああ♡アタイの肉球とおちんちんさんがお相撲取ってるチエキイ♡  
のこった♡のこった♡肉球がんばれ♡おちんちんがんばれ♡」

ブーケの応援に応えるかのように、ワイのチンポもその硬度を増し



ていく。

段々射精が近くなり、亀頭の先から汁も漏れてきた。

「あく♡おちんちんさん泣いてるよお♡お相撲で負けそうだから泣いてるのかなあ？♡なら、もおくと一生懸命応援しなきゃね♡負けるなちんちん♡強いぞちんちん♡はあく♡おちんちんかつこいい♡♡」

ワイのチンポは応援されるたびに肉球を押し返し、それによって互いに食い込みが増し、気持ち良さのレベルもうなぎ上りである。

やばい…出…

ビュ！ビュビ！！

ワイは耐え切れず射精し、ブーケの足を汚していく。

「ひゃあ…♡おちんちんさんががんばったねえ♡でもアタイの肉球の勝ちだよ♡決まり手は射精によるモロだしの反則負けえ♡やくい、ザコチンポお♡♡」

ブーケがワイのチンポを指さしながらバカにしたようなことを言う。

ワイのチンポはそれに合わせて、まるで涙を流すように残りの精液を垂れ流す。

「…でも、おちんちんさん素敵だったよ♡ほら、かつこいいおちんちんさんにはご褒美あげないとね♡」

そう言うブーケはもう一度足でワイチンポを踏む。

しかし、今度は撫でるように踏みつけており、まるでお互いに健闘を讃え合っているかのようだ。

…しかし、ワイのチンポも戦いにつかれたのか、シナシナのままではいまいち元気がない。

…よし、このまま疲れたことを言い訳に、ここはいったん離脱「あくアタイのあんよがバタバタだあく♡お風呂入んなきゃ♡」ヌギい♡!?ブーケがワイの目の前で服を脱ぎだした。

突然のストリップショーにワイは啞然する。

「ん♡タロー、目が血走ってるよお？…えつち♡」

バツ…!?

べ、別に獣のストリップなんぞ楽しくないわ!!チンポも疲れてるし、これ以上コイツの好きにさせてたまるか!!

ワンピースを脱ぎ、ピンク色の下着姿になるブーケ  
ムクツ♡

好きになんか…させんぞ…!!ワイは…ワイは…

ブラジャーを外すブーケ

ムクムクツ♡

ワイは…獣なんかに負けない!!!

パンツを下ろし、全裸になるブーケ

ムクムクムクムクムクムクムクムクムクムク…

ぼつきー——ん♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

その後、ブーケを押し倒して、お相撲がプロレスごっこになった。

拝啓 母上様

今日はきつねさんのお店で美術品を買いました。

やはりアートは良いもので心が震えます。

きつと、先人たちはこれらの芸術にそれぞれの思いを込めているから、それが私たちにも伝わっているのでしょうか。

いつか私たちの島にも美術品を見に遊びに来てください。

それではまたお便りします。

敬具

P・S

買った美術品を鑑定してもらったら全部贋作でした。

どうやら、私には芸術的センスがないようです。

ワイ、迷探偵なウサギに手コキされる

「……暇やなあ〜……」

ワイは今、ケモシコ島の離れの森に居た。ここは店や民家が全くないから静かで良い場所や。

本来なら、この静けさを利用して考え事をしたり、いつもの騒がし（くてエッチ）い日常から解放されて身も心を休めたいところだが、今日はそうもいかない。なぜなら——

「ちよつとタロー！まじめに張り込みしてよ！みたいな!!」

こいつが隣にいるからだ。

ワイの隣には耳が赤くて、全体的にリンゴっぽい印象があるウサギの獣人がいる。

コイツの名はリリアン。ケモシコ島に住む住民の一人だ。

実はコイツとの付き合いは結構長く、ケモシコ島に来る前まで遡る。

ワイがまだ実家に住んでいた時、家でダラダラしていたワイを見かねたパツパが勝手にキャンプ場の設営ボランティアに勝手に申し込みおったんや。

気づいた時には寝間着のままキャンプ場に放り出されてたわ…これ虐待やないの…？てかボランティア参加者ワイしか居らんかったんやけど…

…まあ、他にやる事なかったし、仕方がなくボランティアに参加した時、キャンプ場の客として来ていたリリアンと会ったんや。

リリアンはキャンプ場に新しい出会いとか発見を求めて来たらしいが、キャンプ参加者はリリアン一人しかいなくてな。自然とワイと2人で行動するようになってたわ。ボランティアの仕事も手伝ってもらって、マジで助かったわ〜。

…結局、ボランティア期間も終わってワイとリリアンはそれっきりだったんやけど、この島に来てから偶然再会して、その後何故かこの島に住み着いたってわけやな…こんな島に住むとかもの好きな奴よなあ……

「タロー、ボーつとしない！決定的な瞬間見逃すでしょ！みたいな！」  
今日はそんなリリアンに付き合っただけでここに来ている。

リリアンは最近探偵小説にはまったらしく、謎の現象や事件性がある事が起こると、現場に急行して探偵ごっこを始める。だが、その推理は割とガバガバであてにならない。結構前に博物館から夜な夜な虫が消える怪現象が起こった時も『フータさんがストレス食いた！』と騒いでいたが、結局カエルが水槽から逃げ出して虫を食べていただけだったなんてこともあった。

探偵ごっこをするのは構わないが…ワイを巻き込むのやめない？  
毎回『助手やって！』って言ってるけど、ワイも暇やないんやが…  
今回の張り込みだって、この辺で夜に変な声が聞こえるとかで、『その正体を暴くよ助手！』って言って付き合わされてる…探偵の仕事ちやうやろ！

……あー、もうすぐ日が暮れてまうぞ…

「なあリリアン。もう帰ろうや〜」  
「ダメ！犯人は現場に戻るって言うでしょ！絶対にここに戻ってくるんだから」

「…だいたい、謎の声の調査なんて探偵の仕事ちやうやろ……」  
「そんなことないよ。島の住民を恐怖に陥れるUMAかもしれないでしょ？それを調査して、未然に事件を防いじゃうんだから!!」

……仮にUMAだったとしたら、ワイらにどうにかできる問題でもないんと思うんやが…

「だいたい、夜な夜な『アゝゝモゝツドゝ』とか『ダーリン』『チン』  
『ボー』とか恐ろしい鳴き声を上げるなんて、近所迷惑なんだから！ア  
タイがとちめてやるみたいないな！」

……ん??その鳴き声って…

「……なあ、他に鳴き声の情報とかないん？」

「えっ？そーだなあ…あ！なんかパンパン音が鳴ってたって噂もあるよ!!」

そう自信満々に言うリリアンの横で、ワイは冷汗をだらだらと流していた。

【悲報】犯人、ワイやった

…うつわ、めつつつつつちや心当たりあるわあ……

そういえば、最近夜中この辺でモニカと青姦しまくってたわあ…

…ちやうねん……夜に家にいるとブーケに絞られると思つて散歩に行く和高確率でモニカに会うねん…そうしたら『ダーリン♡夜の鬼ごっこしよ♡アタイが鬼で、捕まえたらその場で犯すね♡』つて感じで鬼ごっこが始まるんや…

アイツ足速くて捕まるの確定やから、せめて人に見られんようにここら辺に逃げてくるんや…

…『ア〜♡もつとお〜♡♡』とか『ダーリンチンポ好きいい〜♡♡』とか確かに言ってたし、めっちゃ腰振ってたからパンパン音も半端なかつたはずだわ…

…やばい、リリアンに悟られてはいけない……！

悟られたら最後、モニカとの既成事実が成立してワイはケモノと人生の墓場に……！！

それだけは何としてでも避けなければ!!

「あれ、タローどうしたの？すごい汗だよ？……もしかして…何か

知ってるの!？」

なんでこういう時ばかり感がええねんおどれはあ!？」

「い、いや!？」なんでもない!？なんでもないぞお!？」

「あー!!声裏返ってるう!!嘘ついてるなあ!!」

なんでワイの癖知ってるの!？ワイでさえ最近知ったんやぞ!？」

「隠し事は良くないぞ助手!この名探偵リリアンに全て洗いざらい教えなさい!」ガシツ!

「うおっ!?!いきなり掴むなや!?!だいたい何が名探偵や!迷う方の迷探偵のくせに!」

「ぬわあんですってえええ!!」

リリアンは怒りに我を忘れ、ワイに掴みかかる。

リリアンは小柄だが、すごい力で体を揺らされる。なんで獣人連中は人間より力強いねん!？なんとか抵抗しようとした時、リリアンの後ろに池があるのが見えた。

「……あっ」

リリアンはワイの身体を揺らすことに夢中で気が付いていなかったらしく、バランスを崩して池に落ちそうになる。まずい!!

「リリアン!!」

「…!?!／／／」

ワイは咄嗟にリリアンを抱き寄せるが、結局リリアンの力に引き寄せられてしまい、2人で池に落ちてしまった……我ながら情けないな。

「へ、へえええええええええくしっつ!!!ず、ずびい……おおうさぶ……」

小さなキャンプ用バーナーで暖を取っているが、やはりこれだけでは寒い…

池に落ちたワイらは池から這い出たあと、張り込み用で建てていたテントまで何とか戻ってきた。

お互いに着ていた服はさぶ濡れで、着替えも持ってきていないため服が乾くまで大きめのタオルを体に巻いているだけだ。

「…なあ、リリアン。もっとこっち来いよ。風邪引くぞ」

「うっさい!!こっち見んな!!／＼／＼」

リリアンはタオル一枚のこの状況に恥ずかしがっているのかテントの端で丸くなっている。

別に恥ずかしがらんでも、ワイはケモノに欲情せんて……

「……タロー…さつきは、ありがと…」

「んあ? いや〜ワイはお礼を言われる事はしとらんど…結局池に落ちちまったし…」

「……タロー、咄嗟に手を伸ばしてくれたでしょ…アタイを助けるために…何気に自分の体を盾にしてくれてるような体勢だったし…だから、ありがと…／＼／＼」

……なんやいきなり…いつもなら悪態の一つでも突いて来そうなもんやのに…気持ち悪ッ

「……ま、まあ、ええて…ほれ、これで温まれや」

ワイは無理やり話題を変えようと、バーナーに火で沸かしたお湯を使い、作ったコーヒーをリリアンに渡した。

「ん…あれ、これって…」

「ブルーマウンテン…じゃない普通のインスタントやけど、ミルクたっぷり、砂糖3個でええんやろ?」

「……覚えてて、くれたんだ…♡」

「そ、そりゃあ…ワイ、お前の助手なんやろ?ならコーヒーぐらい作れんといかんやろ〜」

前世で好きだったAV女優と同じ趣向だったから覚えていたなんて口が裂けても言えんわ…

「……やっぱり、こんなの我慢できないよお♡♡♡」



「あん？なんか言うたか？」

「……」

…いや無言かよ！せめてなんか言わんかい！

リリアンの方をチラ見すると、タオルをギューツと掴んで俯いている。

…なんか、覚悟は決まったけど、前に踏み出せない。そんな顔してるなあ。

…めんどくさそうだからほつといてワイもコーヒー飲も…変な味やな…こんなまずいの一体どこのメーカーやねn「タロー!!」

うおっ?!びっくりした!?

いきなりビビアンの大声が聞こえたため驚いてしまった。

「なんやねん急に…」と思いつつ、リリアンの方を振り向くと――

リリアンが、顔を真っ赤にしなが、体に巻いていたタオルを羽を広げるように「ばさあ！」と広げていた

一糸まとわぬ姿のリリアン

モニカほど大きくはないが、揉み心地が良さそうな乳房

ウサギ特有の太くて肉付きの良い太もも

そして、お肉が「プニイ♡」としている気持ちの良さそうなかわいいおまんこ

その芸術品のように完成された淫らな姿に、ワイは思わず見惚れて――いやちやうやろ!?

ワイはリリアンから顔を背ける。

「な、なにしてんねん!？」

「：／／あ、アタイのせいで風邪引かれても、困るから：こういう時は：は、裸で暖め合った方が効率的でしょ：／／／／／」

だからって、そうはならんやろ!?

このウサギ熱でも出て頭おかしくなったんか!?

「：な、なによ！／／／アタイだって恥ずかしいの我慢してんだから何か言いなさいよ！／／／」

「じゃあ無理にやるなや!?!嫁入り前の女が何してんねん!？」

「じゃあタローが貰って!!／／／／／」

「フアツ!？」

突然の一言に思わずもう一度リリアンに顔を向けてしまう。

…あつ…かわいいおっぱい…♡エツチだ…♡

何が『エツチだ…♡』やねん！ワイのアホおおお!!!

「こ、こんな事したらアタイだってお嫁に行けなくなるもん!!だから責任もってタローが貰ってよ!!」

「そ、そんなめちやくちやな…」

「アタイだって覚悟決めたんだから！タローも神妙にしなさいよお！」ガバア！

「うわっ！ワイのタオル引つ張るなや!!まだ後戻りできる!!やめるんやリリアン!」

ワイのタオルを引つpegがそうとするリリアンと、それを阻止しようとするワイとの間で取っ組み合いが起きる。

取っ組み合っている間、リリアンのおっぱいがプルン♡プルン♡と揺れているのが見えて、チンコに血流が集まってくるのを感じる

…ああ、すごっ…♡

「いいから受け入れなさいよ！あ、アタイ…タローにだったら…キヤツ！」

取っ組み合いの末、バランスを崩し「ずてーん！」と2人とも倒れ込んでしまう。

いてて…大丈夫かりり「ふよん♡」…アン?  
なんや?なんか、手に柔らかいものが収まっているな…

これ、気持ちええな…もつと触ってみるか…「ふよん♡」プニ♡

「あんツ♡」

ワイが夢中になって柔らかいものを触っていると、リリアンが色っぽい声を上げる。

なんか…気持ちよさそうな声やったなあ…つてまさか!?  
ワイは今の状況を把握する。

今は…仰向けに倒れたワイの上に裸のリリアンが覆いかぶさっている、一歩間違えなくてもやばい状態。

そしてワイの右手は…リリアンのおっぱいを揉んでいた。  
…やっぱりかああああ!

なんでワイはケモノとばかりTOLLOVERするすんねん!?  
どーせならワイの元にもララちゃんとかモモちゃんが来てほしい

わ!!

「あ♡…一体何が…?!?//////////」

あ、やべ!

リリアンも今の状況理解したみたいや!

このままでは、ワイは変態扱いになってまう!?

「り、リリアン!これは、その…」

「う、うんわかってr…?!?!//////////」

何かを言いかけたリリアンが突然一点を見つめて顔をさらに赤くし始めた。

な、なんや…どうしたんや?

リリアンの視線を追っていくとそこには——ワイの立派にそそり立った息子チンポがあった。

……オワタ

ワイの人生オワタ。

これからワイは女友達のぱいぱい揉んでちんちんおつきした変態として生きていくんや…

「……こ、これ……アタイで、大きくなったの……?」

ワイは何と言ったら良いかわからず、ただ顔を背けることしかできなかった。

「……アタイで……大きくしたんだね……うれしい……」

沈黙は肯定とみなすとはよく言ったもので、リリアンに感づかれてしまった……ん?気のせいかな、嬉しいって聞こえたんやけど?

「タローの……ち……ん……す……ごいね……ちよつと……触らせて……」

「は?ちよ 〓サス〓……うっ♡」

ワイの返事を聞く前に、リリアンはワイのチンポを触り始めた。

……なんやねんこの状況!?どないなつとんねん!?

「はあ、はあ……タローの……あつたかいくて……カチカチだね……やけどしちやいそう……♡」

〓コス♡〓 〓コス♡〓 〓シコ♡〓 〓シコ♡〓

リリアンがワイのチンポを優しくこすり始める。

……うっ♡……どこかきこちなく、たどたどしさが残っているが、これはこれで……♡

……はっ!こんなことしてる場合ではない!?

とりあえず、リリアンの乳から手を離して……!?は、離れん……!?磁石のように強くくっついとる!

……いや、違う。離れないんじゃない……ワイ自身が、無意識に離したくないって思つとるんか……!?

〓もみゆ♡〓 〓ふよ♡〓 〓ツンツ♡〓

変幻自在に形を変えるおっぱい。

……ああ♡この感触たまらない♡ほくこれ好き♡  
ちゅき

「タロー……♡アタイの……おっぱい……好き……なの?／／」  
……はっ!?ワイはいったい何を!?

リリアンの言葉に動揺して、思わずおっぱいを強く握ってしまう

「……っ♡……好き、なんだ……♡……アタイ……タローになら……いいよ♡♡♡」

その言葉と同時に、リリアンの手の動きも早くなる。  
…あつ、やば…油断し…

“ビュルビュー!!!…ドクドク…♡”

急に擦るスピードが上がったため、思わぬ快感に油断してしまい、  
射精してしまった。

「ひゃあ!?…これって…せいえき…?…あつたかくて…いい匂い…  
♡♡」

リリアンが手についたワイの精液を見ながらうつとりとした表情  
を浮かべる。

……なんで、ワイの精液を…そんな顔で見てんねん……そんなの  
…

“イライラ♡イライラ♡”……ピーン♡

ちんちん、大きくなつてまうやん…♡

「あつ…♡…ね、ねえタロー…まだ、寒いよね…♡…よかつたら…もつと暖め合う…？」

リリアンが顔を少し逸らしながら、流し目でこちらを見て言う。

その目の中に「♡」が見えるのは気のせいではないはずだ…♡  
ワイはチンポをおっ勃てながら、リリアンの元へ近づいた

テントの中は、これからますます暖かくなる…♡

## ワイ、迷探偵なウサギの王子様になる

「これが…タローのおちん…ちん♡…子供の頃に見た、お父さんのよ  
りおつきい…」

ワイのチンポをまじまじと見ながらリリアンが感嘆の声を上げる。  
…どうやら、小さい頃に父親のを見ただけで今まで他のチンポを見  
たことがないようだ。

…それはつまり…

「リリアン、お前処女なんか？」

「!?／／い、いきなり失礼なこと言わないでよ!!…そう、だけど  
……」

リリアンが小さく呟いたのを、ワイは聞き逃さなかった。

…そうか、処女なんか…

「リリアン、引き返すなら今のうちやぞ」

「……え？」

「処女は、本当に好きな人にあげた方がええつて。この場の雰囲気  
軽々しくあげるものでは「タローのバカ!!」!?」

リリアンが突然大声を出す。

目には涙を浮かべて、怒ったような顔をしている。

「アタイ、雰囲気流させるような軽い女じゃないよ！処女だつて、  
ちゃんと好きな人にしかあげないんだから!!」

リリアンが大声でワイに叫んでいる。

…えっ、好きな人つて…

「……アタイ、タローのことが…好きだよ……一緒にキャンプ場でタ  
ローと離れた後、なんだか日常がいまいち楽しくなくなつて…気分転換  
で無人島に来て、タローに再会した時、アタイ胸が「キュン♡」つて  
なつたんだ…ああ、この人がアタイの王子様なんだつて……だか  
ら、タローと一緒に居たくて、この島に引っ越してきてそれで……  
／／／／／」

リリアンが顔を赤くしながら、言葉を紡ぐのをやめる。

自分が言っていることを改めて考えて恥ずかしくなったのだろう

か？

そうか、リリアンはワイのことが……そう考えるとワイのチンポが上下にピクピクと動く。

『早く目の前の雌を犯せ。この雌を自分のものにしろ』

ワイの頭の中に響いた声はワイのチンポのものか、はたまたワイの心の声か。

……まあ、どうでもいいか。

どちらにしろ、ワイのやることは変わらない。

「……リリアン」

「な、なにy……むぐっ!？」

リリアンは言葉が続けることができなかった。

何故ならワイがその唇をキスで塞いだからだ。

「た、タロお……♡……んう……♡……ぴちや♡……♡……ふうん♡」

お互いに舌を入れ合い、しばらくテントの中には水音が響いていた。

一通りお互いの舌で口腔内を犯し前会った後、唇を離すと唾液の橋がキラリと光を放った。

「はあ……はあ……たろお?♡」

リリアンは顔を蕩けさせながら、なにが起こったかわからない様子であった。

「リリアン。ワイ、もう止まれへんから。後悔しても遅いで」

「!?……♡……♡……♡……うんっ!……来て、アタイの白馬の王子様♡♡」

ずいぶんロマンチストやな……これから始まるのは、王子と姫というよりはケダモノ同士の交尾なんやけどなあ……♡

ワイは苦笑いを浮かべながらリリアンに今度は軽い口づけをした。

さて、リリアンは処女やから最初は優しくせんとな……

……ブーケとモニカも処女だったのに激しかった?あいつらが異



常なだけだわ！本来初めてであんな激しいの出来るわけないやろ!!  
そう自分にツツコミを入れつつ、ワイはリリアンを後ろから抱きしめ、リリアンの秘所を揉んでいた。まずはチンポを入れる前にほぐさなアカンからな。

「あん♡……たろお……♡……おま……あそこモミモミきもちい……♡」

リリアンのまん肉を優しく揉む。

プニプニ♡とした触感が指から伝わってきてたまらない。

……よし、段々秘所からエツチなお汁が出て来たな……

ワイはリリアンのまんこの準備が出来たことを確認し——指をまんこに侵入させ、中をほぐしにかかった。

「!?……あつ指い♡……タローの指が、アタイの中で……ひゃん……♡」

リリアンの中は暖かくて、ぬるぬるとしており、出し入れがスムーズに進む。

しかし、ゆるゆるというわけではなく、むしろ膣壁はワイの指を離そうとしたくないのかキュウキュウと締め付けてくる。

「ひゃああん♡アタイの大事なところ……♡タローに触られて、んう♡喜んでるう♡……アタイ、こんなにえつちな娘こだったんだあ……♡」

リリアンがワイの指とまんこを愛おしそうに見つめる。

ワイはまんこがほぐれてきたのを確認し、指の本数を2本に増やす。

それにより、さらにスケベな声を上げる。

……ちよつとからかってみるか……♡

「リリアンのまんこ、グイグイ吸い付いてきて、ドスケベちゃんやな。こんなスケベならオナニーも毎日のようにしてるんやろなあ」

「ふえ♡……お、オナ……♡……そ、そんなこと……やってないもん……」

「ん？そんなわけないやろ。正直に言わないとやめちゃうで」

その言葉と同時に、ワイは手の動きを止める。

「え……タロー……？……なんでやめちゃうの……？アタイ、このままじゃ切なくて死んじゃうよお♡」

リリアンは腰を振り、快感を得ようとするが、ワイは空いている片方の腕で腰の動きを制限しているため、思うように気持ちよくなれない様だ。

「たろお♡…いじわるしないでえ♡…ん♡…ん♡…だめえ、さつきより気持ちよくなれない♡…タローお願い♡アタイの大事なところで、もつとほじほじしてえ♡」

リリアンは切なそうな表情を浮かべながら甘えるような声を上げる。

すぐにでも指を動かしたい衝動に駆られるが、グツと我慢してリリアンの耳元で言葉を紡ぎ続ける。

「ほら、ちゃんとと言わないと指は動かなくてワイの指は？つきは嫌いやからなあ〜」

「!?嫌!嫌わないでえ…お、オナ…オナニーは毎日起きてからと寝る前に／／タローとのロマンチックなセックス♡を想像しながらやってたのお♡／／…本当のこと言ったから、ほじほじしてえ♡♡♡」

リリアンは感極まっているのか、聞いてもいないのにオナネタも白状した。

…ワイでオナニーしてるのか…♡

正直に言ったんだ。これはご褒美を上げないとなあ♡

「リリアンは変態ちゃんやなあ♡…でもエッチな子は大好きやで」  
クチュクチュ♡

「ひゃああん♡アタイも♡タローの指好き♡♡♡」

リリアンは再びワイの指により始める。

ワイの指と一緒に腰も動かし、淫靡なダンスを踊っているかのようだ。

「タロお♡…アタイそろそろ…／／」

どうやらリリアンはそろそろイきたいようだ

「そうか…なら、思いっきりイケー!」  
ぴちゃー!ぴちゃー!

ワイの指はリリアンをイカせるために激しく動いた。

それはもうダンスというより、本能の赴くままに暴れているようで

あった。

「あああつはあ♡タロー♡…それ、激しすぎ…♡…こんな♡我慢  
できない…♡イク、イっちゃう♡…♡イツ!!…♡ツ…♡♡♡♡♡  
♡♡」プシヤア♡

リリアンは顔を上に向けて、舌を出しながら静かにイッた。

どうやら、声もあげることのできない程の絶頂を迎えたらしい。

「…はあっ♡♡…♡タロー、上手だったよ…♡オナニーよりずっと気  
持ちよかったあ…♡♡♡」

リリアンはワイに体重を傾けながら、息を荒くして語り掛けてく  
る。

その顔が美しくて、少し見惚れてしまった。

「ん…♡タロー♡どうしたのアタイの顔見つめちゃってえ…♡さて  
は、アタイにメロメロさんだなあ♡♡♡」ニヤニヤ

ワイの視線に気が付いたリリアンがからかうように言うてくる。

ワイは、なんだか恥ずかしくなってしまう、恥ずかしさをごまかす  
ようにリリアンのおっぱいを揉む。

…♡やっぱり気持ちええねあ。モニカよりは小さいが、手にフィッ  
トしてまるで最初からワイの手に収まるように作られたような錯覚  
を覚える。

「いやん♡タローてば、おっぱいばかりい♡…いいよ♡アタイの  
おっぱいはタローのものだもん♡」

もみ♡もみ♡もみゅ♡

リリアンのおっぱいとワイの手が愛し合っていると、ワイのチンポ  
がムズムズと動き始める。

…♡…♡こいつもそろそろ限界か…♡

「…♡リリアン！」

「きやあ♡」

ワイはリリアンを抱きしめながら、一緒に横になる。

お互いに向き合い、互いの裸をまじまじと見つめ合う。

「綺麗やで、リリアン♡」

「いやん♡タローどこ見て言うてるの…♡タローも、かつ♡いいよ♡」

ワイらはお互いの体の感想を言い合う。  
その言葉は、「綺麗だ」「かつこいい」などの褒める言葉が主なもの  
だ。しかし、

(おっぱい触りたい♡ちんちん擦りつけない♡おまんこにぶっこみた  
い♡)

(ちんちん舐めたい♡おまんこ犯してほしい♡赤ちゃん産みたい♡)

互いの脳内は発情したケモノそのものであった♡

「…リリアン…♡」

「…うん♡」

もう、2人の前に言葉はいらなかった。

ワイのチンポがリリアンのまんこにずぶずぶと侵入していく。

「う…♡にゅん…♡」

リリアンはゆっくりとワイのイチモツを受け入れていく。

ふと、何かにチンポの侵入を邪魔されたのを感じた。

これは——処女膜か

やっぱり、リリアンは大事に処女を守ってたんやな……

……本当にワイが貰ってもいいのだろうか…

「…リリアン、引き返すなら「タロー」…なんや?」

「覚悟を決めた女の子に、それを聞くのは失礼だよ♡——

王子様、早くアタイを夢の世界に連れてって♡♡♡♡♡♡♡♡

プチイ♡♡♡♡♡♡

その言葉と同時に、ワイはリリアンの処女を奪った。

「っー♡♡♡♡♡♡」

リリアンは痛みを耐えるように歯を食いしはる。

リリアンの腕に力が入り、ワイを強く抱きしめる。

それに応えるようにワイも抱きしめ返す。

段々と痛みが和らいだのか、リリアンの呼吸が安定していく。

「はあ…♡はあ…♡ついに、アタイ達繋がっちゃったね♡」

「リリアン、大丈夫か？」

「…：…本当は、ちよつと痛かった…：でも、タローがくれた痛み、優しく気持ちよかったよ♡…：それより、そろそろ…♡」

リリアンが物欲しそうな表情を浮かべる。

…：…たつた今非処女になったばかりなのに、スケベな奴やなあ♡

ワイはゆっくりと動く始める。

「うん♡…：はあん♡…：…きやん♡タローのが、アタイのと、こすれて…♡」

「…：…トン♡…：…トン♡…：…トン♡」

初めてのリリアンに気を遣い、遅く動いているが…：これはこれで気持ちがいい

ワイのペニスとリリアンのヒダ達がゆっくりと愛し合う。

まるで、ペニスとヒダのハーレムエッチだ。

「タロー、ちゅーしょ♡上も下も、一緒に溶け合おう♡」

「ああ…ん…」

「んちゅ♡…ん♡…ペロ♡はむう♡…♡…れろお♡」

ワイは動きながらリリアンとキスをする。

上も下も快樂塗れで頭が蕩けそうだ。

…そろそろそれ耐えられなさそうだ…！

「リリアン…レロ…そろそろ…！」

「タロー♡出して…♡タローのお姫様だつて証拠♡…アタイに残して

♡ああ♡一緒にイこ♡おとぎ話のお姫様と王子様みたいに幸せにラ

ブラブしよ♡」

ビュー——！！ドプウン！！

「ひゃあああん！！♡タローの熱いの出てるう♡タローのものつて証、  
いっぱいつけられちやつてるう♡♡♡♡♡♡」

ワイはリリアンの中にザーメンを吐き出した。

「ビュー…ビュー…♡」

射精が収まり、ワイはチンポを抜く。

「ゴポオ…♡」

リリアンのまんこから受け止め切れなかった精液が流れ出る。

「…えへへ♡タローにアタイの初めてあげちやつた…♡アタイ達、  
きつとどんな童話のお姫様たちより幸せだよお♡♡♡」

リリアンが、幸せそうな表情を浮かべる。

「ペアア…」つと顔の周りに綺麗な花が待っているような幻覚が  
見える。

…さて、お互いに温まったし、今日はもうー

「…タロお♡もう一回しよくよお♡もつとタローのものつて証残し  
てえ♡♡♡♡♡」

…初めてなのに、もうおかわりか…

ウサギは年中発情期と前世で聞いたことがあるが…ここまでは

…♡

「リリアン…ワイ、止まれへんで♡」モミい♡

「あん♡…スケベ♡」

ワイとリリアンの影が重なり合う。

テントの中は、まるでサウナのように暖かった…♡

ぬあくあくにがサウナやあんぽんたーん!!! (小声)

ワイは頭を抱えて小さく叫んだ。隣で寝ているリリアンを起こすと悪いからな。

あの後、お互いに寝落ちしたようで、起きたら抱き合って寝ていた。起きてすぐは頭が働かずボーっとしていたが、段々昨日のことを思い出し、顔を青くした。

…なんで流れるようにリリアンとやってんねん!!

ワイにはブーケとモニカが…ってちやうう!!! そもそもワイケモナー嫌悪民のはずやろ!?! なんで昨日ノリノリでやってんねん!?

…まさか、ワイはケモノと交わるうちにケモナーに「コロコロ…」

あん?

「なんや…?」

何かが手に当たったような気がしたので、視線を向ける。

そこには、昨日飲んだインスタントコーヒーの瓶が転がっていた。

…そういえばこれ、えらいまずかつたなあ…メーカーどこよ?

ワイは瓶を手に取り、商品名を見る。

『つねきち印のハッスルコーヒー!! これであなたも夜の帝王…♡』

「ああんのクソギツネええええええええええええ!!!!!!」

「…うん? タロオ…?」 おめめコスコス !!!!!!

ファッ?!? しまった?!? 思わず大声を上げてしまった!

「リリアン、そのお……」

「…えへへ♡アタイ達、これで夫婦だね♡タロー、子どもは何人ほしい?♡アタイ、タローが望むなら、何人でも産んであげるよお♡」

なんでやねん!!

なんかリリアンの中でワイらが夫婦ってことになっとなる!?

……アカン、このままでは取り返しのつかない方向に行きそうや!!

なにか打開策は……

「……ねえ、タロオ…♡もう服は乾いたみたいだね♡」

「あん?……せ、せやな……」

「じゃあ、テントから出て、張り込み続けようか……それ…と…も♡

…

リリアンがM字に座り、ワイの方に向き直る



”くぱあ…♡♡♡♡♡”

もつと2人で暖まる？♡♡♡♡♡♡♡♡

結局、テントから出たのは夕方であった。

拝啓、母上様

今日は友達とキャンプをしました。

途中で川に落ちてしまったりと大変なこともありましたが、キャンプボランティア時代に戻ったようで楽しかったです。

母上様もたまにはアウトドアを楽しまれたほうが健康的だと思いますのでキャンプセットを送ります。親父殿や友人と行ってみてはどうでしょうか？

それではまた。

敬具

P・S

最近、家の鍵を変えようと思うのですがいい鍵屋さんを知りませんか？

家の中に身に覚えのない女の子用の製品が転がってるなど不法侵入者がいるようなので

ワイ、エジプトネコにマツサージされる

「……全身が痛い……」

ワイの体は限界を迎えようとしていた。

何故かって？いい加減察してくれ…

お察しの通り、ワイの平和な日常に、ブーケとモニカの他にリリアンまで加わってしまったのだ。その結果、もうワイの体はボロボロや…

…大体、あいつらの性欲やばすぎやろ!?

ブーケはどこでもセックスしようとするし、モニカは一度始めると朝までチンポを抜かずに続けようとする。

リリアンはリリアンで、外で偶然会った時は普通に接してくれているのだが、明らかに前より距離が近くなった。具体的には隣にいると常に体のどこかが接触するレベルで近い。座っているときに肩に頭を乗せられたときは「お前そんなキャラやないやろ!」と思わず突っ込んでしまった(リリアン曰く、「恋は女を変えるのよ、みたいな」だそうだ)

そして、先日処女を散らしたばかりなのに、日に日にエロのレベルが上がっている。

この間までは、フェラも「チロチロ…♡」と亀頭を舐めるだけであつたが、いつの間にか「ジュポ!♡ジュポ!♡」と根元までしゃぶり尽くすまでに至っていた時は戦慄を覚えた…

エッチの頻度も日を追うごとに増えていき、我慢できずに1回致した後、10分経たずに「たろお…♡…その、もう一回…ね♡」求めてくるなんてザラだ…賢者タイムもないんか…

だが、そんなこともどうでもよくなる事件が起こった。

最近、ワイの家の中にブーケの私物がいつの間にか置かれているのだ。

タンスの中にはブーケの服が入っているし、歯ブラシが2本刺さっている様は軽くホラーであつた。

そんな3人の相手を毎日こなしていった結果、ワイは全身(主に腰)

に疲れが溜まっていた。

何い？贅沢な悩みやつて〜？

おう、いつでも変わってやるぞ…ワイはケモノと離れられるなら大歓迎や。

…：それにしても、マジで腰痛い…：こういう時は、ゆつくり風呂につかるに限るわ。

こんなこともあろうかと、ワイの自宅の地下室は風呂場になっている。

こんな痛みも、風呂に入れば一発で治るはずや！

幸い、あの3人も今日は所用で島を離れているから誰にも邪魔はされへんはずや！

じゃあ、さっそく風呂に「ピンポーン」…：なんや、客か？

「つたく、人の入浴を邪魔するとか、誰やねん…：」

ワイは少しイラつきながら、家のドアを開ける。

「はあーいどちらさまm…：なんや、お前か…：」

「なんだお前かって…：少し失礼じゃない？」

ドアのを開けると、玄関にどこかエジプトの様な雰囲気を漂わせている黄色い猫が立っていた。

こいつの名前はナイル。この島に住む猫の住民その2だ。

いつだったか、こいつは島の海岸に流れ着いていた（後で聞いたらうっかり海に落ちたらしい）

発見した時、体に包帯巻き付けて倒れてるもんやから「ファツ!?どざえもんやんけ!」と驚いて腰を抜かしたが、どうやらまだ息があったよなのでワイの自宅に運んで看病したんや。

それから、順調に回復していったんやから自分の家に帰ればいいものを「アナタに恩返しをしたい!」と聞かず、そのままワイの家に住み着こうとしたとんでもない奴や。

…：まあ、その後ブーケとリアルキャットファイトを始めたりとなんやかんやあってこの島に住居を構えることで落ち着いたのだ。

「なんか用か？ワイ今から風呂入つてのんびりするんやけど…」

「あらー！ちようどいいわ。なんだかアナタが疲れているように見えた

から、今日はマッサージをしてあげようと思ってきたの」

「えっ、そんなことしなくてええて…ん？ちようどいって何がや？」  
「クフフ…実はいいマッサージ用ローションが手に入ったのよ。だからオイルマッサージやってあげる♪きつと体の疲れも吹き飛ばわよ」  
「なおさらそんなこと…」

…さてよ？

オイルマッサージは血液の滞った流れを改善させて体の調子を整える効果があつたはずだ。

もしかしたら、この腰の痛みともいち早くおさらばできるかも知れない……

「……せっかくだから頼むわ。痛いのは嫌やから気持ちいいので頼むで〜」

ワイはナイルを家の中に招き入れた。

「ええ、期待してて………一生忘れられない、気持ちのいいものにしてあげる…♡」

ワイは海パン姿になり、地下室でナイルを待っていた。

ナイルは「準備に時間が掛かるから先に行つて待つていて…♡」と言つてワイの部屋にこもりおつた。なんでワイの部屋やねん…

プールサイドベッドを置いてつと……よし！これで準備は整つた。あとはナイルを待つだけ「お待たせ…」おん？丁度来たようやな。

「おう、待つてたでナイr…!？」

ワイはナイルの姿を見て、言葉を止めてしまった。

ナイルの恰好は、2枚のハンドタオルを胸と腰に巻いているだけであつた。

「オイルを使うと濡れてしまうでしょう？だから濡れてもいい格好に着替えてきたの」

ナイルはそう言っているが、いくら何でもその恰好はないやろ!?  
ワイはケモノ趣味はないが、一応男やぞ!?

異性の前でそんなタオルを巻いただけの……ああ……エロい腰つきや……♡

足も肉付きが良く、あそこでチンポを挟んでもらったら天国やろなあ……♡

体にはくびれはちゃんとおあるのに、モニカに負けない程大きくて柔らかかそうな黄色いおっぱい……♡

「あらあゝ♡アタシの体をジロジロ見てるけど、何か変なところでもあるのゝ♡」

「!?……い、いや!?なんでもない!!」

はっ!?しまった!見惚れてい……違い!!見惚れてねえし!!あれだし……あれ……目力を鍛えてただけだし!!……何言うてんねんワイは……

「クフフ♡そういうことしておくわ♡……じゃあ、そこにうつ伏せになってもらえる?」

ナイルはプールサイドベッドを指さす。

……せ、せやな!これからワイはマッサージ受けるだけやし、なにもなあんにも!やましいことはないんや!!

そう自分に言い聞かせて、ベッドの上でうつ伏せになる。

「ほ、ほな頼むわ……」

「ええ……まかせて♡」

ワイがうつ伏せになっていると、背中から「ぴちやぴちや」と水のような音が聞こえてくる。

どうやらナイルがローションと手に馴染ませているようだ。

そんな水音がしばらく続き「じゃあ、いくわよ……」という声が聞こえる。

“さわつ” “もみつ”

背中が何かに触られる感覚が走り、マッサージが始まったのだと察する。

…おっ?これは…

「あゝー…キックわゝー…」

やばい、めっちゃくちゃ気持ちいい。

身体の疲れている個所を的確に揉み解し、凝り固まった筋肉が柔らかくなっていくことがわかる。

マツマが按摩に通っていた気持ちがよくわかるわ…これは中毒になる…♡

「クフフ…どう、気持ちいい?」

「最高やで…あつ、腰重点的にやってクレメンスうゝ」

「クフフ、りよーかい…フフ、蕩けた顔可愛い…♡」

あゝー脳が蕩けるう…なんも考えらんねえ…

もう何分ぐらいたったであろうか?マッサージが気持ちよすぎて時間の感覚全くないわ…

よっしや、このまま続けていれば体の痛みなんてすぐに吹っ飛んでしまう。

これからもナイルに頼んでみるか…

「…ねえ、せっかくだからスペシヤルなマッサージやってあげようか?とおくくくつても気持ちいいわよ…♡」

「んあ?…おおくう、頼むわゝ」

なんと!今のままでも良いのに、もつと気持ちのいいものがあるのか!!

これはやって貰う他ないわ!!

「…♡…じゃあ、準備するわね♡」しゆる…

…しゆる?

なんや、何かが落ちる音が聞こえたぞ?

ワイはボーっとする頭で音のした方向を見る。

…なんや、床にタオルが落ちてるな?どっから落ちたんやろ…?

床から視線を徐々に上げていく

ナイルの足があるな…ナイルの腰…お腹…丸出しのおっぱい…鎖骨…ん？…！！

「ファッ!?何してんねん!？」

ワイは朦朧としていた頭を無理やり起こし、ナイルを見…なるべく下の方を見る。

ナイルは胸に巻いていたタオルを外し、いやらしいおっぱいを丸出しにしていた。

「特別なマッサージをするのには必要なのよ…なあに♡アタシのぱいぱいに興味深々なのお♡お・ま・せ・さん♡♡♡」

ナイルはワイをからかうように両手でおっぱいを上下に揺らす。

ふおお…♡ぱいぱいダンス最高お…♡

…やばい！また変な思考に陥るところだった!!

…せや、今から始まるのはただのマッサージ。なんにもやましいことはない。あくまで平然と振舞うんや…!!

「…なんでもいいから始めてクレメンス」

「クフ♡それじゃあ…♡」

ナイルはオイルを自らの身体に垂らすと、自分の体に這わせるように両手でオイルを伸ばし始めた。

…エツツツツツ!!

光に反射したヌルヌルテカテカおっぱい…♡ほちい…♡

…あかん、勃ってしまったそうや…!!

流石に勃起させるわけにはいかないため、目を閉じてうつ伏せになる。

「クフフ…始めるわね♡」

ナイルはそう言う

“むにゅん♡”

ワイの背中にのしかかってきた。

背中からナイルのたわわな2つの乳房の感触が伝わってくる…デ

へへ♡

…なにキモイ声上げてるんやワイは!?

「こうすると♡…全身くまなくほぐれて、気持ちいでしょう♡ほらほら♡」むにゅ♡ぬちや♡

ナイルが体を上下に動かし、ワイの背中をペンギンのように滑らせる。

さつきまでは体を解されている気持ちよさであったが、今は違う意味で気持ちがいい。

ムク…♡あぁっ!?息子が反応してきた!?

お願い!勃たないでチン之内!!ここで勃起したら、ワイの人生はどうなるの!?!まだ半勃起でバレてない…!ここを乗り越えたら、ナイルのマツサージが何事もなく終わるんだから!!

…ん?なんだか固い物が2つ程背中に当たってるな…??

「ん♡…きちゃん♡…むうん♡…♡」

ナイルも小さく喘ぎ声のようなものを上げているな…

…まさか…ナイルの奴、乳首を勃起させているのか…!?

ムクムクムク…♡

ピンピンピン♡♡♡

次回、チン之内勃つ

…デュエル始まる前から負けてるやんけ!

「はぁ…♡背中は一通り終わったから…♡次は前ね♡」

!?!?

ナイルがワイの身体をひっくり返そうとしてくる…!?

と、止めなくては!?!…ちよ、力強ッ!?

あ、あかん!ひっくりかえ——



ビビーーーーーン♡♡♡♡♡♡

ワイはひっくり返されて、巨大化してしまっているチン之内くんがナイルの目の前にさらけ出される。

さらけ出された衝撃でチンコが“ふりふりくん♡”と揺れ、ナイルに挨拶をしているかのようだ。

「わあ…♡とつても大きくて礼儀正しいおチンポね♡…クフフ♡はあい、こんにちはあ♡」

ナイルがワイのチンポに笑いながら挨拶し返す。

ワイは非日常的な光景に興奮してしまい、さらに息子の硬度を上げる。

「クフ♡こんなに腫れてちや、普通のマッサージじゃ痛いわね…♡こは——」

ナイルは“むふあ♡”と乳房を左右に開き、隙間を作ると

“ばふううん♡♡”

“ばいばいで包んであげようね♡♡♡♡♡”

ワイのチンコを間に挟み込んだ。

いわゆる、パイズリというやつだ。

“にゅちゅ♡” “にゅちゅ♡”

ナイルが乳房を動かし、ワイのチンポをむにゅむにゅと刺激する。

ナイルのおっぱいの柔らかさで竿を癒し、ローションのヌメヌメがしつとりと気持ちよく、そしておっぱいの間の濡れ切っていない体毛が“こちよこちよ♡”とチンポの裏筋をくすぐる。

ぱふぱふ♡ぬるぬる♡こちよこちよ♡

3つの違った感触がワイのチンポを狂わせている。

「クフフ…♡アナタの顔、とおくつても気持ちよさそうに緩んでる♡  
かわいい♡」

ナイルの肉の房がさらにワイのチンポを撫で上げる。

ああ♡おっぱいすきい♡

「ん♡…ふん♡……にゅ♡……おチンポ、おっぱいに甘えて、まるで赤ちゃんね♡はあ♡い赤ちゃん♡ママのぱいぱいで気持ち良くなり  
まちようね♡♡♡♡♡」

ナイルが赤ん坊を愛でるような声を出すので、思わずバブみを感じてしまう。

「ああ♡ママツ♡ママツ！♡おちんちん、苦しいよお…♡」

「クフ!?♡じゅる…♡…♡あらあ♡それは大変！じゃあ、ママのおっぱいで苦しいのぜえ♡んぶ吸い取ってあげる♡♡♡」

※パフ！パフ！パフ！※

ナイルがおっぱいの動きを速める。

やば…なにか出そう……！

ママあ…怖いよお…♡

「大丈夫♡ママが全部包み込んであげる♡♡♡♡♡」

ドボボボボオ!!!

ワイの甘やかされチンポは耐え切れずにナイルの胸に射精<sup>だ</sup>した。

「ひゃんー…♡がんばりまちたねえ♡僕ちゃん、かつこよかつたでちゅよお♡」

ナイルがワイの頭と亀頭をなでなでしながら囁く。

ああ♡ママあ♡ちゅー♡

「ん♡…♡ちゅぱ♡レロ♡…♡ちやぶ♡…♡こらあ♡赤ちゃんなのに、こんなえつちなキスしちやダメでしょ♡」

そう言いつつもナイルはキスを激しくしていく。

ムクムクムク…♡

エツちなキスによって興奮したワイの赤ちゃんチンポが、また大きくなり始める…♡

「…♡クフー♡やだあ♡まだえつちなことしたいの♡…♡いいよ♡僕ちゃんの好きにしてえ♡」

ナイルがまたおっぱいを両手で動かして誘惑する。

ワイは本物の赤子になったかのようにそれに吸い寄せられるのであった…

ワイとナイルママのラブラブエッチは、ここからが本番だ…♡

ワイ、エジプトネコがママになる

ママ♡ママ♡ぼくだけのナイルママ♡♡♡

……ぼく?…ぼくの一人称、これじゃない感あるなあ…?

………まあ、いいか。

「はぁ〜い、僕ちゃん♡マッサージはもう終わりにして一緒にお風呂入ろ〜ね〜♡」

ナイルママは、ぼくに手招きする。

ママとお風呂…絶対楽しい!

「入るう〜♡」

「クフフ…♡じゃあ湯船に入る前に、体ゴシゴシしてキレイキレイにしようね〜♡」

ナイルママはそう言って、ボディソープを手に取り、数滴手に垂らす。

……?体を洗う用のスポンジがないのは何故だろう?

「ママあ、スポンジは?」

「クフ♡スポンジなんかなくても、体は洗えるのよ♡ほら、こんな風にー」

ナイルママは、自分の体にボディソープをつけると、そのまま擦り始める。

すると、ナイルママの体毛についたボディソープが泡立ち始め、たちまちママは泡だらけになる。もしかして…

「来て♡ママが直接洗ってあげる♡」

ママは、スポンジだったようだ♡♡♡

「ママあ〜〜!!」だきっ♡

「ああ〜ん♡こらあ♡そんなに乱暴にしないの♡」

ぼくはナイルママに抱き着く。

ナイルママの柔らかい体がぼくの身体に密着してとっても気持ちがいい。

「僕ちゃんの体、とっても固くてたくましいわ…♡それじゃあ、洗うわね♡」

ナイルママが、ぼくの体に手を回して自分の体を上下に擦り合わせる。

大きくて柔らかなおっぱいと、硬くなつたぷつくり乳首が体中に当たる。

「ふうん♡にゅん♡…どう、ぼくちゃん♡…♡…ん♡気持ちいい♡」  
「うう…♡…ささい♡おだよままあ…♡」

あまりの気持ちよさに、ぼくはだらしなく涎を垂らす。

ママの体は体毛に覆われているから、ぼくの体もすぐに泡だらけになる。

あわあわ、ぷにぷにの感触が僕の全身を刺激する。

「さあ、お手でもキレイにちまちようね♡」

ナイルママは、僕の片腕を取って自分のお股で挟み、洗っていく。

〽じゅむ♡〽 〽じゅむ♡〽

えつちな音を立てて僕の腕をきれいにしていくナイルママ。しかし、その顔は少し辛そうで心配になる。

「ママ、どうしたの？苦しいの？」

「クツ♡フツ♡ち、ちがうのよ、ぼくちゃん♡…ひゅむ！♡…これはね♡ママも、気持ちよくなってる…♡…♡…だけなの♡」

ナイルママが震える声で答える。

そうか、ママも気持ちいいのか！それはいいことだ！

なら、ママをもっと気持ちよくしてあげなければ！

そう考えた僕は、ママのお股に腕を強めに擦りつける。

「ひゃん!!♡ぼ、ぼくちゃん？♡…なに♡…ん♡♡してるのかなあ〜♡」

「ぼく気持ちいいの大好き！だから、ママも気持ちよくしてあげたい

!!

ぼくは腕の動きを激しくし、ナイルママのお股に擦りつけるように動かす。

「にゃん!♡あ、アタシはいいから、僕ちゃんだけで…みゆ!♡…ああ♡…これすごっ!♡♡」

ナイルママは、えっちな声を上げながらよがるように体を動かしている。

ぼくがママを気持ちよくしている……うれしい!

「…あれえく?ママ、お股からお水が出てるよおく?」

「あん♡そ、それは…♡」

「ぼく、喉乾いちやっただから、お水飲む♡」

「クフ!?♡…それはだm…みやあああん!!♡♡♡♡♡」

ママが制止する前に、ぼくはママのお股を舐めてお水を飲む。

甘い匂いがして、とつても美味しい…♡

「おいしいよママあ♡」ペロペロ

「フシュツ!♡…ぼくちゃん、それは飲んじや♡…ひゃん!……の、飲んで!♡アタシの愛のお水、もつと飲んでええええ!!♡♡♡」

ぼくはママのお水を飲み続ける。

しかし、ヾチヨロチヨロ…♡” つとしか出ないので、何か物足りない……

もつと一気に飲みたいなあ…ん?何か硬いものに当たったような…

ヾクリツ♡♡♡”

「?!♡♡♡…だ、ダメツ!♡そこをいじられたら…?!♡」

おっ!ママのお水の勢いが強くなったぞ!!

そうか!ここはママのお股水道の蛇口だったのか!!

よおし、ここをもつと刺激して…!!

ぼくは、舌を使って固い突起を弄くる。

ヾクリクリクリクイ♡♡♡”　ちゅこ♡ちゅこ♡”

「やんっ♡クリちゃんいじめちゃだめえ♡イっちやうう♡」

ママがよがりながら言う。

「ママツ!どこに行くの!?!僕を置いて行かないでえ!?!」ペロペロ

「ち、違うのぼくちゃん♡イクっていうのは…あん♡気持ち良くなりすぎてお水があふれることなのよお!♡♡♡」

「そうなんだ…ならいいことだね!もつと気持ちよくなって、思いつきりイっていいよ♡」

ぼくは指も使いママのクリクリを「ピンツ」とはじいたり、摘まんて動かしたりして弄び始める…僕も楽しいしママも気持ちいい。

なんてすばらしい遊びなんだ!!

「はうう♡ぼくちや…♡ダメえ♡…♡ホントにイクツ♡イクイクイクイクい…♡ふしゅうううううううううう!!!♡♡♡♡」

「じよわあああああ…♡」

ママのお股から水がシャワーのようにあふれ出てくる。

どうやら、イクというものがこれの様だ。

ママは白目をむきそうで、だらしなく舌を出して「あへッ♡…あへえ…♡」と息が漏れるような声を上げている。

「きれいだよ。ママ♡…♡ぐくぐく…♡」

そんなママを見ながら、お股の水を飲みこむ。

…♡やはりまとまった量を飲むのは美味しい。

ヤク○トと同じで大容量で飲むべきだね!

「あぁくん♡アタシ、赤ちゃんにえつちなお汁飲ませてるう♡いけないのに…とつても興奮する…♡」ゾクゾクツ♡

元の表情に戻ったママが熱っぽい視線を僕に向ける。

…♡?何がいけないんだろう?こんなにおいしい水なのに…?

「あむっ♡…レロツ♡…ちゅぱちゅぱ…♡…♡…んべえ♡」

ママに身体を洗ってもらった後、ぼく達はお風呂に入っていた。

ぼくはナイルママを後ろから抱きしめ、そのままキスをしている。舌と舌を絡めるナイルママのちゅーは、口の中はくすぐったいが癖になる感覚だ。

「もみゅ♡♡」　「もみゅ♡♡」　「ツン♡♡」　「ツン♡♡」  
「みゅん♡…‥もぉ〜赤ちゃんはほんとにぱいぱいが大好きでちゅね♡」

ナイルママのおっぱいを後ろからもみもみする。

湯船に浸かったおっぱいは、さつきより少しだけ膨らんでいる気がする。

「ママのぱいぱい好き♡♡」

「あらあら♡ママのおっぱいが好きなの？♡それとも大きいおっぱいが好きなの？♡」

「う〜〜と…‥両方!!」

「クフフ♡スケベな赤ちゃんね…♡ナイルママはそんな赤ちゃんを愛してまちゅよ♡♡♡」ちゅ♡

ナイルママがぼくの顔にキスの雨を降らせる。

ぼくもママを愛してる♡

グングン…♡

ママの乳房で遊んでいたら、またぼくのちんちんが大きくなってきた。

大きくなりすぎて、少し痛いくらいだ。

「ママ♡ぼくちんちんがおかしいの…♡さつきみたいに、ぱいぱいで慰めて♡♡」

「あらあら…♡しょうがないわね…♡…‥なら、おっぱいより気持ちのいいもので包んであげる♡♡」

「おっぱいより…?」

ナイルママは、ぼくから離れて、お風呂の縁に手をかける。



「ふりふりりーん♡♡♡♡♡」

ナイルママがお尻を水から持ち上げ、お尻をこちらに向ける。

さつきまで甘いお水を垂らしていた穴は、ひくひくと生き物みたいに動いており、それをまじかで見ると、何だかちんちんがムズムズしてくる。

「見える？この穴に、おまんこにおちんちんを入れるのよ？とおくくくくくつても気持ちいいんだから♡♡♡♡♡」

「ここに…？なんだか少し怖いよお…」

「クフフ♡大丈夫よ♡ママと仲良く童貞と処女、交換しましょ♡♡」

どーてい？…なんだか、少し違うような気がするけど…：段々あの穴におちんちんを収めたくなってきた…♡

ぼくはお風呂から立ち上がり、ナイルママのお尻に手をかける。

「ママーママッ！♡入りたい！♡ぼくママのおまんこにおちんちん入りたいい!!♡」

「いいわよ♡ママを孕ませて♡本当のママにして♡♡♡」

ずぼお!!!

すごい音を立てながら、おちんちんはおまんこの中に入っていた。

「ふうううううツ♡ああ、貫かれてる♡アタシ、ぼくちゃんに貫かれてるう!♡♡」

ママのおまんこの中はトロトロで、おちんちんが溶けてしまいそうだ。

“ちんちんを動かしたい!”

ふと、そんな衝動にかられた。

「ママ!おちんちんが変な感じだよ♡動きたい!ちんちんこすこすしたいよ♡」

「クフ♡入れたばかりなのに、えっちな子♡♡♡:いいよ♡:ママと一緒に気持ちよくなる♡」

“ずちゆ♡” “にゆちゆ♡” “ずちゆ♡” “にゆちゆ♡”

腰を動かして、おちんぽを出し入れする。

おまんこはおちんちんを離したくないのか、入れたらすぐに食いついてきて、抜くとき名残惜しそうにちんちんに最後まで吸い付いてくる。

「にゃん!♡:ぼくちゃん、上手う♡:ママ、とっても気持ちいいわあ♡」

「ママ!ぼくも気持ちいいよお!おまんこ大好き!!」

“パンパン!”と腰を打ち付ける度、ナイルママの肉付きの良いお

尻の感触が腰に当たり、心地いい。

…ちよつとだけ、いたずらしちゃおう♡

♪パン!!”

ぼくはナイルママのお尻を叩いた。

「にや!?…もおく♡いたずらしちゃだめ!」

「え〜その割には、ママ嬉しそうだけど…」

ぼくはママのお尻を叩きながら、腰を打ち付ける

♪べしっ!” ♪べしっ!” ♪パン♡” ♪パン♡”

叩く音と打ち付ける音が鳴り響き、まるで太鼓を叩いているよう  
だ。

♪フルコンボだドン!!”

そんな声が聞こえてきそうさ。

「ああん♡…アタシ…赤ちゃんにお尻叩かれて、感じてる♡…

ひゃん♡…もつと叩いて♡…赤ちゃんの好きにしてえ♡」

ナイルママが僕にすぎるような猫なで声でおねだりする。

…それならもつと強くしてみよう♡

♪べしっ!!” ♪べしっ!!” ♪パン!♡” ♪パン!♡”

「ふ”っ”っ”しゅー”♡…おもちゃみたいに♡…み”♡…乱暴に  
扱われるのいい♡アタシ、赤ちゃん相手にマゾになってるう♡♡

♡」

ナイルママの乱れた姿を見ながら腰を振っていると、段々ちんちん  
の先っぽから何かが昇ってくるような感覚が襲ってくる。

「ママあ〜♡また白いおしっこ出そう…♡出していい?ねえ、出して  
いい♡」

「クフフフ♡…出そうなのね♡…いいわ♡ママの中に出して♡赤  
ちゃんの赤ちゃん、アタシに産ませてえ♡」

どっぽお!!!

ぼくはママの中に白いおしっこを出した。

「くっふうふうふうふう!!!出てりゅ!!赤ちゃんのおしっこ、アタシに出てりゅふうふう!!!」

ゴボゴボと轟音を立てて白いおしっこがナイルママのおまんこに注ぎ込まれる。

音が静かになりおちんちんを抜くと、おまんこは「ひくひく」と動いていたが、白いおしっこはおまんこから漏れてこなかった。

「どうやら全部飲み込んだらしい……ママのおまんこは食いしん坊だなあ」

「はあー♡はあー♡……あーあ♡赤ちゃんにマーキングされちゃった♡これでアタシは赤ちゃんのもの♡」

「ぼくの……?」

「クフ♡そうよ♡ママのお口も♡おっぱいも♡お尻も♡おまんこも♡ぜえーんぶタロー赤ちゃんのもの♡これからはえっちなことをしなくなったら、自分で弄らずにママに言いなさい♡一緒に気持ちのいいこと、いっっっぱいしようね♡♡♡」

ママはぼくのもの……!?

やったー!!

ママのおっぱいもおまんこもぼくのものだー!

それじゃあもつと——あれ?

急に「クラッ」ときて、倒れそうになり、ナイルママに支えられる。「あらあ?どうやららのぼせたようね……お風呂から出た方がいいわね」

「!?やだやだあ!!もつとえっちなお遊びしたいく!!」

「…クフフ♡本当にエッチな赤ちゃん♡…：わかったわ♡続きはベッドで…ね♡」

「！…うん!!」

ぼくとママはお手々をつないでベッドへと向かった。

楽しいお遊びは、まだまだ続きそうだ…♡

という夢やで!!!!

いやゝ騙されたやろ!!

実は最初から夢の話で、ママになったナイルもおぎやったワイも夢落ちや!!

残念やったなく!!そんなエロゲみたいな話はないんや!!

だから、ワイの腰痛がひどくなってるのも、ワイの隣に全裸のナイルが寝ているのも、ベッドがいつもより湿ってるのも、ナイルの全身に白い液がべっとりついてるのも夢なんや…誰が何と言おうとこれは夢なんや…!!

……またやつてもうたあ〜!!

なにがナイルママやねん!?

なにが赤ちゃんやねん!?

なんでワイは風呂でナイルと赤プしてんねん!?

……一応…一応!!念のため言っておくが、ワイはケモナーではない。誰が何と言おうとケモナーではない!!野原ひろしでもない!!!

「ふみゆ……あらあ♡赤ちゃん、起つきの〜♡一人で起きれていいここでちゅね〜♡」

!?ナイルマ……ナイルが!!起きてきたようだ。

のんきにまだワイのことを赤ちゃんだと思つてやがる……!

ここは、ガツンと言つて引き離すんや。そうでもしないとやばい気がする……!!

「ナ「赤ちゃん♡朝のぱいぱい飲みまちようね〜♡」ブルン♡

ナイルが毛布を引っぱがし、自身の裸体をさらけ出す。

だめだ!負けるな!な!!な!!!ナ!!!

「ナイルママあ〜〜〜♡♡♡♡♡♡」だきつ!!

「きゅー♡」

その後、ナイルママのぱいぱいでいっぱいぱいした。

拜啓、唯一無二の母上様

急に母上様が恋しくなったのでお便りしました。

私の母は、母上様だけでございます。

母上は1人だけで、決してネコではありませんしエジプト出身ではありません。

それでは、いつか必ず母上様に会いに帰ります。

敬具

P・S

この間送っていたいただいたエレ○バンで腰痛はすぐに治りました。さすが世界の株式会社ピツ○ですね。

ワイ、大人なオオカミに監禁される

「……………ひぐつ……………えぐつ……………ンゴオ……………」

……………あかん、もうワイはダメそうや…

ワイは涙を流しながらコーヒーをがぶ飲みする。

…辛い……………辛い……………

「マスター、もう一杯…」

「……………タローさん、もうその辺にした方が…」

「いいから出さんかい！ワイは客やぞ!!……………すまん、今は飲ませてくれ…あと、ピジョンミルク入れてクレメンス…」

「……………かしこまりました」

マスターは、ワイの注文を聞き新しくコーヒーを入れてくれる。

クソツ…マスターは良い人なのに、ワイは八つ当たりなんぞして、最低や…

そう、ワイは最低な人間や。

ブーケとは連日ヤってるし、モニカとはよく青姦してるし、リリアンには最近結婚をほのめかされるし、挙句の果てにはナイルはワイのママになってるし……………

どーなつとんねんワイの人生!!!

雰囲気に流されすぎやろ!?

前世含めたら、童貞歴○十年の弱者男性のワイが、なんでこんな短期間で4人の女、そのケモ畜生と関係持つてんねん!?

……………これも全部あのキツネのせいや！ナイルの持つて来たマツサージオオイルもあいつの店のやったし、全部アイツが裏で手を引いているに違いない!!

今度見かけたらあいつから貰ったレシピで作ったデイルド尻にさしてぶっ転がしたるわ!!

……………なに？デイルド作ったのかって？

……………ま、まあ？せっかく貰ったもんやし、試さんとアカンやん？

いや、ワイが自分で使ったわけやないで!?ちゃんとリリアンに……………この話やめよ…



そんなケモノ専門ヤリチンクソ野郎に成り下がったワイは自己嫌悪のあまり、こうしてやけ酒ならぬやけコーヒーを飲んでいるのだ。この島、酒飲める場所ないねん………いつそワイの家をバー仕様にしてみるか……

ただのヤリチンなら別にいい。だが、問題はケモノとしかやってないってことや!!

どーせなら人雌ハーレム作りたいわ! アイちゃんとかさよりんちやんとかりーちゃんとかのかわいこちゃんたちにちんちん打ちつけて「あんあん♡」喘がせてみたい人生やったわ!!

「……入れたてを、どうぞ」

「サンガツ! (ゴクゴク…) 熱っ!？」

あかん! 興奮しすぎてアチアチコーヒー一気してやけどしてもうた!?

水! 水う!!

「しようがないわねえ…はい、水」

「(ゴクゴク…) つはー! 助かったわ! サンキューな…つて何してんねん姐さん?」

「ウフフ…女はね、たまに寂しくなって夜に喫茶店に行く時もあるのよ」

ワイの隣には、いつのまにか白狼の獣人——ビアンカが座っていた。

ビアンカはこの島に引っ越してきた住民で、まさに大人の女性という感じだ。

島で悩んでいる住民がいたら話を聞いてあげているし、何かトラブルが起こった時も一歩引いた視点で物事を見ているので、みんなのまとめ役になることも多い。

島の住民も、ビアンカにあこがれている奴が多い。

ワイもビアンカには何度も助けられているので、尊敬の念を込めて姐さんと呼ばせてもらっている。

「はえ〜姐さんも寂しくなるときあるんやな〜」

「あら、アタシだって生きているんだから、少しぐらい弱気になった

り、自信がなくなる事ぐらいあるのよ」

「ほーん…なんか、いつも頼りになる姐さんがそう言ってるの意外やわ」

ピアノカが少し顔を伏せながら語る姿は、何と云うか新鮮味があるなあ…

「…好きな人が、アタシの気持ちに気付かずにポケーつとしてる姿を見た時は特に…ね」

「あん？姐さんなんか言ったか？」

「何でもないわよ…それよりタローさん、そんなにコーヒーを飲むのは体に悪いからほどほどにしておきなさいな」

「…別にええやろ、そんなんワイの自由で」

「良くないわよ。隣でそんな顔されてたらせつかくのコーヒーがまずくなるわ…何か悩み事かしら？」

!?

…さすが姐さんやな。なんでもお見通しか…

「…関係ないやろ」

「関係なくないわよ。他の誰でもない、島民代表のタローさんが曇った顔をしていたらみんな心配になるわよ…アタシだって、心配してしまっわ」

「姐さん…」

「フフ…悩み事なんて、誰かに話してみたらスッキリすることだってあるのよ♪さあ、お姉さんに話してみて？」

ね、姐さん…！

やっぱり、姐さんには頭が上がらないわ。

こうして話しているだけでも安心感がハンパない。

…姐さんになら、ワイの屑エピソードも話してもいいような気がしてきた。

軽蔑されるのは怖いけど、なんやかんやで姐さんなら何か打開案を出してくれるかもしれん。

…よし、覚悟完了！強化外骨格や!!

「じ、実はな、姐さん…」

「うんうん……」

「ワイ、複数の女の子と……その……関係持ってたな……」

「……………はっ?」

瞬間、ワイの全身に悪寒が走った。

ワイの目の前にいるビアンカが、この世のものとは思えない恐ろしい声を上げ、ワイのことを「ジィ……」と見つめている。

ビアンカから放たれる殺気に、ワイのガンギマリした覚悟は一瞬にして塵となった。

口の中が乾き、自然と歯をガタガタと震わせる。

やばっ……! 姐さんガチギレしてる……!?

やっぱいくら姐さんでも許容範囲超える話やったか……!?

「……………フー……大丈夫……続けて」

ワイが弁明しようとしたとき、ビアンカは深呼吸をし、少し落ち着いた様子になる。

しかし、その視線はしつかりとワイを捕えており「絶対逃がさない」という意志がヒシヒシと伝わってくる。

「ね、姐さん、やっぱこの話やめ「いいから、続けなさい」

あつ、これワイ死んだかも。

「ふーん……そういうことね……」

ワイは姐さんに今までのことを洗いざらい吐いた。

……本当は何人かぼかそうとしたけど、何故か『まだ、言っていないことあるでしょ?』と怖い笑顔で問い詰められて、もうブーケからナイ

ルまでの出来事をプレイ内容含めて全て言ってしまった。

……なんでワイの嘘全てバレてしまうん？

ちなみに、マスターは気を利かせてか途中から耳栓をして話を聞かないようにしてくれた。聖人……いや聖鳩やでほんま……

「……タローさん」

目を瞑り、話の内容を咀嚼していたビアンカが目を開き、ワイに手を伸ばしてくる。

あかん、殺されるう!?

しかし、ワイの予想とは裏腹に、ビアンカはワイの頭を撫でてきた。

……えっ、なんで？

「話しにくいことなのに、よく話してくれたわね。頑張ったわね、えらいえらい」などで

……やっぱり、姐さんには敵わんわ……

こうして、どんな時も冷静に寄り添ってくれる。

絶対的な安心感がワイを包み込んでいた。

「……これは急いだほうがいいわね……マスター、少し早いけど、例のものの出してくださる？」

「!!……かしこまりました」

いつの間にか耳栓を取っていたマスターが店の奥に引つ込む。鳩サブレでもくれるのだろうか？

「タローさあくん、今まで辛かったわよねえくでも、大丈夫。アタシに任せておけば全て解決してあげる♡」などで

ああく^^ビアンカ姐さんのなどで気持ちええんじやく

なんや知らんけど、ビアンカに任せておけば全て解決してくれるらしい。

ビアンカに任せておけば安心やな……これでワイもあいつ等から離れられー

〴〵モヤア……

……ん？なんやろ？あいつらと離れられるなんて、嬉しいはずなのに心がモヤモヤする。

……なんやろ、この気持ち？

「……お待たせしました。淹れたてを、どうぞ」

そんなことを考えていると、マスターがマグカップを差し出してきた。

…ワイ、頼んでないけど？

「アタシからの奢りよ。飲むと気分がすつきりするスペシヤルなコーヒーよ」

ビアンカが笑顔でワイに耳打ちする。

そうか！今モヤモヤしてて気分が悪いから丁度良…うつ！？

なんやこれえ!?なんかドロドロとしたクリーム状だし、赤やら青やらカラフルでアメリカのお菓子みたいやんけ!?

ワイ知ってる!!電王でモモタロスが飲んでたやつやん!?

絶対飲んだらアカンやつやん!?

「大丈夫…見た目はアレだけど、とつても美味しいんだから…」  
ビアンカがワイの耳元で囁く。

……ま、まあ姐さんが言うなら信用できるか…

まさか、マスターも飲んじやあかん奴出さんやろしな…

ワイは、意を決してコーヒー(?)を飲む

……おっ!美味しいやん!!

口の中に広がる程よい甘みと苦みがワイの口内に広がる。

これ、ワイの好きな味やな!もつと飲も!!

……ん?おかしいな?段々眠く……ZZZ

「大丈夫、起きた時にはアタシしか愛せなくなってるから♡」

意識を失う直前、そんな声が聞こえた気がした。

「ううん……どこ、どこ……？」

目覚めたワイは、見慣れない場所にいた。

知らない天井……いや、あのおしゃれなランプは見たことがあるな

……

たしか……ワイが誕生日にビアンカにプレゼントしたもの……つまり、  
ここはビアンカ姐さんの家か？

……なんや、ちんこが気持ちええなあ

なんでやる？と思いいワイは自分の下半身に目をやる。

「ガボウ……ジュポウ……んちゅ……グチュウ♡」

そこには、ワイのチンコにむしゃぶりついているビアンカの姿が  
あった。

……ファツ!?なんでやねん!?

「むちゅう♡……あら、もう起きたの♡……どう?気持ちのいい目覚め  
だったでしょう♡」

ビアンカがワイに気が付き、フェラを中断する。

ビアンカの格好はSMの女王様の様な黒いセクシーなボンテージ  
姿であった。

あつ、口元からザーメン垂れてる……エツロ……♡

……いや待てや!?!?どういう状況やねん!?

「ビ、ビアンカ姐さん、これどういう(ガシャ!)……!?!」

ワイは体を起こそうとしたが、出来なかった。

何故なら、ワイの両腕と両足はベッドに縄で括りつけられているか

らだ。

ワイは今、全裸でベッドに大の字で張り付けられていた。

「どういう状況って？決まってるじゃない——」

アタシたち、これからパパとママになるのよ♡♡♡♡♡」

ビアンカが恍惚な表情でワイに言った。

「フアツ!?なんでそうなるねん!?!」

「だってえくタローさん、複数の女の子から言い寄られて困ってるんでしょ?なら、アタシと夫婦になって周りに見せつけてたら、流石にみんな諦めて離れて行くわよ♡ほらあ、これで全部解決でしょ♡」

ビアンカが、さも当然のように言い放つ。

確かに、そうなる可能性もあるけど、それだとワイ人生の墓場に真っ逆さまやん!?!

それに、ビアンカ姐さんもワイなんかと夫婦になってまうやん!?!それはあかんで!?!

「姐さんーそれあか……!?!」

ビアンカにやめるように言おうとしたとき、ワイは壁に貼つてある写真に目が釘付けになった。

あれは——ワイ?

ワイが笑ってる写真……いつ撮ったんや?

それも、1枚だけじゃない。パツと見ただけで数えきれないほどの写真が貼つてあるのがわかる。

シチュエーションも様々で、釣りをしているワイ、虫取りをしているワイ、モニカと立ち話をしているワイ(何故かモニカは鉛筆か何かで塗りつぶされている)、トイレでウ○コをしているワ……おい最

後どうやって撮った。

「ん〜？……ああ！アレ良く撮れてるでしょ〜♡とっても頑張つて撮ったんだから〜♡」

ビアンカはワイにそう言いながら、ワイの乳首を舐め始めた。

「ちよ、やめ……………あん♡」

「フフ…………『あん♡』だって…女の子みたいで可愛い♡……………でも、こっちはちゃんと男の子ね♡」

〃サワツ♡〃

ビアンカがワイの乳首を舐めながら、ワイのチンコをさすり始めた

〃しこ♡〃 〃しこ♡〃 〃レロ♡〃 〃レロ♡〃

「ん♡…やあ…やめてくれ…めんす…」

「ソフフ♡…………だーめ♡…ああ♡…………タローさんに囲まれながら、タローさんとエッチしてる♡こんなステキなこと♡やめるわけないじゃない♡」

ワイの乳首はビアンカの舌で刺激され、すっかり勃起してしまっていた。

チンコの方も、ビアンカのプニプニ肉球手コキでまるで本物のまんこに入れているかのような快感に包まれている。

上下の身体の性感帯を弄られて、ワイの頭はパンク寸前だ。

段々、ワイの亀頭が膨れ上がり、お汁の発射準備をし始める。

ああ、やばい！イ——

「はあい♡ストーツプ♡」

「……………え」

ワイが射精する寸前、ビアンカが上下の刺激を止める。

ワイは不完全燃焼で、切なげに情けない声を上げる。

「うふ♡やっとな人で結ばれるんだから、もっと長く楽しみましょうよ♡……………そうだ！これをこうして……………」

ビアンカは何かを思いついた顔になり、ワイのチンコの根元に何か



を結びつける。

これは……リボン？

「フフフ……可愛いリボンなんかつけて、可愛いおちんぼ♡ステキね♡」

そう言ったかと思うと、ビアンカはワイの上にまたがり、自分の割れ目にワイのビンビンのブツを入れようとしている。

あかん！止めなくては……!!

「ビアンカ」さあ、タローさん

一生忘れられない、ステキな時間を楽しみましょう♡」

ずっぱお!!♡

ワイのチンポが、ビアンカ姐さんにおまんこに食べられた！

「ツ~~~~♡♡♡……フフ、こうしてお互いに深い所でつながって、生命が生まれる。とつてもステキなことだと思わない？♡」

ビアンカは一瞬苦痛に顔を顰めたが、すぐにいつもの余裕のある顔に戻る……いや、いつもより顔が赤くなっており、興奮している様子だ。

「……まあ、今のタローさんには生命の神秘よりも、気持ちのいいド下品エッチ♡の方が興味津々よね♡…それじゃ、始めましょう♡」

“じゅぶ♡” “じゅぶ♡” “ぬちよ♡” “ぬちよ♡”

ビアンカがワイの上でピストンを始める。

いつもは、余裕のある大人の女性というイメージのビアンカ。

しかし、そのおまんこには余裕の2文字はなく、おチンポを『絶対に離さない♡』というように食いついてくる、まさにケダモノの様で

あった。

「くっ……♡ああん♡……やっと、一つになれたあ……♡……ずっと、こう  
したかったのお……♡」

ビアンカは、感情が高ぶっているのか、ワイに語りだす。

「ずうーつと見てた♡タローさんのこと♡……ずっと、アタシのものに  
したかった♡……アナタのものにして欲しかったのお……♡はあ……♡  
幸せえ……♡」

ビアンカの思いを聞き、ワイのチンポはさらに硬度を増す。

「絶対にこの雌をものにする」

そんな意志がひしひしと伝わって来た。

……やばい、出そうだ……！

「ああん♡動きが早くなつた♡そんなに早く動いたら……♡アタシも  
イっちゃうう！♡イク♡イクイクイク……うほおおおお!!♡♡  
♡」

ビアンカの快感が最高潮に達し、いつもの彼女からは想像できない  
下品な声を上げながらアへ顔を晒す。

「ぶっしゅうううう……」

ビアンカのまんこからは、まるで鯨のように潮が噴出しており、ワ  
イを濡らしていく。

しかし、ワイはビアンカとは違い、完全に気持ちよくなれていな  
かった。

確かにイキはしたのだが、ワイのチンポに結ばれたりボンのせいで  
射精できなかつたのだ。

イっているのに射精できない。それだけのことが、こんなにも苦し  
いなんて……!!

「フフ……♡せっかく結ばれたんですもの、1回だけで終わらせるの  
はもつたいないでしょ？♡まだ、出してないんだから、まだまだいけ  
るでしょう？♡」

ビアンカがSっ気たっぷり視線を向けてくる。

「び、ビアンカ……♡これ、外して……♡射精させてえ……♡」

「フフフ……♡可愛い子……♡でも、だあくめ！♡そのままもつとが

まんしてえ〜♡もつと2人でステキになりましょ♡」ゾクゾク…♡  
「ビアンカの目つきは、まるで丸々太ったウサギを目の前にしたオオカミのように鋭かった。

エツチでステキなことは、まだまだ続く…♡

ワイ、大人なオオカミをわからせる

……あれから、どれ程の時間が経ったであろうか？

ペニスにリボンを結びつけられたまま、もう何回もセックスをさせられている。

「チンポ！♡チンポオ！！♡好き好きチンポオ！！♡」

ビアンカは、ワイのチンポをディルド代わりにして何度も出し入れし、何度も潮を吹いていた。

最初の方はまだ余裕があるように取り繕っていたが、段々と余裕がなくなり、今では快楽を貪り食うだけのケモノと化していた。

興奮しすぎると野生化したようになるのは、モニカと同じだな…オオカミ系は皆こうなのだろうか？

快感によがるビアンカに対して、ワイのチンポは苦しんでいた。

チンポの根元に結ばれたリボンによつて、射精することができないからだ。

もう、何度もイっているのに、まったく精液を出せない。

ワイの睾丸は、マグマのようにドロドロの精液が噴火できず、「ここから出せ！」と暴れだし、今にもはちきれそうだ。

辛い…せーし出したい…！！

「び、びあんかあ…‥これとつてえ…‥♡」

「ウフフ♡タローさんはアタシにせーし出したいのお？♡無責任に

『びゅー♡びゅー♡』ってせーし出して、アタシを孕ませたいのお？♡

……最低ッ♡♡」

口ではワイを罵倒するビアンカだが、明らかにまんこの締め付けが強くなり、チンポを挑発しているのがわかる。

こ、この女あ…！！

「んー♡しようがない坊やねえ♡♡…‥なら、少しゲームをしましょうか♡」

「げ、ゲーム…？」

「そうよ♡アタシが言ったことを、タローさんが後に続いて言うゲーム♡クリア出来たら、このリボンをほどいてあげる♡」

な、なんやそのゲーム……？

……しゃーない、この辛さから解放されるにはやるしかない……！

「よ、よし、やってやろうやないかい!!」

「うふ♡じゃあまず初めに……」

『私はビアンカのこと大好きです♡♡♡』って言うてみて♡」

ビアンカはニヤリと笑いながら言った。

……ファツ!? なんやその恥ずかしいセリフ!?

「そ、そんなん言えるわけないやろ……!」

「あらー?♡それじゃあ、アタシの勝ちだから、ずっとこのままね♡

そおれ♡ぱん♡ぱん♡ぐちよ♡ぐちよ♡」

……ッ!

ビアンカが腰の動きを激しくし始めおった……!

それにより、ワイのチンチンに更なる快感が襲い掛かる。

「フフ……タローさんのおチンポ、さらに固くなってるわよ♡『苦しいよお♡ビアンカちゃんの中で気持ち良くおせーしびゆっぴゆしたいよお……♡』って泣いてるよ♡可哀そうなおチンポさん♡タローさんはひどい人ねー♡この鬼畜♡自分の息子をもっと甘やかせ♡」

ビアンカが挑発するようにワイに語り掛ける。

その言葉で、ワイのチンポはさらにいきり勃ち、痛みすら感じるくらい固くなっていた。

その痛みはまるで『お前のせいだぞ!ビアンカちゃんて気持ちよくさせる!!』とチンポがワイに抗議しているようであった。

くっ…！チンポまでワイを悪者にしておって…!!

…ええい、背に腹は代えられん!

「わ……か……きです」

「うーん?♡聞こえないなあ♡愛の言葉はもおろつと大きな声で言わないと伝わらないぞおろ♡」

こ、この雌オオカミがあ…!

「ワイは!・ビアンカのことか!!大好きです!!!」

「~~~~~ツ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」ゾクゾクゾクウ!!

ワイがセリフを言った瞬間、ビアンカは人生で最高の幸せに包まれたような蕩けた顔になった。

ビアンカのおまんこも、チンポを啜え込む力をさらに強めた。

『おちんぼちゆきちゆき♡このおちんぼを離したくないい…♡♡♡♡』  
そんな強い意志が、ワイのチンポに伝わったのを感じる。

「フ…フ…フ…フ…♡…じゃあ、次は『ビアンカしか愛せない』って言つてえ…♡♡♡」  
…!?

こいつ、まだワイに恥ずかしいセリフ言わせようってのか!?

「早く早くうろ♡思い切つて言つちやつて♡おちんちん解放してあげよ♡」パンパン!

ビアンカは腰の動きを止めることなく続きを要求する。

……ええい、やけくそや!!

「ワイはビアンカしか愛せない!!」

「あーん♡アタシも愛してるう♡…ひゃん♡あん♡…次は『ビアンカと結婚したい』ね♡」

「ツ!!……ビアンカと結婚したい!!」

『『ビアンカを孕ませたい』♡』

「ビアンカを孕ませたい!!」

いつまで続くんや!?

ええい、次!!……?」

なんや、ビアンカが次を言ってこなくなったな…

腰の動きも止まってるな……?」

「……うれしい♡」

……あん?今なんか言ったか?

ビアンカが小声で何か言った気がして、尋ねようとした時であった。

“みちい…♡”

そんな音が聞こえると同時に、ワイのチンポはこれまでにないくらいに快感に襲われた。

見ると、ビアンカのまんこがワイのチンポを根元から啜え込んでいた。

すごい力で啜え込んでいるのか、周りの筋肉の血管が浮き出て見える。

……今の音ってまんこ締める音か!?やばい音鳴ってたけど!?

「うれしい!♡アタシもタローさんと結婚したい!♡♡タローさんの子ども孕みたい!♡♡ずっと一緒に繋がっていたい!!♡♡♡」

“ずっちゆう♡” “ずっちゆう♡” “むっちゆう♡” “むっ





ぶびい！どぼぼぼぼぼ！びゅー！ー！ー！！！！

リボンが外されると同時に、ワイのチンポから精液が発射される。今まで何度も不発で終わった分を取り戻すかのように尿道を駆け上がる精子たち。

あまりの気持ちよさに、ワイは意識が飛びそうになる。

「お、お、お、お、お、お！！」ザーメンきたあ！♡赤ちゃんの部屋に押し寄せて来たあ♡♡お、っ♡…多すぎてお腔壊れちゃう♡♡♡」

「びゅー…びゅっ…♡」 “ぬぽお♡”

長い射精が終わり、ビアンカの割れ目からワイのチンポが這い出てくる。

瞬間、<sup>びゅー</sup>”とビアンカの割れ目からワイの精液とビアンカの愛液が混ざり合った汁が勢いよく飛び出る。あまりの量の射精に、受け止め切れなかったんだろう。

「ふ、っ♡あ、ああああああああああ！！！！♡♡♡♡♡♡」

愛液が飛び出した瞬間、ビアンカは真上を見ながら大声を出し、舌を出してアへ顔を晒す。

「はあ…♡はあ…♡…あ、ああああああああ！！」

一通り快樂によがった後、先程までのト口顔が一転、絶望したような表情を浮かべるビアンカ。

「タローさんの愛情、漏らしちゃったあ…！だめ、だめなのお…みんな戻って…赤ちゃんの部屋に戻ってえ…！」

ビアンカはそう言って狂ったようにワイの身体についての愛液を手で拭く、まんこに戻そうとしている。

しかし、ワイはそんな狂気じみたビアンカの行動を気にする余裕はなかった。

射精して気持ちよくなったはずのチンポが、ムズムズしているのだ。

…まだだ、まだ犯し足りない！

今まで、我慢したのだ。こんな1回の射精で満足できるものか！

早く雌を！雌をよこせ！！雌を抱かせる！！

ワイの頭に、そんな声が響く。

……ああ、そうだ。

……雌なら、目の前におるやん

「ぶちい！」

そんな音とともに、ワイは自分の腕と足に結ばれていた縄を乱暴に引きちぎる。

「えっ、タローさ（ビターン！）!?!」

ビアンカの驚く声を無視し、ワイはビアンカにチンポピンタを食らわせる。

ぶるんぶるん！と揺れるチンポ。ビアンカの視線はそんなチンポを食い入るように見つめていた。

「……なにポーっとしてんや」

「……ふえ？」

「おらっ！こいつが欲しいんやろ!!雌媚しろ!!」ビターン！

ワイはもう一度ビアンカにチンポピンタをする。

「ツ♡♡♡…た、タローさん、急にどうしたの……」

「じゃかあしい!!さっさとけつをこっちに向けろ!!」

ワイはビアンカに無理やり後ろを向かせるとー

「ずぼお！」

一気に挿入した。

……?なんや?さつきと感覚が違うな?

「おっ♡♡♡た、タローさん……そこはお尻の穴：／／」

ビアンカが弱弱しく言ってくる。

なんだ、間違えてアナルに挿入したんか。

まあ、どうでもいい。やることは変わらない。

「ばちゅ！」 「ばちゅ！」

ワイはビアンカの声を無視してアナルでチンコをコキ始める。

「んっ♡タローさ…あん♡そんな、お尻でなんて…♡」

「これが欲しかったんやろ！お望み通りくれてやるわ！」

ビアンカのアナルはギチギチとワイのチンポを締め付けてきて、気持ちがいい。

ビアンカも、初めてのアナルセックスのはずなのに、あんあん♡と気持ちよさそうに喘いでいる。

このスケベオオカミめ！（バチーン！）

「愛？結婚？お前なんてワイの肉便器で充分や！おら、ワイの肉便器嫁になれ！」

「ああ♡わかりましたあ♡…ん♡アタシはタローさん…ううん、タロー様の肉便器兼お嫁さんになります♡だからもっとお尻ほじほじしてえ♡もっといじめてえ♡ほおおん♡」

この雌犬が…さっきから喜びすぎてしっぽをパタパタさせよって…！

ビアンカの尻でチンポをパコパコしていると、またキンタマがフル稼働し、射精しそうになる。

「ビアンカ！出すぞ！今度はちゃんと受け止めるよ!!」

「うん♡来て♡アタシのウンチする恥ずかしい所で気持ちよくなつてえ♡♡♡」

「じゅるるるるるる〜どびゅびゅう〜！」

ワイはビアンカのアナルに射精した。

「ふっ♡ううううん♡お尻が熱い♡お尻が妊娠しちゃううううう」

ワイが射精すると同時に、ビアンカもイった様だ。  
ワイがチンポを引き抜くと、ビアンカの尻から精液が “どぽぽ”  
と出てきた。

こいつ…またワイの精子を無駄にしおったな…!

“ビキビキビキツ…!”

ワイのチンポは怒りによって再びそり立つ。

そして、ワイはそのガチガチチンポをベッドシートで拭いた後、すかさずビアンカのまんこにねじ込む。

「おおおおん♡そんな、お尻でやったばかりなのに♡」

「うるせえ!肉便器が!お前はただワイのチンポを気持ち良くすればええんや!!」

ワイはビアンカの着ていたボンテージをビリビリに破る。

ボンテージに無理やり抑え込まれていたおっぱいが “ぶるる”  
♡”と揺れ、ワイを誘惑する。

生意気なおっぱいめ…こうしてやる!

“もみゅうう…♡”

ワイはビアンカのおっぱいを後ろから揉みしだく。

「あん♡おっぱいちゃん、いじめちゃだめえ…♡♡♡♡♡♡」

「ほおこの肉便器はおっぱいも付いてるんか。なら、揉まなきや損やな!」

“パン♡”

“パン♡”

“もみゆ♡”

“もみゆ♡”

ワイはおっぱいを揉みながらビアンカに腰を打ちつける。

……精子が出そうだ…!!

ワイはチンポを引き抜き、ビアンカに正面を向け、精子をぶつかけた。

“びゆるるるるうー!!”

「あああああん♡アタシタロー様にマーキングされてるう♡バレちゃう♡匂いでみんなにタロー様専用の肉便器ってバレちゃううううう!♡♡♡」

精液が全身にかかり、体毛が粘っこい液体に侵されているビアンカ。

その姿は、まるでB級映画のスライムに犯させているような淫靡な光景であった。

「はあ…♡うふふ…♡アタシ、タロー様に全身包まれてる…♡それに、タロー様の強い匂い…♡ステキね♡♡♡」

ビアンカがうつとりと全身についた精液を愛おしそうに見ている。

…なに終わった感出してんねん！

「おらー！ワイのチンポはまだ満足してねえぞ！もっと媚びろ！！」ずぶう！

「いや〜ん♡ケダモノ〜♡」

ワイはビアンカのまんまんに再びペニスをねじ込んだ。

「……………ん？朝か…」

窓から差し込む光でワイは目を覚ます。

……………ん？ここ、ワイの家じゃないな……………？

たしか、昨日はハトの巣へ行つて、ビアンカ姐さんにコーヒ―奢られて……………!?

昨日のことを完全に思い出し、〃サーツ〃と血の気が引いている。

念のため隣を見ると、全身を液体塗れにしたビアンカが幸せそうに眠っていた。

……OK

落ち着け……ここで大声上げたらビアンカが起きて1日中コースや。ワイは詳しいんだ。

……にしても、最後の方ワイの意識が飛んだというか、チンポに脳みその主導権を奪われたって言うか……

てか、なんで縄ブチ切れたんや……？

“ピンポンパンポー——ン”

その時、デパートのアナウンスのような音が聞こえてきた。

いや、聞こえたというか、頭の中に響いてきた……？

“タロー君の隠し転生特典が解放されたので、お知らせしまーす！”

○隠し転生特典：ヤっちゃえ！<sup>パーサーカー</sup>狂チンポ！！

・性欲が爆発すると、おちんちんでしか物事を考えられなくなるよ

・フルーツ10個一気に食べた時みたいにすごい力が出せるよ！

・でも、性欲に支配されてるから目の前の雌を組み敷くことぐらいしか使い道ないよ！

・解除条件は性欲を満たすか、目の前の女の子に拒絶されるかだよ！レイプはいけないもんね！

・人間相手に欲情しても効果はないよ！ケモノ専用だよ！

“それでは、楽しくてえちえちなケモシコライフを！！ お相手は転生の神でした！！”

あんの邪神めええええええええええええ  
!!!!!!

特典どころかデバフやんけ!

どうせなら人間の女の子にモテモテになるフェロモンとかが欲しかったわ!

てか特典にしたって、名前からしてF a t eに寄せてんな!それに寄せるなら今すぐワイをカルデアに行かせてくれえ!乳上とイチヤラブしたいんや!

……………やっぱ無理!あの世界観からワイすぐに死ぬう!!

「ふあ〜…あら、おはようアナタ♡……」

はっ!

ビアンカが自然に起きてしまった!!

……………?アナタ……?

「ふふ♡…夢みたい…♡アタシたち、夫婦になったのね♡ねえ、結婚式は洋式?それとも和式?♡アタシは、お色直し含めて両方がいいと思うの♡あっ!その前にお互いの両親に挨拶しなきゃね♡」

……………やばいやばいやばい!

ビアンカの中で何かが完成しそうになってる!?

これは止めなければ……?

「ビアン 「はあ〜♡今後のことを考えたら火照ってきちやった♡……  
ねえ、アナタ…♡♡♡♡」

ビアンカがワイに尻を向ける。

「ぐちよおお…:…♡」

「おはようのエッチって、ステキじゃない?♡♡♡♡♡」

その日は、またビアンカの家で丸1日過ごした。

拝啓 母上様

私の住む島には喫茶店があります。

コーヒーが絶品で島の皆に愛されていますが、ショックなことに最近喫茶店のマスターに変なものを飲まされました。

でも、私はあの店が大好きなのでまた利用すると思います。

母上様が、私たちの島に来ることがありましたらそちらにも案内しますね。

それではまた。

敬具

P・S

マスターへの仕返しで、コーヒーにハト麦茶を混ぜて目の前で飲んでやりました。

しかし、とてもまずかったのと、その時のマスターの何とも言えない顔で罪悪感MAXになったのもう2度とやりません。



## ワイ、修羅場る ※ふたなり注意

### 修羅場

激しい争いや戦いの行われる場所のことを言う。

この言葉は、その他にも男女間における痴情もつれについても指す場合もある。

しかし、この言葉は元々阿修羅と帝釈天という神々が戦った場所のことを指すのである。

### 出典・ワイペディア

このように、男女の争いは神々の戦いに例えられるほど激しく、血みどろなのである。

…さて、これを読んで「急に何言ってるんだこいつ？」と思った兄貴姉貴がほとんどであろう。

……まあ、何が言いたいかというところ——

「……」

「「「「……」」」」

ワイ、絶賛修羅場です

ワイは今、リビングに正座させられていた。なんかデジヤブやな…  
ワイの周りは、今まで致してきた女獣人が取り囲み、全員ワイのことを冷たい目で見下している。

冷たすぎて風邪ひきそう…ちゃんと服着ただけけどな…

ここまでの経緯を簡単に説明しよう。

← ワイ、朝起きる

← ベッドの中になぜかブーケが下着姿で潜り込んでいる

← 猿みたいに盛る

← 玄関先で盛ってたらいんターホン

← 「来ちゃった…♡」×4

← ワイ、正座させられる↑今ここ

…ツツコミどころ満載やろ!?

なんでベッドの中にブーケおるねん!?

居るだけならまだいい！（良くない）

自然な流れみたいにやり始めんなや!!

あと何が「来ちゃった…♡」やねん!

ワイがどれだけ慎重に全員の予定組んでるかわかるか!?!被らせな  
いように予定組むのめつつつつつちや大変やねんぞ!?

それも、同じ日に全員同時ってクソゲーの負けイベントか!?

てかワイの家に気軽に来るなよ!来てもいいけど勝手に入るなよ

!?!ブーケと盛ってる時だって鍵かけてたはずやぞ!?

もつとワイの人権を尊ちよ「タロー、まじめに正座」「おかのしたあ  
!!」

…あかん!怖い怖い!ブーケのいつも道理のころころとした可愛  
らしい声色ではなく、どすの利いた声に思わずビビってしまう。

…うう…ブーケの視線が痛い。今のブーケは目で人が殺せると思う  
…直視したくねえ…!!

ブーケが怖いので視線を右にずらす。

…右を見てすぐに後悔した。

右にはこちらを狩人の様な視線で射ているモニカと、頬を「プクーツ」と膨らませているリリアンが見えた。

何を考えているかはわからんが、2人ともワイに激怒しているのはわかった。

右側を見たくないの、今度は左側を向く。

…左を見てすぐに後悔した。

左にはニコニコしているが、目が据わっているナイルと、無表情で瞳孔が完全に開いているガンギマリのビアンカがいた。

この二人は何をするかマジで想像がつかないため怖い。

…ワイ、死んだかこれ？

「……はあ、タロー、ある程度の浮気は許すってアタイ言ったけど、流石に節操なさすぎない？」

この重苦しい空気を破ったのはブーケであった。

ブーケは心底あきれたような様子で頭を抱えている。

「…ダーリン、アタイ、浮気は許さないから」

モニカはいつもの鳥が鳴くような声色ではなく、3段階くらいトーンを落としたどすの効いた声でワイに囁く。

ワイは思わずタマヒュンしてしまい、反射的に助けを求めるようにリリアンの方を見る。

「……すげこましのタローなんか知らないっ」ぷいっ！

リリアンはワイの視線に気が付くと、顔を背け、いかにも「怒ってます」という雰囲気醸し出し始めた。

そんな…この中では一番話を通じそうな奴なのに……

「クフフ……いけない子…アタシが一から育てなおした方が良さそうね……まずはオムツから……」

ナイルは「クフ…クフフフ…♡」と笑いながら何かを考えて言う様だ。

……なんかめっちゃ嫌な予感がするわ

「……………」

ピアノカは……あかん、目を合わせたら殺される気がする……!

なんか「ゴゴゴゴゴゴゴゴ……!」ってオーラ見えるもん!? なら一瞬スタープラチナっぽいの見えたもん!?

オラオラは嫌や!! あとワイは5部が一番好きや!!

そんな女の子たちに囲まれているワイ……どうしてこうなったんや……

ワイはただ、人間の女の子にモテモテになりたかったんや! 雌ケモ動物園を作りたかったわけやない!!

「ハーレムやん裏山」って思った奴! いつでも変わってやるで!!

「とりあえず、タローにはアタイが言って聞かせておくから、みんなもう帰りなよ」

「…は? なんであんたが仕切ってるの?」

「なんでって、アタイ、タローのお嫁さんだから当たり前じゃん」「はあ? 頭湧いてんの? タローちゃんはアタイのダーリンに決まってるんですけど? だからアタイが話しておくから」

「ぷっ! ダーリンだって! 寝言は寝て言うもんだよ?」

「あつ? なんか言ったぺちやばいネコ」

「……表出ろや駄犬」

「ちよ、ちよつとやめてよ2人とも! タローのことはアタイに任せて……」

「…リリアン、さつきタローのこと知らないって言ったじゃん。無理せず帰りなよ」

「そうよ、帰れ帰れ。シツシツ!」

「なっ……そ、そりや、さつきは勢いで言っちゃったけど、タローはアタイの王子様だし……ごによごによ……とにかく! タローのことはアタイが何とかするから!!」

な、なんや?

急に喧嘩始めたぞ……?

話をつけるって、何をやる気なんや……?

「もおー! いいからみんな出てよ! アタイとタローはイチャラブ

チュツチュの続きするんだから！」

「はあああああり!?アタイとダーリンの方がラブラブだしい!お互い全身チュツチュできるしい!」

「ぜ、ぜんし:!?///:あ、アタイだってタローとラブラブだし!::お尻でだつてしてあげたんだからあ!////」

アタイ三銃士が取っ組み合いを始めた。

…漫画みたいな土煙が出ててドラえもんのワンシーンみたいやな

……

「クフフ♡さあ、僕ちゃん♡あんな血の気が多い野蛮なアマゾネスたちなんてほつといて、ママのぱいぱい飲んでねんねしよ〜ね〜♡」もみゅ♡

3人が争っている隙をつき、ナイルがワイの手を取り自分の胸を揉ませてくる。

ああ〜♡ママあ〜♡

「クフ♡さあ、ママとベッドへ——へぶつ!?!」

突然、ナイルが横に吹っ飛ばされる。

ワイの目の前には、いつの間にかナイルの代わりに、足を突き出したビアンカがいた。

「……アナタ、急なんだけど、今からアタシの両親に会ってくれない?大丈夫よ、飛行機で5時間くらいで着けるわ」

ヒイツ!

ビアンカと目を合わせてしまい、思わず少し漏らしてしまった。

ビアンカの目には光がなく黒々としており、今にも吸い込まれそうだ。

「そうねえ……せつかくだし、そのまま新婚旅行しちやいましょうか♡きつと私達ステキな——つぶ!」

今度はビアンカの顔にナイルのドロップキックが炸裂した。

互いに見つめあう2人。

……後ろに虎と狼が見えるのは気のせいだと思いたい。

「……ぶっ転がすッ!」

ついに2人も取っ組み合いを始めてしまった。

……なんや、この状況。

この間まで仲が良かった女友達たちが、争い合っている。  
しかも、その原因はワイや。

……クソツ！元はと言えば、ワイなんかが彼女たちと中途半端に  
関係を持ってしまったのが悪いんや！その後も、ずるずると関係を続  
けて……！

これ以上、ワイのせいで不幸になる女の子は見たくない！もう、終  
わりにするんや!!

「ええ加減にせえや!!」

「「「「?」」」」

ワイの大声で、皆の視線が集まる。

「もうやめようや!!こんなんやつても何にもならんて!!それもこれ  
も、雰囲気の流れされて好きでもないワイとやってしもうたのが悪いん  
や!もうみんな忘れて——

「「「「……は?」」」」

な?!?!?  
な、なんや…?

急に寒気が…これは……殺気!?

5人からなんだかよくわからない「スゴ味」を感じる…!?

……ここに居たらあかん!逃げなくては!!

「ガシツ!」

ワイが逃げようすると、先程まで取っ組み合いをしていたナイルとビアンカがワイの両腕を左右でがっちりホルドする。

…お前らさつきまで喧嘩してたやろ!?

「アナタ……本気で言ってるの……?」

「クフフ……ほんとに悪くい子……お仕置きが必要ね……」

2人がワイの耳元で囁く。

その声の中に黒い感情を感じ背筋がゾクゾクする。

「…………タローの唐変木」

「ふうくん、ダーリンはアタイ達が雰囲気流されるだけの安い女だと思ってたのね〜」

リリアンとモニカはそう言いながらワイの足に抱き着く。

…なにこれ!?ワイ動けないんだけど!?

「タロー……今の言葉は、アタイ達、本気で怒るよ?」

うわっ!?ブーケがマジギレしとる!?

ブーケのマジギレなんて、小さいときに間違えてブーケのプリン食ってもうた時以来や!?

ブーケがキレると、めっちゃ引つ掻いてくるんだよなあ…

ってワイ今ホルドされてるからガードできないやんけ!?

「離してくれ!?!はやらせコラ!?!」ジタバタ!

ワイはブーケからの引つ掻きに備えるため、手の拘束を振りほどこうと藻掻く。

しかし、獣人の力にワイが敵うはずもなく、ただ体が少し揺れるだけである。

その時、ワイのポケットからスマホが落ちる。

「…ん?…これは…………?」

スマホは、落ちた衝撃で何かのアプリを開いたように見えた。

ブーケはワイのスマホを手に取り、画面を食い入るように見始める。

な、なんや…何見とるんや…?

「——へえ♡」

スマホを食い入るように見ていたブーケが「ニヤア」と笑う。

…えっ、怖ッ

ブーケは「チョイチョイ」と手招きして、ワイ以外の4人を呼ぶ。

4人は訝しげにしながらも、ブーケのもとに集まり、スマホの画面を見始める。

ワイは拘束から解放させるが、先程まで強い力で掴まれていたからか、手足がしびれて這って移動することしかできない。

4人はスマホの画面を見ると、ブーケと同じような笑みを浮かべた。

…:…なんだか、すごく嫌な予感がする。

今なら、あいつらはスマホの画面に夢中やし逃げられ「タロー」踏み  
みい

うっ!?逃げようとする前に、ブーケに踏まれてしまい動けなくなっ  
た。

ブーケの方へ顔を向けると、顔を赤くし、舌を「ペロッ」と出して、  
いかにも火照っている様子だ。

ブーケの横に並んだ4人も同じように顔を赤くしており、まるでこ  
れから起こることに期待いっぱいという表情やな……

先程まで争っていたのが嘘のような連携。

い、一体こいつらは何を見たんや!?

「タロー、流石にさっきの言葉は傷ついたよ。だから

みんなでおしおき、するね♡♡♡♡♡」



ブーケの一言に、ワイは底知れぬ恐怖を感じた。

ワイは5人にお神輿のように担がれ、寝室に連れ込まれる。

寝室に入った瞬間、ブーケは部屋の端っこにある「さぎようだい」で何かを作りはじめた。

この隙に逃げられればベストなんやが、残り4人がワイのことをニヤニヤしながら見張ってるから無理そうやな…

…ふと、寝室に入ってから返されたスマホのことを思い出した。

そういえば、ブーケたちは何を見てたんやろ…？

気になったので、ワイはスマホの電源をつける。

…どうやら、DIYレシピのページを見ていたようやな。さて、

何の項目を見――

○ふたなり薬

・そざい：○○○×● △△×●  
・せつめい

①・女の子がこの薬を飲むと、一定時間おちんちんが生えてきます。

②・サイズや睾丸の有無等は使用者によって異なります

③・この薬を飲んで生えて来たおちんぽから出る精液で妊娠することはありません

④・開発途中の薬のため、人間には効果がありません

⑤・飲みやすいチェリー味です

⑥・それでは、レズるなり好きな男の子をレイプするなり好きに楽しんでください♡

……つねきちに貰ったエログッズの項目か〜そうかそうか〜  
いや〜こんなものまで作れるとか、最近のDIYはすごいなく  
あはははは〜

……………逃げねば（風立ちぬ）

「お待たせ〜♡できたよ〜♡」

ワイが逃げる覚悟を固めた瞬間。ブーケがDIYをやめ、こちらに向かってきた。

その手には、おどろおどろしい色をした液体が入った瓶が5つ握られていた。

この流れは、まさか……………

「さあ、みんな飲んで飲んで〜♪」

ブーケは持っていた瓶を他の4人に渡した後、みんなで一斉に飲み始めた。

5人が瓶の中身を飲み干すと――

「ボオン♪」

家具を置いた時に鳴る音と共に、5人の下半身が煙で覆われる。煙が晴れた後、そこにあつたのは……

「ボロン……♡」

大きくて立派な勃起チンポであつた。

……やっぱりさっきのレシピの奴やんけ!?

うわっ!?!みんなワイのイチモツよりデカいやん!?!もはや怪物やで

!?

……これから始まるであろうことを想像してしまい、全身に鳥肌が立つ。

にげ……ズン……!?!?!

ワイがドアに猛ダツシュしようとしたとき、ワイの目の前に5つの

肉棒が立ちふさがった。

“むわあ…♡”

肉棒からは、何度も嗅いだことのあるいやらしい匂いが鼻腔を刺激する。

“ブルン♡”

まるで生きているかのように揺れ動き、いつでも猛威を振るえるように準備している。

その棒が5つ。まるでチンポで檻が作られたようだ。

「ちえきい…♡これがおちんちんか♡…揺らしてるだけで気持ちいい♡」

「アハ♡ダーリン、もう浮気しないようにアタイので染めてあげる♡」

「これさえあれば、タローも雌になれる、みたいな♡…えへへ／＼」

「クフフ♡赤ちゃんにはアタシの特製おしやぶり♡しやぶしやぶして貰いまちゆからね♡」

「ああ…♡アタシ一度でいいから雄になってタローさんをメス堕ちさせてみたかったの♡ウフフ、ステキ…♡」

5人が口々に言いながらワイににじり寄ってくる。

ワイは逃げようとするが、5人のチンポに腰が抜けてしまい動けない。

ああ…マツマ、どうやらあなたの愛する息子は、今日で死ぬようです…

「「「さあ、楽しも♡♡♡♡♡」」」

おしおきの宴が、幕を開ける…♡

## ワイ、ハーレムる ※ふたなり注意

「い、嫌……嫌や……ぐええ！」

何とか力を振り絞り、オーズ最終回のウヴァ様のように逃げ出そうとするが、「ドンッ！」とナイルに肩を押されベッドに倒される。

「な、なにすんねn 『ポロン♡』…!？」

抗議の声を上げようとしたとき、ワイの目の前にナイルの極悪そうな黄色いチンポが突き出される。

亀頭からは、「ポタポタ…」と汁が垂れており、まるで芋虫の様な魔物が餌を前にだらだらと涎を垂らしているようである。

「クフフフフ…♡ 赤ちゃ〜ん、ママ特製のおしゃぶりでちゅよ〜♡  
いっぱいしゃぶしゃぶちまちようね〜♡」

ナイルが笑みを浮かべて、チンポを揺らす。

「ちよ、ちよつとま…『ずぽお♡』『むぐっ!？』」

ワイの制止する声をかき消すように、ナイルは凶悪なイチモツをワイの口にぶち込む。

ワイの口にぶち込まれたチンポは口内でびくびくと震えているのがわかった。

「くっふ…!……さあ赤ちゃん、ママのことを精いっぱい気持ちよくしてね〜♡」

『じゅぽー!』『じゅぽー!』『じゅぽー!』『じゅぽー!』

ナイルが腰を動かし、ワイの口内を犯す。

ワイは口の中に異物を押し込まれた不快感と、「ナイルママのおちんちん」と思うと少し芽生えてくる愛おしさに感情はぐちゃぐちゃになっっていた。

「感情そのものが侵されている」

この言葉が一番しつくり来た。

「ちよつと〜♡アタイ達も気持ちよくしなさいよ〜♡」ガシッ

「ほら、お手て出しなさい♡」ガシッ

ナイルにフェラチオをしているところに、リリアンとビアンカがやって来た。

2人はそれぞれワイの手を取り、その手に自分たちのチンポを握らせた。

「あん♡おちんちんって変な感じ…でも、気持ちいい♡♡」

「オナニーはアナタの得意分野でしょ？♡ほら、お得意の手淫でアナタ達の雄摩羅♡ご奉仕しなさい♡」

2人はワイの手に自分たちの手を被せてチンポをしごかさせる。

「ああ…♡タロー、上手う…♡アタイ、女なのに雄になっちゃおう♡」

「ウフフ…♡そう、その調子よダーリン♡……やん♡…もつとこすこすしてえ♡」

2人はそれぞれ気持ちよさそうな顔でチンポをしごいている。

ワイの手には2人のチンポの暖かさと、精液を出そうとする尿道の蠢きが伝わってきていた。

くっ…！

なんやこの状況はあ!?

ケモノの！それもチンポが生えた雌共に犯されとる!?

オークに犯される姫騎士でもこんなひどい状況にはならんて!?

なんでワイがこんなくつ殺的な状況になってんねん!?

…いや、でもまあまだ一部の穴は守れてるから、まだマシ ♪ガシツ

！ ♪やな…

…? なんや？腰が何かに掴まれているような…? ♪

「タロお…♡アタイ、我慢できないい…♡アタイの童貞、もらってえ♡」

……今の声はブーケ!?

まさかブーケ、ワイの尻に…!?

……あかん！それだけはあ!?!?

「ふうーふへ、ふあへふんひやあ!!」

「ふう…ん♡…こらあ、お口でママにいたずらしちゃメツ!!♡」

ダメだ！ナイルのチンポが邪魔でうまく喋れない!!

「はあ、はあ♡タロー♡一緒に気持ちよく、なる?♡」

ブーケ!!やめ——

『ずぼお!!!』

「ぐつ!?ぐあああああああああ  
?!!?!?!?!?!?」

「ちえきいいいいいいいい♡♡♡♡♡…なにこれなにこれえいいいい♡♡♡…知らない、アタイこんなの知らないいいいい♡♡♡♡♡♡」

ブーケが快感に身を痙攣させているのがわかる。

尻にねじ込まれた肉棒の痛みにワイは歯を食いしばりそうになるが、ナイルのチンポを噛み千切ってしまうかもしれないため、口を窄めて耐える。

「ふおおお…♡赤ちゃんのはよつとこフエラ、さいこお…♡」

唇を窄めたことで、ナイルのチンポは更なる快感に『びくくぅ…♡』と動く。

「や…あん♡タ、口お♡アタイのおちんぼ、潰れちゃうよお…♡」

「ふぬぅぅぅ!♡チンポぎゅつぎゅしちやだめえええ♡」

無意識に手に力が籠められたのか、リリアンとビアンカも快樂に声を上げる。

2人とも、口では拒否することを言っているが、もつと握れと言われんばかりにチンポを押し付けてくる。

…あれ?1人足りないような…?

「うう…あそこでチョコキを出してれば、アタイがダーリンの処女貰えたのに…!!!」

そんな声の方向に目をやると、モニカがハンカチを噛んで悔しさを露わにしている。

「チエキキ♪負け犬は大人しく指啞えて見てな♪アタイはタローとラ



ブラブエッチしてるから♡」

「くうううう!!……こうなったら、犯されるダーリンをおかずにオナニーしてやるう!!」

そう言つて、モニカはチンポをさすつてオナニーを始める。

しかし、自分のチンポに慣れていないのか、少しぎこちない。

「えへへ……それじゃ、動くね♡」

ブーケはそう言つと、腰を動かし始める。

ワイの尻の中を「ずずい」と進み、腸の壁をえぐる。

ワイは痛みで涙目になる。

「ああん♡アタイ、タローを犯してるう♡タローのお尻、気持ちいい♡

……あ♡おちんちんつてすごい♡」

ブーケの顔はナイルが影になって見えないが、声からしてトロトロ溶けそうな顔になっているのだろう。

「パン!」 “パン!” “あん♡” “あん♡”

部屋の中に、肉と肉をぶつける音と、淫獣の喘ぎ声が響き渡る。

尻を掘られているワイも、認めたくはないが、段々痛み以外の感覚もある事に気が付く。

……気持ちいい。

おチンポ気持ちいいいいいい!!

ワイはもつと快感を得ようと、全力かつ丁寧にワイに襲い掛かるチンポを相手取る。

いくら立派なチンポを持っていても、相手はおチンポ白帯、初心者だ。

こつちは前世を含めて何十年も付き合い続けてきた相棒だ。扱いはワイの方が上や!!

「!?……ふっしゅううう♡♡タローのお尻が、アタイのちんちん食べてるうう!♡」

「ああん♡タロー、亀さんの頭なでなでしちやらめえ♡」

「フ——♡フ——♡チンポ気持ちいい!♡アナタ、もつとシて!

♡アタシのペニス、もつといじめてええええ!♡」

「こ……らあ♡ママのちんちんで遊んじや……めえ♡……出ちゃう!

♡ザーメンミルク出ちやうううう！♡」

4人はそれぞれ、ワイのテクニクに悶えている。

ワイはチンポの扱いに関しては黒帯！あのオナニーマスター黒沢とも肩を並べる男や!!

「クソ……クソツ!!」シコシコ♡

1人残されたモニカはワイらを見て自慰に耽っているが、うまくチンポを扱えずもどかしそうだ。

待ってろ、こいつらが終わったらお前の番や!!

くらえ!!ラストスパート!!

「二二あああああああああ————————♡♡♡♡♡

♡」「」

〃びゅうううううううううううう!!びゆるびゆるびゆるるううううううううう!!”

音だけなら滝つぼと間違うほどの轟音と共に、4人の雄チンポから精液が発射される。

発射された精液達は、ある者はワイの体内に注がれ、ある者はワイの身体を汚していく。

4人は射精が終わると、力が抜けたようにチンポを離し、ベッドに倒れ込む。

「ちえきい♡……男の子ってずるい♡だって、こんなに気持ちのいいのを秘密にしておくんだもん……♡」

「お、王子様♡アタイの変態なところ、もつと見てえ……♡」

「あへええ……♡アタシのミルク、おいしかったでちゆかあ……♡」

「チ、チンポ…♡チンポチンポチンポオ…♡」

4人は虚ろな表情で呟く。ピアンカに関しては頭が蕩けすぎてチンポと連呼するしかできていない。

ワイは、身体に着いた精液を集め、ナイルの精液と一緒に飲み込む。  
…変な味やな…こいつら、ワイのを美味そうに飲むから少し期待したんだが…

…さて、そんなことはどうでもいい。

「ああ…♡ダーリン助けてえ…♡アタイ、おちんちん苦しい…♡」  
シコシコ♡

まずは、こいつをどうにかせんとな♡

「またせたな、モニカ」

ワイはモニカに近づく。

「ダーリン♡ダーリン…♡」

「わかつとる。ワイに任せろ」

ワイはそう言うと、モニカの勃起ペニスにワイのイチモツを擦りつける。

いわゆる、兜合わせと言うやつだ。

「ひゃん…♡ダー、リン…♡それ、気持ちいい♡」

モニカは「ビクンツ！」と体を跳ねさせる。

モニカのオレンジがかったチンポも嬉しそうに角度を上げた。

兜合わせ。その語源は、鎧兜やカブトムシが戦っているように見えるためと諸説あるが、今の光景はチンポが戦っているというよりは、チンポ同士で愛し合っているという方が適切ではないだろうか。

“ちゅ♡” “ちゅ♡” “シユツ♡” “シユツ♡”

ワイとモニカのチンポがキスをする光景は、まさに棒状の生物が交尾しているようであった。

「ダーリン♡ふツ…♡アタイ、おちんちん初めてなの♡だから、アタイにおちんちんを教えてえ♡」くりくり♡

モニカが甘えるように、ワイの右胸あたりを人差し指で「くりくり♡する。」

その可愛らしい姿をずっと見ていたいが、頼まれたからにはしょう

がない。

ワイはモニカチンポとのキスをやめる。

「あつ…」とモニカが名残惜しそうな声を上げる。

「ええで、ワイが教えたる。ただしー」

ワイはモニカのチンポの下にある、おまんこにチンポをあてがい、

授業料貰うで」

“ずぶう”

一気に挿入した。

「はあああああん♡やっぱりおちんぽもいいけど、おまんこ気持ちいい♡♡♡」

モニカはチンポを入れられて喘ぐ。

しかし、今回はこれでは終わらんで。

「さあて、チンポはまず、ここをこうして……」

“さすつ♡”

「ひゅう!?だ、ダーリン?おチンポはその…おまんこの後で……」

「いや、せっかくだから同時進行や」

“シコシコ♡” “パンパン♡”

ワイはモニカのまんこを突きながら、モニカのチンポを扱く。

「おっう♡おちんぽすごっつ……♡おまんこしながらおちんちんシコシコなんて、えっちすぎるよお……!♡」

モニカは舌を出しながらアヘアへと感じている様子だ。

「んっ♡…タローとモニカ、エッチすぎるう…♡アタイ、興奮してきたあ♡」シコシコ♡

よく見ると、いつの間にか復活していた4人が、ワイらの行為を見ながらチンポを扱き始めている。

「ひあん♡もう我慢できない…リリアン♡んっ♡ちゅ♡」

「ちゅ♡…そんな♡女の子同士でこんな…♡ブーケえ♡もつとおく♡」

右を見ると、ブーケとリリアンがディープキスを始め、ワイらと同じように兜合わせを始めていた。

「グフフ♡…ビアンカの、硬くなりすぎてて凶暴なのね♡ん…♡」

「ナイルだつてえ…♡ちんちんビンビンじゃない♡あん…♡でも、おっぱい柔らかくて癖になりそう…♡」

左では、ナイルとビアンカが互いのチンポとおっぱいを触り、愛し合っている。

女達がワイのセックスを見てレズり合っている。

その淫らな光景に、ワイのチンポはさらにいきり立つ。

…!!で、出る……!!

「モニカ!出るぞ!!」

「いやくん♡ダーリン先生♡おちんちんのこと、もつと知りたいのにいっ♡…♡ああダメ!♡イク♡イツチャ…♡ウウウウウウウウ♡♡♡」

“ぶぼぼぼぼぼぼぼおぼぼうううう!!!”

ワイが射精すると同時に、モニカも射精し、精液の花火を打ち上げる。

ワイの身体に熱い雨が降り注ぎ、ワイを白く塗っていく。

「はああああ…♡ダーリンには勝てなかったよお…♡おしおきのはずなのにい…♡アタイがしつけされてるう…♡」

モニカがうつとりしながら余韻に浸る。

さて、ワイも疲れたし、いったん休憩……

「も、もうダメ！リリアン!!あんたのおまんこ貸して!!」

「きゃあ……ブルーケえ♡」

休憩しようとする、ブルーケがリリアンに入れようとしている光景が見えた。

「ムカ、ムカムカムカ……ぶちい!!」

その瞬間、ワイの中で何かがキレた!

「ドンツ!!」 ずぶう!!」

「きゃん!……タロー?」

「ああん♡……あれ?なんでタローが……?♡」

ワイはブルーケを押しつけて、リリアンのまんこに自分のを挿入した。

突然動いたワイに、5人は目を丸くする。

「………嫌や!!お前らのおまんこはワイのもんや!!他のチンポを入れるなんて嫌や!!」

ワイは魂の叫びをあげた。

ワイはケモノ以上に寝取られNTTRは大嫌いだ。

あんなもんは脳を破壊する人類の敵や!!

……しかし、よくよく考えたら、相手はケモノだし、別にいいか? ?

「タロお……そんなにアタイ達のことを……♡」キウンキウン♡

……ん?

なんや?みんなワイを見る目が変になつたぞ?

目の中に♡マークが見えるし、なんか「キウンキウン♡」って音が聞こえてきそうな雰囲気だし……

「嬉しい……♡タローがそんなにアタイ達のことを大好きなんて……♡もつと言つて……♡もつと愛してえ……♡♡♡♡」

ブーケを筆頭に、4人がにじり寄って来る。

……なんか嫌な予感がする。ここはにげ……れない!?

「タロお……♡タロオ……♡」ガシィ!

リリアンがワイを足でがっちり挟んでいた。

そういえば挿入してたあああああああ!!!

「タロー♡」

「ダーリン♡」

「王子様♡」

「赤ちゃん♡」

「アナタあ♡」

「二二アタイ×3 / アタシ×2も大好きiiiiii  
!!!!!!  
♡  
♡  
♡  
♡

♡「」

ぎやあああああああ!!!!!!

その後、朝まで大乱交!スマツシユ(ちんちん)ブラブラザーズした。

“ちゅん、ちゅん”

……つは!?!朝か……

ああ……昨日は大変だった……あれから理性を失った5人を相手にしてまんこ弄ったり、チンポのいじり方をレクチャーしたり、挿したり挿されたり……

最後は、6人でスクラムを組み、兜合わせサドンデスマッチで6人同時イキしたのは覚えてるが、その後寝落ちしたのか……

……にしても、ワイ全裸やったはずなのに、あつたかいなあ……なんやろ……?

ワイは身体に目を向ける。

そこには、昨夜愛し合った5人がワイを抱きしめるように眠っている姿があった。

その身体からは、チンポがなくなっていたので、薬の効果はなくなっていたのだろう。

なるほど、5人の体毛で暖を取っていたのか……

生前、バイト先に毛皮が好きなおぼはんがいたが、その気持ちが少しわかった気がした。

とてもふかふかで暖かい。だが、毛皮と違ってこっちは“たゆたゆ♡”で“ぶにぶに♡”でこっちの方が遥かに気持ちがいいだろう。

……5人の女の子が、ワイのことを愛し、抱きしめている光景かあ……



「……………エへへ」

……………!?

今ワイは何と言った……………!?

エへへ…やと…!?

何嬉しそうにしてんねん!?

相手は毛むくじやらのケダモノやぞ!? 嫌悪の対象であるはずやろ  
がい!?

……………これもきつときつねか神のせいや!!

今回は何も証拠ないけど、ワイがケモノ相手に発情するわけがない  
からきつとそうや!!!

「うみゆ…おはようタロー♡」

ワイが悶えていると、ブーケが目を覚ました。

「タロー…昨日、タローが1人一人を相手していた時、みんなで話し  
合ったんだけどね…アタイ達、タローを許すことにしたんだ」

「?…お、おう…サンガツ?」

なんだか知らないが、ワイは許されたらしい…?

「だって…タローはみんな平等に愛してくれるもん♡ 浮気じゃなく  
て、みんなお嫁さんなんだよね♡ タローの欲張りさん♡ ……ほんと  
は、アタイ1人を愛して欲しいけど、タローはエツチだつてわかつて  
るから、いいよ♡ ……それに、女の子同士も気持ちいいつてわかつた  
し♡ ……いつそのこと、この島をタローのお嫁さんハーレムの島にし  
よ! ……なーんて…キャ／／」

ブーケが顔に手を当て、「いやんいやん♡」と頭を左右に振る。

…なんやろ、取り返しのつかないとこまで来てる気がする…!?  
確かにハーレムは作る予定ではあった。

だが、それは人間ハーレムであつてそこにケモノの席はない!!

おめえーらの席はねえから!!!

ああああああ! ワイはどこで間違えてしまったんやああああああ

!!!

ワイは頭を抱える。

もう嫌や……少なくとも今日はもう、何もせずに死んだように眠り  
t「タロー」

ブーケが話しかけてきたので、そちらを向くと

“ちゅ♡”

軽いバードキスをされる。

「タロー♡アタイ達の旦那様♡自分は浮気し放題の癖に、自分の女が  
浮気するのが許せない最低の旦那様♡そんなタローのことを、アタイ  
達は大好きだよ♡♡♡」

その後、ブーケと本気ツクスした。

さらに、次々に起きてきた雌たちとも1対1の本気ツクスをして、  
最後はレズ交じりのラブラブ6Pエッチをした。

拝啓、母上様

先日、5人の友人たちと喧嘩になりそうでしたが、みんなでスポー  
ツをして仲直りできました。

やはり、体を動かすのはいいですね。健康的に汗を流すのは気持ち  
がいいです。

母上様も、適度に運動をしてくださいね。健康のために。  
それでは、お元気で。

敬具

P・S

前回の手紙のお返しで、バーゲンで買いすぎたからと家具をおすそ

分けしてくれたのは嬉しいのですが、「うばぐるま」を送ってくるのはやめてください。

マジで命が縮みます。

ワイ、デザイナーなゾウと再会する

「……ついに来たあ（ねっとり）」

ワイは初期のパラガスみたいに眩きながらバスに乗っていた。  
今、ワイの心の中はすごくワクワクして、ハチャメチャが押し寄せ  
てくるようにテンションが上がっていた。

ピンポーン！まもなく〇〇街に停まります。お降りの際はー

“

!!

っしやー!!街や!街に着いたんや!!

よーし、ワイの長い時間をかけて練られた計画を実行するときや…

!!

“ふたなりケモノ6P事件”というこの世の終わりみたいなイベ  
ントを終えた後、ワイの生活は明らかに変わっていた。

まず、あの時のメンバーと一緒に居る時間が多くなった。

もちろん、前みたいに1対1で会うこともあるのだが、複数人で行  
動する時間が増えた。

ブーケと釣りをしていたらいつの間にかビアンカも隣に居たり、リ  
リアンとくだもの狩りをしていたらモニカが加わっていたり、一人で  
こっそり散歩に出かけたら5人が勢ぞろいして軽いピクニックに  
なったりなど、ワイの生活は徐々に浸食されつつあった（ピクニック  
の時「みんなでハーレムデート、楽しいね♪」と言われてチンポが反  
応し、青姦に発展した模様）

あいつら、あの時の殺伐とした空気が嘘のようにめっちゃ仲良く  
なっとる……

そのくせ、ワイが1人に構いつきりになると、嫉妬して喧嘩したり、  
ワイに噛みついたり、ワイを引っ掻いたりしてきおるから参った…

本人たち曰く「それとこれとは話は別!!」らしい…

一緒に居る時間が多くなった。それはスケベなことも例外ではなかった。

ワイらのはあの日以降、複数人でやることに抵抗がなくなっていた。ワイの家でやってる時に突然訪問、乱入してきて3P、4Pになったり、ワイが他の娘とやってるのを観戦して、オナツたりすることもあった。

ひどい時では、ワイが寝室へ行ったら既に百合エッチが始まっていたなんてこともあった。なんで居るねん……不法侵入やめーや! (じっくり鑑賞した後、混ざった模様)

……こんな感じで、ワイのプライベートな時間は雌ケモ達に犯されていった。

ワイのプライベートな時間。そうー

自由にオナニーができなくなったのである!!!

……今「あほくさ」って言った奴、表出るや!!!

いいか! オナニーはエッチと違って自分の好きなおかずを選んで、自分の好きなタイミングでイけるから最高なんや!

なんなら、エッチへオナニーの気分の日だってある位や!

オナニーをする時はね、誰にも邪魔されず自由で、なんとというか救われてなきやあダメなんだ。独りで静かで豊かで…

それなのに、あいつらと来たらあ…!

オナニーしてたらヤンヤンな空気になって「オナニーするくらいなら、アタイにちよーだい♡」とか「赤ちゃんはおナニーしないでしょ♡ママに任せなさい♡」とか言っつて邪魔ばかりしおつて……!

ワイはケモノじゃなくて人間でちんちん気持ち良くなりたいたいんやあ!! (なお、邪魔された後しつかりとエッチはする模様)

オナニー用のエロ本もDVDも全部ズタズタにしおつてえ!

…そんなわけで、ワイはある計画を立てた。

その名も、「2泊3日オナニー旅行」である!

…まあ、簡単に言えば、あいつらが追っつて来れないように街まで行き、エロい本屋DVDを買いあさり、格安のホテルでおナニーパーティーをするという算段や。

ふふ…この日のために、ブーケたちには悟られぬよう入念に計画したんや……!

思う存分、楽しむでえ!!

「街……キターーーー!!」

バスから降りた後、ワイはどこぞの宇宙ライダーの様に叫ぶ。

周りから「ひそひそ」と陰口をたたかれているような気もするが構うものか!

ホテル代含めて○万ベル…この旅行は失敗は許されぬ……!!  
さて、まずは駿○屋にでも…

「は、離してください……!」

「へへ…おねえさんいいだろおくオイラと遊ぼうぜえ?」

あん?

なんや、昭和みたいなのナンパの光景が広がってるな……マジであん

なん居るんやな……

「ひび……なあに、後悔はさせねえよお〜？ただ気持ちいいだけだつてえ〜……」

「いい加減迷惑ですつて……！それにわたしには心に決めた人が……」

……なんか、男の方目がラリつてるな……あれは何するかわからん奴や。

女の方も迷惑そうだし、助け舟でも出してやるか……

「いいからさつさと……」「お〜い！待たせたな〜！！」……な、なんだあ!?!」  
ワイは男女の間に割って入る。

「いや〜待たせて悪かったな、マイハニー迎えに来たよ〜♪」

「えつ……あつ……ウフフ……もお〜遅いですよ〜♪」

ワイの意図をわかってくれたようで、女の方も話を合わせてくれる。

……近づいてみてわかったけど、女の方なんかデカくね？

「……ちっ!!」

男は舌打ちをすると、人ごみの中へ消えて行った。

……けっ！そんなんだからモテないんやぞ！もつと紳士になれ!!

……さて、この娘は大丈夫だろうか？

「大丈夫「タローさん？」……あん？」

たった今助けた奴がワイの名前を呼んだ……？

ワイはそいつの顔を見上げる。

透き通るような白い肌

ぱつちりとした美しい蒼い目

そしてゾウ特有の長い鼻

……あつ！こいつは!?!

「やつぱり!!タローさんじゃないですか!!ああ……わたし、また会えて嬉しいです!!」ぎゅううう……

目の前のゾウ女がワイのことを抱きしめる。

あまりの力に、身体から鳴ってはいけない音がするような気がする。

あつ…でも、こいつ身長ワイよりでかいから顔がちようどおっぱいに埋まって……♡

……い、息ができない…!?

「ちよ……ギブギブ……!」

「ああ…久しぶりのタローさんだあ……♡」すりすり♡

だ、ダメや!こいつ聞いてへん!?

「く、苦しいンゴ……や、やめてくれサリー……!」

ワイは目の前のゾウ——サリーに向かって叫んだ。

サリーは元々、ワイらの島に引越してきた住民の1人やった。

ゾウ系の獣人は基本的にワイらより体がデカくて、圧がすごいから、ワイも「ゲーツ!ゾウの獣人!」とテリーマンみたいなビビリ方をしたが、話してみたらお淑やかで優しい娘ですぐに仲良くなった。

しかし、サリーはデザイナーになるという夢を叶えるため、ケモシコ島から引越したんや。

懐かしいなあ…サリーのデザインした服の下書きを見て意見を言い合ったり、徹夜して実際に仕立てをしてみたり、一緒にエイブルシスターズでバイトしてみたり…青春してたなあ…

サリーのデザイン力が認められて、デザインの会社に決まった時はみんな自分のことのように喜んだっけ…

「まさか、サリーがこの町で働いてるとはなあ〜」もぐもぐ

「ふふ…おかげさまで、こうしてデザイナーを続けられます…あつ!店員さん、ドリア追加お願いします」もぐもぐ

ワイとサリーはせっかく久々に会ったし、飯でも食おうという話になり、格安イタリアンの「ソイゼリア」に来ていた…前世に似た店なかつたっけ?

ここの店は安くていいもの食えるからええ店やで…サリーもニコニコ顔で美味しそうに料理を食べている。





「おお！この店ワイン飲めるやんけ!!おねーさん！ワイン追加で!!」  
「!?た、タローさん、お酒はそのお……やめた方が……」

「いや〜島では酒なかなか手に入らんから久々やわ〜♪酒ツ！飲まずにはいられないツ！」キリッ!

「で、でもお〜……はあく好きにしてください……」

?なんでサリーはワイの飲酒を止めようとするんやろ?

……まあ、ええわ!オナニー旅行成功の前祝いとサリーと再会できたことへのお祝いで今日は飲むでえ〜!!

「うええええい！ワイはケモシコ島の王様やで〜！よろしくニキ〜！」

「だから言ったじゃないですかあ……タローさんお酒飲むとすぐに悪酔いするんですから……」

サリーが呆れながら呟く。

そういえば、ワイ結構酔いやすかったわ……久々の酒でテンション上がって忘れてたあ……

ワイは今、サリーに肩を貸してもらいながら予約していたホテルに向かっていた。

酔っているため千鳥足で1人では歩けんわ……

はあ……これはホテルで少し休んでからエロい物買いに行くか……

そして夜は……デユフフ♡

「えーと……住所はここk……?!?!?!?!  
／／た、タローさん！本当にここな  
んですか!?!」

サリーが慌てたように叫ぶ。

んー？酔ってるせいかわ視界が少しぼやけるなあ〜？

……まあ、多分あつてるやろ！

「おう、ここやで。せつかくだからサリーも休んでいこうや」

「!?／＼か、からかわないでって言ってじゃないですか!!」

「からかつとらんでえ……久しぶりに会えたんやし、交友深めようや」

「……タローさん、これって、そういう意味って捉えていいんですよね……?／＼」チラツチラツ

急にサリーが真つ赤になった顔を背けた。

そう言う意味ってなんやろ？

……テキトーに頷いとくか

「おう、せやでえ」

ワイが答えるとサリーは少し俯き「……ブーケ、ごめん。やっぱり諦めきれない:!!」と呟くと、意を決したように顔を上げる。

「……わかりました。その……わたし、本気になっていいんですよね……／＼」

「?……おう」

なんや、さつきつから会話がかみ合っていないような……?

……まあ、ええやろ！

しかし、サリーの顔真つ赤つかやなく。サリーも酒飲んだんかな？

「……着きましたよ／＼」

お！どうやら予約したホテル着いた様やな!!

さあ、ワイのオナパを開く会場は……ッ?!?!?

ワイは目の前の光景に思考が停止した。

そこには、ホテルが建っていた。

おとぎ話に出てくるお城の様な外見

どこことなく漂うピンクっぽい雰囲気

『休憩〇〇ベル・お泊り▽▽ベル』と書かれた看板

ホテルの前には、これから利用すれであろうラブラブカップルがいちゃついている

そして、正面玄関には『L♡O♡V♡E』の文字が書かれていた

……ここ、ラブホじゃね？

〃シャアアアアアア……〃

シャワーを浴びる音が部屋の中に鳴り響く。

やけにピンクがかった部屋の中、その中心にあるやけにデカイベッドにワイはバスローブ姿で腰を掛けている。

ラブホに着いたと気が付いた後、ワイはサリーに「やっぱりやめとくか!」とはつきり言えたらよかつたんやが、完全に脳がフリーズしてしまつて何も言えなかつた。

一方のサリーは、ワイの腕を組み、ずんずんと建物の中に入つていきいつの間にか2人で部屋に入つていた。

今は、サリーが「シャワー…浴びてきますね……♡」と言つてシャワーを浴びているところだ。

この状況を何とか打開するため、酔いを醒まそうと先にシャワーを浴びたのだが、結局何も思い浮かばず、現在に至るといふわけや。

……いや、なんでワイはよりによつてラブホテルに予約取つてんねん!?

申し込みの時どつかで気付や!?

というか、あの会話の流れ完全にワイがサリーをラブホに誘ってるやん!?

偶然間違えて予約したラブホテルに、偶然再会した友達とチエツクインするってミラクル起きてるやん!?

……あかんあかん、何とか誤解を解かなくては…!

ここで逃げるのが一番簡単やねんけど、それだとサリーに恥をかかせてまうからダメやな……

よし!ここはワイの口八丁で「おまたせ、しました…/ /」…!?

ワイが悩んでいると、サリーがシャワールームから出てきた。

サリーはワイと同じようなバスローブ姿で、ワイの隣に座る。

……なんか近くね?めっちゃ肌と肌くっ付いてるんやけど…少し離れるか…

「スツツ…」      「ズスイツ!ピトツ♡」

「スツツ…」      「ズスイツ!ピトツ♡」

……なぜか距離を取るたびにサリーが距離詰めてくるんやけど!?

「…♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」すりすり♡

ああああああ!なんかサリーからの視線が熱い!!圧がすごい!!

「て、テレビーテレビ見よか!!」ピッ!

ワイはテレビをつけて、気を紛らわせようとする。

今の時間なら、お笑い番組、『ししよーときよしよー』がやってるはずや!それで気を紛らわせて――

『ああああん♡気持ちいいいいいい♡』

なんでAV映るねええええん!!!

普通にテレビつけただけやのにAV映ったんやけど!?

しかも、女優がゾウつていうミラクルまた起きたんやけど!?

「……タローさんのえっち……♡」

ああああああ!!!サリーが勘違いしとるう!?

あ、あかん!弁明しなくては!?

「サリー…これはちが「タローさん♡」むぐう!」

ワイが弁明する前に、サリーがワイの口を塞ぐ——サリーの口で

「んちゅ♡…ぶちよ♡…はむう♡…レロオ♡」

サリーの舌がワイの舌に絡まり、ワイの舌を犯していく。

激しすぎて舌同士で交尾しているかのようだ。

「…ッ♡……はあ!!……ひゃ、ひゃりー……」

ワイは何とかしてティープキスから逃れるが、あまりの快感で腰が砕けてしまい、ベッドに倒れ込んでしまう。

「ふふ…♡いざという時のために練習していたんですけど、まさかこんな風に役に立つなんて…♡」

サリーがうつとりとした表情のまま、バスローブを脱ぎ捨てる。

「ボヨヨヨ♡♡♡♡♡♡」

サリーがバスローブを脱いだ瞬間、サリーのおっぱいが暴れながら出てくる。

こ、これは……!?

今まで大きい方であったモニカやナイルは「ボイーン♡」であったのに対し、サリーのは「どたぶくん♡」という効果音が似合う。

今まで重巡洋艦で満足していた状況で、いきなり戦艦が出てきたような感覚だ!あと、ワイの推しは島風ちゃんや!

足も「むちい♡」と肉付きが良く、挟んだら気持ちよさそうである  
いっぱい食べるからか、お腹の贅肉が目立つが、そのだらしなさが  
逆にそそる。

そんなわがままボーディーを前にし、ワイのキンタマ精子工場が労働

基準法ガン無視の24時間フル稼働をはじめるのがわかった。

「タローさん♡わたし初めてなのでその…優しくしてくださいね♡♡♡」

そう言って笑うサリーは、いつものような明るい笑みではなく、どこか官能的であった。

これからこの小さな密室で、大きい女の子が激しく乱れる…♡

ワイ、デザイナーなゾウをベッドにする

身長だけでなく、足やお尻も大きいサリーの規格外の裸体を前に、ワイはただ見惚れることしかできなかった。

「シヤララ…♡タローさんってば、お目めがいやらしいですよ♡  
そんなに私のおっぱいが気になりますかぁ♡」たゆん♡

サリーはワイの視線に気が付き、ニヤニヤしながらおっぱいを揺らす。

「ばあるん♡」 “ばあるん♡”

まるで地震のように揺れる特大おっぱいは、見ているだけでワイのチンポが幸せになる。

ワイはまるで、その揺れに催眠術を掛けられたように少しずつ顔を寄せていく。

3cm…2cm…1cmと段々と距離が縮まっていき、そして

「むにゆう♡」

ワイの顔はサリーのおっぱいに埋まった。

顔いっぱい広がるおっぱいの柔らかい感触が、ワイの脳を蕩けさせ、IQを下げていく

ああ♡おっきいばいばいちゅき♡お嫁さんにしたい♡

「シヤララあん♡やっぱりタローさんは、おっぱい好きの甘えん坊さんですね♡ほくらあ、私のおっぱいにいっぱい甘えていいですよお♡」

サリーがおっぱいをワイの顔に押し付けてくる。

「むにゆ♡むにゆ♡」 “タプ♡タプ♡”

ああ…おっぱい…おっぱい…おっぱい…！



……はむっ！

ワイはサリーの右乳首に吸い付いた。

「ひゃん！もおくタローさんったらあ♡わたし妊娠してないからお乳なんて出ませんよお♡」

サリーがそう言うのも構わず、ワイはサリーの乳首を吸い続ける。

“ちゅぱ♡” “ちゅぱ♡” “ぺろ♡” “ぺろ♡”

確かに母乳は出なかったが、どこかミルクの匂いと甘い味がするよ  
うな気がして、こうしていれば、いつか本当にお乳が出るような期待  
さえ出てきた。

「んう♡……もお……♡しょうがないスケベさんですねえ♡そんな助べ  
えにはお仕置が必要ですね♡」さわっ♡

そう言つてサリーは、ワイのチンポを扱き始める。

「ひゅん♡……サリー…サリー！」

「ふふ…♡タローさんだつてわたしのおっぱいで遊んでいるんですか  
ら、わたしだつてタローさんのおちんちんで遊ぶ権利があるはずす  
よ♡さあおちんぽちゃん♡お姉ちゃんと一緒に、いっぱい気持ちい遊  
びましょうね♡」

“さす♡” “さす♡” “もみ♡” “もみ♡”

サリーがワイのチンポを優しく可愛がる。

ワイのおちんぽは、サリーのお手々が気に入ったのか、どんどん巨  
大化し、硬度を増していった。

ワイも負けじと、サリーの乳首を赤ん坊のおしやぶりのように思  
いつきり吸う。

ワイとサリーの今の状況は、所謂授乳手コキと言ったところか。

「あん♡タローさん、右ばかりえこひいきしないで下さい♡ほら、左の  
おっぱいがヤキモチを焼いて乳首を “ぶくう♡” と膨れさせてま  
すよ♡おっぱいは平等に愛してください♡」

サリーの言う通り、サリーの左のおっぱいは乳首を膨れさせてお  
り、 “プンプン！” と怒っているようであった。

そうだった。おっぱいは2つあるのだ。

両方とも愛してあげなければ…♡



…ああ、まだまだおっぱいで遊びたい…♡

「ぱい…♡ぱい…♡おっぱい…♡」

ワイはサリーの右胸を両掴み——

「ぶっすう!!」

乳首目掛けて、チンポを突き立てた。

「うゝうゝう!?♡そんな…♡おっぱいはセックスする場所じゃ…ああん♡激しすぎい♡」

「パン♡”　　”パン♡”　　”ツン♡”　　”ツン♡”」

ワイはサリーのおっぱいに対してピストン運動を始めた。

パイズリをしてもらった経験はあるが、これはパイズリというより、おっぱいとのお尻だ。

ワイのチンポの先っぽから、サリーに乳首が固く勃起している感覚が伝わってくる。

勃起乳首は力強くワイのチンポを押し返そうとしてくる。

「やん♡ちんちんと乳首が勃起喧嘩してますう♡ダメ、ダメなおおっぱいとおちんちは、もっと仲が良くて、愛し合うものなの♡♡♡」

サリーが激しく乱れながら言う。

サリーは喧嘩という表現を使っていたが、違う。

ワイの亀頭とサリーに乳首は、押し合い勝負をしているように見えて、お互いに気持ちのいい所を擦り合わせてキスをしているのだ。

これを愛し合うと表現せずに、何を愛と呼ぶのだろうか？

「サリー…♡出る…♡乳首に出すぞ!!」

「出してえ♡母乳がまだ出ない未熟な乳首に、お手本としてタローさんのザーメン出すこと見せてえ♡」

「どっぶう！」

ワイはサリーのおっぱいに思いっきりぶっつけた。

「いやああん♡おっぱいに中出しされちゃいましたあ…♡これじゃおっぱいが孕んじやいますう…♡」

サリーが精液塗れのおっぱいを見ながら、うっとりとしている。

白い精液を垂らす右乳首は、まるで母乳が出ているようだ。

ああ…これが本当に母乳だったらしいのに…♡

サリーのデカ乳から出てくるミルク…絶対おいしいに決まってる♡

…飲みたいなあ♡

でも、残念ながらサリーには赤ちゃんがいらないから母乳は出ない。

…クソツ!!なぜ神は女の子は赤ちゃんができないと母乳を出してくれない身体に作ったのだ!あんまりじゃないか!

その時、ワイの灰色の脳細胞に、電流が走る。

せや!赤ちゃんを仕込んで、母乳が出る身体にしたろ!

「サリーー!」ドントッ!

「きやあ!?た、タローさん…♡とつてもいやらしい顔してますよお♡」

ワイはサリーをベッドに押し倒し、おまんこにチンポをあてがう。

“ぐちよお…♡”

サリーのおまんこは、チンポとおっぱいの交尾を目の当たりにして、びちよびちよに濡れて最高に興奮しているようだ♡

チンポとおまんこはお互いに擦り合いながらコミュニケーションを取っているようで

“またせたな…おっぱいの次はお前を犯してやる♡”

“来てえ♡…ねばねばあつあつの精液ちよーだい♡”

という会話が今にも聞こえてきそうだ。

「タローさん♡わたし、初めてなんですよお♡そんな女の子を無理やり押し倒しておちんちん擦りつけるなんて、レイプじゃないですか♡わたしの好きな人は変態さんだったんですねえ♡幻滅です♡」

サリーは“イヤイヤ♡”と首を振るが、その表情は期待たつぷりと言っているようなものであり、ワイにレイプされることを望んでいるのがわかる。

「サリー…！サリー…！孕んでくれ！ワイに母乳を飲ませてくれえ！」

「はい♡元気な赤ちゃん産みます♡母乳もいっぱい出します♡だからわたしをあなたのものにしてくださいね♡」

“ずぼお！”

ワイはサリーの言葉に理性を失い、乱暴におまんこを貫いた。

「シヤラああああん♡これが、交尾なんですね…♡うふふ…♡初めては痛いつて聞いてましたけど、しよせん噂ですね♡だって、こんなに気持ちいいんですもん♡」

少し乱暴に入れすぎて心配になったが、サリーはあまり痛みを感じていないようであった。

…これで遠慮なく、動ける。

「ぬぷ♡」 「ぬぷ♡」 「びたん♡」 「びたん♡」

ワイはサリーに性欲をぶつける。

サリーは身体は大きいがおまんこはガバガバではなく、むしろキツキツでワイのチンポを咥え込む。

「シヤラ♡もおくわたし初めてって言ったじゃないですかあ♡それなのに、こんな…ん♡こんなに激しくして…ひいん♡わたしはおもちやじゃないんですよ♡」

サリーが抗議の声を上げるが、トロトロの表情で言っても説得力はなく、むしろ「もつとやって欲しい♡」と言っているようなものだ。

ワイは、サリーのキツキツまんこに腰を打ちつける速度を速める。

そしたら、あまりの気持ちよさに腰が砕けてしまい、サリーの身体に倒れ込んでしまう。

「むにゆうううう♡♡♡」

サリーの大きな身体に倒れ込むと、そこはまるで天国であった。

ワイの顔は、大きなおっぱいに挟まれてばふばふされている状態。

手には揉みこんでも揉み切れない程の爆乳…いや、これは超乳と言ってもよいのではないだろうか？その超乳がいつでも揉み放題。

サリーのムツチリとした肉付きの良い身体は、ワイの身体が若干沈むほどに柔らかく、ワイの全身を気持ちよくしてくれている。

一昔前に、人をダメにするソファアというものが流行ったが、これはそれ以上だ。

まさに、人を…否、「タローをダメにするゾウベッド（オナホ付き♡）」だ！

こんな気持ちのいいベッド、どんなにえらい王様や権力者でも持つ

ていない、ワイ専用のドスケベベッド♡

：これはもうワイのものや！どんなに金を積まれても、誰にも渡したくない!!

ワイは自分のものにマーキングするように、サリーベッドに腰を叩きつける。

「タローさ…あん♡そんなに焦らなくても、わたしはどこにも行きませんよ♡わたしの身体も心も、もうタローさんのものですから、いっぱい堪能してくださいねえ♡♡♡」

サリーの声が頭の上から聞こえる。

サリーのおっぱいがちょうど耳に来るから、少し聞こえ辛いと感じるが、これは夜に安眠するのにちょうどいい。毎晩この状態で眠りたくなりそうだ。

…アカン！出る…!!

「サリーー！出さぞー！すっかり孕んで濃厚ゾウミルクいっぱい出すんやでえ!!」

「はいい♡いっぱい愛のミルク出しますうう！♡タローさんも赤ちやんも飲みきれない程いっぱい出しますからあ！もつと突いてえ！ああん♡イツちゃ…ううううううううううううううううう♡♡♡」

「どつつつぽお…♡♡♡」

ワイはサリーを孕ませる気満々の濃厚ザーメンを出した。

尿道から、オタマジヤクシ見たいな精子たちが我先にとサリーの膣に押し寄せるのがわかる。

「シヤララあ…♡タローさあん♡…好きですう♡あの時は言えなくてごめんなさい♡でも、我慢できないんです♡わたしをそばにおいてください♡お嫁さんでも、肉オナホでも、性奴隷でも、なんでもいいので、お側に居させてください♡♡♡♡♡」

サリーは気持ち良くなりすぎたのか、IQが溶けて流れ出そうなの口トロの顔でワイに愛の告白をしてくる。

おかしなこと言うなあ？こいつはもうワイの肉ベッド兼嫁なのに

…

ワイはサリーの乳首を強めに吸う。

……ダメや！まだ母乳は出ない！精子が足りなかったか!?

こうなったら孕むまでパンパンして、何としてでもワイ専用ベッドにミルクサーバーを増設するんやあ!!

「もう一回や！今度は孕めよ!!」

「ああん♡イったばかりなのに♡」

大きな女の子は、まだまだ激しく乱れ続ける♡

Z z z ……

………はっ!?いつの間にか眠って居ったわ!!

うっ…頭痛が痛い……

ワイは何をしたんや？確か、サリーと一緒にドリア食って、酒飲んで………ラブホへ………!?

ああ!?そうやった！ワイは何故かサリーとラブホへチエツクインしたんやったあ!?

サリーとの濃密な時間を思い出し、血の気が引くワイ。

と、とにかく！起きてサリーと話を「たゆん♡」………あん？

なんや？ラブホのベッドってこんなに柔らかかったか？



それに、さつきつから顔の横に当たってるふわふわはなんや？  
加えて、ワイの視界がさつきから白いのはなんでや？

とどめに、ワイのチンポが気持ちええのはなんでや？

ワイが考えに耽っていると「スースー」という寝息が頭の上から聞こえて来た。

上を見ると、そこにはサリーの顔があった。

…あれ？サリーの顔があそこにあるってことは……!?

ワイは上体を少し上げて今の状況を確認する。

…予想通り、ワイはサリーに覆いかぶさるように眠っていたようだ。しかも、チンポはサリーのまんこに挿入されているので、やっている途中で寝落ちしたようだ。

……あゝあああああああああああ!!!

なんでいつもこうなるんや!?

ワイはただオナパを開きたかっただけやのにい!?今度はゾウとヤつてもうたあああ!

何がワイ専用の肉ベッドやねんんん!?完っ全にクズの発言やんけ!?

…クソっ!酒とラブホの雰囲気流されたとはいえ、こんな失態をしてしまうなんて…!

……サリーには悪いがワイの今後の為や!ここはとんずらこかせ  
て「タローさん?」またタイミングよくサリーが起きたあああ!!  
ただワイ運悪いねん!

「…シヤララ♡わたし達その…色々しちゃいましたね／／」  
サリーがはにかみながら言う。

その表情が可愛く見えてしまい、心臓がドキツとする。

すると、サリーは今度は真剣な表情で話を続けた。

「……わたし、決めました!ケモシコ島に戻ります!!」

「フアツ!?ダメやって!せっかくデザイナーになれたんやろ!」

「わたしが今務めている会社で、最近リモートワークが導入されたので、服のデザインが送れば出勤しなくても大丈夫になったので安心

してください！それに……デザイナーもタローさんも諦めたくないんです!!」

サリーがワイに告白まがいのことを言う。

スケベしてた時も言っていたが、マジなんか……

……しかし、ワイはケモナーではない。ひどいことを言うが、諦めてもらう為だ。

「……サリー、お前の気持ちはうれしいが……ワイはゾウの女の子嫌いなんや……諦めてくれ」

……ひどい嘘だが、これでいい。

サリーにはこの街でデザイナーを頑張ってもらいたいんや……ワイのことなんか諦めてな……

「そうなんですか……で?」

しかし、サリーはそんなこと気にも留める様子はなくあつけらかなとしている。

「で?って……ワイはゾウ嫌いって言ったんやぞ!」

「はい、聞きましたけど……わたしはそれ以上にタローさんのこと好きだから問題ないじゃですか♡」

「……は?」

「タローさん♡わたし言いましたよね、『本気になります』って♡タローさんの気持ち私が私に向いていないなら、向かせます♡どんな手を使っても堕とします♡どこまでも追いかけます♡だからたつぷり時間をかけて、安心してわたしにメロメロになってください♡」

言ってることはおかしいが、サリーは真剣な目で言っている。

……重いつて!サリーがワイに向ける感情激重やん!?

ワイが何言ってもそれ以上の愛ぶつけられるんだけど!?!レスバ最強かよ!?

「それに、タローさんの声が裏返ってるのでゾウ嫌いも嘘ですよね♡」

「お前もブルータスカよお!」

ワイの癖知られすぎなんやけど!?!ウイキペディアにでも書き込まれてるんか!?

「それにタローさん——」

わたしのおっぱい揉みながら言っても説得力ありませんよ♡」

!?

あ、ありのまま起こったことを話すで…!

ワイは、起きてから現在の会話まで、サリーのおっぱいを触り続けていた…!

いやマジで何してんのワイ!?

「シヤララ♡結局タローさんはおっぱい大好きなえっちゃんですね♡」

軽くポルナレフ状態になっているワイをサリーがからかう。

クソツ…!この状況では反論できない!

「そうだ!わたしが5つ数えるうちに♡おっぱいから手を離せたら、タローさんのことを諦めます♡でもお♡もし5秒以内に離せなかったらあ♡今日は一日中タローさんを独占しますね♡いきませよお、ごお♡♡よお♡♡♡♡♡」

何故か急にゲームが始まった。

しかし、これは簡単や!ワイが手を放すだけで全部解決や!

さっさと手を放して、オナニー旅行のやり直しや!

「さあ♡♡♡♡♡」

さあ、とつとと離すで…:あれ?

は、離れない…!?

何故に!?!接着剤かなんかか!?

「ににに♡♡♡♡♡」

いや、違う!

ワイの脳がそうさせてるんや!?!サリーのおっぱいを離さないように!?!

…:アカン!このままでは、ワイはサリーに全部持ってかれる!?!

何としてでも、理性で本能に勝つんや!!

「いゝゝゝゝゝゝゝゝち♡」

命を燃やせええええええええええええ!!

離すんやあああああああああ

!!!!!!

「ぜえええゝゝゝゝゝゝゝゝろ♡♡♡♡♡」

ワイの「2泊3日オナニー旅行」は「2泊3日サリーとドスケベラ  
ブホデートになった」

拝啓、義母様

ケモシコ島からタローが出て行って2日経ちました。

タローがいなくなつて、アタイは胸が締め付けられる気持ちでいっ  
ぱいです。

今日もタローが帰つてこないか24時間体制で空港を見張るつも  
りです。

もし、義母様の所になにか情報がありましたら、連絡ください。ど  
こにいても、アタイが迎えに行きます。

それでは、いつかお約束通り孫を見せに行きますので楽しみに待っ

ていてください。

敬具

P・S

前回のお手紙に書いてあった「24時間監禁逆レイプ」についてですが、あれは義父様相手にやったものですか？

もしそうなら、参考にしたいので詳しく教えてほしいです。

ワイ、たぬきをハメる

「出ない……もう出ないから……」

……はっ!?

あかんあかん!またトリップしてもうた!

ワイは2泊3日の旅行を終え、ケモシコ島に帰ってきていた。

サリーとの別れ際に手を「ギュツ!」と握られて、耳元で「タローさんが本気でいいって言ったんですよ?覚悟してくださいね?」とささやかれた時は、もう玉ヒユンどころか竿まで縮こんだわ:

そして、ワイは疲れた体を引きずってケモシコ島に帰って来たんやが、着いた途端に違和感が襲ってきた。

いつも礼儀正しいモーリーもロドリーもワイと目を合わせようとせず、何かを恐れているようにビクビクしていたのだ。

「…タローさん、御武運を」とロドリーに耳打ちされ、ワイは頭に「?」を浮かべながら空港を出ると

「……………おかえり、タロー」

はい、いましたよ。

目のハイライトが家出したのかどこにもないブーケが。

……………今思い出しても、あの顔は……………あああああああ!思い出すだけで恐ろしい!!

その後は、ブーケに連行されてワイ宅帰宅。

そして、何故かいるメンヘラ状態の4人を含めた事情聴取という名の拷問。爪やら牙やらで刺されて体中ボロボロやで…

全て洗いざらい吐いた後は、「3日いなかった分を取り戻す」という名目で自宅に監禁された。

例の5人もワイの家に泊まり込んで、1日中誰かしらとイチャラブさせられた。

もう3日目あたりからは、みんな服を着るのもおっくうになって下着姿か全裸がデフォになってたわ…

そんなこんなで、10日間の監禁生活が続き、先程やつと全員の機嫌が直り解放されたのであった。ワイもう出がらしやで…

…：大体、なんでワイが旅行に行っただけでこんな目にあわなきゃならんのだや！

アイツら別にワイの嫁って認めてないのに、ヤっただけで嫁面（づら）しやがってえ…!!

ワイは別にあいつらのことなんて、なんとも思っていないんだからね！

…：オエツ、キモイからやめよ。

…まじめな話、これから先サリーも引っ越してくることが確定しているんや。これではワイの人間ハーレム計画もますます進まなくなってしまう。

だからこそ、ワイは今日、とある計画を発動させる。

それは、ケモシコ島引っ越し計画だ！

この日のために、ちまちま荷物もまとめて、新しい住居の契約も済ませたんや！

ワイは今日、この島を出て、新しい生活を始める！

というわけで、次回からは「朗報」ケモナー嫌悪民のワイ、人間ハーレムを築くが始まるでえ!!!お楽しみに!!

ビバ！引っ越し!!

「ダメに決まってるんだなも」

【朗報】ケモノー嫌悪のワイ、人間ハーレムを築く

く完く

「なんでや!? 阪神関係な…違った、ワイの引越しがダメってことないやろ!」

ワイは戸籍を移すために、役場へ来ていた。

引越しの旨を目の前のタヌキ——たぬきちに話した瞬間、無情にもワイの申し出は却下された。

たぬきちは、この島への移住プランを企画した責任者や。

こいつは1日で家を建てたり、広い人脈で島に色々な物を斡旋してきたりと有能なんやが、金の亡者気質があり、ワイも引越しそうそろうローン地獄にされた苦い思い出がある。

現在は、島の役場で家や橋なんかの相談をして働いているのだが、今はそんなことはどうでもいい。

重要なのは、ワイの引越しが拒否されていることや!

「タローさんはこの島の代表だなも。引越しされちや困るのね」

「なあにが代表や! そんな後任立てればええやろ!」

「後任ねえ…ほとんどの住民からの信頼が厚くて、大金を一日で稼いで、島の御用聞きして、この前まで無人島だった島をたった数か月で☆5ランクの島にして、島のインフラも整備して、趣味の一環で遊園地とかの島の外観整えちゃう高スペックな人の後任…簡単に見つかるわけないだなも」

「?…そんなんゴロゴロ居るやろ?」

「そんなバケモノゴロゴロいてたまるかあ!!」

たぬきちが興奮して叫ぶ。興奮しすぎて語尾が飛んじやつてるやん。

しっかし、ワイがバケモノ?…違うワイは悪魔だあ…

「はあ…はあ…とにかく、今タローさん島から出てつてもらったら困るんだなも…というか、タローさんが出て行ったら、おまけで女性住民がみんないなくなるから島が崩壊するんだなも。だから、ぼくの独断で戸籍は移させはしないんだなも…!」

ん?なんで女住民がいなくなるんや…?



いや、今はそんなことは置いて……

「ふざけんなや！横暴や！弁護士を呼んでクレメンス！ワイは成歩堂君がええなあ!!」

「うちの島には弁護士どころか裁判所もないだなも。というか島の位置的にどこの国の法が適応されるかも不明なんだなも」

怖ッ!?ワイらそんな無法地帯で生活してんの!?

真月||ベクターだったレベルの衝撃の真実うくやったわ!!

「とにかくくーワイはこの島から出て「ただいま戻りましたあく♪あれ?タローさん来てたんですね!」……おつ、しずえちゃん。お疲れさまやで〜」

ワイがたぬきちを訴えようと画策していると、役場のドアが開き、黄色いイヌの獣人——しずえちゃんが入ってくる。

しずえちゃんは、この役場で働いている1人で、1日も欠かさず島の様子をアナウンスしてくれている娘だ。

この娘の声で、島の住民は皆癒されていると言っても過言ではないやろ。

今日は姿が見えないと思ったら、どつかへ出かけていたんか…

「タローさん♪本日はいかがなさいましたか〜?」

「あ、ああ今日は「タローさん、この島から出て行きたいそうだなも」ちよ!?!」

流星にしずえちゃんには誤魔化そうかと考えていたのに、このスカポインタヌキはあ……!

「えっ……タローさん、この島から出て行っちゃうんですかあ……?わたし、出て行ってほしくないですう……」ギョッ

しずえちゃんがワイの腕をつかみながら、目をウルウルさせている。

うう……しずえちゃんの辛そうな顔を見るのは罪悪感がハンパないンゴ……

「……だ、大丈夫やで〜出て行くわけないやん♪」

「!!そ、そうですね!タローさんがわたしを置いて行くわけないですもんね!もお〜驚かさないでくださいよお〜」ニヨニヨ♪

しずえちゃんが、心底安心したような笑みを浮かべる。

しずえちゃんは「あっ！せっかくなので、お茶入れてきますね〜♪」  
と言って役場の奥に引っ込んでしまう。

「いや〜タローさんの引っ越しがなくなつて、僕も嬉しいんだなも♪」  
どの口が言つとるんじゃこのたぬきはあ!?

「あつ！今度サリーさんが引っ越してくるから、周りの整備もよろしくだなも代表〜♪」

「……くそっ！覚えてろよ金の亡者あ！あと整備は任せとけー！」  
ダツ！

ワイは悔しさのあまり、役場を飛び出した。

「ふう……やれやれ、何とか危機を脱しただなも……」

「はあく〜い！お茶が入りましたよお〜♪……あれ、タローさんは？」

「今帰つただなも」

「そ、そんなあく〜：せっかく久しぶりにおしゃべりできると思ったのに……」 シュン……

「(どんだけ粉掛けてるんだなもあの男は……)……まあ、タローさんならそのうち来るんだなも。その時におしゃべりするんだなも」

「そ、そうですね!! ああ……楽しみだなあ……♡」

(マジで爆発しろだなも)

「だああー……腹立つわあー！」

ワイはたぬきちに腹を立てながら、サリーの家建設予定地の整備をしていた。

あのタヌキ親父めえ……！なんかで復讐してやらにや気が済まん！

しかし、どうするか……緑のペンキをぶっかけて蕎麦でも持たせるか？ワイはどん兵衛派だから没。あいつを見る度に「そいやっさあ！」と言って平成狸合戦でも始めるか？意味不明やからダメやな。

……ダメや、はらわたが煮えくり返りそうや……！こういう時は、コーヒー飲み行って、フータに虫の鑑定依頼して反応を楽しんで、エイブルシスターズで……ん？エイブルシスターズ？

……せや！いいこと思いついたで！

ワイはマジキチスマイルを浮かべてエイブルシスターズへ走った。

「いらっしやい！手作りフアツションの店、エイブルシスターズへ……なんやタローさんか……お姉ちゃくん、塩持ってきて〜」

「き、きぬちゃん……いくらタローさんでも、ちゃんと接客せなあかんよ……」

「別にええやんかお姉ちゃん。どうせまた冷やかしやろ」

ワイはケモシコ島唯一の服屋——エイブルシスターズへと入店して早々、青いハリネズミの獣人（ソニックやないで！）に罵声を浴びせられる。

こいつはきぬよ。ここエイブルシスターズの接客担当だ。

そして、ワイのことを庇ってくれたのが、きぬよの姉のあさみ。服の仕立てをしている

2人は姉妹でエイブルシスターズを経営しているのだ。

ああ〜思い出すなあ……サリーのデザインの勉強を手伝う一環で、ワイもエイブルシスターズと一緒にバイトを「パツ！パツ！」……しよっぱ〜！

「ちよ!? 本当に塩撒くなや!? ワイ客やで！お客様は神様やろ!?!」

「あら？タローさん、今日はなんか買いなさんの?」

「おう！冷やかしやd「パツ！パツ！」……だから塩を撒くな！ワイもほら、ここでバイトしてた仲間みたいなもんやん!? もっと暖かく迎え入れてクレメンスー!」

「……タローさん、『これがワイの考えたデザインやで〜』て言って

エッチな服のデザイン描いて、サリーさんやおねーちゃんの反応楽しんでただけやん」

きぬよが呆れたように言う。

…その通り過ぎてぐうの音も出んわ……

「き、きぬちゃん！そんなに酷いこと言わんの！……ごめんなさいタローさん、本当はきぬちゃんも、タローさんが来てくれて嬉しいんですよ……」

あさみがきぬよを叱りつけ、ワイをフオローする。

ああ、やっぱりあさみちゃんは天使やなく

……おっと！目的を忘れるとこやったわ!!

「あさみちやくん！ワイ、君に聞きたいことあるんやけど〜♪」

「ふふふ…♪タローさん変な喋り方やわく、何でしょう〜♪」

「たぬきちのこと好きってほんとなん？」

「た、タローさん!!なななななに言ってるんでs「うん、ベタ惚れやで」きぬちゃん!?!」

ワイの問いかけに、代わりに応えたのはきぬよだった。

そうか、あの噂は本当だったのか…

「ええ…マジなん……あのたぬきのどこがええの？」

「たぬきちさんとおねーちゃんは幼馴染みやからなく小さい頃から



「きぬちゃんのおんぽんたー！ー！ー！！！！」

叫びながら店を飛び出して行ってしまった。

取り残されるワイら2人。どうしてこうなったんや…

「…ワイが言うのもなんやけど…言っつて良かったん？」

「かまへんよ、実際迷惑しとるし…それで、おねーちゃんとかたぬきちさんの話がどうしたのん？」

うーんこの…まあ、当初の予定とは違うが、きぬよに協力してもらうか。

「おう、実はな――

「へえ、おもしろいやん♪一枚噛ませてもらうわ」

時刻は22時を回り、辺りは真っ暗だ。

しかし、ぼくはタローさんと一緒に暗い夜道を走っていた。

「たぬきち！はよ走れ！！」

「わかってるんだなも！全力全開だなも！！」

サリーさんの家(仮)を建て、帰路に就いた後、タローさんから「サリーの家から煙出てるで!？」という話を聞き、ぼくたちはサリーさんの家に向かっていた。

「…見えてきたんだなも！…!?!本当に煙出てるだなも!?!」

サリーさんの家に着くと、火は見えないが、確かに家の中が煙塗れになっている様子が見に入った。

そんな…まだ誰も住んでいないはずなのに!?

「ワイは外側見てくるから、たぬきちは中に誰かいなか見てきてくれ!!」

「わかつたんだなもー!」

ぼくは家の扉を開け、中に入る。

：火にしては、変な臭いだなも? 臭くはないけど…どこことなくポーツとする匂いだなも…

すると、家の中に人影が見えた。

逃げ遅れた人かと思ひ、ぼくは駈け寄る

「大丈夫かだな m 「たぬちゃん…♡」…あさみさん!？」

そこには、ぼくの幼馴染みのあさみちや…あさみさんが居たんだなも。

どうして彼女が…? それに、様子がおかしいんだなも。顔も赤いし、目が「とろろん♡」としてるし、息も荒いし、それに色っぽい…僕は何を考えてるんだなも!?

とにかく! あさみさんをここから避難させなくては!

「あさみさん! 僕に「たぬちゃん!」 だなも!？」

ぼくは何故かあさみさんに押し倒されて、そのままキスされる。

「はむう…♡じゆる…♡…♡…♡…♡…♡…♡…♡…♡…♡…♡…♡…♡…♡…♡…♡」

あさみさんに舌を入れられ、ぼくの舌と交わる。

お互いにキスを終えると、ぼく達の口の間に唾液の橋ができる。

「はあ…はあ…あ、あさみさん…!」

「たぬちやくん♡好き♡大好き♡あたしをお嫁さんにして〜な〜♡」

「だも!？」

あさみさんからの大胆告白に、驚いて言葉を失う。

「あ、あさみちゃん…」

「たぬちやくん♡家族になろ♡一緒に世界一大きいお店と、世界一幸せな家庭つくろ♡ああん♡もう、良いよね? 我慢しないでいいよね♡」

あさみちゃんが、段々ぼくに覆いかぶさる。

やばいんだなも! 脱出しなくては!?

「たぬきち」

!?

ドアの方を見ると、タローさんが立っているのがわかる。

「タローさん！助け…!？」

その時、ぼくは見た。

「ニチャアア…」と気持ち悪い顔をしながら、中指を立てながら扉を閉めるタローさんを

ぼくはやつと気が付いた

ハメられた——と

「だもおおおおおおおおおおおおお  
!!!」

「たぬちやくくくん♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

その後のしずえ談

「たぬきちさんですか？昨日は帰ってこなかったですねえ…朝方に帰ってきましたけど、なんか干乾びてました！」

「m9（ハハ）プギヤーマシウマw w w w w w w w w w」

ワイはサリーの家の前で大爆笑していた。

「もおろタローやりすぎ！サリーの家煙だらけじゃん！」

「いいのよブーケ…それにしても、あさみさんが幸せそうでほんとに良かった♪」



ワイの両脇には、ブーケとサリーが居た。

あさみさんの思いを聞いたワイは、たぬきちへの復讐作戦を開始した。

その内容は、たぬきちを人生の墓場へ叩き込むことである!!

その為に、サリーの家(仮)を借りて、そこにあさみをきぬよに誘導してもらう。

家の中には、つねきち印のアロマキャンドルやらオイルやらコーヒーやらを混ぜ込んだワイ特製の薬を撒いたから、今頃2人とも「ギンギン♡」の「ぐちゅぐちゅ♡」やで。

扉を開けられないように、ブーケとサリーにも応援を頼んだが、あんま意味なかったな。

…まあ、しずえちゃんやまめつぶコンビにも聞いたら、たぬきちもあさみのこと「いっぱいいちゆき♡」らしいから、これが復讐になるかはわからんが…

いやーそれにしても気分がいい!今日は枕を高くして眠ろ」ところでタローさん♡」

…なんやろ、サリーに話しかけられた瞬間、いやくな予感がしたんやけど…

「わたしのお家、あさみさんたちに貸してるので、今日宿無しなんです。だから、責任取ってタローさんのお家に泊めてください♡」

サリーが「チロツ♡」と舌を出して言う

「フアツ!?そんなブーケの家に「あっ、今アタイの家バル〇ン炊いてるから入れないんだ♡」夜に焚くなや!!」

アカン、なんか雲行きが怪しくなってきた…!?

逃げようとしたワイを、サリーは後ろから抱き上げる。

「離せ!離してくれメンス!」

「さあブーケ♡タローさんの家でお泊り会しましょう♡」

「りよーかいチエキイ!…今夜は寝かさないよ♡」

サリーに運ばれながら、ワイは思った。

ワイも、ハメられたんやなって

今からハメるのはお前だろって？やかましいわ!!!

その後、ブーケ、サリーと朝までラブラブ3Pエッチした。

拝啓、母上様

最近、引越そうと計画していましたが、結局頓挫してしまいました。

しかし、まだこの島でやりたいこともあったので、これはこれで良かったのかと思います。

だから、もう少しこの島で頑張ってみようと思います。

それでは、またお便りします

敬具

P・S

近々、役場の職員と仕立て屋さんが結婚するそうです。

めでたい話ですけど、その話の後ブーケの圧がすごいです。やっぱり

り引っ越したいです。

ワイ、おっとり系オオカミのモデルになる

「よいしょ……ふう……さすがにこの量は大変やな」

ワイは今、島の花畑で、花達に水をやっている。

元々、メルヘンチックな雰囲気のところを作って、頭の中がお花畑のお嬢様を誘い込むために作った花畑やが、いざちゃんとした花畑を作ってみると愛着が湧いてしまい、今ではガーデニングがメインみたいなどころもある。

ああ、花はええなく心が洗われるで

最近のワイ、心が休まることになかったからな

ここ最近起こったことを、ワイは思い出す。

たぬきちをハメたあの夜、ワイはブーケとサリーに拉致され、朝まで絞られた。

あの2人、親友同士だからか抜群のコンビネーションで、ワイの射精を促していった。

サリーのおっぱいをブーケと一緒に吸ったり、ブーケに挿入している最中にサリーとディープキスをしたり、2人がレズっているときにチンポを割り込ませたりと、休みなくワイらは交わった。

ワイが正気に戻った時は、すでに朝日が昇っており、ワイの両脇にはそれぞれブーケとサリーが幸せそうな顔で眠っているのを見た時には、ワイはまたケモノと過ちを犯してしまったと軽く鬱になった。

2人と朝食を取った後(なぜか口移しで食べさせられた)、ワイはたぬきちの様子を見にサリー宅(仮)へと向かった。

家の中に入ると、たぬきちは乾燥途中の干し柿のように干乾びており、対してあさみはお肌がツヤツヤで、幸せそうにたぬきちに膝枕をしていた。

「たぬちやくん♡」と甘ったるい声を出しながら、たぬきちをなでなでしているあさみは、とても可愛くて天使のように見えたが、その瞳には濁った色が見えたのは気のせいではないだろう。

ワイはあの目を知っている。ブーケやモニカがヤンヤンな空気になるときの目だ。

そうか…あの恐怖をたぬきちも味わうことになるのか……なんと  
いうか……

ざまあ W W W W W W W

フアー…… W W W W W W W これでお前も人生の墓場行きやな W  
W W W

「おいつすー！冷えてるかあ？」と2人に挨拶をしたら「あつ！タロー  
さん、おはようございますう〜」とご機嫌に挨拶してくるあさみ。

そのあさみの膝元で、この世のすべてを呪い殺しそうなくらい表情  
のたぬきちを見て、ワイは少しちびつた。さすがに後で謝った。

「…まあ、仕返しはするけど……ありがとだなも」

謝った時に、何故かお礼を言われるワイ。

なんやねん、結局あさみと一緒になれたの嬉しいんやないかい。こ  
りや復讐失敗やな……でも、嬉しかったんなら仕返しすんなや！

結局、サリー宅（仮）については、たぬきちの「こんなの、お客様  
に売れるはずないんだなも！」という一言で、たぬきちとあさみの同  
居する家になったらしい。

たぬきちは役場に24時間いるからなく働き方改革が謳われてい  
る今のご時世にはグレーな案件だったし、まあ良かったんちゃう？

その代わりに、ワイが役所仕事を手伝う羽目になったのは納得でき  
んが…（しずえちゃんがすごく嬉しそうやったけど、たぬきちと24  
時間はきつかったんかな？）

あさみの方は、エイブルシスターズには仕事をしに行くだけで、終  
業後はたぬきちとの家に帰っていく生活になった。

「今までとは違って、通勤するようになって辛いわ〜♪」とあさみは愚

痴っていたが、顔のニヤつきが隠しきれないんだよなあ…

きぬよは「夜がうるさくないってすばらしいわ〜♪」とご機嫌で言っていたが、少し寂しそうな様子もあり、姉の思いが実ったことのうちれしき、姉が自分から離れて行く寂しきの板挟みで複雑な様だ。

そんなきぬよを心配してか、エイブルシスターズの次女であることが来る頻度が多くなった。

この3姉妹も、複雑な関係らしいが、このもあさみのことを祝福してたし、まあ大丈夫やろ。

さて、あいつらの問題は解決したが、まだワイの問題が残っている。というか今回、一番の被害者がワイなんだが。

たぬきちとあさみは、サリーの家になる予定だった場所に住んでいる。つまり、サリーの家がないのだ。

今はサリーの強い希望から、何故かワイの家に居候している状態なのだ。

『わたしは居候の身ですから、タローさんのために何でもしますね！炊事、洗濯に、お風呂の時に身体を洗って……その……夜伽の方も……』

なんてとち狂った事を言い出す始末だ。

それからというものは、おはようからおやすみまでサリーにお世話される毎日。至れり尽くせりすぎて、このままではワイはサリーなしでは生きられない身体にされてしまう。

たぬきちに早く家を作ってやれと催促しているのだが、『ああ…腰が痛くて、しばらく動けないんだなも……』などと申ししており、しばらく家もできそうにない。

腰が痛い理由？隣で顔を赤らめているあさみちゃんがすべてを物語ってるわ…

そんなわけで、ワイはサリーとの同居という現実から逃れるため、今日はこうしてガーデンングをしているのだ。

……でも、流石に花畑を大きくしすぎて1人大変だったろうな。助っ人を呼んでおいてよかったわ。

「タローさーん！こっちは終わりましたよお〜！」

その時、ワイを呼ぶ声が聞こえた。

後ろを振り返ると、淡い水色と白の体毛で、頭に花のような模様のあるオオカミがワイの向かって手を「ブンブン！」振っているのが見えた。

こいつが花畑の真ん中で、可愛らしく手を振ってる姿は絵になるなあ

「おう、お疲れさまやで、リリイ」

ワイが声を掛けると水色のオオカミ——リリイは「フワツ」とした笑みを浮かべた。

リリイは、ケモシコ島のオオカミ住民その3だ。

オオカミと聞くと、モニカやビアンカといった肉食系の女の子を思い浮かべるだろうが、リリイは他のオオカミとは違う。

お淑やかで優しく、上品な笑顔が似合う女の子だ。

まったく…あの2人もリリイを見習って欲しいものだ！リリイはまさに淑女！性欲の塊である他のオオカミとは違って、ワイを逆レイプすることもないから安心やな!!

「いや、手伝ってくれてありがとなりリイ。これでこの花畑も活き活きするわ」

「フワワ♪わたしもタローさんのお役に立てて嬉しいです♪」

リリイが「ニコツ」と笑いかける。

…やっぱ可愛いな〜ワイじゃなかったら勘違いして惚れる男が続出してまうわ。

「よっしゃー！今日は手伝ってもらったし、ワイもリリイのこと、何でも手伝ったるでえ〜」

「ええ！そんな。わたしそんなつもりで手伝ったわけじゃないから、悪いですよお…」

リリイが両手を横に振って、ワイの提案を断る。

…そうだよ！必要なのはこういう姿勢だよ！！

他のオオカミ女に同じこと言ってみろ。どこぞのビデオみたい  
に「んっ？今何でもするって言ったよね？」と言って1日中ベタベタさ  
れるに決まっとするで！

…しかし、こうも遠慮されると、なおさらこの娘に何かしてやりた  
くなっただな……………

「遠慮しなくてもええで！ワイはリリイやから何かしてやりたいんや  
！」

「ツ！／＼／……………そ、それなら……………わたし、是非ともやってみたいこと  
があるんです……………タローさん…手伝ってもらえますか…？／＼／」  
「おう！任せとけ！！」

ワイはリリイの申し出に2つ返事で答える。

いつもは皆から一歩引いたところにいて、自分を抑え気味な彼女か  
らの願いだ。いつも世話になってるし、叶えてやりたい。

まあ、リリイのことやから、控えめで可愛い頼み事やる！！

とか考えていた数分前のワイを殴り転がしたい…！

そう考えながら、ワイは拳を握りしめた。

ワイは花畑から離れ、リリイの家をお邪魔している。

リリイの部屋はハート柄の壁紙やピアノなど、女の子の部屋という  
感じで、良い匂いもする。

そんな女の子の秘密が詰まった部屋で、ワイは海パン一丁で佇んで  
いた。

……………ちやうねん。好きでこうしてるわけじゃないねん…



リリーのお願い、それは『絵のモデルになって欲しい』というものであった。

リリーは最近、絵を描くことに凝っているらしく、部屋にも本格的な画材道具がそろっていた。

これが普通の絵のモデルなら快く引き受けたんやが、リリーが描きたいのは、『男の裸』らしいのだ。

なんでも、この前博物館で見た『ダビデ像』にひどく感銘を受けたらしく、自分でも書いてみたいと思ったそうだ。

『わたし…男の人の知り合い少ないから…こんなこと頼めるのはタローさんだけなんです…ダメ、ですか…』

顔を真っ赤にしながら頼んでくるリリー。

元はといえば、ワイが言い出したことが始まりなんや。そんなリリーの頼みを断って恥をかかせるわけにもいかず、海パン装備でならと条件を付けてモデルを引き受けた。

『フワワツ!? タローさんの体、すごいです…本当に男の人って感じで…わたし、ドキドキしちゃいますう…』

本当に男慣れしていないのか、ワイの海パン姿に手で顔を覆うリリー。しかし、指の間から見ているのが丸分かりである。

最初は恥ずかしさから、あまり筆が進まないリリーであったが、段々慣れてきたのか、筆の動きがスムーズになってきているのがわかる。慣れたようであったよかった。

…時折、股間を食い入るような視線が襲ってくるのは気のせいだよな…

…それにしても、ポーズ取るだけって言うのも飽きるなあ…

ワイは今、ダブルバイセツプスのポーズを取っているが、この状態が数十分続き、流石に退屈に感じてきた。

はあ…何か暇つぶしになりそうなものは…壁のシミでも数えるk…!?

ワイが暇つぶしを探して視線を動かしていると、ある物が目に留まった。

“ムツチくくン♡”

リリーの胸の谷間である！

リリーは椅子に座っている状態だから、ワイはリリーの谷間を見下ろす形となっている。

リリーは絵に集中しており、ワイの視線に気が付いていないようだ。

うおおお…！リリーって、意外とデカイんだな……！？

モニカやビアンカと違って、大人しいタイプの彼女だが、そのおっぱいは2人に負けず劣らずの大きさだ…！！

ああ…触ったら気持ちいいんだろうなあ……♡

“ムクムク……♡”

！？

嘘だろ！？ワイのチンポがムズムズし始めたで！？

胸の谷間見ただけでおつきなるなんて、ワイは中坊か！？

“ムクムクムツクン………ピ——ン♡♡♡♡♡”

ついに完全に勃起して、交尾したがるワイのチンポ。

海パンの上からでも、勃っているのがはつきりとわかる。

まずいで……今は目の前にリリイがいる！こんななどの見られるわけにはいかない!!

……いや？リリイは今、絵に夢中になつとるはずやから、案外アハ体験的な感じで意外とバレないのでは………?

「ふう〜!?!?……タローさん、時間もだいぶ経ちましたし、そろそろ休憩………!!?!?!?!?!」

リリイがワイに声を掛けようとしたのだが、その声は途中で中断された。

リリイの目は、完全にワイの股間を捕えていた。

………やっぱ誤魔化せんかったああああああ!!!

や、やばい……!何とか弁明しなくては………!!

「も、もおくタローさん♡モデルが動いちやダメじゃないですか〜  
///  
///  
///  
」

リリイは、ワイの元まで来る。

「リリ」さつきとポーズが全然違うじゃないですか〜♡ほら、こことか♡「さわっ♡」

うおっ!?リリイがワイのチンポを掴んできた!?

いつもは大人しいリリイが、こんなことをするなんて………!?

「いつの間ここに棒なんて隠したんですか〜♡ダメですよお♡ほら、早く取り出してください♡」

リリイがワイの海パンを脱がしに掛かる。

ちよ!?!やめ…

「ボロ——ン!」

抵抗むなしく、ワイのチンポはリリイの前に轢きずり出された。

うう…絵のモデル中に勃起するなんて……リリイに軽蔑されてまうう………

「!?……これが、タローさんの…♡とってもエッチな匂いですう……♡」

ワイはリリイに軽蔑されると思っていたが、その考えとは裏腹に、リリイはうっとりワイのイチモツを見つめている。

普段は、あんなに淑女的なリリイが、ワイのチンポを下品な目で見

つめている。

そのギャップで、ワイのチンポはますますその凶暴性を増していく。

「フ—————♡フ—————♡」

リリーの息が荒くなる。

このパターンは見たことがある……モニカやビアンカといったオカミ系の獣人が、興奮して理性を失う前触れの呼吸や！

「フ♡フ♡フ♡……チンポオー————♡♡♡」がぼお♡

そんな下品な声を上げながら、リリーがワイのチンポを口に咥えた。

「がぼお♡」 「がぼお♡」 「ぐぼ♡」 「ぐぼ♡」

部屋の中に、いやらしい水音が鳴り響く。

リリーの舌はねちつくくワイのペニスを舐め、程よい刺激を加えていく。

「はみゅ♡……んちゅ♡……この匂い好き♡とつても強い雄の匂い♡……」

リリーはワイのチンポの匂いを堪能しながら、チンポを舐め続ける。

普段は見ることでどころか、想像すらできないリリーのスケベな顔に、ワイは背徳的な興奮を覚えていた。

……やばっ、出っる……！

「ぶしゅううううう!!!ぶるるるるるるうううう!!!」

ワイはリリーの口に精液を出した。

「むぐっ!!……これが……精液………すごい臭い……癖になりそう……♡」

リリーは、口元に付いた精液を掬い取り、それを宝物を見るかのように見つめる。

ああ……あのリリーが、ワイの精液で汚されている……ワイの色に染まっっていく………！

そう考えるだけで、ワイのチンポははち切れんばかりに巨大化して

いく。

「あつ♡……タローさん♡モデルをやって貰って、しばらく時間が経ってますし…少し、休憩しませんか……♡」

リリイはそう言って、部屋の端へ視線を移す。

その視線を辿ると、そこには可愛いデザインのベッドがあった。

もう一度、リリイの顔を見ると、そこには期待に胸を膨らませた淫乱そうな顔があった。

まったく、しょうがないなあ…♡

ワイはリリイの肩に手を乗せ、一緒にベッドへと向かった。

しかし、2人は休憩できそうもない程興奮していた♡

ワイ、おっとり系オオカミとベッドでイチャやる

「ん……ちゅば……レロ……ぴちゅ」

「あ……♡……じゅる♡……んう♡……あん♡」

ワイらはベッドに腰を掛けて見つめ合い、キスをしていた。

リリイは男とのキスの経験がないのか、最初はぎこちなかったのでワイがリードしていたが、続けるにつれ舌の絡め方や口の中の気持ちのいい所の攻め方が上手くなっていった。

普段はあんなにお淑やかなのに、エッチなことを覚えるのが早い。まるでスポンジのようにどんどん吸収していく。

まったく……とんだスケベオオカミやで。

「リリイ……脱がすで……」

「……はい♡……あの、よろしく……お願いします……♡」

ワイはリリイの「はながらのニット」に手をかけ、一気に脱がす。すると、ワイの目の前に花柄レースの水色の下着が現れた。

水色の下着は、リリイの体毛と同じ色であり、リリイによく似合っている。

先程服の上からも確認したが、リリイの乳房は大きくたわわに実っている。足も程よくムチイ♡”としており、どちらも触ったら気持ちよさそうである。

「……／／／／タローさん……そんなに見られたら、恥ずかしいですう……♡」

リリイが“いやん♡”と言うように手で胸を隠す。

ああ！あんな素晴らしいものを隠しておくなんてもったいない！！

「リリイ……いじわるせんで、ワイにもっとリリイの綺麗な身体をみせてくれ……」

「……えっ♡」

リリイは手をどけると、そのまま後ろのブラホックを外す。

“たゆゆ……ん♡♡”

ブラを外した瞬間、リリイのおっぱいがワイを誘惑する。

水色と白の毛で覆われたおっぱいは、まるでお菓子の様な色合いで

美味しそうです。

「…リリイ！」

「きゃ♡」

ワイはその誘惑に耐えることができず、リリイのおっぱいに飛びつく。

“もみゅ♡” “もみゅ♡” “ふわ♡” “ふわ♡”

ワイはリリイのおっぱいの触り心地に驚く。

やわらかい。やわらかすぎて、指がどこまでも沈んでいきそうだ。

同じオオカミのモニカはハリがあるロケツトぱいぱい。ビアンカは弾力と柔らかさのバランスが取れたぱいぱい。そしてリリイは柔らかさの全振りしたプリンぱいぱい。

同じオオカミでも、ここまでおっぱいに個性があるんやな……

「んっ♡…タローさん♡おっぱい、気持ちいいですう♡やん…♡もっとお♡もっともみもみしてくださあい♡」

リリイが甘えるような声色で言う。

そう言われては、ワイも期待に応えなければ！

ワイはリリイの望み通りおっぱいを揉みしだく。

普通に揉むだけでなく、左右バラバラに揉んだり、乳輪を重点的に攻めたり、ペニスを抜くように上下に揉んだりしてリリイのおっぱいで遊ぶ。

「ひゃん！………タローさん上手ですう♡…んんっ！♡………タローさ、んう♡…わたし、おっぱいだけで…♡いつ…♡………♡♡♡」

“ぶっしゅううううくく！”

リリイの口から息が漏れたと思ったら、何か水の音が聞こえた。

リリイの下半身を見ると、水色のパンツが色濃くなっているのが見えた。

どうやらリリイはワイにおっぱいを揉まれただけでイッてしまった様だ。

リリイの愛液が、パンツをやらしく濡らしている。濡れ具合を見るに、大洪水の様やな♡

……ちよつと、いじわるしてみるか…

「おっぱい揉まれただけでイクなんて……リリイはエッチな娘やったんやなく少し幻滅したで〜」

「!?ち、違うんです!!わたし、そんなにエッチじゃありません!」

「ん〜?違うんか〜……じゃあ、ここでやめておくか…」

「…えっ」

服を着ようとするワイを驚いた表情で見るリリイ。

ワイがパンツ履こうとすると、リリイの手がそれを引っ張って止める。

「どうしたんや〜?もうやめるなら、風邪ひくから服着たんやけど…」

「……な…です…!」

「ん〜?」

「わたしはタローさんが大好きなエッチな娘です!／／／／／／だから、もつとえっちなことしたいです!／／／／／／」

リリイが顔を真っ赤にして叫ぶ。

あの大人しいリリイが、想像もできないようなスケベなことを言っている。

その言葉が聞きたかった(ブラック・ジャック)↑今から始まるのはエッチナ・フアック

「リリイ!」

「いゃん♡」

ワイはリリイをベッドに押し倒す。

お互いに見つめ合うワイら。

リリイの目には、これから起こる事の期待と高揚感が見て取れた。

「リリイ……入れるで」

「…はい♡おちんちんください♡わたしを、あなたのメスにしてえ…」



ワイは微笑みながら、リリイに覆いかぶさる。ピンポーン  
「リリイ……入るわよ……」

!?

ワイがリリイと一つになろうとしたとき、リリイの家の呼び鈴が鳴り響き、誰かの声が聞こえた。

この声は……モニカ!?

ま、まずいで!?この状況を見られたら、ワイはヤンヤンモニカに食われる!?二重の意味で!!

リリイも、突然のことに動揺しているのか「えっ、えっ」と小声で呟くだけで思考が停止している様子だ。

「がちゃ」

あかん!扉が開く……!隠れなきゃ!!

「おいつすー!この間借りた本返しに来たよ……って、なんで昼間から布団かぶって寝てるの?」

「あ、アハハ……少し風邪気味で……本は机に置いてください

／／／

「マジい!?……大丈夫なん?お薬持ってこようか……?」

モニカとリリイは普通に会話を始める。

ワイは咄嗟にリリイに布団を被せ、その中に隠れたがバレていない様やな……

ワイは今、布団の中でリリイと密着している状態や。

リリイの柔らかさやと体毛のふわふわ感を全身で感じる事ができて、興奮のボルテージが高まる。

それに加えて――

“むわあ……♡”

密着したことで、ケモノ特有の強い匂いがワイの鼻腔をくすぐつた。

ケモノの臭い。“ツンツ”と鼻に来る刺激的な匂いで、本来なら嫌悪する臭いだが、不思議とワイはその匂いを好きになっていた。

もつと嗅ぎたい……………!

“ぐんぐん♡”

(!?!?/!/ちよとタローさん/!/!/!/そんなところ嗅がないでください……!)

「んんん?リリイ、息荒くない?そんなに具合悪いの?」

「い、いえ!お気になさらず……/!/」

ふう…癖になるそうな匂いやな♡

前世で「猫吸い」というものが流行っていた時期があったが、これは中毒性あるで。

ワイはもつと強い匂いを求めて、リリイの脇に顔をうずめた。

「ツ!~~~~~♡タローさ…♡くすぐったいですう♡んっ♡…

ひゃん♡」

「…リリイ顔赤いよお?熱でもあるんじゃない?」

うっ…クラつと来るようなにおいがたまらん…!

あっ…汗流れて来てる……ペロツ♡

「くっツツくくくく♡♡♡♡♡」ビクビク♡

「ちよ!?どうしたの!?布団上下に動いてるけど!?ポンポン痛い!?」

…しよっぱ。

しかし、不思議と不快感はなく、もつと舐めたいと思えてしまう。

それに、舐める度にリリーの身体が「ビクンツ♡」と跳ねて、おっぱいやら足の肉が揺れながらワイに体当たりしてくるのが気持ちいい。

もつとお…♡♡ペロペロ…♡♡

「ひゅんんんくくくくくくくく♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「リリーいいいいいい!!アタイお薬買ってくるから!ポンポン抑えて!」ダツ!

「ボタン!」と扉が閉まる音が聞こえる。

どうやらモニカは薬を買いに出って行ったようだ。

これでもう安全やな…

「もう!タローさん!!もう少してモニカにバレる所だったじゃないですかあ!」

布団から這い出て来たワイにリリーは怒った様子で言う。

「すまんすまんwでも、リリーの身体がエッチなのが悪いんやで」

「ツ!?／／もう!知りません!!」プイッ!

リリーは頬を膨らませてそっぱを向いてしまう。

「リリー」

「……………どうしても、許してほしかったら……」  
そう言うと、リリイはワイの方へ向き直り

“くばあ♡♡♡”

わたしを、あなたのものにしてください♡♡♡♡♡」  
おまんこを両手で広げ、ワイを誘ってきた。

“ビキビキキイ……!”

「この雌犬があー！舐めくさりおってえー！ぶち犯したるっ!!」ドンッ  
「ひゃー……ん♡」

ワイはリリイを右を向かせるようにして寝かせ、片足をワイの肩へ  
乗っけると

“ぐぼおん!!”

そのまま、ワイの怒髪天チンポを乱暴にぶち込んだ！  
「ひゃあああああん♡入ってきた♡タローさんのおちんぼさん、  
入ってきましたあ♡♡♡」

リリイが気持ちよさそうな声を上げる。

リリイのおまんこは、先程の前戯ですっかり“とろとろ♡”で、す

でに交尾の準備は万端だったようだ。

このスケベまんこめえ……！

「おらー！これが欲しかったんやろ！大人しいフリして、とんだスケベ女やなあ！返せ！ワイの純情を返せ!!」

「あああん♡激しすぎですう♡…すみませえ…ん♡実はわたし、とってもえっちなんですう♡ずっとタローさんと、こうしたいと思ってた変態さんなんですう♡」

ワイは乱れる淫乱オオカミに腰を叩きつける。

リリイの中は暖かく、全てを包み込んでくれるような抱擁感を感じ、とても気持ちがいい。

「ほおくん、そりゃあかなあ……そないな変態、野に放したら危険やで！ワイが飼つたるわあ!!」

「やあん!?♡……う、嬉しいです…♡タローさん……いえ、ご主人様あ♡わたしは、ご主人様で毎日変態オナニーしてるダメダメオオカミなんですう♡もう、ご主人様のペットとして生きていくしかないんですう♡あん、きもちー♡」

「ぎゅちゅ♡」 「ぎゅちゅ♡」 「ぬち♡」 「ぬち♡」

リリイのまんこの締め付けがきつくなる。

まるでワイのチンポを抱きしめて、離さないようにしているようだ。

くそっ……！こんな変態、やっぱワイが責任もって飼うしかないわ！「よしーお前は今からワイのオナペットや！ワイが揉みたいときはすぐにおっぱい丸出しにして、やりたいときはどこでもパンツを下ろすんやでえ!!」

「は、はいい♡んひいいい…♡わたし、ご主人様のペットになったんですねえ…！……嬉しい…♡ご主人様、いっぱい可愛がって、愛してくださいね♡リリイは、あなただけに尽くす、あなただけの愛玩ペットですう♡ひゃああん♡」

生意気なこと言うペットやなあ……！

これは、ワイの精液を流し込んで、上下関係をわからせるしかないわ！

「おらー！出さずりリイ！しっかり受け止めて、ワイのものって周りに示すんやでえ！」

「ああん♡来て♡あなたのチンポ汁でいっぱいマーキングしてえ♡きてきてきてきて………キツツツツ………タ

ああああああああああ♡♡♡♡♡♡」

「ぶびよおおおおおおおおおおおお!!!」

ワイはリイに、誰のものかわからせ<sup>!</sup>るために射精した。

ワイが射精すると、リイのヒダ達も休みなく動き、まるでワイの精液を根こそぎ持つて行こうとしているかのようだ。

「はあ…はあ…流石に、疲れた…っ!?」

ワイは先ほど布団をかぶっていたのもあつてか、のぼせてしまっていた。

その為、ボーっとした頭でバランスを崩してしまい、ベッドボードに頭を打ちつけてしまった。

痛ってえ!

………はっ!?ワイはいったい何を…?

たしかワイは…リイの絵のモデルになって、リイにおっぱいで勃ってしもうて、それで………ツ!!!

みぎやああああああああああ!!!

ワイはまたやってもうたんかあ!?

!!  
最近のワイおかしいやろ!?なんで自分からケモノを犯しとんねん

そいで正気に戻った時に死ぬほど後悔ってもう天井芸やん!?ワイはてんどんまんよりかまめしどんの方が好きやねんけど!?かつどんまん?あんな奴知らん!!

「フ——♡ご主人様あ♡もっと可愛がってくださいよお♡♡

いっぱい愛し合つて、元気な赤ちゃん一緒に作りましょうよお♡♡」  
リイはワイにもたれ掛かり、甘えてくる。

何がペットや!?何が赤ちゃんや!?ワイは獣人のペットなんで持ち  
とうない!家庭を持つ覚悟もまだない!!

もう嫌や!もう知らん!クズと呼ばれようが関係あらへん!逃げ  
「ダーリン?」

……………なんやろ、なんだかすつごおくく嫌な予  
感がするねんけど…

額から流れる変な汗もそのままに、ワイは「ギギギツ…」と首をド  
アの方へゆつくりと向ける。

「へえ、そういうことね」

家の入り口に、薬をぐちやぐちやに握りしめたモニカが立っている  
のが見えた。

……………そうだったあああああ!戻ってくる雰囲気やった  
ああああああ!!!

「ダーリン、アタイがリリイのこと心配してる時に、自分はまたお嫁さ  
ん増やしてたの?……………ずいぶんいい御身分ねえ?」

モニカが牙をチラつかせながらワイににじり寄る。  
その目には光はなく、濁った目をしていて、今にも吸い込まれそう  
だ。

や、やばい!食われる!(性的に)逃げなくては!!

「……………主人様?なんでモニカがあなたのことをダーリンと呼んで

いるのですか？それと、またお嫁さん増やしたってどういうことですか？」ガシツ

逃げようとしたワイを、リリイが後ろからがっちり掴む。

その瞳は黒くて、まるで松崎し●るだ。

お ま え も か ！ ！

「ダーリン、おしおきが必要みたいね……」

「ご主人様あ……説明してください」

あ……あ……あ……（ガタガタガタ……キリバ……）

ワイは恐怖のあまり、口から空気を漏らしてガタガタ震えることしかできなかった。

「ダーリン」「ご主人様」

う、うわああああああああああああああああああああ

!!!!!!!!!!!!

あつ♡

その後、2匹のオオカミをわからせた

拜啓、母上様



今日は友人の絵のモデルになりました。

芸術は、この間贋作をつかまされたばかりなので少し嫌な思いがありますが、こんな私でもモデルにしたいなんて、友人はもの好きだなと思います。

絵に限らず、一から何かを作るのはいいものですので、母上様も何か作ってみてはいかがですか？例えば、小説などいかがでしょうか？それではまた。最近は花粉が辛いのでお気を付けください。

敬具

P・S

友人の絵を見せて貰ったら、そこには立派なフランクフルトが描かれています。

友人はいつたい何を見たのでしょうか？

ワイ、お嬢様なヒツジの婚約者になる

「ドウワアwwセンナナヒヤクウwww」

おっと！テンションが上がりすぎて鉄オタみだいになつとったわ。

ワイは今、諸事情でケモシコ島を離れて、電車……いや、新幹線に乗っていた。

ワイは別に電車は好きではないが、ケモシコ島から離れられるならなんでもええわ！

リリイと致した後のことを説明しよう。

結局あの後、リリイとモニカの2人を相手にハツスルしてしまった。

性欲つよつよオオカミ2人の相手は困難を極め、転生特典で絶倫なはずのワイも干乾びると思ってしまうほど搾り取られた。

最終的に3人で気を失うまで盛り合つて、その日は朝までリリイの家で過ごしてしまった。

目を覚ましたら、モニカもリリイもすつきりした様子で良かった……いや良くないわ！

またワイはケモノとセックスしてもうたんやぞー！しかもまた経験人数増えとるやないかい！！

あの5人ならまだしも、いつの間にかサリーもリリイもワイのハーレム（ワイは認めとらんでえ！）に加わつとるし、どないなつとんねん！

しかも！あの後さらにやばいことなつたんよお！聞いてくれ！

あれからしばらく経つて、やっとサリーの家ができたから『サリーお帰りなさいパーティ』をやることになつたんや。何故かワイの家で……まあ、サリーのことは祝う予定だったからええんやけど……

参加者はワイ、ブーケ、モニカ、リリアン、ナイル、ビアンカ、サリー、リリイのなんか嫌な予感がするメンバーや。どこぞのモグラみだいに参加者0人じゃないで！これが人徳の差や！！

問題はその後や！ワイらがパーティを楽しんでいると、郵便が届いたのだ。

あて名はたぬきちで、『前々から欲しがっていた物をあげるんだな  
も』というメッセージカード付やった。

ワイが欲しがってたもの……!!?まさか、伝説のファミコンゲーム  
「スーパーコトブキ」か!?

前々から欲しいと言っていたが、まさか手に入るとは……!!?あいつ  
も役に立つやん!!

そんな感じでテンションMAXになったワイは、早速みんなの前で  
家具を出す。

しかし、出てきた家具はスーパーコトブキではなく、「ラブリーベッ  
ド」であった。

…ファツ!?なんでラブリーベッドやねん!?しかもここに居るメン  
バー全員で乗っても余裕がある位デカいし、ご丁寧に「Y e s / N o  
枕」付かよお!?

…ツ!?なんか寒気が……

恐る恐る、後ろを振り返ると……

「こんなものいきなり出すなんて……ほんとにえっちなんだからあ  
♡」

振り返らなきやよかつた……みんなが目を「♡」にして発情してい  
る姿なんて見とうなかつたわ!

そこからはもうお約束のごとく「サリーお帰りなさいパーティー」が  
「ドスケベ発情♡ハーレムエッチ♡」になり、全員で快樂の海の溺れ  
た。

ああああ!!?……おっぱいが……おまんこが襲い掛かってくるう!!?!

……すまん、あの時の光景が軽くトラウマになってしもうとるん  
や……

今思い出しやけど、たぬきちの仕返しってそういうことか！あの野郎、今度あさみにたぬきちが浮気してるって吹き込んでやる！

そんな事件の後、とある事情で現在ケモシコ島を離れ、新幹線に乗っている。

その事情とは――

「タローさん、コーヒー零れそうになってますわよ？」

「うおっ!?あぶねっ……………サンガツやでマリー」

「うふふ♪どういたしまして」

そう言つてワイの隣に座る黄金色のフカフカの毛で覆われたヒツジ――マリーは天使のように微笑んだ。

マリーはヒツジの獣人で、ケモシコ島の住民の一人や。

そのふわふわの体毛は触り心地最高で、よく他の住民たちに触られている。ワイが触ろうとすると、顔を赤くして拒否されるからその良さはわからんけど……………なんでワイだけ触れへんのや……………

ちなみに、マリーは喋り方や家の雰囲気からいいとこのお嬢様なのではないかという噂もある。ワイも何度か遊びに行っただけど、確かにあの家具ほとんど高級品やで……………さらっとグレースブランド混ぜつとるし……………

そういえば、引越して最初の頃は米のとき方知らなかったり、虫が苦手でワイに泣きついてきたりと箱入り娘感出てたしなくなぜか毎回ワイが助けるはめになってたな

…話が少し逸れたが、今回ケモシコ島から離れる要因となった事情というのが、このマリーなのだ。

ある日、ワイの家に来て、涼しい顔で「アタシの婚約者になってください♪」と言ってきたんや。

「ファッ!?何言うとんねん!?!」とワイは驚き、マリーに説明を求めた。話を聞くと、最近実家からお見合いの話がひっきりなしに来るた

め、いい加減うんざりしたので一緒に婚約者として挨拶して欲しいとの事だ。

……ははあくん。これあれやろ、婚約者のフリをして両親に紹介してお見合いの話を止めるって言うかんだんやろ？なろう小説を愛読していたワイに死角はないで！

まあ、マリリーにはご実家から送られてくる食料とかお裾分けして貰ってるし、そのくらいやってやるかと了承したら「パアアア！」と顔が明るくなり「それじゃあ早速行きましょう！善は急げですよ！」と半ば拉致られる形でドードーエアラインに乗せられた。

飛行機に乗った後は陸路で行くとのこと、こうして新幹線に乗せられたというわけだ。

……ワイ新幹線ってあんま乗ったことないねんけど……個室ってあるんやね。

マリリーと乗り込んだ新幹線を通されたのは、なんと個室。聞いたところ、ファーストクラスと言うことらしい。

……やっぱマリリーいいとこのお嬢様やろ!?!新幹線のファーストクラスって初めて聞いたで!?

このコーヒーも、ブルーマウンテンっていう高級品やって………ワイは青山さんのペンネームか青眼の白龍のことだと思つとつたわ………

車内販売の駅弁も、絶対高いやつやろ……めっちゃ美味しいねんけど………

「……おっ？マリリー、口にご飯粒ついとるで」ヒョイパカー

「ツ／／た、タローさん！流石に恥ずかしいわよ!／／／／／／」

「ええやん、ワイとマリリーの仲やんか（仲のいい友達）」

「!?!……そ、そうね／／アタシとタローさんの仲だもんね／／（婚約者）」

なんや？マリリーが顔真っ赤にして、俯いたままだまってしまった。

……まあ、気にせんでええやろ！弁当（。D。）ウマー

新幹線から降りて、タクシーで数分走ったところで、マリーの実家に着いた。

マリーの家を見たワイは、度肝を抜かれた。

そこには、西洋風お屋敷が建っていたのだ。庭には現代アートみたいな植木や、お茶を飲む用の椅子やテーブルが並べられている。

マリーはその屋敷のもんから堂々と入り、執事っぽい人から「お帰りなさいませ、マリー様」なんて言われとる。

……お、おう、薄々感じていたとはいえ、こうして目の前にする  
とビビるもんやな。

マリーの家に通された後、マリーのご両親に挨拶をした。

マリーのお母さんは美人で驚いたなくワイはケモナーではないが、思わず見惚れてしまったわ。お父さんの方はまじめそうでええ人そうやけど、なんかやつれてる感じしたなあ……社畜なんかな？

挨拶が済んだ後は、ご両親と一緒に食事をしながら質問攻めにあつたわ：「娘のどこが好きなんですか？」「お二人の慣れ始めは？」など色々聞かれて疲れてしもうたわ……料理を味わう暇もなかった……

しかし、我ながら適当に答えた部分も多かつたけど、マリーもマリーのお母さんも終始ニコニコ顔やったなあ……お父さんの方が何かを察したような複雑な表情やったけど、なんやったんやろ？

食事が終わり、「今日は泊っていきなさい」と言われたため、来客用の部屋に通されたんやが、これがもう高級ホテル顔負けの部屋で腰を抜かしてしまつたわ。これは一日の疲れが一気に取れそうやな!!

部屋で休もうとしたんやが、急にう○こしたくなつて離れのトイレに行つたんやが、トイレもまあ裝飾がすごい事……デイ○ニー並みに凝つてたなあ……

そしたらトイレの帰りに、マリーのお父さんから「一杯付き合ってくれないか？」と言われ、ワイは今、マリーのお父さんと一緒にワインを飲んでいるところや。流石に悪酔いしたらマリーに悪いから、ワ

イはちびちび飲んでるフリやけどな……

お父さんがグラスを一気飲みした後、ワイに話しかけてきた。

「タロー君、君は娘の婚約者じゃないんだろ？」

「ツ!?!いい、いえ!?!……そげなことは………」

「誤魔化さなくていい!?!私の時と同じだからな」

「まずい!?!偽物の結婚相手だつてバレてる!?!」

……やけど、同じってなんのことや?!

戸惑うワイを気にせず、お父さんは話を続ける。

「私も若い頃、妻にお見合いで困っているから助けて欲しいと言われてね、君と同じように妻の実家に御挨拶しに行ったんだよ。あの頃はまだ若かったなあ……あの後、妻に逆レイプされたのが慣れ始めだったなあ………」

お父さんが懐かしそうに昔の話を……ん?………フアツ!?!

「フアツ!?!逆レイプう!?!」

「うん、この家の女は、代々気に入った男をどんな手段を使つても手に入れる風習があつてね。こうして理由をつけて家に招いて、そのまま既成事実を作るのが恒例なんだ」

「お前精神状態おかしいよお!?!」

「なんやその悪魔の儀式みたいなの!?!邪悪すぎてゼラ様が召喚されてまうわ!?!」

「……時にタロー君、君は本当に婚約者のフリをして欲しいと言われたのかい?！」

「あたりまえやろ!?!ワイはちゃんと婚約者……あれ?！」

ここでワイは思い出した。

確かマリーは「婚約者になってください」とは言ったが「婚約者のフリをして欲しい」とは言っていない。

つまり、ワイはマジで婚約者として連れてこられた……!?!

お父さんが2杯目のワインを飲み干して、一息つく。

「フーツ……あの子の座右の銘、『血は争えぬ』だったか……まさにその通りだよ。手口が妻と全く同じだ」

「ふざけんな!?!そんなの認められるか!?!」

「ふふっ、すぐに慣れるさ……ただ、夜は毎晩のように求められるから体力が必要だな……：恥ずかしい話、私たちも3人の子宝に恵まれてもなお週5で……」

「言わんでいい！こんな頭のおかしいところ居られるか！ワイは帰らせてもらうで！」

ワイはマリーのお父さんの話を遮り、席を立つ。

自分を奮い立たせるため怒ったように大声を出したが、内心ではマリーへの恐怖でチビリそうになっていた。

「……いいだろう。逃れられるなら、そうしてみるといい。先輩として忠告しておこう、『ヒツジの毛には気をつけろ』……それだけだ」

ワイはその言葉に返事することなく部屋を出た。

「やばいやばいやばいやばい……！！」

ワイはマリーの実家の廊下を小走りしていた。

さっきのマリーのパツパの話……ガチならやばいで！

なんでマリーがワイなんかを婚約者に迎えようとしてるかはわからんけど、ここに居たらワイの人生が詰むのは確実や！（すでに詰みます）

とにかく、早く脱出しなければ……！

ワイは貸し出された部屋に入り、荷物をまとめる。くそっ！よく見たらベッドがダブルやんけ！用意周到かよ!?

……よし！まとめたで！ここまま駅まで「タローさあん♡」ッ!?

突如後ろから聞こえて来た甘ったるい声に、ワイの背筋が凍る。

恐る恐る振り返ると――



「せっかくだから、一緒に寝ましょ♡」

黒のスケスケベビードール姿のマリーが立っていた。

マリーの黄金色の体毛が、黒のベビードールをより一層卑猥に引き立てている。

うお……マリーって結構巨乳やな……♡って違あああああああう!!

「ま、ままままマママリー!どどどどどないしたん!?!」

「うふふ♡そんなに慌ててどうしたの?アタシの下着姿に興奮しちゃったの?……意外とおませさんね♡」

そう言いながらマリーは、部屋のドアを閉め、そのままワイに近づいてくる。

あ、あかん!退路を断られた!!

「どうしたのって……アナタはワタシのフィアンセなんだから♡一緒に部屋にいることなんて当たり前でしょ♡」

「ふい、フィアンセえ!?!……す、すまん!ワイ婚約者のフリをするだけだとワイ思っただけなんや!だから「関係ないわ」!?!」

ワイの言葉を遮り、マリーは「ズズイ!」とワイの前に出る。その勢いに、自然と体を少し引いてしまう。

「その気がなかったとか、勘違いだったなんて関係ない。アタシが、タローさんをフィアンセに決めた。それだけのことよ♡その他の事情や過程なんて関係ないの♡」

…あかん、この女話通じひん!?

マリーってこんなやばい奴だったんか!?!普段のお嬢様キャラからのギャップやばすぎやろ!?

だが、このままではワイは媚入りするハメになってまう!?

……背に腹は代えられん!マリーを突き飛ばしてドアまで突っ切

るで!!

ワイはそう決意し、マリーを突き飛ばそうとはり手をかます。ワイは地元でハリテヤマって呼ばれてたんや!ワイのはり手は効くでえ!でも怪我しないように加減するでえ!!

“ポフウ!”

しかし、ワイのはり手はマリーを突き飛ばすことなく、マリーの毛に腕ごと埋もれていった。

……あかん!早く引き抜かなければ…!?

ワイは腕を引き抜こうとするが、その手を止める。

これは…!?

「はへえ〜♡気持ちええ〜♡」

マリーの毛はフカフカで暖かく、触っているだけで気持ちがいい。

ああ〜ぼくここに住むう〜♡

…はっ?!いい、いかにいかに!気をしっかり持たなあかん!

気を抜いたら、ワイはマリーの毛に取り込まれる!?

「うふふ♡ほおら♡タローさんがずう〜つと触りたがってたアタシの毛はどう?気持ちいいでしょ♡アタシ一番の自慢ですよ♡」

マリーはこちらを見透かしたようにねちっこい笑みを浮かべる。

くそっ…!抜け出してや…:う、動けん!?

毛が絡まって、ワイの腕をガッチリホールドしとる!?

これは…:逃げられん!?

「あらあ♡逃げないの?それなら——

恋人同士の初夜、始めましょ♡」

ワイは絡まった腕ごと、マリーにベッドへと引きずり込まれた。

眠れない時はヒツジを数えろって？そのビンビンなおちんぽで本  
当に眠れるの？♡

ワイ、お嬢様なヒツジをモフる

「マリーー！やめっ 〴んちゅ♡〵…むぐう!？」

ベッドまで誘導されてしまったワイはマリーにやめるよう説得を試みる。

しかし、ワイの口はマリーの口に塞がれてしまい、その言葉を最後まで言うことはできなかった。

「んちゅ♡…ちゅる♡…これが、キスですのね…♡とつても胸がキュンキュンして、気持ちいい♡…もつとお♡…ちゅ♡」

マリーは夢中でワイの唇を貪る。

初めてのキスらしく、舌の絡め方はあまり上手くはないが、未知の快楽に必死に食らいつこうと激しく動いているため、ワイも口の中を隅々まで犯されているようで気持ちがいい。

「…ちゅ♡…ぺちや♡…んんん!!♡…ぶはあ!…はあ♡…はあ♡…これが、殿方とのキスですのね…♡とつてもはしたなくて、満たされますわあ…♡」

マリーは初めての激しいキスに、うっとり余韻を楽しんでいる。

…マリーが余韻に浸っている今がチャンスや！なんとかマリーの毛から腕を…!？」

マリーの毛から手を引っこ抜こうとしていると、ワイはあることが付いた。

〴びびー〴ー〴ん♡〵〵

ワイのチンポが、先程のキスですつかり勃起してしまったのだ!

それだけならまだいい。最悪なのは……

もこお♡

チンポの先つちよが、マリーの体毛に侵入していたのだ！

道理で亀頭があつたかいなと思つたらこれか!!

ズボンの上からでも十分暖かさともこもこ感が伝わってくる。こ  
んなの、生で入れてしまつたら……

「…あらあら♡タローさんのおちんちんさんつたら♡…ズボンな  
んかの狭い世界に閉じこもってないで、広い世界において下さいな  
♡」

ワイの勃起に気が付いたマリーが、ワイのズボンを脱がせようとベ  
ルトを緩める。

ああ！利き手が体毛に埋まっていて抵抗できない!!

ワイのズボンがベルトを緩められ、重力に従いパンツと一緒に下に  
落ちる。

「こんにちはあゝ♡」

それと同時に、ワイのチンポはマリーに挨拶をするように「ぶるん  
♡」と震えながら目の前に現れる。

「まあ♡これが噂の節操なしおチンポですね♡…うふふ♡この凶  
器で何人の女の子を墮としてきたのやら♡」

マリーがワイのチンポを愛おしそうに見つめてくる。

……ん？今なんか違和感が……？

「えっ…？…今なんて…？」

「うふ♡知ってますわよお♡…タローさんがこの凶暴ちんちんを使つ  
て、島中の女の子を手籠めにしてることなんて♡」

マリーが特大の爆弾を落としてきた。

手籠めってなんやねん!! 9割型ワイが襲われてただけやんけ!!

えっ……残り1割? ……うん、まあ……今はどうでもええやろ

!!

「それにブーケさん達から聞きましたわよお♡…ケモシコ島をタローさんのハーレムにする計画のこと♡………ふふふ♡とつてもステキじゃないですかあ♡」

なんやその地獄みたいな計画!? ワイ知らんのやけど!?

……ん? ステキってなんやねん? こういう時は「アタシだけを愛して!」など独占欲とか見せる場面とちやうんか? 実家にまで挨拶させたんやし、マリーもクソ重感情だと思ったんやが……

そんなワイの考えを見透かすように、マリーは言葉を続ける。

「…アタシ、ケモシコ島が大好きなんです♡今まで、お嬢様暮らしだったアタシに色々なことを教えてくれたタローさんやケモシコ島の皆を愛してるんです♡だから——

ケモシコ島のみんなでタローさんの子どもを孕んで、みんなで幸せになりましょう♡♡♡」

マリーが狂気じみた、そして淫靡な笑みを浮かべて言った。

……別次元で重い娘やったああああああ!!!

「うふふ♡アタシの実家の様子を見ただでしょう? アタシ自身のポケットマネーもすごいんですのよ♡アタシの財力でタローさんのハーレムを強固なものにしますわあ♡♡」

それ強固にしてるとちやう!! 外堀埋めとるだけや!?

まさかマリー、今回実家に来させたのは自分の力を見せつけるため…？

ハーレムは金がかかるもの。それを実現できるとワイに分からせるためだとしたら…!?

……ま、まずいで……このままマリーとも関係を持ってしまったら、ますますあの最悪な島から逃げられなくなる！

ワイはマリーの体毛から脱出しようと体全体を揺らす。

離れろおおおお!!!

「すぽん!!」

そんな音と共に、ワイの腕はマリーから解放された。

よし！これでまだワイにも勝機が……？

な、なんや…？腕は抜けたが、何だか違和感があるな……？

具体的に言えば、股間が暖かいもので包まれているような……ワイ、下半身真っ裸のはずやのに……

違和感の正体を確かめるべく、ワイは股間に視線を向ける。

「すつぶし♡」

そこには、ワイのペニスがマリーのフカフカの体毛に埋まっている光景があった。

……状況悪化しとるやんけ!!!?

「あらあら♡すいぶんとアブノーマルなプレイをするのね♡アタシの

体毛、どうかしら♡」

“ずりゆ♡” “ずりゆ♡” “しより♡” “しより♡”

そう言つてマリーは自らの体を動かし始めた。

すると、マリーの毛に絡まったチンポも同時に動かされる。

うおお……こ、これは……！

「うっ……くっ……！」

「ふっ♡お気に召したようね♡ほおら♡シコ♡シコ♡」

マリーが体を動かし続ける。

ワイのチンポはマリーの言う通り、気持ちよくなっていた。

世の中は広く、髪の毛コキという行為もある位だ。

しかし、そんな髪の毛コキとは比べ物にならない毛の量。ヒツジで

しかできない体毛コキ。

チンポが全て包まれていたため暖かくて、満たされる。

体毛一本一本がワイのチンポを奪い合つて、ご奉仕してくれている。

その光景は、チンポと無数の体毛によるハーレムエッチの様だ。

「ヒツジの女の子は生涯の伴侶と決めた相手にしか、このエッチはしないんですよ♡ふわふわ体毛に包まれてるおちんちんさくん、天国に来た気分はどうですかあ♡」

その言葉に反応するように、ワイのチンポは “ピクピク……♡” と動く。

天国か……天国は雲の上にあるというようなことをのび太が映画で言つてたな。

確かに、マリーの体毛はふわふわしていて、まるで雲で出来たオナホの様だ。

つまり、ワイは今天国とセックスしているのか♡

天国が、こんなに気持ちいいなんて……のび太もエッチやなあ♡

……何を考えとるんやワイは！

「あん♡ちんちんのピクピク強くなってきましたよお♡おせーしさん出したんですかお♡……いいですよ♡遠慮なくアタシのお毛毛達にぶっかけて♡タローさんの臭い、しみこませてえ♡」



「ぶっしゅうう!!!ぴゅっ♡ぴゆるるう♡」

ワイのチンポはマリーの体毛たちの奉仕に耐えることが出来ず、そのまま射精してしまった。

「いやあん♡……これがタローさんの精液……♡うふ♡臭いが強すぎて、アタシの体毛に染み込みそう……すぐにタローさんの雌つてバレちやいそうですわ♡」

マリーが精液のかかった体毛を見ながらつぶやく。

精液のついた体毛はしっとりとしており、精液のせいでぬるぬるしているためワイのチンポはするりと抜けた。

これでワイの逃走を邪魔するものはいなくなった。

このまま走れば、ドアを突き破って逃げる事ができるだろう……

しかし……

「あら♡体毛はもういいのお?♡なら——

今度はおまんこで、天国へ行きましょう♡♡♡」

マリイが尻をこっちに向けて、すっかりびしょびしょになってしまっているまんこを開いてきた。

こんなの、逃げられるわけがない!!

「マリイ!!」ガシッ!

「あん♡」

ワイはマリイの腰を乱暴に掴み――

「ずぶん!!」

チンポをおまんこにしゅうううううううっ!!

超エキサイティング!!

「やあああああん♡これが、えっちなね♡タローさんのおちんちんが、アタシのおまんこにぴったりはまってるう…♡」

マリイは痛がる様子はなく、逆にもっとチンポを求めめるかのようにヒダが蠢いている。

くそっ…!このドスケベヒツジめ…!!

ワイはマリイのヒダ達の期待に応えるように、腰を振り始めた。

「メエエエエ♡おちんちんが、ずんずんってえ♡アタシの膣を犯してるのおお♡ひゃん♡」

セックスの気持ち良さに、マリイが大声を上げる。

なんや…ハーレムが何度とか言うてる割には、ずいぶんと余裕がないやんけ♡

「あん♡こんなの、堕ちちやう♡みんなタローさんの性奴隷になって当然よ♡だって、うん♡こんな気持ちのいいのを味わったら、堕ちるしかないですわああああ♡♡♡」

マリイの声がさらに乱れる。

一方のワイも、未知の快感に戸惑いを感じていた。

今までもバックは経験していたが、マリイのバックは一味違っていた。

尻に腰を叩きつけると、尻の周りの体毛に当たって、今までの肉同



「きやあああん♡…ふう♡…：タローさんのせーし、いっぱい来たあ♡…ふふっ♡不思議ですわよねえ♡だってこの暖かい液体が、赤ちゃんになるんですもの♡」

マリーがワイの精液を見ながら、生命の神秘を感じている。

確かに、この中の目に見えないくらい小さいおたまじやくしみみたいなのが、ワイらみたいに大きくなるというのは、不思議やなあ♡

…それに、赤ちゃんを作るのは気持ちのいいことっていうのも、よく考えたら不思議よなあ…

ワイは哲学的なことを考えながらマリーのまんこからペニスを引き抜く。

ペニスには、精液と愛液が混じり合ってすっかりベトベトに汚れてしまっていた。

「…あら♡タローさんのちんちん、汚れてしまっているわね♡アタシが掃除してあげるわ♡」

ワイの汚れたペニスを見ながら、マリーは「ニコッ♪」と笑って「ぱくっ♡」

ワイのチンポを口に咥えた。

「ん♡じゆる♡…：がぼお♡…どう？アタシのお掃除フェラは？♡…お気に召したかしらあ♡」

マリーがワイのチンポを咥えながら聞いてくる。

うおお…♡マリーの口の中はトロトロで、射精したばかりのチンポが固くなっていくのがわかる。

…もつと気持ち良くなりたい!!

「ガシッ！」

「むがつ!お♡おん♡ぐちゅ♡む♡ぢゅ♡ごおん♡」

ワイはマリーの角を握ると、無理やり上下に動かす。

あつ♡やつば♡マリーの口まんこ気持ちいい♡

「んぼお♡むぐう♡タ♡ローさ♡…むう♡♡♡」

マリーは無理やり動かされて少し苦しそうだが、頬を赤くしてるし、目が「♡♡」になっており、興奮している様子がうかがえる。

…やば、出…

「ぶびゆるるるう！」

ワイはマリーの口の中にドロッドロの精液を出した。

「むぐう!?……………ゴクゴク……♡はあ!……♡タローさんの鬼畜ツ♡女の子のお口に無理やりおちんちん突っ込んでんじやダメなんですよ♡♡♡」

マリーはワイを非難するが、その表情は喜びでいっぱいであった。「あむっ♡……………せーえきってネバネバしてて、飲みにくいですね……………でも、おいしいですわね……♡」

マリーは口の周りに残った精液を掬い上げ、飲みにくそうに口に入れている。

その姿を見て、ワイのチンポは射精の疲れを忘れて、臨戦態勢に入る。

「あつ……………♡タローさん、まだまだイケそうですわね……♡それでこそ、ハーレムの主ですよ♡……………いいですわよ♡好きなだけアタシを使ってください♡」

マリーは、誘惑するようにワイに身体を擦りつける。

……………期待には、応えんとなあ♡

ワイはマリーを抱きしめ、もう一度その体毛にチンポを突っ込んだ。

天国への旅は、まだまだ続きそうだ……♡

Z Z Z……………

……………んっ?朝か……………

朝の陽ざしに目を慣れさせながら、ワイは昨日のことを思い出していた。

……ふうーOK、落ち着いたで。

ワイは朝チュンのプロや。何度も動揺してたまるか。

……マリーとの過ちは…一旦置いておいて、今はこの屋敷から逃げんや……!!

逃げた後で、マリーとの関係をどうやって終わらせるか考えるんや……!!

ではさっそく服を着て――

「あらー起きたんですね旦那様♡」

目を開けた瞬間、マリーと目が合った。

……しまった、マリーが先に起きてるのは予想外やった!!

「うふふ♡昨日は気持ち良かったですわねえ♡…こうして婚約者と結ばれるなんて幸せえ♡」

マリーが昨日のことを思い出して、うつとりとしている。

……べ、別に結ばれてないわ!!婚約なんて破棄や破棄!!…そもそも婚約してへんし!!だからナチュラルに旦那様呼びはやめてえ!?

「さあ♡ケモシコ島に帰ったら忙しくなりますわよ♡あの島は良い所ですけど、足りないものが多すぎますからね♡出産用の病院や、子どもたちの学校を誘致しませんと…♡ああ、お金の心配はなさらないで。実は今、サリーさんと会社を建てる計画をしています♡実家のお金はあてにたくありませんからね。あと……」

マリーが一人でどんどん喋る。

……情報量が多すぎる!!病院!?学校!?会社!?

マリーは一体どこに向かっとなるんや!?

「…ああ♡旦那様は何も心配なさらなくていいんですよ♡旦那様はただ、ハーレムの主としてどっしりと構えていればいいんです♡…なんなら、お仕事もアタシたちに任せて、依存してくれてもいいんですよ♡むしろ、その方が……♡♡♡」

…あかん、こいつら、ワイをヒモにして逃がさん気や……!?

ケモノのヒモになんぞなりとうない!!

今すぐ逃げ……「ガシツ♡」あん?何かに手を掴まれた…!?

恐る恐る、ワイの手を見てみると……

「逃がしませんわよ♪」ぎゅうう……♡

マリーがワイの手を掴んでおり、その手を――

「モフう♡」

また自分の体毛の中に入れた。

ふわふわ、らめえええええ♡♡♡♡♡

その後、マリーとめちやくちやモフックスした。

行為の最中、マリーのマツマとパツパが扉の間から覗いていたのが見えてタヒりたくなった。

拝啓、母上様

今日は友人の実家へ遊びに行きました。

友人の家は、とてもお金持ちの様でびっくりしました。

なぜか、本当になぜか高価なお土産もいっぱい貰ったので、母上様にも送ります。

それでは、お風邪など引かれぬようお気を付けてください

敬具

P・S

羊毛にはお気を付けてください。

あれの中毒性は異常です。



ワイ、ツルみたいなダチヨウにセクハラする

「……………」

……………なんや？今ワイは集中してるんや、ほっといてくれ…

……………だあー！わかったわかった！あれからどう  
なったか語ればええんやろ！

あれからマリーとの行為は熱を増し、食事もとらずに交わり続けた  
結果、気が付いたら夕方であった。

「あれ？さつきまで朝やったのに…？」てな感じで脳がバグリそうに  
なったわ…頭ん中で音割れハリーポッター流れたで…

流石にこれ以上はお互い頭がパーになるとのことで、マリーとの  
エッチ終わりにして服を着たタイミングで「もう遅いから、今日も  
泊っていきなさい♪」とマリーの両親が部屋の中に入って来た。

…お前ら、ワイらの行為中に扉の隙間から見てたの知つとんのやぞ  
……………！

……………まあ、確かに今から乗れる電車もないとのことでその日も泊つ  
たんやが……………

夕食の時に、マリーとマリーのママの会話がめっちゃ弾むことよ  
……………

「昨日はお楽しみだったわね♪」「貴方たちを見ていたら私たちも…  
キヤー／＼／」とかママの方がテンション爆上がりやったな…  
（マリーのパパが昨日よりしなびてるように見えたのはそう言うこ  
となんか……………）

その日も泊ったのは良いが、また夜中にマリーに襲われては帰るタ  
イミングを逃すと考えたワイは、「今日は部屋に来るなよ！来たら絶  
交するからな!!」とマリーを脅した。

それに対してマリーは、「うふふ、はあくい♪」と以外にも肯定的で  
あった。

「…なんか不気味やけど、まあええやろ」とその場は引いたワイ。しか  
し、これがとんでもない間違いであった。

「お風呂を沸かしましたから、よろしければ」と執事っぽいおっさんに

案内され、風呂場に行ったんや。マリーの家風呂は広く、まるでローマの大浴場の様であった。これ、ワンチャンルシウスさん来るんちやう？ワイ阿○寛のサイン欲しいんやけど。

そんなことを考えながら風呂に入ってたら――

「お背中、お流しいたしま〜す♡」

そんな声と共に、裸のマリーが乱入してきた。

「絶交するって言ったやろー」と反論したら、部屋には入ってないからセーフって言い包められたわ……

マリーは元々スケベだったらしく、今まで隠してたらしい。

このヒツジの皮被ったオオカミめっ!!(なお、お風呂エッチした後、自分から部屋に招き入れて続きを楽しんだ模様)

このままではマリーの家から出られないと感じたワイは、次の日の早朝にマリーを無理やり引きずり、気合いでケモシコ島への帰路へ着いた。

家を出る時、「ちっ」とマリーが舌打ちしたような気がしたが、気のせいやろなあ〜……

命からがらケモシコ島に帰って来れたのは良いが、今度は「2日間いなかった分の埋め合わせをする」という名目でブーケたちにめちやくちや搾り取られた……てか、しれっとマリー混ぜてるやん!?!お前は2日間ベタバタやったからええやろ!?

そんなこんなで、全員から搾り取られているとき、ワイは考えた。

何故、ワイはこんなに流されやすいのか、と

思えば、ワイは性欲の赴くまま流され続けて、こうして何人もの獣人と関係を持ってしまった。それは、一言にワイの精神力が弱かったのが原因やと思う。

なんとかして、性欲に流されなくなるような、超重武者のような不

動の心を得る方法はないか……

その時、ワイの頭に名案が閃いた。

せや！和の心を学んだろ！！

……何言うとんねんと思つた奴、浅いなあ〜！

ええか！和の心つてのは、自らの心を和ませて、穏やかに保とうとする心や！

色々大変な現代の社畜たちに、学んでほしい心なんやで！

その和の心を学べば、ワイも性欲に流されずに穏やかに、つまり賢者タイムを自由自在に操ることができるんや！！

そう思い立ったワイは早速和の心を学ぶため、とある住民のもとを訪ねた。そいつの名は――

「タローさん、心の乱れが字に出ていますわ」

「ぬう……しまったあ………」

ああ……いらんこと考えすぎて失敗してもうた……

書道なんて小学校以来やから、めっちゃ集中力いるわあ〜

「うふふ♪タローさん、そんなに焦らなくても、自分のペースで進めればいいんですの。無理に上手く書こうとすると、逆に心が乱れますわよ」

ああ、優しいんじや〜

やっぱり、彼女を頼つたのは正解やつたな〜

「せやな、ありがとなくちとせ〜」

ワイがそう笑うと、それに合わせて、ちとせも微笑みを浮かべた。

ケモシコ島一番のお淑やかな住民。

そう聞かれたら、ワイは真っ先にちとせと答えるだろう。

ちとせは、ケモシコ島に住む住民の一人で、真っ白な羽毛に、頭に赤い丸模様で、見た目は完全に鶴だが、実はダチヨウの獣人らしい。

ちとせの立ち振る舞いは、まさに彼女の座右の銘である「歩く姿は百合の花」という、絵にかいたような大和撫子であった。

和の心を学ぶなら彼女しかいないと確信したワイは、さっそく彼女の家へ行き、和の心を教えて欲しいと頼み込んだ。

それともう一つ理由がある。それは、彼女がダチヨウであるということだ。

ダチヨウ、つまり哺乳類ではない生物である。最近、哺乳類畜生と2人きりになるといつの間にかエチエチな関係になっていくワイ。だからこそ、哺乳類ではない鳥類の住民がええんや。

ふふっ……流石のワイも鳥とエツ！な関係にはならんやろ！残念やったな邪神めっ!!

ワイの頼みに、最初は戸惑っていたちとせであったが、ワイの熱意が伝わったのか、快諾してくれたで。

『なんだかよくわかりませんが、ワタシで良ければ、お力になります！……やった！……タローさんと二人つきり：／／／／／』

はえくもう、ちとせ様様やでく

最後なんか小声でなんか言ってたけど、なんやったんやろ？……

まあええやろ!!

……それにしても

「うゝむ……上手く書けへんなあ……」

ワイは、目の前の和紙と筆を見ながら首を傾げた。

ちとせ曰く、書道は和の心が詰まっているとのことと、こうして彼女の趣味でもある書道をしているわけだが、久々の筆と墨に戸惑い、思うように書けないのだ……

「タローさん、お茶を淹れたので休憩にしましょう」

「サンガツうゝ……（ゴクゴク……）お茶うまー」

ワイはちとせの入れてくれたお茶を飲む。

…うまし、お茶うまし！

「うふふ♪そんなに喜んでいただけなんて、立てた甲斐がありました」

おおん!?これ既製品でなくて立てたやつなん!?

よく見たら、ちとせの後ろに茶釜などのお茶セットが置かれているのが見える。

「ちとせ…茶道もいけるんか…」

「はい！お母様が花嫁修業の一環で色々習い事をさせていただいたんです。他にも華道、弓道、薙刀道に戦車道…あとは…」

ちとせが指を折りながら、自分の経験した習い事を思い出している。

…後半武闘派すぎやろ!?!怖いわ!!

てかこの世界戦車道あんの!?!ワイ、噂のドスケベな家元見たいんやけど!?

「合気道に忍道…剣道にカポエラも少々、それと…」

「…な、なあ！ワイ、ちとせのお手本みたいんやけど!!」

ちとせの習い事をこれ以上聞くのが怖くなったワイは、無理やり話題を書道に戻した。

「お手本ですか…では、筆をお借りします」

そう言ってちとせは、ワイから筆を受け取り、和紙の前に座った。筆に少し墨を付けると、深呼吸。すると――

「――ッ！」

ちとせを纏う空気が、変わった。

いつものお淑やかな雰囲気から、武士のように「ギリッ」とした顔になり

「シユババババババババツ！」

高速で腕を動かし、文字を書き始めた。

…あかん、想像と違うう!?!ワイ詳しくないんやけど、書道ってもつとゆつくり、心を静めて書くんとかやうの!?

「……………できました」

そう言つて、ちとせが筆を置く。

早っ!?手元どころか何も見えんかつたんやけど!?

ワイは、ちとせが書いた文字を見る。

そこには――

【鶴】

の文字がしつかりと書いてあつた。

………やっぱこいつ鶴やないの？

「さあ、タローさんもやってみてください」

そう言いながら、ちとせはワイに筆を持たせてきた。

………どーしよ…まったく参考にならんかつた………

「タローさん、そんなに難しく考えなくてもいいんです。心に浮かんだもの、自分が表現したいものを書けばいいんです」

呆然としているワイに、ちとせは耳打ちしてくる。

「…心に？」

「そうです。書道に限らず、何かを作る事つて結局、自分が何を作りた  
いかが一番重要なんです。人から評価されたいとか称賛が欲しいと  
かの気持ちで作つちやうと、どこか歪なものになります。でも、自分  
の心の赴くままに作った物つて、その人の熱意が伝わって、誰かの心  
に響く作品になるんです」

「だから、自由に書いていいんですよ♪」とちとせは続ける。

………そうか、自分の赴くままか…何物にも縛られず、自由であ  
ること。それも、和の心なのかもしれないなあ……

「………わかつたでちとせ！だから見ててくれ！ワイの！作・品!!」

「うふふ、楽しみです♪」

ワイは2000の技を持つ男の様なサムズアップを決め、和紙に向  
き合う。

ワイの表現したいもの…なんやろ………ワイのスポーティな生  
い立ち?………そんなもん伝えてどーすんねん………ワイのは  
てしなく遠い男坂?………未完で終わりそうやから没やな………

せや！ワイの好きな物に対しての愛を綴るか!!

ワイの好きな物……マスターのコーヒー……ママのカレー……くまのダイちゃん……ブーケとのキス……パツパの……んん??

……フア!?なんでブーケが出てくんねん!?べ、別にワイはあんなネコ畜生に愛なんてないわあ!?

あかん!もっかいや!!

らせん階段……カブトムシ……廃墟の街……モニカのパイズリ……だああああ!!今度はモニカが出て来たあ!?ち、違う!これはノーカンや!やり直しツ!!

リリアンのお尻……ナイルママのぱいぱい……ビアンカの……アアア(ブリブリーブリーブリュリユ!)

何考えとんねんワイ!?こうなったら無心で書いたら!心には何も無い!ワイには感情はない。否定し、痺れ、瞬き、眠り妨げる、爬行する鉄の王女。絶えず自壊する泥の人形。以下省略!地に満ちワイの力を思いしれえ!!

〃シユババババババババツ!!!〃

ワイは無心(?)で習字を書いた。

目を閉じて、無心で書いたから、ワイ自身何と書いたかわからない。しかし、ワイの人生で最高の出来だと、確信している。

「た、タローさん……/ / / / / /」

ちとせが、感嘆としたような声を漏らした。

ふふっ、さてはワイの作品に感動してるんやな。見ただけで人を感動させるとか、ワイは人間国宝かな?

……さて、さっそくワイも自分の作品を試してみるか。

ワイは〃カツ!〃と目を見開いた――

【お・ま・ん・こ♡】

……ワイ、タヒんだ方がいいんかな？

『あ……あはは／＼／＼……きよ、今日はお疲れの様子ですし、もう解散に  
しますか……／＼／＼』

ちとせが顔を真っ赤にさせながら一言で、その場は解散となり、ワイは帰路へ着いていた。

……最ツ悪や……絶対ドン引きされたでワイ………大天使ちとせに引かれるとか、ワイ終わってんやろ………

なんで、あんなこと書いてしまったんや………途中でプツチ神父みたいになったからか？それとも、黒棺を最後まで詠唱しなかったからか？……どーでもええか、もう終わった話やし………

こんな日は、シヨツピングでもして気を紛らわせるに限る。そう考えたワイは、ポケットに手を伸ばすが、そこに財布がないことに気が付く。

あー………そういえば、ポケットに入れてたら邪魔になるってことで、ちとせの家のテーブルに置きっぱなしにしたわ………気まずいけど、取りに行くしかないよなあ………



数分悩んだ結果、気が付いたらワイはちとせの家の前まで来ていた。

さて、どんな顔で会えばええのやら……………

「はあ…行くしかないか……………」ん♡……………んおう？」

ちとせの家の扉を開けようとしたら、ワイはある事に気が付いた。

ちとせの家から、変な声が聞こえるのだ。

なんや……………？……………ちとせの声……………だよな？

ワイは変だなと思いつながら、扉を少し開けて中の様子を見た。

そこには、先程までワイがいた空間があった。

畳の床

部屋にでかでか置いてあるはた織機（やつぱ鶴だろ？）

それで織ったと思われる織物が壁に掛けられている

先程と違う点は、部屋の中心には布団が敷いてあった

「……………?!」

ワイはその布団の上への光景に目を疑った。

そこには——

「んん♡…あん♡……………こんなの、ダメなのにい♡」クチュ♡クチュ♡

布団の上には、ちとせがいた。

ちとせは、何故か下半身に何も着ておらず、布団の上で足を開くように座って、自分のアソコを弄くりながらオナニーをしていた。

な……………！何しとんねんちとせえ!?

「ひいん♡……………タローさんのバカあ♡……………二人きりであんなセクハラしておいて、襲ってくれないなんてえ♡……………こんなの、辛いですう♡」

……………えっ、ワイのせいなの？

……………なして？

「ふう♡…ふう♡…切ないよぉ♡…ほしい♡…タローさんの大きいのが欲しいのぉ♡」

ちとせはそんなことを言いながらオナニーを続ける。

そんな…あの和撫子のちとせが…あんなにも淫らに自慰をするなんて…！

ちとせの痴態を目撃したワイ。そして――

“ビビビビーーーーー♡”

それを見たワイのチンポは、戦闘態勢に入った。

“ Bannon!”

ワイはドアを勢いよく開ける。

「ふえ!?…た、たたたたタローさん!?ど、どうして…!?いや!見ないで!わたしの恥ずかしい姿見ないでえ!!」

ちとせは、恥ずかしがりながら自分の身体を布団で隠す。

しかし、ワイはそんなちとせの制止を振り切り、布団を引っぺがす。

「きや!?た、タローさ…!?／／」

そんなワイに、ちとせは何かを言いかけるが、その発言は途中で止まった。

なぜなら、ちとせの視界に、ズボンの上からでもわかるほどピンピンに勃起したワイのチンポが入ったからだ。

「すごい…おつきい…♡タローさん…これは、もしかしてわたしで…?」

ちとせがワイのチンポに見惚れながら聞いてくる。

ワイはそれに対して何も言わなかった。なぜなら、ワイの代わりにチンポが頷くように“コクン♡”と頷いたからだ。

「ああ……♡……本当なんですわね……♡嬉しい♡」  
ちとせは嬉しそうな表情を浮かべる。  
それだけで、二人の間に、もう言葉は必要ないとわかった。

歩く姿は百合の花？淫らな花の間違いでしょ？♡

ワイ、ツルみたいなダチヨウの羽毛を堪能する

「ああ……♡タローさんの、ズボンの上からでも逞しい……♡わたし、惚れ直しちゃいますう♡」クチュ♡クチュ♡

ちとせがワイのチンポを見ながら自慰を続ける。

そのいやらしい姿に、ワイのチンポは勃起しすぎて痛くなり、ズボンを履いているのがもどかしくなった。

……ここ、これは痛みを取るため、だからスケベな意味じゃないんや……!!

自分にそう言い聞かせ、ワイはズボンをパンツごとずり下ろす。

ブルブル——ン♡”

ズボンという枷から解き放たれたワイのイチモツは、まるでその自由を謳歌するように上下に震えた。

「わあ……これが殿方の……その、マラなんですな……♡」

ちとせはワイのチンポを見て、感嘆の声を上げる。

………なんや、気に入らんなあ……

「ちとせ、マラってなんや？……ワイでもわかる言葉で言ってくれ」

「ふえっ!?!//いや……それは……そのお……//」

ちとせは恥ずかしそうに顔を伏せる。

その反応に、ワイは何故かゾクゾクと興奮していた。

「言わないんならええで、これは仕舞つとくわ」

そう言つてワイはズボンを手に取る。

「あっ……!」

その行動に、ちとせは声を上げて手を伸ばす。

「なんや？何か言いたいことあるんか？」

「い、いえ……あの……//」

ちとせが白い羽毛を真っ赤にしながらもじもじしている。

…羽毛どんな仕組みやねん……

「用事ないならええわ。仕舞お」

ワイはズボンに足を通そうとする。

「……………いで…」

「あん？なんて？」

「おちんぽ仕舞わないで！もつと見たい！感じてみたい！！／／／／／」

ちとせは叫ぶような声を上げた。

その顔は、恥ずかしさで今にも死んでしまいそうであった。

そんな顔を見てワイのチンポは――

「ゾクゾクゾクう……………♡」

益々そそり勃った♡

ワイはチンポに何か刺激を加えていないと、目の前のちとせを無理やり犯してしまいそうなので、右手でチンポを扱き始める。

「ああ……………♡おちんぽがあんなに激しく……………♡すごいです♡とつてもたくましい♡」クチュ♡

ちとせは、そんなワイのイチモツをガン見しながらまた自慰を始めてしまった。

ワイらはもう、お互いのオナニーしか見えていない2匹の淫獣の様であった。

「ちとせ……………ちとせっ……………！」「シコシコ♡

「うっふ♡タローさんに、オナニー見られますう♡…見て♡もつと見てください♡淫らなわたしで、おちんちん気持ちよくなつてえ♡」クチュ♡クチュ♡

ワイの目の前でいやらしく乱れるちとせ。

ワイのチンポは、そのトロトロまんこに頭を突っ込もうと、ドンド

ン長く伸びていく。

ああ……入りたい……！

「うふふ♡……タローさんの顔、とってもエッチです♡わかりますよ♡頭の途中でわたしを犯してるんですよ♡わたし、タローさんの頭の中で、気持ちよくレイプされてるんですよ♡……ああん♡想像したら、わたしまで気持ちよく……ひゃん♡……もつと視姦してえ♡」

気持ちよさそうにオナニーをするちとせにさらに興奮するワイ。

ワイのチンポを抜く手も、ちとせのまんズリしている手も、段々と速くなり、お互いに達する準備をする。

「ちとせえ……もう出る……！！」

「出るって……精液ですか？……出して♡出してください♡わたしにぶっかけて♡タローさんの臭いザーメンくださいいい！♡ああ……想像したらわたしももう………ピイイイイイ！♡♡♡」

“びゅるるる♡”

“ぶつしゅううう♡”

ワイらは同時に絶頂に達し、お互いに熱い汁をまき散らした。

「はあ♡……はあ♡……い、いつもより気持ち良かったあ……♡……互いをおかずにするって、こんなに良いものなんですよ♡」

ちとせが余韻に浸りながら言葉を漏らす。

ちとせの身体には、ワイの白く濁ったザーメンがこびり付いていた。

ちとせの体毛も真っ白な色だが、ワイの精液は濁った白色なので、精液塗れなのがはっきりとわかる。

「これが……精液……♡……ものすごく強い匂い……癖になりそう♡」

ちとせが身体に着いた精液を顔を真っ赤にしながら見つめる。

その光景は、まるで白いスライムにちとせが犯されているようだ。スライムに種づけされるちとせ……♡

そんな妄想をしたからか、ワイのチンポは“まだ射精したりない！

”というように先程よりその大きさを増している。

「あら♡…タローさん、まだ出し足りないんですかあ♡…：…：しょうがないですねえ♡」

その瞬間を、ちとせは見逃さなかった。

「フアサア…♡」

ちとせは手…：…否、翼でワイのチンポを握って来た。

翼の羽毛が、ワイのチンポを程よくくすぐってきて、不思議な感覚だが、これはこれで気持ちいい。

「きつき出したばかりなのに…：…♡うふふ♡タローさんのおちんぼさんはやんちゃさんですね♡」

ちとせはそう言いながら、ワイのチンポを摩り始める。

程よい力加減と羽毛の柔らかさが絶妙にマッチし、ワイのチンポは幸せそうにワレ目から我慢汗を漏らしている。

うつ…：…こ、これは…：…♡

「うふ♡…タローさん、とつても気持ちよさそうです♡ほら♡シコシコ♡シコシコ♡…もつと気持ち良くなりましたよ♡」

「フワ♡」 「フワ♡」 「ごちよ♡」 「ごちよ♡」

ふわふわの羽毛にチンポをくすぐられて、ワイは自然と腰を前へと突き出すように動かしていた。

「あらあ♡…タローさん、わたしの羽とセックスしてるんですかあ♡わたしの羽におせーし「ぴゅーぴゅー♡」したしんですかあ♡…：…とんだ変態さんですねえ♡変態さんはおせーし搾り取って退治しなきゃいけませんよねえ♡」

いつものちとせからは考えられないSツ気たつぷりの言葉攻めに、ワイは中のDMスイッチが入るのがわかった。

「ち、ちとせえ…♡出させてえ♡…ちんちん幸せにしてえ…♡」

「はい♡情けなくいっぱい射精してください♡わたしの羽をせーし塗

れにして♡」

「びゅるるるー！ー！」

ワイはちとせの翼にイカされた。

ワイの熱い精子とちとせのあったか羽毛で、ちとせの翼は火傷しそうでなくらいに熱くなっている。

「いや〜ん♡タローさんのいっぱい出てますう♡…ああ…わたしのお手々がタローさんの色に染まってますう♡」

ちとせが、さつきまでワイのチンポと愛し合っていた翼を熱っぽい視線で見つめている。

ドロドロの精液がちとせの翼を汚し、羽の隅々まで湿らせている。

しかし、ちとせをそんなにまで汚しても、ワイのチンポはまだ大きくなつたままであった。

むしろ、ちとせの気高き白を精液の薄汚れた白色で染め上げなければ気が済まないと言っているようだ。

「…ちとせえ!!」ガバツ！

「きゃ♡」

ワイはちとせの両足を無理やり開かせる。

「ぐつちよお…♡」

そこには、哺乳類と変わらない濡れ濡れおまんこが顔をのぞかせていた。

ワイはチンポを扱きながら、チンポをおまんこに近づける。

その光景は、まるで扱かれるチンポの求愛ダンス。そのダンスに見惚れて、ちとせまんこはチンポを受け入れる準備をしている様だ。

チンポもおまんこも、どちらも濡れ濡れ♡テカテカ♡でいやらしい空気が漂っている。これは、いつセックスが始まってもおかしくはない空気だ。

「タローさん♡…お目目が野獣さんですう♡…わたしを犯したいんですか♡女友達のオナニーを覗き見るだけじゃ飽き足らず、おまんこにおせーしぴゅーぴゅーしたいんですかあ?♡…最低ですな♡」



ちとせは、そんなワイに幻滅したような言葉を投げかける。

しかし、それでも開いた足を閉じる気配が全くないため、ちとせもこの後の展開を期待しているのだろう。

「ちとせえ……入れてええか」

「はい♡今日まで貴方のために守ってきた処女♡今ここで貫いてください♡」

「ずつぶしッ!!」

ワイの理性が本能に負け、ちとせのまんこに突撃した。

「ひゃあああああん♡…あ、頭が、ビリビリって……♡これが、セックス……♡」

ちとせは、未知の快感に戸惑いながらも、その快楽を楽しんでいる様子だ。

ワイはワイで、ちとせのまんこの感覚を楽しんでいた。

ちとせのおまんこは締め付けはしっかりとっているが、中は意外と広く、チンポの出し入れがしやすい。

……これは――

「……ちとせ、普段からオナニーしとるな？おまんこのほぐれ具合でバレバレやで」

「ツ!?!/!/……し、仕方ないじゃないですか!?タローさんは何時まで経っても襲ってくれないし、それでも日に日にムラムラが強くなっ  
てきますし……/!/!/!/!/!/!/」

ちとせが恥ずかしそうに俯く。

ふむ。鎌をかけてみたが、凶星やった様やな。

まったく……普段は大和撫子やのに、みんなに隠れてこんなスケベ生活を送っていたなんてな……♡

そんなスケベ娘には、お仕置きしなきゃな♡

「ずにゆん♡」

「ずにゆん♡」

「フアさ♡」

「フアさ♡」

「はにゆん♡…タローさんのが、動いてます♡……ん♡わたしのおまんこ、ずぶずぶつてえ…♡いあん♡」

ワイはちとせに腰を打ちつけて、快樂を貪る。

ちとせは鳥類の為、セックスが出来るのか不安であったが、いざ中に入ってみたら「ぎゆうきゆう♡」とワイのチンポを気持ちよく締め付けてくる優しくいやらしいおまんこでホッとした。むしろ、お互いを気持ちよくしようと硬度やヒダの動きなどがどんどん増していく、相性は抜群の様だ。

「わたしのおまんこ♡タローさんチンポに墮とされてるう♡……お母様ごめんなさい♡貴方が大切に育ててくれた娘は、こんなにエッチに育つて♡今はオナニー覗き魔の変態さんと気持ちいいことをしてしまってますう♡あん♡」

ちとせが母親に謝りながら喘ぐ。

小さい頃からちとせに習い事を色々させてきた教育ママだ。そんなママが今のちとせを見たらどう思うのだろうか？

幻滅して、ごみを見るような目で見るだろうか？娘が変態に犯されて、涙を流すだろうか？もしかしたら、意外とワイらの交尾に興奮して、この場で自慰を始めてしまうかもしれないあ…♡

ワイは今、ちとせのママから娘を寝取ってるんや。そう考えると、ワイの頭の中は射精のことしか考えられなくなった。

「タローさあん♡もつと見てえ♡…わたしのエッチな醜態♡目に焼き付けて♡…頭の中でもわたしをレイプしてえ♡」

ちとせがワイの頬に手を乗せ、視線を自分から離さないように誘導する。

ちとせは、今の実際の交尾に飽き足らず、ワイの頭の中でも自分を犯してほしいと言ってきた。

そんなこと――

「言われなくても、ワイの頭の中のお前は、もうワイの精液塗れの肉便

器やで！」

「あああん♡それ、とつてもステキで、えつちですう♡目の前のわたしも、タローさんの精液専用おトイレにしてください♡」

くっ！なんやこのドスケベバードはあ!?そんなに使器になりたきやワイの家のトイレに設置してやるわ!!

ワイはピストン運動を速める。

ワイが腰を打ちつける度、ワイの金玉がちとせの身体に生えている羽毛にくすぐられて、刺激を加えられる。

そのこしよばい刺激にイライラしたワイの金玉は怒りに任せて精子をどんどん生成しているのがわかる。

やばい……精子をもう留めておけない………!!

「ちとせーもう出そうや!!」

「出るって……い、いや、いやですう♡タローさん、知ってますか♡おまんこにせーしぴゅっぴゅ♡したら赤ちゃんできちやうんですよ♡絶対だめですう♡」

ちとせは中に出すことを拒否するが、それは本心でないことはすぐに分かった。

なぜなら、ワイの腰にちとせの足がクロスされ、もう中に出すしか選択肢が残っていないからである。

それに、ちとせの目がギンギンに輝いており、絶対にこの雄の子を孕んでやる!という意志が何も言わずとも伝わった来るのだ。

これは、中に出すしかない!!

「ちとせえーイクでえ!!」

「ダメですう♡中に出さないで♡ああん♡赤ちゃん………赤ちゃんできちやううううううううう♡♡♡♡♡♡♡♡」

ぶびゅるるるるうううう!!

ワイはちとせの膣に出した。

ちとせの子宮が、ワイの精液で満たされるのを感じ、征服感が心を

支配する。

流石に疲れてしまい、ちとせに覆いかぶさるように倒れ込む。

「はぁ♡……はぁ♡……♡もおく中はダメって言ったじゃないですか♡赤ちゃんできたらどうするんですか♡責任取って結婚してください♡」

ちとせがワイの顔を覗き込みながら惚けた顔で言う。

……ふう………射精したから、賢者タイムや………  
はい、皆さんと一緒に………

またやってもうたあああああああああ!!!!

流石に学べよワイい!!何回このパターンで関係増やすねん!?

しかも今度は鳥やで!?今まではギリ哺乳類だからセーフって言い聞かせてきたのに、今度は鳥畜生かよ!節操とかないんか!?

……もう、こんなチンポ生かしておくわけにはいかん!ワイは去勢して女の子になるしかない!!………やっぱヤダ!もつと女の子とエッチなことしたい!!

「タローさん♡」

「あん?なん♡んちゅ♡♡むぐつ」

ちとせに話しかけられ、顔を向けると、キスをされた。

ワイの唇と、ちとせの嘴が合わさり、心の中に幸福感があふれ出る。

なんや……鳥ともキスってできるんやなあ………ああ………ちとせのト口顔が視界を支配して………♡

ムクムクムクウ♡♡

鳥とのキスという謎の、しかしエロいシチュエーションにワイのチンポは、再び勃起する。

………もう、何でもいいんかワイのチンポオ!?

あ、あかん！もうチンポには頼らん！ワイはチンポなんかになんか負けない！！

「あらあ♡タローさんだったら…♡そんなにわたしとの赤ちゃん欲しいんですかあ♡……………うふ——」

〃くばあ♡〃

わたしと、同じこと考えてますね♡♡♡」

その後、ちとせとたつぷり子作りした

拝啓、母上様

今日は書道を試してみました。

書道は小学校以来で緊張しましたが、意外と上手く書けてよかったです。

書道はいいもので、心が落ちつきます。

これが和の心。これがブシドーなのです。

それではまた。

敬具

P・S

上手く書けたので、一枚贈らせていただきます。一番上手く書けた作品です。

『性愛』の文字の筆書き同封。

ワイ、ラブドールを釣り上げる

「ウオミオオン！〜オミミウエ〜イ、ミ〜ミミオ……」

ワイは今、鼻歌を歌いながら釣りをしていた。

歌はみんな大好きけけライダーやで……マジで歌詞どーなつてんねん……

さて…突然やが、9という数字についてどう思う？

スーパーヒーロータイムの時間？プリキュアが入ってないやん！やり直し!!

チルノのあだ名？……懐かしいが今回は関係ないで。

正解は……ワイが関係を持った女の子の数でしたあ〜

………でしたあ〜じゃないわどアホ!!

ついに9人に達したでおい!?野球チームが作れるで!?

チーム名は「タローハーレムズ」だよねって言った奴!どつき回すぞ!?

別に、ハーレムは作る気でいたから問題はない。むしろ大歓迎や。

ただ!問題なのは9人全員ケモノってことや!!

なんでよりによってケモノだらけやねん!動物園でも開けてるか!?

そういうのはケモナーニキに任せるから、ワイには人間の女の子をプリーズ!!

しかも!今回ワイと関係を持ったちとせは鳥類やで!?もう分類すら違うやん!?

ちとせとの一件の後もひどいもので、行為が終わった後、ちとせが「結婚を前提にお付き合いください♡」というか、もう結婚してますよね♡」とほざきやがったのだ。

勝手に事実捏造すんな!ワイは結婚なんかせんわ!!

……しかし、ちとせの目がガンギマリで怖かったなあ…マジでこの島に婚姻届けとかの制度がなくてよかったわ……あれは無理矢理署名させるき満々の目や……

だが、たぬきち曰く「婚姻制度の整備をするだなも……べ、別にあ

さみちやんのからの圧が強いとかではないんだなも！」とか言つてたから危ないか……？

……こうなつたら、マジでたぬきちの浮気の噂を流して場を混乱させるか……？

……話が逸れたな。そんなわけで、ちとせとも関係を持ったわけだが、あれからちとせがドスケベ過ぎて辛いんや……

具体的には、外で偶然出会うと「タローさん、こんにちは！」と言つてくれるのはいつも通りなのだが、ワイに挨拶した後、ワイの下半身に顔を近づけて「おちんちんさんも、お元気そうですね♡」と言つてくるのだ。

……チンポに挨拶とか不要ら！あと、ワイのチンポも挨拶がわりに大きくなるなや！この間もそのせいでそのまま……なんてもないで！

他にも、「この竹、立派ですよねえ……まるで、誰かさんのおちんちんみたい♡」とか「くまのダイちゃんを抱いて眠るより、わたしを抱いたほうが気持ちいいですよ♡」とかセクハラ親父みたいなこと言つてきおるし……君そんなキヤラちゃうやろ!! 大和撫子のちとせを返せえ! 「恋は女を変えるのよ、みたいな(ドヤア……)」やかましいわ!

……だが、そんなワイだが、今は思わず鼻歌を歌うほどに機嫌がいい。

なぜなら、奇跡的にワイと関係を持った9人が所用でケモシコ島を離れるからである!

ブーケとの過ちから始まったこの地獄から、一時ではあるが解放されるのだ! ワイは自由やああああああ!!

……まあ、出発前にブーケが『アタイ達がない間にこの島から離れたら、どこにいても見つけ出して、今度はどこにも行けないように監禁するからね』と光のない目で言われてタマヒュンしたからどこにも行けないという制限はついたんやけどな……

……クソツ! こうなりやヤケや! この間失敗したオナニーパーティーを自宅で開くんやあ!!

というわけで、偶然来ていたつねきちの店でおかずを漁っていたのだが、好みの水着写真集を買おうとしたときに、金が足りないことに気が付いたワイは、つねきちに取り置きを頼んだ後、急いで釣りを始めたというわけや。ここで冒頭の釣りの伏線回収やで！オダ君もびつくりやろ！……ごめん、あの人には勝てん……

しっかし……こういう時に限ってなかなか釣れんなあ……物欲センサー働いてんのか？

……あああああああ！ワイは早くオナニーがしたいんや！早く魚来いよ！！

足りないベルはほんの数ベル。それこそ鱸一匹釣れば足りるんや！来てくれ鱸い！またお前かなんてもう言わへんからあ！！

ぴくツ……ぴくツ…………ポチャン！”

！！キタあー！

ここであつたが百年目、いざ尋常に勝負じゃ！

ワイは力いっぱい釣竿を引き、魚を引き寄せる。

ぬおっ!?この引きは……!?

鱸の引きやない！まさか……マグロか!?

よっしゃ！このマグロを売り飛ばせば、写真集の他にもエロいのが買えるかもやで！

おらっ！来いマグロ！釣りあげて撮影開始してやるわ!!

「ご期待くださいいいいいいい!!」

「バシヤあ!!」

強面俳優の様な掛け声とともに、ワイは竿を振り切った（チンポのことやないで！）

「ずどお！」という音とともにワイの両手に重みがのしかかる。

おっも!?マグロってこんなに重かったっけ？

ワイは釣り上げたものを確認するために、手に持っている者を観察する。

魚にしては、人間に近い身体の作り

手には肌の柔らかさとはにわ特有のすべすべ粘土のような不思議な感触



身体の色は薄い茶色っぽい

顔(？)の部分はウサギの長い耳とハイホーのような穴が3つ開いた様な作りになっている

あっ、これ魚じゃないわ。獣人や。

「…フアあああああああああああああ

そう理解した瞬間、ワイは驚きのあまり叫び声をあげた。

「むゝ……」

ワイは自宅の寝室で頭を抱えていた。

あれから、釣り上げた獣人をよくみたら、獣人型のはにわだということが分かったので、ワイはホツとして力が抜けてしまった。

……いや獣人のはにわってなんやねん!?紛らわしいからそんなもん作んなや!?

あと、パツと見乳首とかまんことか作りこまれすぎやろ!?絶対エロ目的で作ったやんこれ!?ウサギの獣人のはにわラブドールって業深すぎい!?性癖どうなつとんねん!!

……まあ、それは一旦置いておいて、あれからなんとか鱸を釣り上げて換金したワイは、つねきちの店から無事写真集を入手し、自宅に帰ってきたわけだが、ワイはその写真集でヌケなかつたのだ。

人間の女の子のエッチな水着写真集だと思っていたのだが、後半に行くにつれ流れが変わり、唐突に汚いおじさんが現れ、女の子をレイプ↓快樂堕ちさせるというエロ本だったのだ。

……このちくしょうめがあ!なんで唐突に汚いおっさん出したん

? ちとら女の子とビーチでイチヤイチャする妄想しとつたんやぞ  
! こんなんNTRれた気分やわ!

しかも女の子の方も満更でもなさそうやんけ! なにが『SEXから  
始まる恋もあるよね♡』やあ! そんなんあつてたまるかあ!?

はあ: はあ: ダメや、こんな本では気持ちのいいオナニーはできん  
!

ワイは本を部屋の隅に投げる。本は床を少しスライドし、とある物  
にぶつかってその動きを止めた。

……はあく……: ……そーいや、こいつの問題もあつたわ……

ワイは心底嫌そうにそれに目を向ける。

そこには、先程釣り上げたウサギのはにわが座っていた。

……釣り上げてしまった物だし、海には戻せない。かといってまめ  
つぶの店で売ったらワイのクールガイのイメージがダダ下がりにな  
るし、最悪まめつぶの性癖が歪むから売ることできない。ゴミ捨て  
場も、しずえちゃんがいるからダメ。

もう色々詰んでいる状況で、海岸に置いて行くわけにもいかないの  
で、一旦ワイの家を持ち帰ったわけだが……マジでなんなんこれ?

はにわでラブドールとか、製作者は頭おかしいんか!?

うう……あの真っ黒な空洞の目がワイを「ジイ……」と見つめてき  
ているようで不気味や……

「……………// // // //」

……あん? あのはにわあんなに顔赤かったか?

……: ……やめよ、チャッキーとかのホラー系の人形思い出したわ……

どーせ人形なら上海人形とかエミリコとかの可愛い人形が欲し  
かったわ!

あく気分悪い……: ……こうなったら、既存のおかずでいいからオナつて  
寝よ……: ……

ワイは、タンスの奥に隠してあるおかず置き場(15代目)の中を  
探す。

……クソツ! ここもブーケたちに見つかったか! 全部処分されと  
るわ!?! ワイの私物勝手に捨てんなや! 親しい仲でも訴えられるんや

ぞ！……ダメやあゝ！うちの島法律なかつたあゝ……

……あん？なんや一個残つとるなあ……なんやろ？

ワイは残っている物体を手取る。これは……写真立て？何の写真が入ってr——

『M字開脚でおまんこをぐぱあ♡〃しているブーケの写真』

……ファツ!?エロ写真やんけ!?

ブーケの奴、いつの間に仕込んだんや!?てかいつ撮った!?

『ブーケのしゃしん』は前に貰った(リビングに飾っている)が、それとは別で用意したんか!?

ご丁寧に『タロー専用のお嫁さんまんこ♡』とかいうふざけたメツセージ付きや！羞恥心とかないんか!?

クソがツ！こんなもんの為にワイのおかずコレクションは犠牲になつたんか!?!こんなイタチ兄さんも浮かばれんわ！

こんな……こんなものお!!(RRR姉貴)こんなもの、ごみ箱へ捨ててやる！

ワイは写真を大きく振りかぶった。

「はあ……はあ……ブーケ……ブーケえ!!」シコシコ♡

ワイはブーケの写真をおかずにオナニーをしていた。

「……………いやほら！せっかく貰った物捨てるのは駄目やん？だからしようがなく、本当にしようがなく！捨てずにいるんや！ワイの恩情や!!」

けつつつつつとして使ってみたら、想像以上にいっぱい出て気持ちが良いかったなんてことはないで!!

「……………♡」

「……………ん？なんかさつきから視線を感じるなあ…気持ち悪いなあ…」

視線を感じた方向を見ると、そこには釣りあげたはにわラブドールが座っていた。

「…あれ？さつきとポーズ違くない？……………まあ気のせいやろ。」

「……………よくみたらこのラブドール、身体つきがエロいな……………ほんまに製作者のこだわりが見て取れるわ……………」

「……………使うか」

「ま、まあ？せっかく釣り上げたんやし？一回ぐらい使って供養してやらんと……………な？」

ワイはオナニーを中断し、勃起チンポを揺らしながらラブドールに近づく。

「……………うん、エツロい身体つきやなあ……………特におっぱいとか本物みたいや。」

ワイはドールのおっぱいを触ってみた。

「もみゅ♡」

「……………♡ッ」

「ん？今動かなかった？……………気のせいやろな！」

「うおお……………♡柔らかッ！これはシリコンとは比べもんにならないで！」

「……………これは使わなあかな（使命感）」

ワイはラブドールを抱き上げると、ベッドへ寝かせた。

「……………／／／」

はやく見れば見れ程性欲を掻き立てられる身体やでえ……………

ワイは試しにラブドールのワレメに指を入れてみる。

「グチュウ♡」

「ツ!?／／／／／」

おお!?中もトロトロであったけえ!これ本当にラブドールか!?

これは絶対気持ちええだろ!

……………よし、早速使おうか。でも、流石に拾ったラブドールは汚そうだから、挿入はやめておいて、素股にするか……………

ワイは荒ぶったチンポをワレメにあてがう。

「ぐりゅ♡」

「…!!♡♡♡♡♡♡♡♡」

ほおお…♡チンポを当ててるだけで気持ちいい!もういつてしま  
いそうだ…!

しかし、ここで射精したらもつたいたい。ワイは射精したい気持ち  
を抑え、腰を動かす。

「ぐりゅ♡」 「ぐりゅ♡」 「グリツ♡」 「グリツ♡」

「……………ツ♡……………ツ♡……………／／／」

ぬっ……………ふっ…!

クリトリスの部分が、本物のように硬くて、ワイの裏筋を刺激して  
いる。

作りものだと頭では理解しているが、ワイのチンポは目の前の人形  
を本物と錯覚し、孕ませる気満々にその大きさを増していく。

「ツ♡…いん……………♡」

あん?今なんか音がしたような……………?

まあええやろ!

ワイは先ほどのブーケの写真を手に取り、腰ふりを続行した。

このドスケベネコがあ…!エツロいまんこおっぴろげやがってえ  
…♡

何がワイ専用のまんこや!そんな当たり前のことわざわざ書くな

や!!

「この……♡……ブーケめえ……お前なんて、ワイのカキタレで充分や!……生意気な奴がよお……帰ってきたらブチ犯したるから覚悟しとけよ……!」

ワイはブーケへのイライラをラブドールにぶつける。

クソツ!このラブドール素股してるだけやのに気持ちよすぎやろ!思わずワツカさんみたいな顔になってまうわ!

「……………」

ゾクツ!

な、なんや?一瞬だけヤンヤンな空気感が出たような……?

……………べ、別にビビッてねーし!

ワイは気を紛らわせるために、腰の動きをMAXにする。

ああ……………イっ……………!!

“びゅっぴゆるー!”

ワイは射精し、ラブドールを白く汚していく。

「……………ツ~~~~♡♡♡♡♡」

“ぶっしゅ♡”

……ファツ!?ラブドールのワレメからも水が出てきたで!?!海水でも残ってたのかな?後で掃除してやるか……

「はあ……はあ……気持ちよかったでブーケえ……♡」

「……………やよい」

あん?なんや声が聞こえたような?

……………気のせいかな?

にしてもこのラブドール気持ち良かったわ♡デザインは最悪やけど、こんなエロいの男の欲望の塊やんけ。

「……………よっしやーこいつはワイ専用のラブドールにするで!!毎日犯してやるから覚悟しとけよ!!」

「……………♡」

ワイは征服感から、ラブドールに向かって叫ぶ。

ラブドールも嬉しそうに微笑んでいる……………ってそんなわけないかw

……………あつ、なんか眠くなってきたわ……………

一回お昼寝挟んで、起きたらラブドールを風呂で洗うか……………そして、今度は挿入してやるわ……………

「おやすみやで、ワイのラブドールちゃん♡……………ZZZ……………」

「……………おやすみなさい♡」

最後に、ラブドールが小さく返事をしたような気がした。

お人形も、エッチなことがしたいんだよ♡

ワイ、はにわウサギの中に出る

〴〵んふう♡……ちゅ♡……レロレロ♡〴〵

ZZZ……ああ♡そらちやくん♡そんなにチンポ舐めたら、ワイ惚れてまうう♡

……んごお?……なんや……夢か……

くっそ!もう少しでワイのテクでそらちゃん(人間のかわいこちやん)を〴〵あんあん♡〴〵喘がせてあげたのにい!!

……しやーない、二度寝して同じ夢見るんやでえ

そうすれば、そらちゃんがまたワイにフェラしてくれて、ワイはまた気持ちよく……待てよ?なんかおかしいで?

なんや……チンポが気持ちいい?

確かに、ワイはさつきまでフェラチオしてもらって夢を見ていたはずや。だが、今は夢から覚めている。それなのに、何でチンポが気持ちいいんや……?

ワイは視線を下に向けると、掛け布団が異常に盛り上がっているのが見えた。

……盛り上がってるってか……上下運動してる?

ワイは恐る恐る布団の中を覗き込む。そこには――

「ちゅぱ♡……じゅろ♡……ぺちやあ……♡」

何者かが、ワイのチンポをしゃぶっていた。

……えっ、何…ツ?

な、何が起こつとるんや……!?

玄関には鍵を掛けたはずや。窓が割られていたのなら流石に気付





長い射精を経て、ラブドールは全ての精液を静かに飲み干した。  
はやく最近のラブドールは精液を飲む機能も付いてるんか……エ  
ロは人類を進化させるんやなあ………

いやそんなわけあるかい!!

いくらワイでもそんな信じへんぞ?! (一瞬信じそうになった)

これは明らかに人知を超えた事態が起こつとるって! 心霊現象の  
それやつて!?

チャツキーとか貞子とかシャイニングとかのホラー展開やつて!?  
キノコ男? あれはホラー映画やなくてコメディ映画や!! ただの楽し  
いワ○カバジ一家のホームビデオや!! てかワイは何を言つとるん  
やあ!?

「はー♡はー♡……あつ」

ワイが混乱していると、フェラチオを終えたラブドールが顔を上  
げ、ワイと目が合う。

目と目が合う瞬間好きだと……アホやつとる場合か!

ワイはラブドールの目を凝視してしまう。そこには、何もない真っ  
黒な空洞が広がっていた。

その奥は暗くて何も見えない、まさに深淵。ワイのすべてが飲み込  
まれそうなくらい深い黒や。そして、深淵を覗く時、深淵もまたここ  
らを覗いているという言葉があるように、ラブドールもワイに視線を  
向けてきているのがなんとなくわかった。

……あ、あかん……これホラー映画で取り殺される王道パターン  
やんけ………!

そいつと視線があつた時、ワイは直感的に死を覚悟した。



……嫌や！妖怪の類に取り殺されるなんてまっぴらや！！

……こうなったら、目の前のおぼけと死ぬほどエッチして腹上死したる!!毒を食わば皿までや!!

「むぐぐう♡がぽッ♡んぼお♡ぐちゅ♡」

ワイはラブドールの口にチンポを突っ込み、腰を使う。

これはワイだけが気持ちよくなる動きで、相手のことは一切考慮しない激しい動きや。でも、相手はラブドール、性欲を発散するための道具や！ワイに使われてこいつも本望やろ！

クソっ！こいつの吸い付きエグいな!?チンポからワイの魂を吸い取ろうとしとるんか!?ワイは負けへんぞッ!!

ワイは腰の動きを大きくしていく。しかし、ラブドールはダメージを負っている様子はなく、逆に満たされているような表情を浮かべている。

こいつサキュバスかよお!?そんならお望み通りワイの精液でも持ってけ！

「どっぷりい……♡」

ワイはラブドールの口にもう一度精液を出した。

先程とは比べ物にならないくらい粘っこい液だ。もうほぼゼリー状と言ってもいい。

そんなゼリー状の精液を、ラブドールは飲みにくそうにしながらも全て吸い尽くした。

「ん♡……ん♡………はあー!♡」

ラブドールは精液を飲み終わると、そのまま満足気に仰向けに倒れ込んだ。

「はー♡……はー♡……」

息を大きく吸って吐いてを繰り返すラブドール。

その動きに合わせて、ラブドールのおまんこもくぱっくぱあ♡  
”と一緒に呼吸しているかのように開閉を繰り返す。

………そういうえば、こっちはまだ味わってなかったな……

”ガシっ！”  
「……………!?!」

ワイはラブドールの両足を掴み、足を開かせる。

ラブドールのおまんこがくぱあ♡”と完全に開き、こちらを誘惑する。

その誘惑に完全に乗ってしまつたワイのチンポは”ビキビキビキイ……”と戦闘態勢に入った。

「どーせ死ぬなら気持ちよく死なせてクレメンスツ!!」

「ちよ……ちよつとまてて。ずんツ!!」…………お♡♡♡……………」

ワイはラブドールへ容赦なく挿入した。

うごお!?!な、なんて締め付けや……………入れただけでいきそうになつたで!?

流石は男の性をぶつける為に生まれた人形やな。

しかし、ワイもこれが最後のセックスになるかもしれへんのや、本気で行かせてもらうで!!

”ばしゅ♡” ”ばしゅ♡” ”ぬぽお♡” ”ぬぽお♡”

「ん♡……お♡お♡お♡お♡お♡お♡ぶふっ♡」

ワイはラブドールに腰を叩きつける。

ラブドールは声を押し殺しているが、気持ちよさからか、エロい声が漏れている。ラブドールの癖に、マグロではないとは、ドールの風上にも置けない奴め!ワイが退治したるわ!!

「おらッ!ワイの精液が欲しいんやろ!?!欲しけりゃくれてやる!この世のすべてをお前の膣に置いてきてやる!!」

「お♡おん♡だめ♡い♡つ♡ち♡や♡う♡……………今日あったばかりの人に、種付けされちゃう♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

”どボボボボボおおおおおお………!!!!!!”

ワイは滝のように精液をラブドールに注いだ。

「ツ~~~~~~~~♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」プッシいいい…………♡

ラブドールは、声にならない叫び声をあげながら潮を吹いた。

なんや、ワイが寝落ちする前に出したのも、海水ではなく潮だったのか…………あの時からワイを殺す計画を入念に立ててたんか…………

「お——♡…………ん——♡」

ラブドールは快感の余韻に浸るように深い呼吸を続ける。どうやら、まだワイは殺されないらしい。

…………なら、もう一回戦や！ワイの命は高く付くでえ！

「なに休んどんねん！ラブドールは大人しくワイを気持ちよくしろ

!!」ずぼっ！

「あ、あん♡」

ワイはラブドールでの性欲発散を続けた。

「はあ…………はあ…………どうや！まいったか!？」

「ツ♡…………♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

あれから、何時間くらい経ったであろうか？

ワイはあれから何度もラブドールに中出した。しかし、ラブドールは一切疲れを見せず、ワイに貪りついている。

くっ…………このままワイはこいつに絞られた後に殺されてまうんか…………!

その時、ベッドの端っこに置いてあったとある物が目に入った。

あれは……………ブーケのエロ写真か？

…………ここで死んだら、あいつとももう会えなくなるんか…………

……すまん、ワイはもうダメそうや……最後に正直に言うわ  
ワイは覚悟を決め、最後の言葉を残す。本人に言えないのは、情けないけどな……

「ブーケ……愛しゅ……よい……」あん？」

ワイが遺言を残そうとしたとき、目の前のラブドールが静かに、しかし力強く何か言った気がした。

「な、なんや!? やよい!!」フアツ!」

突然、ラブドールが大声を上げた。

な、なんや!? さっきまで喘ぐだけやったのに!」

「わたしの名前はやよい! やよいです!! ブーケじゃありません! 他の女なんて呼ばないで、わたしだけを見てください!!」

ラブドールがワイに向かって叫んだ。

やよい……? こいつの名前か?

……そうか、理解したで!

これあれやろ! ラブドールに死んだ人の魂が乗り移って、成仏できないやつやろ!

こいつの言葉を聞く限り、多分彼氏に浮気されてヤンデレになった女の子ってところやろ (適当)

……もしかしたら、こいつを満足させたら、ワイは助かるかもしれない……!

そうと決まれば、ヤルことは一つや!

ワイはラブドール——やよいの手を「ギュッ」と握る

「……ふえ?」

「ああ……わかったでやよい。一緒に気持ちよくなろうや……」

「!? // // ……はい♡」

ワイはその言葉と共に、もう一度まんこにチンポをねじ込んだ。

手を恋人つなぎにしながら、ワイは腰を動かす。しかし、先程までの性欲に任せた一方的な交尾ではなく、お互いが気持ちよく愛し合うようなドスケベセックスだ。

「っん♡…気持ちいいです…♡さっきまでのも良かったけど、今はもっと気持ちいいですよ……はにょん♡」

ワイらは互いに交わりを楽しみ、部屋の中はワイらの荒い呼吸の音が響き渡っていた。

ああ……もつとやよいを感じたい!!

ワイは恋人つなぎをほどこき、やよいに覆いかぶさるように抱き着く。

その姿はまるで、なめくじの交尾の様だ。

「ああん♡そんなこと……♡ダメッ♡お顔が近くて恥ずかしい……♡」

やよいは恥ずかしそうに顔を赤める。

やよいの身体は、はにわのようにツルツルした肌触りだが、生物的な暖かさや柔らかさを持つ二面性ボディをワイは全身で楽しむ。

「はああ……やよい……やよい……」

「もつとわたしを呼んで♡わたしを見て♡求めてツ♡愛してツ!♡注いでツ!♡孕ませてツ!♡ああ……♡気持ち……♡……♡いいいいいいいい♡♡♡♡♡♡」

〃  
~~~~~  
!!!!!!  
〃

ワイはやよいの膣に精液を注ぎ込んだ。

不思議なことに、先程まで出しまくっていたのに、さつきとは比べ物にならない程の勢いと量で、ワイも射精の解放感で意識を失いそうになるほどであった。

「はあ……はあ……わたし、こんなに満たされてるの、はじめて……♡」

やよいがワイの耳元で囁く。

……満足そうやし、これでこいつも成仏するやろ。

……ちよつとだけ、本当にちよつとだけ、残念やなあ……



「ファッ!?お前ウサギの獣人なん!?!」

「はい、そうです……はによ／＼／＼」

ワイとやよいはベッドの上に座り、向かい合っていた。

あれからしばらく経っても、やよいは成仏せんし、ワイも呪い殺されないしで流石におかしいと感じたワイは、ダメ元でやよいとの対話を試みた。

そしたら、出るわ出るわ重要な情報が……!

とりあえず、長くなりそうやったから箇条書きにしたで!

・やよいはウサギの獣人。はにわっぽいボディは生まれつき

・ケモシコ島の近くの島でバカンスをしていたら、波にさらわれて海を漂っていた(その時に服も流された)

・ワイに釣り上げられた時には、意識を取り戻していたが裸を見られたのが恥ずかしくて声を掛けられなかった

・ワイのを見た瞬間、一目惚れして、素股で完堕ちしたとの事(↑これが一番意味が分からん)

だつて。

………ツツコミどころありすぎやろ!?!

この際、はにわボディのことや釣り上げたことは置いておく。どこに一目ぼれ要素あんねん!?!恋は何時でもハリケーンつか!?!ワイはウタ派や!!

しかも素股で堕ちたつてなんやねん!?!エッチから始まる恋はないつて前回言ったやんけ!

てか字面だけ見たら、ワイ海での遭難者を救出した後、家に連れ込んで監禁レイプしてラブドール宣言までした鬼畜野郎やんけ!鬼畜王ラ○スやんけ!?!

ああ〜!せっかくあいつらが留守だつてのに、何でワイは面倒ごとにまた首突っ込んでしまんやあ〜!?!

「あの……／＼／＼」

「あん？なんや、ちゅ♡?!」

ワイが頭を抱えていると、唐突にやよいに呼ばれて、そのまま頬へキスをされる。

突然の出来事に、ワイの頭は真っ白になった。

「はによ……あなたのお名前は……」

「えっ……タロー……やで」

……そういえば、ワイ自己紹介しとらんかった

「タロー……さん♡……いいお名前ですね♡」

やよいは、ワイの名前を噛み締めるように呟き、ワイに真っすぐ向き合う。

「タローさん♡やよいはあなたのことが好きです♡末永く幸せにしますので、わたしのことも幸せにしてくださいね♡……タローさんのやりたいこと、したいこと、なんでもしてください♡やよいは、あなた専用のラブドールです♡」

その後、やよいが可愛すぎて我慢できずに押し倒した

拝啓、母上様  
母上様は9と聞いて何を思い浮かべますか？

9は縁起の悪い数字と言われています。私も9という数字がとても重く感じます

こう言ったものは、風水的に悪いということなんでしょうか？

母上様も、縁起の悪い数字にはお気を付けください

敬具

P・S

この手紙を書いた後、9が10になってさらに重くなりました。  
10は世界の破壊者の数字で縁起が悪いですよね？

ワイ、ほっぺカエルに舐められる

「あつっくくく……」

最近暑くなってきたからすぐに汗かいてまうわ……

夏はまだのはずなのにこの暑さ……温暖化つてやつか？それか松岡○造がテニヌ実況でもしてるのか……後者やろなあ……

ワイはさつき収穫していたオレンジを口に運び、水分補給をする。

(熱中症は怖いからな！みんなも気を付けるんやで!!)

キンツキンに冷えて……ないです。ぬるいなあ……オレンジもこの日差しで温かくなつとるわ……

こんなことなら、家から飲み物持参するべきやったわ……

ああ、ダメやった。ワイ、今家に帰れないんだったわ……

何故家に帰れなくなったか、ワイはその経緯を思い出していた

時は少し遡り……ちょうど、やよいとの一件あたりの頃やな。

あれから、やよいとのセックスは三日三晩続いた。

……ここ最近、ワイは誰かしらとエッチしてたからか、ブーケ達  
が不在の中、肉欲が溜まりすぎて変なテンションになつとつたわ。

やよいもやよいで、さつきまで処女だったとは思えないくらい淫乱  
にワイを求めて来た。

ワイらは3日間の間飯、風呂、トイレ以外はベッドの中で過ごした。  
ベッドの中では、お互いの身体を好きに触りまくり、お互いの興奮  
が最高潮に達した時に挿入するという、付き合いたてのカップルによ  
うにイチヤついていた。

それこそ、イチヤつきに夢中になるあまり、玄関から入ってくる来  
客に気が付かないくらいに……

やよいとベッドでイチャついていると、突然「ガバアツ！」っと布団を？がされる。

交わりを邪魔されたワイはムツとなった。一体誰や！ワイの至高の一時を邪魔する不届き者は!!

「……………ずいぶんとお楽しみでしたね、タローさん」

「あらあらあ……………またハーレムを増やしましたのね旦那様、流石です♡」

そこには、呆れたようで、しかし顔を赤らめて何かを期待しているサリーとどこか嬉しそうなマリリーがいた。

……………あつ、これタヒぬわ。

「は、はによ!?こ、これは一体……………!?!」

「はあい♡旦那様の新しいお嫁さんですよね♡アタシはマリリー、旦那様の婚約者ですわ♡……………あなた、とおくつても可愛い娘ですわね♡それに身体つきもエッチです……………♡」くりゅ♡

「はにゅん!?そ、そんなとこ触っちゃ……………いん♡す、すごい……………♡」  
突如現れた2人に驚くやよい。そんなやよいに近づいたマリリーはやよいのおまんこやおっぱいを触り、そのまま百合エッチを始めてしまった。

うおお……………やよいもマリリーもえっろい……………♡じゃなくて!

「ま、マリリー!なにしてん!!」タローさん♡マリリーさん達も楽しんでるようですし、わたしたちも楽しみましょ♡ほらあ、タローさんの大好

きなおっぱいですよぉ♡」むぐう!？」

マリーを止めようとしたワイだが、止めに入る前にサリーに押し倒され、おっぱいを顔に押し当てられる

ああ♡サリーのデカパイ最ツ高♡

結局、ワイらはそのまま4Pエツチに発展してしまった……

そんなアクシデントもあつたがなんやかんやで、やよいとみんなの顔合わせが出来た後、やよいの住む家をたぬきちに建ててもらおうという話になったんやが、その時にやよいが「はによ？わたしはタローさんのラブドールだから、家に居ても問題ないじゃないですか♡私のごとは家具かなんかだと思ってください♡」という爆弾発言をしおつた。

そこから「ずるい!だつたらアタイもタローのお嫁さん兼ネコ型抱き枕だから一緒に住む!!」とか「タローさん、快適な安眠ができるダチョウの羽毛布団はいかがですか♡毎日気持ちのいい目覚めを約束しますよ♡」とか、自分も家具だからワイの家に住むと大騒ぎになつた。

というか、何やねんネコ型抱き枕つて!?!そんなもんあるわけ……ああ、そういえばそんな感じのドラえもん擬人化のエロ同人があつた希ガス……

やばいと感じたワイは、みんなが言い合っている間に、こっそりと逃げ出してきたというわけや……

あゝ……帰ったらあいつらが満足いくまでイチヤイチャコースやから帰りたくないわあ……

ワイはオレンジを食べ終わって一息つくくと、目の前の景色に目を向ける。

目の前には綺麗な川が流れており、太陽に光が反射して宝石のように輝いている。

こんな暑い日はやっぱ川に限るな!水場の近くに居るだけで涼しくなった気分やわ!これで川遊びをしている水着の女の子がいれば

文句無しやで……………

「ゴポゴポゴポ……………」

……………あん？なんの音や？

変な音が鳴っていることに気が付いたワイは、当たりを見渡す。すると、川からブクブクと泡が噴き出ていることに気が付いた。

なんやこれ……………暑さでついに川が沸騰したんか？せつかくやからここでラーメンでも作ってみるか……………

そんなアホみたいなことを考えていると、泡の勢いも量も段々と増して言っているの気が付いた。

これは…何かが川から上がってくるんか……………？

よく見ると、川の底から何かが浮いてくるような影も見えてきた。

ん？……………結構デカくね……………？それこそ、人間くらいの大きさのよ  
うな……………?!?

な、何が上がってくるんや?!ホラー展開はやいだけで充分やて!

2回連続はいらんで!!

「ザバア!!」

ワイが動揺していると、川から何かが飛び出し、大きな水柱が上がった。

水しぶきをモロに受けずぶ濡れになったワイは、ビビりながらも川から飛び出したものの正体を確かめる。

クリクリとした大きな目

明るい緑色のハリのある肌

大きくて真っ赤なほっぺ

大きな口から覗いている長い舌

……………あれ？こいつは…

「ん〜♪やっぱりこんな暑い日は川で泳ぐに限るでちゅ♪……………あれ？タローさん、そんなところで何してるんです？しかもびしょ濡れじゃないですか!?ダメですよ服を着たまま水遊びしちゃ!？」

「……………誰のせいや誰の……………」

ワイは川から上がってきたカエルの獣人——レイニーを睨みつけながら言った。

この世界に転生してから、犬や猫、ゾウなど様々な獣人をワイは見  
て来た。

しかも、そんな獣人の中にはハムスターやニワトリ等、前世ではあ  
まり聞いたことのない獣人も居った。

中でも一番驚いたのはカエルの獣人で「ファツ!?二足歩行のカエル  
とか絶対キモイやんけ!?せめて梅雨ちゃんレベルで可愛い娘にして  
クレメンス!」と絶対交友を持ちたくない獣人ナンバーワンであつ  
た。

そんな中、ケモシコ島に引っ越してきたのがカエルの獣人、レイ  
ニーであった。

最初は絶対に関わらないという鉄の意志を持っていたが、引っ越し  
初日に挨拶だけと思いきや家に訪問したら、会話が弾んでそのまま飯ま  
で一緒に食べる仲になってしまった。

レイニーは天然な部分があるが、話は楽しく、付き合っていて全然  
飽きない。それに、レイニーの笑顔は眩しくて、見ているこっちまで  
元気を貰えるのだ。



ワイは、カエルだからと意味不明な理由で距離を置こうと考えていた自分を恥じた。

そんなこんなで、レイニーとは今も仲良くしている。

「すみませんタローさん……………わたしが飛び出したばかりに……………」

「別にええて……………暑さでバテてたから丁度ええわ」ふきふき…

ワイはレイニーからタオルを借りて、体を拭いた。

うええ……………パンツまでビショビショや……………」

服乾くまでこしみのでも装備しておくか……………」

「あの……………わたしの着替えで良ければ、お貸ししますけど……………」

「いやー……………レイニーの服をワイが着るわけにはいかんやろ……………」

それに、お前もそんな格好やし……………」

ワイはレイニーの恰好を見ながら言った。

レイニーが今着ている服は、普段着ではなくスクール水着であった。ご丁寧に胸の白いゼツケンに「れいにい」と書かれている。

いくらカエルであっても、全裸で泳ぐのは恥ずかしいのだろう。

しつかし……………スク水とはマニアックやなあ…体のラインにぴったりとくつついた紺色の水着は完成されていて、まるで美術品やなあ……………」

最近のスク水も悪くはないが、やっぱり古き良き昔のスクール水着が一番やなあ…♡

……………はっ!?ワイは一体何を考えてるんや!?相手は両生類相手は両生類相手は……………」

「あの……………タローさん?」

「うえい!?そ、そういえば、レイニーはここで何してるん!?」

ワイが煩惱と激しい死闘を繰り広げている姿を不思議そうに見ているレイニー。

煩惱を悟られぬように、ワイは無理やり話題を変える（カエルだけにね!!…すまん）

「あつ、はいー今日は暑いので、涼むために川で泳ごうと思ったんです。久々の川遊びだから、長く遊ぼうとテントまで引っ張り出して張

り切っちゃいました／＼」

“にへへ”と照れ笑いを浮かべるレイニー。

その視線を辿ると、確かにテントが張ってあるのが見えた。

やっぱりカエルだから水が好きなんか……？それにしても、テントはやりすぎやと思うが……

「……あの、もしよかったらその……タローさんも一緒に遊びませんか……？／＼」

レイニーがなぜか顔を赤らめながらワイを誘ってきた。

……まあ、家には帰れないし、川で涼むつても悪くないか……どうせもう濡れとるし……

「ええで、一緒に遊ぼうや」

「わああ……はい！一緒に楽しみましょうね!!」

レイニーの顔が“ペアああ……”と明るくなる。なんや？そんなに川遊びがしたかったんか？

「ではさっそく一緒に……あつ、そういうば今朝の天気予報で午後から雨の降る確率が20%ということでしたが、大丈夫でしょうか……？」

「ぶっ……20でwwレイニー心配しすぎやってww気にするほうがあほくさいわwwww」

心配そうなレイニーをよそに、ワイはあまりの低確率に草を生やす。

20でwwwwつのドリルより確率低いやんwwwwww

そんな低い確率、当たるわけないやろwwww

「ザアアアアアアア!!」

はい、フラグ回収

ワイとレイニーが川遊びを始めて10分も経たないうちに土砂降りや。

……20%で土砂降りはおかしいやろ!?仕事しろや人工衛星!!

雨が降り始めてすぐにワイらはテントへと避難した。雨の勢いは結構強く、強行突破するにはしんどいため、ここで雨宿りしとるわけや。

ワイは濡れた服を脱ぎ、雑草で作った腰みを装備していた。濡れた服は今干しとるけど、この調子だとたぶん乾かんな……

レイニーもテントで着替えようとしたが「ああ!?着替えを忘れてました!」とのことだ。話を聞いたら、楽しみ過ぎてスク水でここまで来たらしいのだ……天然ってか、アホなんか?

そんなわけで、テントの中にはこしみのイケメンワケメンとスク水のカエルの2人がテント内で向かい合っているという奇妙な図が出来ていた。

……文面だけなら世にも奇妙な物語やな……スタッフに送ったら採用されへんかな?

「なあ……大丈夫かレイニー?なんか具合悪そうやで?」

「はあ……はあ……だ、大丈夫です……」

ワイの言葉に、レイニーは息を荒くして答えた。

テントに避難してからしばらく経って、段々とレイニーの顔が赤くなつていき、今では目も虚ろになっている。

「なんや?スク水で過ごしたから風邪でも引いたんか?年中身体が湿っぽいカエルがこれくらいで風邪を引くのかは謎だが……」

「はあ……はあ……た、タローさん……そこに寝袋があるはずなので、広げてもらえませんか?やつぱり、少し横になりたいです……」

「ん?別に構わんけど……具合悪いなら、ワイが走って薬買ってくるで?」

「い、いえ!多分……ううん、絶対横になつたら良くなります!!」

「お、おう……」

レイニーの圧に押されて、ワイは言われた通りに寝袋を広げる。  
ここをこうして……よし！これで良しや！南よ○や！（まったく似ていません！）

さて、さつきとレイニー寝かせて、楽にさせるか。

「レイニー、広げたd「タローさんッ!!」ドンッ！」

うおっ！な、なんや!?

ワイがレイニーを呼ぼうと振り向いた瞬間、何かに突き飛ばされ、寝袋の上に寝かされた。

目を開くと、ワイの視界いっぱいレイニーの顔が映りこんだ。

どうやらワイは今、レイニーに寝袋の上に押し倒されている様だ  
……………なんで？

「はあ……はあ……タローさんが悪いんですよ♡こんな雨の日に、そんなエツチな格好で2人きりでテントで過ごすなんて……♡もう誘ってるのしか言いようありませんよ♡」

レイニーが虚ろな目でワイに言ってくる。

さ、誘ってるってなんのことや……………!?

「ふー♡……ふー♡……カエルの女の子は、雨の日にとってもエツチな気分になるってこと、タローさんも知ってるでしょう♡それなのに、そんなに無防備な格好で……タローさんも期待してたんですよ♡……………エツチ♡」

戸惑うワイに構わず、レイニーが言葉を続ける。

……………ファツ!?そんな情報知らんのやけど!?

「タローさん♡……………レロオ……………」

レイニーが長い舌を伸ばし、ワイの顔を舐めまわし始めた。

うひい!?!な、なんやこの感覚!?!ベタベタの舌には不快感はなく、気持ちのいい場所を舐めてくれているため気分が高揚するのを感じる。

「レロ♡ペろ♡……………しゅる♡……………タローさん、おいしいですよ♡」

「レイニーーやめ……………あひいんー!」

「ふふ♡……………タローさん、女の子みたいな悲鳴上げちゃって……………かわい♡」

普段の彼女からは考えられないSっぽい表情を浮かべるレイニー。

レイニーに舐められ続けた結果、ワイのチンポは気持ちがいいのを察知し、期待するかのようになくなっていく。

「あつ……♡タローさん、やつぱりエツチさんですう……♡いいですよ♡川遊びより、もっと気持ちいいお遊びしましょ♡」

レイニーはワイのチンポを見ながら嬉しそうに言った。

カエルの歌が、聞こえてくるよ。

ギシッ♡ギシッ♡あんっ♡あんっ♡　ぱんっ♡ぱんっ♡いやん♡

いやん♡

ワイ、ほっぺカエルとぬるぬるする

「ケロツ♡……………ケツケロロ♡……………」

レイニーが恍惚の表情を浮かべてワイのことを舐め続ける。

その範囲は顔に留まらず、脇や乳首といった性感帯をねちっこく舐めてくる。

……………少し、本当に少しだけ……………気持ちいい……………♡

「れ、レイニー……………そこは…ひゃん……………」

「あははッ♡タローさんったら♡ひゃん！」なんて女の子みたいな声です♡とつても「かわいいですよ♡」

レイニーはワイの反応を楽しんでいるようにニヤつきながらその長い舌をワイの身体にあてがう。

くっ……………まるでデカイミミズが全身を這いずり回っているようや……………!!

舌で舐められている独特な不快感と気持ちのいい所を攻められている幸福感で、気分はワーム系の魔物に犯されてくっ殺している姫騎士や……………こんなに辛いんか……………一時期おかずにしてすまんかったわ……………

「えへへ……………♡タローさん、ちゅーしましよ♡ちゅー♡」

「んちゅ!?……………お♡っ!?」

レイニーに唇を奪われ、口内に長い舌を突っ込まれる。

な、なんやこれ……………!?今までディープキスは何度か経験があったが、カエル特有の長い舌で口内の性感帯を一気に刺激されて、色々な快感が同時に押し寄せてくる……………!?

く、苦しい……………!?でも、気持ちいい……………♡

♡ひくひく……………♡

あまりの気持ち良さに、ワイのチンポはひくひくと動き出す。

「口ばかりずるいぞー俺も気持ちよくしろ!!」と言わんばかりにイライラと血管が浮き出ているのがわかる。

「じゅじゅ……………♡ケロお♡タローさんのおちんちんさん、交尾したがつてますね♡ああ……………とつても大きくて、エッチな形……………♡」

レイニーがキスをやめ、ワイのチンポをうつとりと見つめてくる。  
レイニーの拘束が少し緩んだ…！今が逃げるチャンスや!!

「レイニー…すまんッ！」ドンッ！

「きやあ!？」

ワイはレイニーを押しつけ、レイニーの体勢を崩した。

レイニーが後ろにのけぞった瞬間、ワイはすぐに立ち上がりテントの出口まで走りだす。

外は大雨だけどしやーない！今すぐここから逃げるんや！

ただの逃げやないで！大逃げや!!今のワイはあのダブルジェット  
師匠やスズカさんをも超えるスピードやッ!!いっけ  
ええええええええ!!!

“にゆるり♡”

……………?

な、なんや？何かに引つ張られて動けん……………!?

というか、急に何かがチンポに絡みついてきたような……………?

頭に嫌な予感がよぎり、ワイはゆっくりと視線を下に落とす。

そこには――

“ぐるぐるぬちよーん♡”

レイニーの長い舌が、ワイのチンポをぐるぐる巻きにしていた。

えっ…………カエルの舌ってこんなに長いんか!?!てかなんでチンポに  
巻くねん!?!もつと巻くとこあつたやろ!?!

「ケロお…………♡だめでちゅよタローさん♡女の子がここまでやってる  
んですから、応えてあげるのが男の子でちゅ♡据え膳はちゅゅゅん  
と残さず食べてください♡」

レイニーがそう言いながら舌でワイのチンポを引つ張っていく。  
ちよ!?舌の力強ツ!?どんどんレイニーに引き寄せられるう!?  
チンポが引つこ抜かれないように、レイニーとの距離を詰めざるを  
えなくなり、ついにレイニーとの距離が0になってしまった。

“ヒシツ!”

「ふふふ……♡つうかまえたあ♡」

互いの距離が0になった時、ワイはレイニーにこしみのを引つpeg  
され、ガツチリホールドされてしまった。

レイニーはカエルだからか、肌が程よくぬるぬると湿っており、ひ  
んやりしていて心地いい。

「ほらほらあ……♡タローさんのおちんちん、わたしの舌に食べられ  
ちやつてますよお♡」

“ぬにゆ♡” “ぬにゆ♡” “ねちよ♡” “ねちよ♡”

レイニーが舌を動かし、ワイにチンポを扱き始める。

ぬうツ!?舌が何重にも巻かれて、ぷにぷに、ぬるぬるで、これはま  
るで舌のオナホ……否、舌のまんこや……!!

やべっ……!出てまいそうや……!!でも、相手はカエルや。カエ  
ルに出してしまつたら、ケモノー上級者になつてまう!!そしてワイは  
本当の意味で終わつてまう……!?

「れ、れいにい……やめ……うひい!」

「しこしこ♡ぬちよぬちよ♡……タローさんのおちんちん、すつごく  
熱いですう♡わたしの舌が火傷しちやいそう……♡」

そう言いながらレイニーは舌の先端がにゆるりと伸ばすと、ワイの  
亀頭のワレメをぬちぬちと刺激し始めた。

龟头と尿道を刺激され、ワイの腰が自然と前に出て行くのがわか  
る。

うああ……チンポにレイニーの唾液が入つて……!?

「ケロケロお♡気持ちよさそうでちゅね♡♡タローさんはおちんぽ舌  
で絡めとられるのが好きな変態マゾさんなんですね♡……いいで



すよ♡いじめられるのが大好きなマゾせーし、わたしにぶっかけてください♡」

レイニーの舌の動きが激しくなり、ワイのチンポをもみくちやにする。

あつ……マジで出………!!

“ぶちゅちゅちゅちゅゆるるるるるるるるるるるるるるるるるるる!!”

「ひゃんー………ああん、これがタローさんのマゾせーしなんです♡とつてもネバナバで、わたしの舌に絡みついてきます♡……ん♡」

そう言つて、レイニーはワイのチンポから精子で汚れてしまった舌を離し、その舌をそのまま口の中に戻してしまった。

“むぐむぐ♡くちゅくちゅ♡”といういやらしい音を立てながらワイの精液を味わうレイニー。

ワイのチンポから出たおたまじゃくし達が、カエルのレイニーの口で蹂躪されていると想像すると、何故かチンポも興奮し「賢者タイムなぞ知らん！」と言わんばかりに硬く、大きくなっていた。

「べにゅ♡………ぐええええええつぷ♡……うふふ♡タローさんのお汁、ごちそーさま♡」

レイニーが下品にゲップをしたと思うと、“あーん♡”とワイに口に中を見せてくる。

レイニーの口内は“ムワア……♡”と暖かそうで、涎が良い潤滑油になりそうで、チンポを淹れたら気持ちよさそうだ……♡

しかも、口の中には精液が全くない。ワイの精子を全部飲んだんか………♡

「あつ…♡タローさんったら、あんなにちんちんいじめられたのに、まだ出し足りないんですかあ？♡……………この変態ッ♡」

レイニーが衰えないワイのチンポに気が付き、罵声を浴びせてくる。

しかし、その顔は嬉しさを隠しきれていないのがわかる。

……………だ、ダメや！このままカエルとセックスするなんて、ワイはケモナー上級者になってしまう!?

……………こうなったら奥の手や!!

「さて、タローさんの準備万端ですしさつそく続きを「そおい!!」あれえ?」

ワイはレイニーの隙を見て、先程敷いた寝袋の中に潜り込む。

別に諦めてレイニーと寝ようとしているわけじゃない。この寝袋は一人用で、いくらレイニーが小柄とはいえ、二人入るのは不可能なはず。

つまり、実質この寝袋は、何者も寄せ付けないワイだけの要塞！ここに籠城すれば勝ち確や!!

これぞ、大槻ロールをリスペクとした『たロール』や！

「あれあれあれえ♡自分から寝袋に入っていくなんて……………しようがないエツチさんですねえ♡」

レイニーが嬉しそうにしながら、寝袋に足を突っ込む。

馬鹿めツ！この寝袋は一人用や！この鉄壁の城を攻略することは不可能や！

“にゆるん!”

そんな音と共に、レイニーはぬるりと寝袋の中に入った。えっ……ワイの無敵要塞は……？

レイニーが寝袋に入った瞬間、ワイの身体をぬるぬるとした感触が襲う。

……そうか！レイニーの身体のヌルヌルとした液が潤滑油になって、狭い寝袋の中でもあっさり入れたんか!?

「えへへ♡この寝袋は小さいから、お互いの身体から心臓の鼓動まで感じられますね♡」

ワイと向き合ったレイニーが笑いかける。

レイニーの言う通り、ワイらは狭い寝袋の中で密着している状態だ。

ワイの身体全体でレイニーを感じるができる。

スク水越しのレイニーの柔らかな身体、ぷっくりとした成長途中のような膨らみの胸と固く勃起した乳首、♡キyunキyun♡と蠢いてチンポを欲しがっているおまんこ、それら全てをワイが独り占めしていた。

そして、♡ドキドキ♡という鼓動も聞こえてきた。

これは……レイニーから聞こえてくるな……レイニーも、この状況に緊張しているんか……

「タローさん……そんなに見つめられたら、照れちゃいますう／＼」  
まじまじと見つめすぎたからか、レイニーが照れたようにはにかむ。

……かわいい、犯したい。

……はっ!?ワイは今何を!?

あかんあかん！ここに居たら、とんでもない間違いが起きそうな気がするう!?!早くこの寝袋から脱出しなければ!!

ワイはなんとか寝袋から脱出しようと藻掻く。

♡にゆる♡♡ ツルツ♡♡

しかし、動けば動くほど、レイニーのぬるぬるがワイの身体を侵食し、うまく動けなくなっていく。

「ひゃん♡タローさ……いやん♡そんなところ触って……タローさんのス・ケ・ベ♡」

ワイが動く度に、レイニーの身体にワイの身体がこすれて気持ちがいい。

レイニーも感じているのか、喘ぎ声を上げ始める。

「タローさん、もっと身体をこすり合わせましょ♡こすこすして、一緒に溶けちゃいましょ♡」

段々とレイニーの顔が気持ち良さに身を任せた ``とろん♡``としたものになっていく。

ワイの手は、脱出しようとさつきまで藻掻いていたはずが、今はレイニーのお尻に収まってその感触を楽しんでいた。

ワイとレイニーの乳首が互いにこすれ合い、チンポはまんこことすれ合い、愛を確かめ合う。

いつの間にか、この寝袋から脱出することより、レイニーと体を重ねて気持ち良くなりたいという考えがワイの脳を支配していた。

「タローさん♡きてえ♡もつとぬるぬるになりました♡」

レイニーがワイのチンポを手に取り、スク水をずらしてまんこのワレメにあてがうのがわかる。

``ぐちゆう♡``と音を立てて、ワイの亀頭の先端がまんこに侵入した。

ああ…入れたい…!!

「レイニー……！ワイも、気持ち良くなりたい!!ぬるぬるしたい!!」

「ほい♡いっっっっぱいぬるぬるしましょ♡」

「ずにゆううう!!」

「いやああああああん♡……入ってきたああ……♡」  
ワイはレイニーのおまんこにチンポを突っ込んだ。

レイニーのおまんこは身体よりもぬるぬるとしており、ワイのチンポにもぬるぬるになっていく。

「これが…セックス……♡きもちい……♡タローさん動いて♡わたしを使ってください♡」

ワイはレイニーの言う通りに腰を動かす。  
うおお……めっちゃスムーズに動く!!

レイニーのぬるぬるまんこに出入りするたびに、ワイのチンポは滑るようになっていきピストンのスピードも速まっていく。

「でちゆうううん♡タローさん、早すぎッ……♡わたし、初めてなのに、あん♡……感じちやいますうう♡」

レイニーも初めての快楽に戸惑いを感じながらも、気持ちよくなっている様だ。

レイニーとワイの体液で、寝袋の仲は「あつあつ♡」 “にゅちよにゅちよ♡” で全身がローションに塗れている様だ。

この暖かさとぬるぬる加減は、まるで子宮にいるみたいだ。

寝袋という名の子宮の中で、ワイはレイニーの子宮にチンポを突っ込んでいる。

赤ちゃんの部屋で赤ちゃんを作っている………なんや、変な感覚やな……♡

愛の結晶を育てる場所で愛の結晶を作るなんて………♡  
もしかしたら、男女の双子も子宮に居る時にこうして愛し合っているのかもなあ……♡

「ひいん♡タローさん、無心で腰振ってないでキスしましょうよ♡  
わたしはオナホールじゃないんですよ♡」

おっと!無駄に考えすぎたな。今は目の前の女に集中しなければ。

「すまんすまん……レイニー」

「タローさん……んちゅ♡」

ワイはレイニーと口づけを交わす。

口、身体、性器。その全てを重ねてワイらは今、真の意味で一つになっ  
ていた。

……………そろそろ射精でる…!!

「んちゅ……………レイニー……………そろそろ……………!」

「ちゅ♡……………タローさん、辛そうでちゅ……………♡いいですよ♡いっぱい出  
してください♡一緒に気持ち良くなりましょう♡」

ぶしゅしゅしゅるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる!! ”

「ひゃあああああああああん♡タローさんのお汁が入ってきた  
あああああ♡」

ワイはレイニーの中に射精した。

子宮に入りきらない精子たちが外に飛び散った。

ワイの精液もレイニーの体液もぬるぬるで、もうワイらの身体が何  
が原因でぬるぬるになっているのかわからなくなっていた。

「はー♡…はー♡……………タロー、さん……………♡…最高でしたよ……………♡」

レイニーの息が、ワイの顔に当たる。

レイニーが満足そうにワイにもたれ掛かってくる。

……………ふう、賢者タイムや…

両生類ツ!!

ついに両生類とやってしもうたあ!? 両生類はアブノーマルすぎるやろ!?

もうケモナーとかそういうの超えとるやんけ!?

ついに哺乳類かも怪しい娘とヤってもうああああ!.....い  
や、ちとせとやよいも怪しいか.....

「タローさあん♡.....その、もう一回しませんか.....♡」

ぬっ!? レイニーが耳元で二回戦を所望してきたあ!?

その目はねっとりとしていて、全てが吸い取られる錯覚を覚えてしま  
うほどに深く、暗かった。

ひっ! このままじゃレイニーに全て絞られてまう!?

「れ、レイニー! その.....ワイ疲れてしもうてな! 今日はずもうやめと  
こうや!」

本当は絶倫だからまだまだ余裕のよっちゃんイカだが、疲れたことを  
言い訳にこの場は逃れるで!

「あらあ♡それは大変ですねえ.....♡そ・れ・な・ら.....♡」

「ガバあ!」

そう言つてレイニーは寝袋に潜り込んでしまった。

な、なんや.....ツ!?

ち、チンポが、にゆるりとしたもんに絡めとられて.....!

レイニーの奴、寝袋の中でチンポを啜えとるんか!?

うおお! なんつーフェラテクツ!? こいつほんまにさつきまで処女  
やったんか!?

あつちよ...すご.....!! ああああ.....!!





ワイ、キザ男なりスの家に転がり込む

「ふんっふふふーん♪」

ワイは今、上機嫌でスキップをしていた。

機嫌が良すぎて鼻歌も歌う程やで。

ちなみに曲はけけボツサや。サリーがよく歌ってて、覚えてしもうたわ……

今日はおニューの靴を履いておでけや……昨日の雨で道が少しぬかるんでおり、足元は最悪やがな……あつ、水たまり踏んだ。おニューの靴があ……

……しかし！これからのことを思えばこんな事、屁でも無いわ！  
目的地に着くまでまだ時間かかりそうやな……しゃーない、この前のことでも語つたるか。

レイニーとのテントセックスはあれからも続き、いつの間にかお互いに抱き合って眠ってしまった。

ワイが先に目が覚めたんやけど、テント内のいたる所がぬるぬるでローションでも巻き散らかしたかのように悲惨な状態やった。

「ええ……」と戸惑っていると、レイニーが目を覚ました。

レイニーは昨日のことを思い出し、「わたししたら、なんてことを……／＼」と顔を真っ赤にして、「いやんいやん♡」と全身を左右に動かしていた。

そういえば、昨日のは雨が原因でレイニーが火照っただけで、事故みたいなもんやったもんなあ……

……これは、お互いになかったことにすればいいのでは？  
そう閃いたワイは昨日のことはお互いに夢だったことにしようとして提案したところ

「あつ、でもタローさんを好きなのは本当です。結婚を前提にこれからも子作りしてください♡」

と返されてしまった。

………なんでやねん！昨日のは事故みたいなものからノーカンでええやん!?そのままワイと関係持とうとすんなや!?

てか、結婚を前提に子作りってどういうことやねん!?順番逆やろ普通う!?

その後もワイの説得虚しく、レイニーはこのままワイと恋人関係になる決意はアンダーテイルの主人公のごとく揺らぐことはなかった。決意が硬すぎて、Sansも根負けするレベルやわ……

何とか家に帰った後も、前回の家具の話が続いていたらしく、ブーケたちがワイの家の家具ごっこを始めていた。

ワイ専用の抱き枕やらバスタオルやらオナホールやらを自称したあいつらにべったりとくつつかれて、もうヘトヘトや……（なお、大喜びで使用していた模様）

そんな感じでひどい目に合ったワイは、流石に疲れを感じていた。人間ハーレムというか……しばらく女の子と絡みたくない。

肝臓に休肝日が必要なように、ワイのチンポにも休チン日が必要や。今の時代、ブラック企業は駄目やから、ワイの金玉精子工場にも休みが必要や

そこでワイは良いことを思いついた。

せや！男友達の前を転がり込んだろ!!

いくらワイが島を離れても、どこに行っても女の子と出会ってしまつて疲れるから……

おまけに島を離れて戻ってきたら、浮気を疑ったブーケ達からまたしつぽり絞られてしまう。

だからこそその男友達や！男同士なら気を遣うこともなく、下ネタを言ってもそのままえちえちな雰囲気になる事もない。さらにブーケ

達にも浮気を疑われることはないんや！ワイが男ともやるようなホモ野郎なわけないからな!!（フラグ）

……ただ、「男友達の家遊びにいつてくる!!」とブーケに言った時「……タローの節操なし」と何故かジト目で睨まれた……あいつはワイのことバイかなんかやと思つとるんか！（その日の夜エツチはブーケの攻めが激しかった模様）

というわけで、ワイは今男友達の家へ向かっているというわけや。……なに？この島にワイ以外の男がいるのかつて？当たり前やろ！ちゃんと男も住んでるわ！……まあ、日に日に男が減つていったり、すぐに引越してまうことは多いが……

でも！少数でも男はいるんや！残った男は絶対に引越しさせんわ!!アイツらがいる限り、ケモシコ島がワイのケモノハーレムになる事はないからなあ!!（フラグ）

……おっ！回想タイム挟んだからもう着いたで!!

ワイは白と灰色の外観の家の前で立ち止まる。

本当は一本電話連絡しておくべきなんやろうけど、今朝は忙しかつたからなー連絡しとらんわー（ビアンカの裸エプロンに興奮していた模様）

……まあ、ワイとあいつの仲やし、アポなし余裕やる!!

ワイは目の前の家のインターホンを鳴らしながら叫んだ。

ピンポーンポーン

「ジューンくんツ！あつそびーましょー!!」

瞬間、ドタドタドタあ!!と家の中を走り回るような、急いで何かを片付けるような音が鳴り響いた。

そんな音が続くこと3分。もう待つことも飽きたのでドア突き破って入っておうか考え始めた時、ドアが「バアン！」と大きい音を立てながら開いた。

視線を少し下にずらすと、ドアを開けた主が「ぜえ…ぜえ…」と息を荒くしていた。

白くて美しい毛並み。

キザっぽい前髪

鋭いが、愛嬌のある瞳

そして、リス特有のふわふわのしっぽ

「ぜえ…ぜえ…：…毎つつつつ回言ってんだけど、突然来るのやめてくれないかなあ!?ボクにも都合があるんだけどお!」

ドアを開けたリスの獣人——ジュンは懇願するように言った。

ジュンは、ケモシコ島に住むリスの獣人だ。

しばらく前に、ワイが無人島へ小旅行に行ったときに「ね、ねえキミ!どこから来たんだい!」と食い気味に声を掛けられたのが出会いやな。

「なんやこのリス?」と第一印象は微妙やったが、話している内に意気投合した。

会話の流れで「ボク、今引越し考えててね…せっかくだからキミのいる島がいいなあ…：…なんて／＼」というもんやから、そのままたぬきちに連絡して引越しの手続きしたわ。

それ以来、ケモシコ島に住んでいる腐れ縁ってやつや。

そして今、ジュンの家に遊びに来て歓迎されてるっちゅうわけや!「歓迎してないから!?!い、今は家が散らかってるから後で来て欲しいんだけど…：…」

「え〜別にええやん。ワイ気にせんでえ〜」

「ボクが気にするのツ!!」

「ジュンが「意地でも入れないぞ!」というようにドアの前で手を広げ、通せんぼしている。」

何をそんなに慌ててんのや?

「男ならそんな細かい事気にすんなや。でっかく生きろよ男なら! つて竹○順○さん歌ってたやろ?」

「誰だよジュンコさんって!」

「なんやねん、今日はめっちゃ拒否するやん……さては、ちんぽこシコってたな! (RRM姉貴)」

「シコツ／／……そ、そんなわけないだろ!? キミじゃあるまいし!!」

ジュンのツツコミが炸裂する。

竹○さんを知らんとは……こいつメダロット見とらんな? 面白いから見た方がええで?

にしても今日は何時にも増してガードが堅いなあ……流石に毎回アポなしはやばかったか?

……こうなったら、いつものアレや

「そっか……こういう時に頼れるのはジュンだけなんやけどな」

「ツ!!……ぼ、ボクだけ……?」

「おう、ワイが暇な時に相手してくれるなんて、ジュンくんだけやで〜特別なんやで〜(棒)」

「そ、そっか／／……ボクだけ……特別……えへへ／／」

ジュンが照れたようにはにかむ。ちよろい。

「し、しかたないなあ〜! ぼ、ボクは優しいから特別に、そう特別に! キミを招待するよ!!……あつ、でも部屋掃除したいからちよつと待

「おう、邪魔するで〜」……ちよ!? 最後まで聞きなよ!」

ワイはジュンの返事を待たずに家の中へ入っていった。

ジユンの家の中は、まるでおしゃれなカフェの様であった。

オープンキッチンに高そうなソファ、グラントピアノも置いてあり、女の子が来たら「キヤーキヤー♡」と黄色い声を上げそうだなと思っただ。

「あー落ち着くわ〜……あつ！ワイコーヒーでええで！」ドカツ！

「……………人ん家のソファに堂々と座って飲み物まで注文するのはどうかと思うけど」

「え〜、ええやん、ワイとジユンの仲や〜ん。それだけ特別な仲ってことや〜ん」

「も、もう／＼しゆうがないな／＼」ニヤニヤ

ジユンがニヤニヤしながらコーヒーを準備してくれた。やはりちよろい。

……………もうちよいおだてたら、茶菓子とかくれへんかな？

「いやー、これでお茶菓子も出てきたら、もつと特別な仲になれそうな気がするわ〜」

「ほ、本当!?……………ごほん、しよ、しよがない奴だなくキミは／＼」

ニヤニヤに加えて、身をよじらせながらチェリータルトを差し出してくるジユン。

やったぜ。これ、もつとおだてたら、すごいものが出されてくるのでは……………!?

「わーい！そんな優しいジユンくんを愛してるで〜」

「?!／＼あ、愛……………!?……………うっ！」

ワイが次に何が出せれるのか期待していると、ジユンがうめき声をあげて、前のめりの姿勢になった。

「んおっ？どうかしたんか？」

「い、いや！何でもないよ!!……………うう、さつき中途半端で終わっちゃったから……………♡」

「あん？なんて？」

「あ、あー！ちよつとお手洗い行きたいなー！た、タローくんはくつろいでいてくれよ!!」

ジューンはわざとらしい大声を上げると、股間を抑えて奥の部屋に行ってしまった。

……  
……  
……

……まあ、いつもはキザったらしいジューンが人前でトイレに行くのは恥ずかしいもんがあるんやろ（適当）

その内戻って来るやろし、クッションにもたれ掛かってくつろいで待ってますかね〜（ゴツツ！）

………あん？なんやこのクッション、なんか固いような………？

ワイはクッションをパンパンと叩く………やはり、何か硬いものが入っているようだ。

なんでクッションにわざわざ硬いものを仕込むんやろ？………何が入ってるんや？

ワイはクッションの中を開けて、中身を確認する。

これは………ノートパソコンか？なんでこんなもんがクッションの中に………？

ワイはノートパソコンを開く。

パソコンを開いた瞬間、とある動画が再生された。

『はあ……♡はあ……♡ブーケ………ブーケえ♡』シコシコ……

画面には、ワイがブーケの写真でオナっている動画が映し出されていた。

………フアツ!?なんやねんこれえ!?なんでワイがオナってる動画があんねん!?

これはなんや…AIで作成したフェイクか？…否、映像の場所は間違えなくワイの部屋や。多分、やよいとエッチした時の映像やな…問題は、いつ撮られたのかや。隠しカメラでもあったんか？…というかなんでジュンのパソコンにワイのオナニー動画が映つとるんや…？

…あん？クッションの中にまだ何か入つとるな…なんや？  
ワイはクッションの中に手を突っ込む。

…円柱型のものみたいやな、中心に穴が開いとるな…  
ワイはクッションの中から棒状のものを取り出す。

それは、オナホールであつた。

…何故に!?さっきからクッションに入つてちやダメなもんばつか出てくるんやけど!?てかこのオナホ、生暖かくてベタベタするんやけど!?うえっ！絶対さっきまで誰か使つてたやろ!?

…ん？誰かつて…誰や？

ここはジュンの家やから…さっきまでオナホを使つてたのはジュンか…?

恐らく、ワイが突然家に来たから咄嗟に隠したんやろが…何故、パソコンも隠した？

しかも、パソコンの画面はワイのオナニー動画。これが意味することは…!?

ワイの脳内に、嫌な考えがよぎる。

や、やばい！すぐにここから逃げ――

「…バレちゃったか…まあ、いいや」



そんな声と共に、ワイは何者かに殴られ、気を失った。

ワイの名前はタロー新一！

幼馴染で自称ワイの嫁のブーケ（とその他）から逃げるため、ジュンの家に遊びに行つたとき、ジュンのクツションから怪し気なものを目撃した！

オナホに夢中になっていたワイは背後から近づいてくる男に気が付かなかった。

目が覚めたら、その男——ジュンに

「がぼお……………ずぬう……………ぶぶふう……………」

「ん……♡ふりゆ♡……………ああ♡……………気持ちいいよ、タローくん♡」

チンポを口に突っ込まれていた!!

……………最ツ悪や!!

アポトキシンで体が縮む展開の方がまだマシやわ！おねシヨタ展開も期待できるしな！（その場合、ナイルに完堕ちさせられる模様）てか、なんでジュンのチンポしゃぶってんねんワイは!?

「ふう……………♡ふう……………♡……………あつ、起きたんだタローくん♡」

ワイが目を覚ましたことに気が付いたジュンが、ワイの口からチン

ポを引き抜いた。

「ぶふおー……………えほっ！えほっ！……………じゅ、ジユン……………な、なにを……………!?」

「えへへ♡……………なになって、決まってるじゃん——

タローくんに、ボクのお嫁さんになって貰う儀式だよ♡」

ジユンが自分の手についたワイの唾液を「ペロツ♡」と舐めながら言った。

「…ファツ!?何とち狂った事言ってるねん!?お嫁さんって……………ワイは男や!!」

「……………初めて会った時から、ずくずくつと、思ってたんだあ♡この人に、ボクの子どもを産んで欲しいって♡」

ジユンが話を続ける。

ジユンの目は、黒く濁っており、漆黑という言葉がふさわしいと感じた。

「いやー、さっきはタローくんのオナニーを見てオナニーしてる時に家に来たから焦ったよ♡……………でも、あの動画ももういらないね。だって、タローくんもボクを愛してるんだから、相思相愛だもんね♡さあ、早くボクの雌になってよ♡」

そう言うとジユンは、再び自分のチンポをワイの顔に近づけた。

雄が雄を求めるのは、普通のことなんだよ♡

ワイ、キザ男なりスをわからせる

「じゅ、ジュンツッ！待っ！それじゃ続き、しよっか♡」がぼお!」  
ジュンはワイの制止を無視し、再び自分のチンポをワイの口に突っ  
込んできた。

口の中に、精液の何とも言えない味と生臭い匂いが広がっていく。  
「んっ♡…いいよタローくん♡その調子で、もつとボクのペニスを気  
持ちよくして♡…んにゅ♡」ビクビク…♡

ジュンは、この状況に興奮しているのか顔を真っ赤にして腰を振っ  
ている。

もういきそうになっているのか、口から涎を垂らしているのに気が付  
いていないほどに余裕がない様子だ。

それに対して、ワイはある事が気になっていた。

ジュンのチンポ、小さくね？

先程は意識を失っている間にチンポを突っ込まれたから動揺して  
いて気が付かなかつたが、口に突っ込まれたイチモツに、あまり不快  
感がないことに違和感を感じ、冷静になったから気づけたんや…

こちらら定期的にふたなり薬飲んだブーケ達に襲われてるんや!  
なめんなよ!!…言ってる悲しくなったわ…後、ワイは今舐めとる  
側やったわ…

にしても…ジュンのチンポ小さすぎひん？例えるならそうやな

……ワイのが魚肉ソーセージだとしたら、ジュンのはポークピッツやな。ギリギリたこさんウインナーにできないサイズの（ふたなり娘たちはフランクフルト）

やっぱリスだからイチモツも小さいんかな……

「ふっ♡ふっ♡……ど、どうだいタローくん♡ボクのペニス、大きいだろ♡」

ジュンが腰を振りながら語り掛けてくる。

……えっ？これでフル勃起なん……？

おまけに、皮も被ってる様やし……なんやろ、この童貞に押し倒されたけど、テクがまったくなって呆れるエロ漫画のギャルの気持ちかわかったような希ガス……

「ふああ……♡気持ちいい……♡……ちんちん蕩けちゃう……♡」

一方で、ジュンは気持ちよさそうに腰を振り続けている。

ワイに無理やりチンポを突っ込んだ張本人の割には、その姿にはまったく余裕がなく、今にもイってしまいそうになっている。

………なんか、からかいたくなってきた……♡

“チロツ♡”

ワイはジュンの皮被りの亀頭の中に舌を突っ込んだ。

「ふにゅ!? た、タローくん!? そ、それは……ほわっ♡」

亀頭から突如走った快楽に、ジュンは驚いた様子を見せる。

しかし、その中に淫靡な声が含まれているのを、ワイは聞き逃さなかつた。

ワイは皮を被った亀頭の中を、舌でぐるぐると舐めまわした。

「うわあ……♡キミの舌が、ボクのおちんちんを……!? やああ♡ダメ♡おかしくなりゆううう♡」

わたあめ機のように回りながら亀頭を刺激するワイの舌に、ジュンの身体は、快感に耐えるように硬直する。

ジュンのチンポは“ピクピク♡”と小刻みに動き、一番気持ちのいい射精の瞬間を見極めている様だ。

よし、そろそろイかせてやるか………!!

ワイは亀頭から舌を離し、代わりに唇を亀頭にあてがう。

そして――

〃めりゆめりゆめりゆう〃

一気に口の中に押し込み、包茎チンポの皮を剥いた。

「ひん………ぐあああああああああああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡」  
びゅーびゅうううううううう♡♡♡♡

ジュンが淫らかな大声を上げる。

それと同時に、ジュンのチンポから大量の精液が流れ出た。

ワイの口の中に、磯のような臭いと、ぬるぬるとした液体が充満する。

ふむ………さらさらであっさりめの汁やな…

ワイはジュンから放たれた雄汁を飲み干し、口からチンポを離す。

「はあ…♡はあ…♡お、男の子に、せーえき飲ませちゃった…♡」

ジュンは白目になりかけた妖艶な顔でボソツと呟く。

しかし、その顔は先ほどまで雄を犯していた者の顔ではなく、快楽に負けたがっている雌の様であった。

「はあああ♡………!?な、なにこれえ!？」

ジュンが自分のチンポに視線を向けると、驚きの声が上がった。

そりやそうや。さっきまで皮被り君だった自分のマラが、皮がずる剥けになったグロテスクなチンポが目に入ったんやから、動揺して当たり前や。

あせあせと慌てた様子 of ジュンを微笑ましい目で見えるワイ。

そんなワイの視線に気が付いたジュンは一瞬だけ〃ハッ!〃となつて、わざとらしく咳払いをする。

「んぐんっ…………ど、どうだい、ボクのペニスは？とつても立派で、今すぐに種付けして欲しくなるだろう／＼」

ジユンが腰に手を当てて、チンポを自慢げに突き出してくる。

堂々として男らしく見せようとしているが、声が震えて若干涙目になっているのを隠しきれしておらず、内心ビビっているのがバレバレや。

加えて、ずっと皮を被っていた亀頭が外界の空気と温度差に慣れていないのかさつきから「ピクピク…♡」と上下に震えている。

……ワイはホモではないが、短小のチンポが怯えるように震えている姿は少し可愛いものだと思えた。

「よ、よおし、タローくん！お尻をこっちに向けるんだ！」

「よいしょ…………」と言いなながら、ジユンはワイの身体をうつ伏せにさせ、ワイのズボンを脱がす。

「はあ…♡はあ…♡これが、タローくんのアナル…♡えっちなあ…♡」

丸出しになったワイの尻を見て、ジユンはうっとりとした表情をする。

……………よくわからんのやが、ジユンはワイの尻に欲情してるんか？

「ふー♡ふー♡こ、ここにボクのおちんちんを…………♡」

ジユンは「がしっ！」とワイの腰を掴み、短小チンポをアナルにあてがう。

ジユンは獣人やから、力は強いんやけど…………モニカやナイルより力弱いような気がするな……………ワイが本気出したら抵抗できるレベルや。

しかし――

「あ、あれ？…は、入らないよ…？え、えい！えい！！…な、なんでえ…………？」

何とかチンポをアナルに入れようとするが、我慢汁でぬるぬるになったチンポが滑ってなかなか入らずに涙目になっているジユンを見ると、なんだか抵抗するのが申し訳なくなってきた。

……ま、まあ？一回ぐらい付き合ってもええかという気持ちになつてきたで……ワイ、頭おかしくなつたんか……？  
そんなことを考えていたら

“ぶすっ♡”

ジュンのチンポが、ワイのアナルに入ってきた。

「うひゃああ……♡入ったよ♡今、ボクとタローくんは、一つになつてるんだね……♡」

ジュンは息を荒くして、この瞬間をずっと待っていたと言う様に感極まっている様子だ。

しかし、ワイはこの状況にもどかしさを感じていた。

くっ！ジュンのチンポが小さすぎて、ワイは全然気持ち良くないッ

!!

ジュンのチンポはワイのアナルの入り口辺りまでしか届いていなかった。

ブーケを始めとしたふたなり娘達に開発されたワイのアナルは、ジュンの租チンに満足しておらず、もっと大きい肉棒を求めヒクついていた。

「ふっ♡ふっ♡……タローくんのお尻気持ちいいよ♡まるでオナホールだね♡」

そんなワイの考えなど知らんと言う様に、ジュンは腰をへこへここと動かす。

よっぽど気持ちがいいのか、余裕がなさそうにワイの尻に乱暴に腰を叩きつける。

くそが！自分だけ気持ちよさそうにしおつてえ!!ワイだつて気持ち良くなりたいのに……!!

たまに見るマグロ系エロ画像の女の気持ちが少しだけわかつたよ  
うな気がした。

「ああ……♡だ、射精すよタローくん♡ボクの愛を受け止めてえ！ボクの雌になつてえ!!……う……ひいいいいん♡」

“びゅーびゅーびゅるるうう♡”

そんな情けない声と共に、ジユンはワイの雄膣に精液を流し込んだ。

しかし、チンポのサイズや射精の勢いが弱く、ワイの尻の入り口付近で精液が止めつているのを感じる。

ワイも気持ちよくなかったし、はつきり言って不完全燃焼であった。

ああ…ワイも射精したいい……………!!

“今すぐ家に帰れ！家で待っている雌どもを犯し尽くせ!!”

ワイのチンポの音が、脳内に響く。

そ、そうや…ワイの家には、まだやよいが、ワイ専用のラブドールが居るんや……………早く帰ってワイのラブドールで……………

「はあ…♡はあ…♡…き、気持ち良かっただろタローくん♡ボクの雌になりたいよね……………♡」

ワイがそそくさと帰ろうとする前に、ジユンがワイの腕を抱いて、縫るように言ってきた。

発情期の犬の様に腰を動かして、まだやりたりないとアピールしている。

「えへへ…♡ボクとキミの相性は抜群だよ♡もう、キミはボクのお嫁さんだから、思いつきり気持ちよくなっていいんだよ♡」

——ワイを嫁扱い……………だと？

“ぷっちーーーーーん!!”

その時、ワイの頭の中で、何かが切れた。



ワイの頭の中に、再び声が響いた。

“ああ、まだ家に帰らなくてもいい”

“犯すべき雌は、目の前にいる”

ああ、せやな

帰る前に、こいつに教えてやらにやあかんな

自分が、雌であるということ

「んー？どうしたの？タローk「調子乗んなよこの野郎!!」ふえッ!」  
突然黙りこくったワイを心配するジユン。

ワイはそのジユンを押し倒し、ジユンは驚きの声を上げる。

なにが『ふえッ!』や！チンポに響いてくる可愛い声上げやがつて

!!

「た、タローくん!?!いきなりどうして ぼろんッ!」……!!?」  
ジユンの言葉は途中で止まった。

ジユンの目の前に突き出したワイのデカマラに驚いて言葉を失ったのだ。

「はっ?……えっ?……な、なにこれ?お、おちんちんなの……?  
お、おつきい……♡」

ジユンがワイのチンポをガン見する。

先程まで皮被りの短小童貞チンポを大きい方だと思いついていたジユンは、目の前にそそり立つワイのイチモツを見て理解した。

本物の、雄のチンポを

「な、なんだよこれえ…♡お、お尻がヒクヒクするう♡」

ワイのチンポを見て、ジユンはアナルが“ヒクヒク♡”と動いているのに気が付いた。

まるで、強い雄のチンポを求める雌のおまんこの様にいやらしかった。

ジユンは、アナルの動きを治めるためにアナニーを始めた。

「はあ…♡ ああん…♡ ゆ、指じゃ足りないよお♡ おちんぽ欲しいよお…♡ ……た、タローくんお願い！おちんちん入れてえ！ボクのアナルでおちんちん気持ちよくなつてえ♡」

しかし、自分の指では満足できず、尻をワイに向けて煽るように“フリフリ♡”と振り、ワイのチンポを誘惑する。

……もう、我慢ならん!!

「ジユン!!」ガシツ!

「あん♡」

ワイはジユンの腰を乱暴に掴み

“ずぶずぶふうう!!”

チンポを一気に突き刺した。

「あ……ああああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

“びゅー♡びゆるるるるうー♡”

ワイがジユンにチンポを突き刺した瞬間、ジユンが射精した。

気持ちよさそうな声と共に、発射された精液は、ワイの中に出されたものとは比べ物にならないくらい量が多く、濃いものであった。

「ああ…♡き、気持ちいい…♡これが、キミのおちんぽ……♡」

ジユンは満足気な笑みを浮かべた。

……何勘違いしてるんだ！まだワイのバトルフェイズは終了してないZE!!

「なに一人で満足してんねん！ワイが気持ちよくなってへんやろがあ

!!

「ちよ?! そんないきなり……はあん♡腸が捲れるう♡」

ワイはジュンの制止を無視し、ジュンの尻に腰を叩きつける。

「パアン♡ “パアン♡” “みゆちゅ♡” “みゆちゅ♡”

いやらしい音を立てながらワイはジュンの尻を使う。

ジュンの尻は「キュウキュウ♡」とチンポを締め付け、精液をねだってくる。締め付けだけなら、おまんこにも引けを取らないだろう。

ジュンは淫靡な声を上げながら、射精したばかりのチンポを勃起させている。小さいイチモツが上下に「ブルンブルン♡」と揺れ動く様は、もはや芸術とも言えるくらいに美しく、そしてエロい。

ふと、ワイは部屋の中にあつたスタンドミラーに気が付いた。

あの大きさなら、全身がしつかり写りそうやなあ…

……ひらめいたで

「やん♡ひゃん♡……ふえ? タローくん?」

ワイはジュンを後ろから持ち上げて、鏡の前まで移動する。

鏡には、ワイに持ち上げられながら尻を掘られているジュンの姿が映った。

「おら見てみい、これがワイを嫁にするとかぬかした男の姿か? どう見てもチンポ突つ込まれて喜んどの雌リスやろがあ!!」

「ち、ちが……!?! い、嫌だ♡こんなエッチなの知らない♡こんなのボクじゃないい♡」

ジュンは必死に否定するが、言葉の端々からこの状況を喜んでいるような声色が聞こえる。

「安心せい、そんな変態リスはワイが飼つたる! お前はワイのペットや!! 毎日気持ちよくしてやるからなあ!!」

「ま、毎日……!……うん。わかつたよ♡ボク、タローくんのペトリスになるう♡だから毎日お尻を気持ちよくしてえ♡」

ジュンが自らワイのペット宣言をした。

よし、それなら証を刻まんとな……♡

「おらっ! ならワイの精液受け止めるよ!! ワイの物だつて証刻んだる



あああああああああああああああ  
!!!!ワイはなんてことをおおお!!

あれからしばらくジユンと交わり続け、賢者モードになったワイはソファアに座りながら後悔の念に押しつぶされそうになっていた。

「えへへ：／／タローくうん♡」

隣には、ジユンがワイの腕を抱きしめて雌の様に媚びている。

……………ついにケモホモにまで手を出してしもうたあ!?

ホモに手を出したことにさえダメーヅデカいのに、加えてケモホモって頭お菓子なるわツ!!

「うふふ…♡まさかこんなことになるなんてねえ♡……………あながち、

ボクはタローくんに種付けしてもらうためにこの島に来たのかもね♡」

ジユンがはにかみながらワイに言った。

ワイは男に種付けする趣味はない!!

ああ…なんでこんなことになってしもうたんや……………

こうなったら、タイムマシンを発明して過去のワイをブチ転がすしかない…!

そのためにはまず、バックトウザフューチャーとドラえもんの映画を視聴し「タローくん♡」……………ん?なんや?

ジュンに呼ばれて顔を向けた瞬間 “ちゅ♡” とジュンに唇を奪われた。

唇同士を重ねる軽めのバードキス。しかし、男同士でやるそれは、背徳感で途轍もなく興奮した。

「これからも、ボクとホモセックスしてね♡ボクの大好きなご主人様♡」

二人は幸せなキスをして終了……………するはずもなく朝までハメ倒した。

拝啓、母上様

最近、同性の友達と友情を深めました。

やはり、同じ性の友人は良いもので、異性間ではできない話や遊びが出来て楽しいです。

大人になったら、友人との交友機会も減ると思いますが、たまには母上様も旧友との仲を深めてはいかがでしょうか？

それでは、最近暑くなってきたので体温管理にお気をつけてください。

敬具

P・S

最近、友人が「お尻が痛い」と言ってきました。

痔でしょうか？ボラギールをプレゼントしたほうがいいですかね？

ワイ、ロリロリなりすとデートする

「ふあ〜……ねむっ……」

暖かな気温が眠気を誘い、ワイはあくびを漏らす。

こういう天気の日には昼寝でもしてのんびり過ごすのがワイの流儀やが、今日はそうもいかない。何故なら、今日は人と待ち合わせをしているからや。

ワイは今、ケモシコ島から離れた街にいた。

その街の広場にある噴水が待ち合わせの場所や。ここが定番のスポットらしいが……さつきからカップルが多くてうざいし、噴水の水掛かるしで正直うんざりしとるわ……

あいつもわざわざこんなところで待ち合わせせんでもええのに……

……待ってる間暇やし、回想でもするか……

ジュンと関係を持ってしまったあの後、結局ワイらは何度も交わってしまい、完全にホモホモしい関係になってしまった。

ワイは何度もジュンの尻に精液を流し込み、そのせいでジュンの腹はまるで妊婦のように膨れ上がってしまった。

……ワイどんだけ出してんねん!? 我ながら狂つとるやる!?

ジュンもジュンで『えへへ／＼／＼本当にタローくんの子どもを妊娠したみたい……』とか嬉しそうにすんなやツ!!

ああ〜……今思えば、あれは久々に狂戦士モード入ってたな……雄ケモにも反応するんかあれ……(狂戦士について? 詳しくはビアンカ回を読めやつ!)

さて、今まで節操なしの浮気し放題だったワイやが、流石にジュンとホモったなんてブーケ達にバレたら流石にまずい。

今日のことをなかったとこにしようとしてジュンに提案したら『そんなあ!? ボクはもう、キミのおちんちんなしじゃ生きていけないよ! そんなこと言うなら、今ここで心中してやるう!!』と男のメンヘラという誰得な状況に陥ってしまった。

何とか説得しようとして話合っていたら『ドガア!!』と突然ジュンの家の扉が蹴破られた。

『動くなツ！ケモシコ警察だツ!!チエキ!』

扉から現れたのは、何故かアメリカンポリス風のセクシーなコスプレをしたブーケ達であった。

突然の出来事に放心状態のワイらはすぐに拘束されてしまった。

拘束されてからは、本当にひどかった。

何故かワイとジュンがホモったことがみんなにバレており、おしおきという名目で例の薬でふたなりになったブーケ達に穴という穴を犯されまくった。

『ほらほらぁ♡雄チンポ啜えてアンアン喜んでるのはこの穴かぁ♡』

『フワワツ♡ご主人様だったら…女の子みたいにおちんぽ欲しがって可愛いです♡』

などと言われながら、いつの間にか縛られているジュンの目の前で犯されまくるワイ。

その光景を見て『ああ…♡ボクの愛する人が寝取られてる…♡』とチンポを勃起させながら変な性癖を開花させるジュン。

昨日まで島一番のオシャレな家とまで言われていたジュンの家が、雄の匂いで溢れ、部屋中白い液体だらけになっていく様は、まさに地獄絵図であった(なお、最終的にはブチギレたタローくんがみんな仲良く種付けしてあげた模様)

その後、ブーケ達は『まあ、タローは男の子と違ってエッチしちゃう変態さんだからしょうがないよね♡』とジュンがワイのハーレムに加わることに納得。ジュンも『ボクはタローくんに愛されるなら何でもいいよ♡』と満更でもなさそうで、その場は丸く収まった様だ。

………収まった様だやないわ!!少しは躊躇しろ!男がハーレム入りしとんやぞ!?!てか別にワイのハーレムとちゃうし!?!



ワイはツツコミ不在の恐怖に身震いした。

あれからしばらく経ち、色々なことがあった。

『たぬきちが浮気してる』という噂を流した結果、ヤンデレ化したあさみがたぬきちを監禁したり、オオカミ3人衆と『ラブラブ♡ケルベロス4Pセックス』したり、とたけけが来るという噂を聞きドーム会場を作つてとたけけを困惑させたり、着物を着たちとせ・やよいと『帯引き悪代官レイプごっこ♡』をしたり、リリアンに目隠し+バイブ+猿轡を装備させてSMエッチしたり……エロいことしかしてなくて？

………まあ、ええわ。その他にも、裏でとある事を進めていた。実は、今日街に来た理由も、そのとある事に関係している。

「タローさくらん!!」

おん?噂をすれば、丁度来たようやな。

ワイの真正面から『ぶんぶん!』と手を振りながら、小柄な身体を動かしてこちらにやって来る影が見えた。遠近法で小さく見えているのかと思いきや、その影は近くに来てても小さいままで、身長はワイの胸のあたりに来るかどうかという小ささだ。

「えへへ……待ちましたか」

「んん?そんなに待つたらんで?」

ワイに向かって微笑んでいた小さい影。

しかし、ワイの返事が気に入らなかつたのか『むく』と頬を膨らました。かわいい。

「むく……そこは『今来たところだよ』っていう場面ですよーデスー!」

「あーはいはい、今北産業今北産業」

「もう……」

小さい影は呆れたような表情を浮かべる。

……はあくしやーない。いっちよやつたるか。

「よつと」

「ふえ!? たたタローさん!?! / / /」

小さい影は戸惑った声を上げた。

何故ならワイが片膝をつき、小さい影の手の甲に口づけをして驚いたからだ。

その光景は、まるで王子が姫に首を垂れ、口づけをしている当てあつた。

!!  
……自分で王子とか、恥ずかしッ……もうやけや！押し切るでえ

「さあ、参りましょうか。ワイの愛しい姫——グミ」

その言葉を聞いたグミは、顔を赤らめながら「あわわ……／＼／＼」と焦っていた。かわいい。

グミはケモシコ島に住んでいるリスの住民や。

リスの獣人は他の獣人よりも小さいことが多いんやが、グミは特別小さい。はつきり言ってロリっ娘や。

本人もそれを気にしているらしくコーヒーをブラックで飲んでみたり、島の景観をもっと大人っぽくしようとしてワイに提案してきたりなど、グミなりに大人っぽく振舞おうと頑張っている。

……まあ、ブラック飲んだ瞬間にむせて涙目になりながらミルク追加したり、島の景観を遊園地っぽくしたらすぐくはしゃいでいたりなど逆に幼女感が増しているような気がするが……

しかし、根はとてもいい子でワイもよく世話になってるわ。

今日のお出かけは、ワイが秘密裏に進めていることの手伝いをしてくれたグミにお礼だ。

手伝いのお礼に何かして欲しいことはあるか聞いてみたところ『そ

れじゃあ……大人のデートがしてみたい………デス／＼』と照れながら言っていたので、今日はグミに付き合っつて街デートというわけや。

………しっかし………デート相手ワイでええんか？ワイの尻を犠牲にすれば、イケメンリスのジユンとのデートもセツティング出来たんやが……

………ん？ワイが秘密裏にやっつたこと？ああ、それは――

「た、タローさん！早く行きましよう！わたし、今日という日をずっと楽しみにしてたんですから／＼／」

グミが突然叫ぶ。姫扱いされて、少し照れている様だ。

………この話は、また今度やな。今日はグミの為に時間使うわ。

「おう、すまんすまん。今行くわ」

「タローさん………手、繋ぎましょ／＼／＼／」

グミが照れながら右手を差し出してくる。

ワイはその手を握り返すが………今の光景は、身長差も相まって大人のデートと言うよりは親戚の子の引率って感じやな……

「………えへへ♡」

………まあ、グミが嬉しそうだし、何でもええか

ワイらは手をつなぎながら、町へと繰り出した。

「んんん楽しかったデスう……♪」

グミは腕を真上に伸ばしながら、満足気に息を漏らす。

対するワイはゲツソリと疲れていた。

幼女………とか子ども体力ヤバすぎひん？

デート(グミ曰く)ということで、ウインドウショッピングからの結構いい店でランチという算段を立てていたのだが、途中で人気アニメ『ふたりはケモキュア!』のキャラクターショーに遭遇して『!!タローさん!ケモキュアですよケモキュア!!』と目を輝かせたグミがショーに夢中になったり、いい店のランチ予約してたのに某教祖っぽいピエロのハンバーガーが食べたいとのことで店のキャンセルをしたりで、散々であった。ケモキュアショーの時なんか、ワイ大きいお友達状態やったで……(最後の方は『がんばえけもきゅあく!』と幼児退行していた模様)

他にも『あれは何でしょ!』『あれ面白そうですよ!』などと子どもの好奇心全開で気になったものに全力ダツシユするグミに振り回されてヘトヘトやで……『大人のデート』ってか『年の離れた妹の同伴』をした気分や……

「タローさん!わたし、とっても楽しかったデス!付き合ってくれてありがとうございました!!」

グミがワイに満面の笑みを向けた。

………まあ、こんなに眩しい笑顔が見れるなら、安いもんやな。

さて、辺りも暗くなってきたし、そろそろケモシコ島に帰るk……

「あつ!もう夜ですね!!そろそろホテルへ向かいましょう!!」

………ん?ホテル?

「………グミちゃん、ホテルって何のことや」

「えっ?そのまんまの意味で、今日泊まるホテルに行きましょうって意味ですけど……」

グミが「何か変なことを言っただろうか?」という様な顔を浮かべる。

そっか?ホテルかあ………フアツ!?

「フアツ!?今日日帰りやないんか!?ワイ聞いてへんぞ?」

てつきり日帰りだと思っていたワイは、驚愕の声を上げる。

「えっ………だって、大人のデートって、お泊りが基本だって、ちゃ○に書いてあったし……」

グミが「えっ?何言ってるのこイツ」みたいな目をワイに向ける。

なんやこれ……ワイが悪いんか？

てか少女雑誌にそんなアダルトなこと書くなや○やおお!?

「も、もしかして……嫌、でしたか……?」うるうる……

グミが今にも泣きそうな不安げな表情を浮かべる。

うつ……その顔はずるいやろ……!!

「……まあ、ええで。こうなったらとことん付き合ったるわ……」

「ほんとですか!!ありがとうございますう!!」

グミが嬉しそうに「わーい!」と小さくバンザイする。

グミの涙目に負けてしもうた……破壊力抜群やろ……

もう『涙目のグミ』とか二つ名付けようや……目玉えぐり取られそうやからダメやな……

しかし、ホテルかあ……サリーの件もあつてホテルは結構トラウマになつとるんやがなあ……

……まあ、今回はロリータのグミやし、変なことは起こらんやろ

!! (フラグ)

「それじゃ、行きましようか!実はわたし、ホテルの予約取ってたんです!」グイグイ!

「おお、そんなに引つ張らんでもええやん……」

ワイはグミに手を引つ張られながらホテルへと歩き出した。

わざわざホテルの予約を取ってるなんて、グミはまじめちゃんやなあ……

「計画通り………デス♡」

何が、起つとるんや……!!?

ワイはホテルのベッドの上でゲンドウポーズを取りながら動揺していた。

ホテルの部屋は一般的なごく普通の部屋で、冷蔵庫やテレビ、ソファなどがある。

そして、真ん中には大きめのダブルベッドが一つ置いてあった。

「わーい！タローさん、このベッドとってもふかふかですう〜♪」ぴよんぴよん♪

ベッドの上では、同室のグミが「ぴよんぴよん♪」と飛び跳ねて遊んでいる。

…そう、グミと同室なのである。

しかも、ベッドは一つしかないのである……!!

ホテルに着いたワイらは、フロントで受付をした。

しかし、受付で渡された鍵を使って入った部屋は、夫婦や恋人用のダブルベッドの部屋であった。

最初は何かの間違えかと思ったが、グミが予約を確認したところ『あーまちがえてダブルベッドの部屋を予約しちゃったー(棒)』とグミの予約ミスが発覚したのであった。

ああ…ホテル予約は慣れてないとわかりにくいもんな……

ベッドが2つの部屋だと思っていたが、一つしかないのは辛いなあ

……受付で確認したら、今日は満室だつて話やし……今からだと電車も船もないから島にも帰れん……

……流石に、ロリ娘のグミとベッドを共有するのは犯罪臭がする。

だいたい、ワイはYesロリータNoタッチ主義者や！何とか同じベッドで眠るのは回避せな……!!

「はい、タローさん♪」

ワイがこれからどうするか頭を悩ませていると、唐突にグミがワイングラスを渡してきた。

グラスの中には、茶色っぽい液体が注がれており「しゅわしゅわ」

と音を立てていた。

「お酒は流石に飲めないので、コーラで乾杯しましょう♪」

グミが「ニコッ」と微笑む。

おっ！喉が渴いてたし、丁度ええな！これ飲んで考えよ!!

にしても、コーラかあ……やっぱグミはまだまだおこちやまやなあ  
……今日の大人のデートも、背伸びがしたいからなんやろなあ  
……

……こんなピュアピュアなグミと、間違いが起こるわけもないし、  
ワイの考えすぎかもな。気にせず同じベッドで寝てもええのかも  
……？

「かんぱーい！」

ワイはグミと乾杯し、コーラを飲む。

………なんやこのコーラあ!?!まっずう!?!まずすぎて実況界の王  
みたいな声出たわ!?

どこのメーカーやねん!?!コ○でもペ○シでもド○ペでもない  
………薬みたいな味や…

……………なんや、急に眠く………ZZZ

意識を失う前、ワイが見た光景は、どこかで見たことのあるキツネ  
の顔が書かれた瓶と——

「あはは………♡いっぱい楽しましょ、タローさん♡」

いつもの可愛い笑顔ではなく、見たことのない扇情的な表情をした  
グミの顔であった。

Y e s ! ロ リ ー タ !!  
G o ♡ エ ツ チ ♡



ワイ、ロリロリなりスのハジメテの雄になる

「Zzzz……う、うぐお？」

……ハッ！あかんあかん！何故か知らんけど意識飛んでたわ。

えーつと……気を失う前、ワイは確か……グミと街でデート（笑）して、色々あつてホテルに泊まって、コーラで乾杯してそれで……あれ？なんかこのパターン、ワイ知つとるぞ。

……いやいやまてまて！相手はあのグミやで？幼女やで？最近マせて来たからと言ってても、まさかグミがコーラに菓盛るなんてことするはずないやん。流石に考えすぎやでワイ君。

きつとあれや、デート（笑）で疲れすぎて気を失ったか、ワイが知らんうちにドカ食い気絶部に入室してて、コーラ飲んだ瞬間血糖値上がつて気絶したんや。ワイつたらお茶目やな〜！

そう、だからチンコがスースーするような気がするのも気のせいやし、ズボンどころかパンツすら履いていないような気がするのも気のせいなんや。

きつと目を開けたら、グミが『タローさんったら、急に寝ちやつてどうしたんですか？』と不思議そうに聞いてくるに違いないんや。

……さて、そろそろ目を開けるか！

ワイが目を開けた時、

そこに映った光景は、想像通り不思議そうな顔をして――

「わあー……これが男の人のおちんちなんですね…!!本で見たのやお父さんのより大きくてたくましいですう……♡」

ワイのチンポを観察しているグミであった。

……想像通りなわけあるかい!!

想像の斜め上どころかワープして宇宙空間行つとるやんけ!!

「ん?.....ふえ!? タローさん、起きちゃったんですか!?!.....おかしいなあ? あの薬は最低限1時間は眠り続けるってつねきちさん言ってたのに.....」

ワイは目を覚ましたのに気が付いたグミが、驚いた表情を浮かべる。

.....つておい! 今何気なく言っただろうが、ワイは聞き逃さんかったで!

またあのキツネか!! あいつまた変なもん売りおつてえ!! この前は秘蔵のエロ本で誤魔化されたが今度という今度は勘弁ならんわ! あいつの細目を無理やりこじ開けてタバスコ振りかけてやる!

てかワイ最近薬盛られすぎて耐性出来てると思うんやけど...ワイが小五郎のおつちゃんやったらコナン終わつてる説まであるで.....

「んくく.....でも、まあバレちゃったならいいや。逆に静かにやらなくていい分、気持ちよくなれそうですし.....」

「.....ハッ? 何しようとしてんや.....グミ?」

「えへへ.....こんな状況で、なにをするのーなんて.....タローさん意外とおこちゃまなんですな.....」

「わたし、今からタローさんを襲うんデス♡」

いつもの幼さを残したグミの顔からは考えられない程艶っぽい表情に、ワイは無意識に見入ってしまった。

「...ツ!!ぐ、グミ...襲うって.....」

「ああ、安心してくださいタローさん♡ 襲うって言っても、傷つけるわけじゃありませんよ♡ 性的に襲うって意味デス♡.....れいぷ? っていう奴デス♡」

「ファツ!?ほんまに何言うтонねん!」

「わたし、タローさんに出会ってからずっと変だったんです……タローさんのことを考えると、頭がボーっとしたり、胸やおまたの奥の方が〃キyunキyun♡〃したり…最初は病気なのかなって不安だったんですけど、この前読んだ本にこの症状がちゃんんと載ってたんです♡この症状は、大好きな人の赤ちゃんを宿したいっていう自然な反応なんですよね♡だから頭がそれしか考えられなくなったり、子宮がキyunキyunするんですよ♡」

グミが学んだばかりの知識を自慢げに話す。

だ、誰や!?幼女大天使のグミにこんな汚いこと教えた輩はあ!?

いくら知りたがりのグミと言っても、自分で成人雑誌やエロ漫画を手にとって読むはずがない。何かのきっかけがあつたはずや!

誰や……キツネか!?タヌキか!?天ぷらか!?月見か!?!?!?!?!怒り狂いすぎてうどんスープの話になつとつたわ……

とにかく!!ワイはグミを汚した奴を絶対に許さん!!見つけ出して袋叩きにしたるわあ!!

「グミ!そんなエツチなこと誰に教わったんや!」

「タローさんが隠し持ってた漫画で学びました♡」

すまん!犯人ワイやったわ!!

「そんなことより、さつそくエツチなことしましょうようよ♡わたし、お勉強したこと実践したいデスう♡」

そう言つて、グミがワイのチンポを触つて来る。

うっ……!触り方は恐る恐るといった感じやな……だが慣れていない感じが逆に興奮する……何考えとんねんワイはあ!?

「わわっ!お、おちんちんつてすぐく熱いんですね……♡でも、本に書いてあつた物をもつとキノコに近かつたような……?」

グミがご丁寧にワイのチンポ実況を始める。

幼女にチンポをサワサワさせているという背徳感が良いスパイスとなつて、快感がワイの全身を走り抜ける。

ぐっ……!このままでは実況どころかワイの射精RTAレコード記録まで取られてしまう……って何バカなこと考えてんねん!それよ

り幼女にぶっかけとか倫理的にまずいですよ！（世界の遠野）

そ、素数や！素数を数えて落ち着きんや!!

1…2…3…4…5…6…これ素数ちゃう！ただ数字言うてるだけや!!

ワイがバカなことをやっている間も、グミのちんちん愛撫は続く。そうしていると、ワイのチンチンはみるみるうちに天を直指して成長し始めた。生理現象は抑えることは不可能やなって…

「うわあ…！段々おつきくなつて来ました！本で見たものより、ずっとすごいデスう…♡」

グミがじつくりとワイのチンポを凝視する。

まだ幼い女の子に自分の雄の部分を見せつけている。本来であれば許されない行為をしているという事実には、ワイのチンポは背徳感と興奮でイライラを募らせていく

『メスガキがあ…！舐めてると犯すぞお…!!』

何処かで聞いたことがあるようなセリフが頭の中で響いたのを感じた。

「えつと…確かこうするとおちんちん気持ちいいんですよ♡」ゴシゴシ…♡

グミがワイの竿を握り、上下に動かし始める。

ヌツ！先程までの恐る恐るといった様子ではなく、加減を知らない子どもの様に強めに扱いとる…！乱暴ともいえるチンポの扱いに少し痛みを感じるが、これはこれでチンポに留めなく快感の波が襲ってきて気持ちがいい…♡

「へへへ…♡気持ちよさそうですねタローさん♡後は…男の人はこれも大好きなんですよね♡」ペロペロ♡

そう言つてグミがワイの亀頭を小さい舌で舐めまわし始める。

ペロペロキャンディーの様にワイのチンポを優しく舐めるグミ。強く扱かれる竿と優しく舐められる亀頭。グミは無意識に飴と鞭をワイのチンポに与えている。

グミの奴…性に関して天性の才能がある!?!可能性のケモノか!?!トランザムか!?!

や、やばい……！これ以上グミの性のレベルを上げてしまったら、ワイはえちえち幼女を誕生させてまう……！と、止めなくては！！

「グミ……こんなことやめ」「ちろちろ……♡しゅこしゅこ……♡おちんちんさくん♡気持ちいいですか♡」かはあッ！！

ダメや！グミの舌や小さい手が的確にワイの気持ちいい場所を攻めてきて、言葉を続けられへん！？

グミめ……勉強熱心なところある娘やと感心しとったのに、こんなえつちなことまで学習しおつてえ……！

あつ………イッ——！！

〃ドピユるるる！どびゅどびゅうううう！！〃

ワイのチンポはグミの手の中で果てて、隠し持っていた欲に塗れた汁でグミを汚した。

「ひゃあ！びつくりしたあ……熱くて独特な匂い……これが、赤ちやんの素なん德斯ねえ……♡」

グミは初めて見る男汁に少し戸惑ったが、すぐに学んだことを思い出し、手についたワイの雄汁を愛おしそうに舐め取った。

「ううん……変な味……でも、嫌じゃない……♡」

精液は決して美味しいものではない。

しかし、グミは自ら進んでワイの汚液を飲んでる。

年端もいかない幼女を白い液体で汚し、それを飲ませている。

そんな非日常の光景を前に、ワイは無意識に生唾を飲み込んだ。

〃じよわあああああああ♡〃

「……ッ!?あ、あれ!?な、なんで!?全然おしっこしたいわけじゃないのに……！」

ワイがグミの事を凝視していると、突然グミのまんこから水があふれてきた。

この匂い……もしかして、潮を噴いてるんか？

「い、嫌！お漏らしなんて恥ずかしい！み、見ないでえ……♡」

グミはお漏らしをしてしまったと勘違いをしているようで、手で顔を覆っている。

ふむ、性的なことを勉強したとはいえ、初めての潮吹きで戸惑っているのだろう。

それにしても…手コキとチンペロしただけで潮を噴いてしまうなんて、グミはしょうがない娘やな…♡

……せっかくの「ハジメテ」なんや。ワイがリードしてやるか…♡

「グミ…」ガシッ

「うわわ……た、タローさん?」

ワイはグミの両脇に腕を回し、上へ持ち上げる。

リスの獣人は普通の人間よりも小さいので、小さい子に高い高いをしているような構図になる。

グミは先ほどとは違うワイの様子に戸惑っている様や…

まあ、心配せんでお兄さんに任しとけ（ニチャア…）

「グミ…はふ……じゅるり……ペロ」

「うええ!? たたたたタローさん!? そ、そんなところ舐めたら汚いデスよお!」

ワイはグミを持ち上げたまま、グミのずぶ濡れまんこにしゃぶりついた。

グミの潮のしょっぱい様な、苦い様な独特の味がワイの舌を楽しませる。

ワイの唇が幼さ全開のプニプニまんこ当たっているだけで気持ちいい。ずつと吸い付いていたくなる柔らかさだ。

「いやあ…♡こ、こんなこと、ダメなのにい…♡」

グミはワイにまんこを舐められて目を思いつきり閉じて快感に耐えている。

肩で息をしているようで呼吸が深く、気持ちよさそうに見える。どうやら初めてながら感じている様だ。

これはもつと気持ちよくしてやるか…!

ワイはグミのまんこの上についている豆の様な突起——クリト

リスに舌を舐める。

「ッ?!?!?……う、うそ?!?こ、こんなの知らない♡あん♡……いやあん♡  
!?!?……こんなの、本にも書いてな……ひゃん♡……だ、だめえ♡……何か  
来る……♡……キチャウウウウウウウウウウ♡♡♡♡♡♡」

「ばっしやああああああああ♡♡♡ぶしゅ♡ぶしゅ  
しゅ♡♡」

グミは大声と共に、雌の汁を噴いた。

勢いよく発射されたそれは、ワイの顔のみならず部屋中を濡らし、  
雌臭が部屋中に充満する。

「え、えへへ……♡タローさんにおしっこ、飲ませちゃいました♡……  
癖になっちゃいそう……♡」

グミは虚ろな様子で呟く。

「どうやら、ワイに小便を飲ませてしまったと勘違いしている様だ  
が、それによって変な性癖を開きかけとるな……」

「さて、グミをクンニでイかせたわけだが——」

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……!!!」

その代償として、ワイのチンポは目の前のまんここと交尾しなければ  
収まらない程に勃起していた。

「……もう、我慢できへん!」

「あっ……♡タローさん♡」

ワイはグミをベッドに仰向けに寝かせ、まんこを「くぱあ♡」と開  
かせる。

産まれてから今まで、男を知らないかわいいピンク色の新品まんこ  
を目の前に、ワイのチンポは今にも爆発しそうだ……!

「じゃあさっそく……!!!」

挿入しようとしたとき、ワイはグミが震えているのに気が付いた。  
：そうか。本で知識はあるとはいえ、本番は怖いよな……  
大人として、ワイがリードせんとな……

「グミ……♡」

「タローさんちゅ♡」

ワイはグミにキスをする。

グミは一瞬だけ目を見開いたが、すぐにワイに身を任せるように腕をワイの首に周してきた。

舌と舌を絡み合わせるワイとグミ。よし、キスに集中している間に……ゆっくりと……

ワイはグミのまんこにチンポをあてがい、ゆっくりと挿入していく。  
く。

“ずぶう……にゆぶにゆぶ……！！”

「ツ!?」ギョッ!

グミが一瞬痛みを感じたようにワイの首に周した腕に力を籠める。  
しかし、ワイがグミを優しく抱きしめ、安心させるように背中を摩る。

すると、グミも落ち着いた様子になり腕の力を弱め、再びキスに集中する。  
中する。

やがてワイのチンポはグミのまんこに全て入っていった。

「グミ、痛くないか？」

「はい♡最初は痛かったですけど……タローさんが優しくしてくれたので、今は大丈夫です。むしろおちんちんがおまんこの気持ちのいいところに当たって気持ちいいです♡」

グミは眩しい笑顔でワイに向ける。

よかった。初体験はあまり痛みを感じなかったようやな……

しっかし……グミのまんこ小さくてキツいな。密着しすぎて少しでも動いたらイってしまいそうや……でも、思いつきり動きたい……! グミの未使用まんこを堪能したい……!

「うふふ……♡わかりますよタローさん♡動きたいんですよね♡わたしのおまんこ、いっぱいずぶずぶして気持ち良くなりたいんですよね



♡」

ワイがそんなことを考えていると、グミはこちらを見透かしたようにSっぽい笑みを浮かべる。

「いいデスよタローさん♡わたしみたいな小さい女の子とエッチしたいなんで、タローさんは変態で鬼畜のロリコンさんですね♡」

グミがワイをバカにしたようなことを言う。

このセリフは……ワイが読んでいたメスガキをわからせる系のエロ漫画のセリフや！

グミ：ワイがセックスを楽しめるように、勉強したことを生かそうとしてるんやな…

こんだけ気を遣わせてしまったんや。ワイも全力でグミを気持ちよくさせなければ…！

「何がロリコンやあ！ワイのチンポをイライラさせおつて、責任取れッ!!」

「あああん♡そんな♡初めてなのにこんなに激しく…やん♡ひゅん♡こ、壊れる♡わたし、壊れちゃいますう♡」

ワイはグミのメスガキ発言に怒り狂ったふりをしながら、ピストンを始める。

ぐっ?!き、きつい！キツキツすぎて、まるでチンポとまんこが一体化しているかのようや！

動くたびに陰茎とヒダが擦り合って、気を抜くとすぐに射精してしまいそうになる。

だが、我慢や！グミの初めてを、最高の物にしてやるんやあ！

「おおーなかなかいい具合やなあーガキのくせして、ごつつエロいまんこしてんなあ！」

「いやあ♡そ、そんなことないもん♡わたし、もう立派な大人なんですもん♡」

「ほーん…大人なら、もっとペース上げてもええよなあ!!」

「そ、それは…ッ!!♡♡♡♡は、早iiiiiiii♡こんなの、全然知らないよおおお♡♡♡♡」

ワイはグミの挑発に乗り、腰の動きを速める。

グミは襲い来る快感に耐えることができず、淫獣のように乱れる。だが、ワイもこの快感に耐えなくては…!

そう思ったワイは、グミの大きな尻尾を強く抱きしめ、射精を我慢するために踏ん張る。

むおお!?!リスの尻尾ってこんなにフカフカなんか!?!あまり意識してこなかったが、抱きしめた今ならわかる。まるで高級な布団の様にフカフカで、柔らかい毛がワイの全身を愛撫してきて、脳が溶けそうや…!

「ああん♡ダメですう♡しつぽなんかより、わたしとラブラブしてください♡」

グミは、ワイに抱きしめられている尻尾を見て、尻尾よりも自分を抱きしめろと嫉妬している。

しかし、キツキツまんことフカフカの尻尾の毛に乳首などの性感帯を刺激されているワイには、グミを抱きしめなおす余裕などない。

ああ……射精る!!

「あああはあ♡おちんちんの先っぽが大きく膨らんできて…きやん♡だめ、またおしっこ出ちゃう♡嫌♡お漏らし嫌♡いやいやいやいやイ……やああああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「どぼぼぼぼぼぼおおおおつぶびいいい!!!!!!」

ワイのチンポは、小さい女の子のまんこにも容赦なく白濁液を発射した。

ワイもグミも、快感で全身が震えているのがわかる。

射精が収まった後、チンポを引き抜くと「プシユアアアア!!」とグミが再び潮を噴いた。

…いや、この仄かに香るアンモニア臭は…ガチモンのおしっこやな。

「あ、あへえええ…♡頭、真つ白なおお…♡」

お漏らしをしているというのに、グミは恥ずかしがる様子はなく、初めての雌の悦びに打ちひしがれていた。

全身ワイの精液塗れの幼女……なんちゅードスケベな光景や……  
あっ……なんか冷静になってきた………

幼女に手え出してもうたあああああああ!!!!

今までは相手がギリ成人しとったからまだええ! (良くない)

今回はグミやで!? 未成年やで!? ロリやで!? ケモナー以前にポリスメン案件やんけ!!

ワイの頭の中に秋田犬とブルドックのおまわりさんがニツコリしながら手錠を持って近づいてくるビジョンが見える。

ま、まだや! 幸いグミは今、絶賛快感でトリップ中や! この部屋にまき散らされた体液やら臭いやらを片付けて、すつとぼければ夢落ちってことできる!!

後はグミに内緒でアフターピルでも飲ませればもしもの時も安心のはずや!

ワイの掃除力を舐めるなよ! ワイの前にはル〇バも裸足で逃げだすんや!!

グミが起きる前に、全部終わらすでえ!!

絶対に完全犯罪を成功させるんやあああああああ  
!!!!!!

5秒後、トリップから戻ってきたグミに普通にバレた  
誤魔化そうとした罰で、一晚中絞られた

拜啓、母上様

最近、島で仲良くなった女の子と街に遊びに行きました。  
自分より年下の女の子と出掛けるのは意外と楽しく、童心に帰るこ  
とが出来ました。

小さい頃に、妹が欲しくて駄々をこねたことを思い出し、懐かしさ  
に浸っております。

少し、実家が恋しくなったので近々里帰りするかもれません。その  
時は、よろしくお願いします。

敬具

P・S

私が妹が欲しいと言った次の日、父上が乾燥途中の干し柿の様に干  
乾びていたのを思い出しました。

あれは、一体何だったんでしょうね？

ワイ、ハロウインにクイズ大会をする

ハロウイン

それは大昔の人間が秋の収穫を祝うために行ったとされる祭り事の1つだ。

また、この日は死後の世界とこの世が繋がる日とされており、日本でいう所のお盆的な日でもある。だが、死後の世界から先祖の他にも悪霊がやって来ると信じられており、そいつらに紛れる為だったか、逆に怖がらせるためだったかでおばけの仮装をするというのが風習となった。

ハロウインで仮装した子どもにお菓子を配るのは、おばけ達に「お菓子をあげるからいたずらしないで」というお願いの意味合いがあるのだ。

ワイらが住むケモシコ島にも、ハロウインのイベントがある。

住民たちがお菓子を乞食し、お菓子を持っていなければいたずらと称して手持ちの家具を奪っていくという蛮族も真つ青の祭り戦や。

ワイも毎年のようにお菓子を要求され、最後には全てを盗られる……イベントが終わった後のワイはまるで追いはぎにでもあったような姿になるんや……

だが！今年が違うで！！

今年のワイは過去の過ちから学び、家から一步も出ないことを決めたんや！！

こんな時に家から出ても何のいいこともない！どーせ路上で酒飲みに絡まれて警察沙汰になったり軽トラックが横転したりろくでもないことが起こるんやろ!?(偏見)

それなら今日はワイは何があっても家から出ないし、客が来てもドアを開けへん！

今日この日の為に籠城の準備も完璧や！食料よし！お菓子よし！ハロウインをテーマにしたエロ本とAVよしッ！！

これから始まるのは収穫祭や仮装パーティーやない！ワイの性欲を満たす為だけのオナニーパーティーの始まりや！！

「…………と、思っと思ったんやけど…なんやこれ？」

ワイは今、暗い部屋の中で椅子に縛り付けられていた。しかも全裸や。

ワイに向かって照らされているライトの位置、明るさ、それによつてうっすらと見える家具から察するに。ここはワイの家のリビングで間違いなさそうやなく……

どういう事やねんツ!!

非現実的すぎて逆に冷静になつとつたわ!

えっ、何…これ? 怖いんやけど…ハロウィンだからって無理にホラー要素出さんでええやろ!!

ま、待て待て…落ち着け…まずは冷静にこういう状況になる前の事を思い出すんや…そうすれば、きっと何かがわかるはずや……!

← ワイ、窓とかドアの鍵を閉め籠城の体制を取る

← ワイ、食事を済ます

← ワイ、食後のオナニーのためAVを準備する

← ワイ、急に眠くなり寝落ちする

← ワイ、おはよー↑今ここ

……………なるほど、わからん

マジで唐突過ぎてわけ分からんて!?

なにがあつたんや？ブーケ達に邪魔されんようこの日の為に鍵も新調したんやで？

でも、この状況は第三者に手が入ってないとありえん状況や……

ま、まさか、本当に霊的なアレか……!!?

「パッ！」

ワイが困惑していると、急に部屋の電気が付いた。

眩しさに思わず目を閉じるワイ。段々と目を慣らせ、徐々に目を開くと――

「「「「「「「……………」」」」」」

「ファッ!?なんやこいつら!」

ワイが目を開くと、目の前にはカボチャを被つてお揃いの紫のスモックを着た不審な集団がワイを凝視していた。

怖ッ!?何この……何ッ!?シニールすぎるわ!多分霊的な何かではないやろこれえ!

つ、ついにケモシコ島にもテロリスト集団が来たんか!?人質ならワイよりタヌキの方がお金いっぱい取れるぞ!だからそつちを人質にしてクレメンスう!?

「……あー、おはようタロー君。手荒な真似して悪かったチエキね」

ワイが混乱していると、目の前のカボチャの一人が話しかけてきた。

なんか変な声やな…多分、カボチャの中にボイスチェンジャーを仕込んでるな。

……………というか…

「お前ブーケやる!?口癖隠せてねえーぞ!」

「な、何を言ってるのか分からないチエキー(棒)」

「またチエキって言つとるやんけ!?ボイチェン使うならもつと徹底し

ろや!!」

クソツ!よく見たらこいつらの恰好、ハロウィンイベントの時によく来るパンプキングの仮装やんけ!怖がって損したわ!!

こいつがブーケということは、他の奴らは多分ワイと関係を持ったケモノらやろ!

「あーもうっ!元はと言えばタローが悪いんじゃない!せつかくのハロウィンなのにずっと家に閉じこもっちゃって!!タローが出てきた瞬間、サリーがお菓子全部食べてみんなでいたずら(意味深)し放題になる計画が台無しじゃん!!」

「知らんわツ!!」

てかそんな恐ろしい計画立てとったんかこいつらあ!?もうこいつらが悪霊やろ!?

てか鍵は!?ワイの鉄壁の城砦をどうやって突破したんや!?

「鍵はどうやって開けたんや!?まさか、壊したんか!?もしそうならただじゃ済まさんでえ!!」

「あの……鍵はわたしが内側から開けましたです……はによ」

ワイが叫ぶと、カボチャ集団の中からやよいの声が出た。

………せやったあああああああ!なんやかんやで住む場所決まらないやよいをずっと住まわせてたの忘れとったわあああああ!!

トロイの木馬やったかあああああ!!

「あの……ブーケさん、そろそろ本題に入った方が……」

「はっ!そうだった……ん……んっ……タロー君、我々パンプキングは君に挑戦状を叩きつける」

隣のパンプキングに耳打ちされたブーケカボチャが再び話始める。

………挑戦状?

「我々の出題するクイズに全て答えてもらおう。1問でも間違えば罰ゲーム、全問正解で甘あ〜いご褒美を約束しよう」

なんやねん甘いご褒美って……アメちゃんでもくれるんか?……正直いらんなあ……

………まあ、こいつらに付き合わんと解放して貰えなさそうやし、



付き合っつてやるか…

「おう、ええで！言つとくがワイはクイズ大得意やで！ヘキサゴン毎週見てたからな!!」（なお、毎回全問ハズレだった模様）

「ふふふ…♡それは楽しみだ…チエキ♡」

ブーケがそう言うのと、他のパンプキング達がワイの周りを取り囲み始めた。

えっ…今から儀式でもすんの？傍から見ればカルト教団やで？

「タロー君、君に出題するクイズの内容を発表する。それは…」

その声が聞こえた瞬間――

「フアサア…♡」

「好きおまんこクイズだ♡」

全員がスモックをまくり上げ、おまんこを丸出しにした。

……………フアツ?!?!?

「フアツ?!なんやねんそのこの世の終わりみたいなクイズはあ!?!」

「ルールは簡単♡我々が顔、身体を隠した状態でタロー君のおちんちんを挿入していく♡タロー君にはそれが誰のおまんこなのか当ててもらおう♡」

ブーケカボチャが言っているのだろうが、もう他のカボチャに紛れてしまって誰が言っているのか分からない。

パンプキング達は、それぞれおまんこからいやらしい汁と垂れ流しており、雌臭い香りが部屋の中を支配する。

ワイこれと似たAV見たことあるぞ！まさか自分が当てる立場になるなんて思わなかったわ!!

しかも数！10人以上をノーミスで、しかもまんこだけで当てろなんて無理ゲーやんけ!?!

それと右から3番目の奴ッ！お前ジュンやる!? 一人だけチンポから雄汁垂らしてんのが丸見えや!!

「ふざけんなッ！こんなクイズやってられるかあ!!」

「フフフッ♡もう君は参加すると言っているのだ。今更取り消しなんて出来ないさ♡……………それに——

「ビンビンビーーーーー♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「君のおちんちんはやる気満々のようだぞ♡♡♡」

パンプキングの言う通り、ワイのチンポは部屋に充満するエツチな匂いとこのAVのようなシチュエーションに興奮が抑えきれずに、フル勃起していた。

…この親不孝愚息があ!?!少しは躊躇せいや!?

周りのパンプキンが、ワイの勃起チンポを見て熱い吐息を吐いたのが分かった。

あ、あかん…これはやられる…!

「それじゃあ第1問!」

その声と共に、1人のパンプキングがワイの前に出た。

「……………」

パンプキングは何も言わずにスモックを捲り、まんこをワイのチンポに「すりすり♡」と擦ってきた。

ぐっ…!これだけで射精しそうや…!!

「このまんこは誰のでしょう♡制限時間は射精するまで♡正解する前に射精したらゲームオーバーだ♡……………それでは、始め♡」

その言葉と共に、パンプキングは腰を浮かして——

「ずにゆん♡」

ワイのチンポを、おまんこで啜え込んできた。

「ツ~~~~~~~~♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

正体がバレないよう、声を殺して快感に悶えるカボチャ。

その姿の愛おしさに興奮し、思わず射精してしまいそうになるが、ワイは何とか耐える。

どうせ罰ゲームなんてろくでもない物に決まっとする…ここは何と少しでもクリアするでえ！

ワイはおまんこからヒントを得ようと、腰を動かしてまんこの感触を隅々まで調べる。

「ずち♡” ずち♡” タン♡” タン♡”

「……ツ♡……ハッ♡……ツ♡……♡♡♡♡」

声を上げないよう必死に耐えるパンプキングだが、吐息と共に漏れる嬌声が抑えきれていない。その声に挑発され、ワイのチンポも反応し、腰の動きを速める。

うう…今にもイきそうや…!!

………だが、このワイの全部を貪り食わんとするおまんこは…!!

「はあ…はあ……!!も、モニカッ!!お前モニカやろ!?!」

「アハッ♡正解よ、ダーリン♡」

ワイの言葉に、目の前のパンプキングが被り物を取り、中からモニカの顔が現れた。

よっしや！幸先ええでえ!!

「うふふ♡おまんこの具合でアタイだって分かるなんて、ダーリン凄すぎ♡ますます惚れ直しちゃう♡」

モニカがワイに熱っぽい視線を向けてくる。

…た、ただの偶然やしい！そんなケモノまんこで誰だかわかるわけ

ないやん!!

「おらっ! 当てたんやから早く次に代わらんかいっ」

「えー♡せっかく久しぶりの1対1のセックスなんだから、もっと楽しもうよお〜♡」

そう言つてモニカはワイから離れることを拒否し、さらにワイのチンポに縫つて来る。

おうう…ふ、深い…!!

「いいなあ…♡」

「うっ…♡みゆ…♡」

「わたしも…おちんちん欲しいデスう♡」

「も、もう我慢できない…♡リリアンさあん♡」

「いやあん♡レイニー、そんな風におっぱい触っちゃだめえ♡変になっちゃうう♡」

ワイらの交尾を見て、周りのパンピング達もそれぞれ自慰に耽つたり、隣り合う者同士でおっまいを揉み合ったり、カボチャをずらしてキスをしたりしてレズり合っている。

ワイを中心としたドスケベ空間に、チンポの興奮は最高潮に達した…!

「ダーリンのチンポ♡先っぽ、ぷっくりしてるう♡♡出そうなの? いよ♡いっぱい出してえ♡ああん♡イク、イクイクイク…♡ふおおおおおおお♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

“ぶしやああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡”

ワイはモニカの中に精液を打ち込んだ。

ワイの亀頭が揺れる度、モニカの子宮にワイのオタマジャクシ(意味深)が泳いでいくのを感じる。

「ダーリン♡ちゅー♡」

モニカはワイにキスをせがんでくる。

セックスの後という事もあつて雰囲気飲みこまれたワイは、モニ

カにバードキスをした。

「んちゅ♡レロツ♡ダーリンちゅき♡」

「ちよつとモニカ！後つつかえてるんだから早く代わりなさいよ!!」

しばらくモニカとイチヤついていると、外野からヤジが飛んできた。

…つつかえてる？

「んもう……急かさなくてもいいのに……ダーリン、またあとで愛し合おうね♡」

モニカはワイの耳元でねちつく言った後、名残惜しそうに離れる。

「……さて、タロー君。一問目は正解だ……では、次の問題だ♡」

パンプキングがそう言うのと、次の別のパンプキングがワイに近づいてきた。

あつ、そういうえばこれクイズやったわ………ということとは、あと十数人と同じことをする………つてコト?!

………ええい、ままよーやつたるわあ!!

それから、ワイの戦いは続いた。

それは辛く、険しい物であった………

「この全力で甘やかしてくるまんこは………ナイルやつ!」

「クフフ♡正解よ、アタシの赤ちゃん♡」

「このたどたどしくも締め付けてくる感じ………ちとせやつ!」

「ひゃん♡まぐわいでワタシだつて分かるなんて………おまんこきゅんきゅんしちゃいますう♡」

「ジュンやな。お前だけケツなのバレバレや」

「あああああん♡タロー君もつと♡もつと激しくボクを求めてえ♡」

………辛く!!険しい物であった!!(なお、全員に中出し決めた模様)

そうして連続して正解していき、とうとう最後の問題。

「消去法やが、このまんこを間違うはずがない…ブーケや」

「ぶしゆるるるるる!!」

「ちえきいいいいん♡せ、正解だよタロー♡」

最後の一人、ブーケに中出しを決め、ワイの全問正解が決まった。

ブーケの後ろには、中出しされた他の奴らが「はあ…♡はあ…♡」と息を荒くしている。

多分気のせいだろうが…みんなまだ満足していないような目線を向けてるような気がしないでもない。

「へっ♡へへっ♡…タローったら、おまんこだけでアタイ達が誰か分かるなんてスケベすぎい♡どんだけアタイらの事好きなのさあ♡」

ブーケと後ろの奴らの熱い視線がワイに刺さる。

…べ、別に偶然だし！お前らの事なんて何とも思つたらんしい!!

…だが、流石に疲れたわ…もうチンポも勃起そうにないし、今日のオナパは中止やな…

「それじゃあ…全問正解のタローには、ご褒美上げないとね♡」

そう言うと、ワイを縛っていた縄をほどき、スモックを着ているみんなが一列に並ぶ。

そういえばご褒美なんて話しあったなあ…なんやろ？

「じゃあみんな行くよ♡セーの…えい♡」

ブーケの掛け声と共に、全員スモックを脱ぐ。

「じゃーん♡どーよタロー♡」

全員がスモックを脱ぐと、その下に着ていたであろうコスプレの姿が現れた。

下着姿の様なサキュバス

ベビードールの様な姿の妖精

おっぱいやおまんこが丸見えのボロボロ服のゾンビ

逆に大事な所にニツプレスしかしていない真っ裸同然の魔女

男の情欲をそその様なおばけ達がそこに居た。

「全問正解のご褒美はあ♡エッチなおばけ達とのご奉仕満載♡とお  
くつても気持ちいいハーレム大乱交だよ♡」

ブーケの言葉と共に、それぞれセクシーポーズをとる雌共。

大きいおっぱい、小さいおっぱい、爆乳、ロリ乳、様々な乳房がワ  
イのチンポを誘惑する。

先程までの激闘で疲れ果てたワイのチンポも、目の前のエロおばけ  
達を退治せんとやる気に満ち、イキリ勃つ。

「あははっ♡タローったら興奮しすぎてオナニーしてるう♡  
……………オナニーじゃなくて、ちゃんとアタイ達に精液ちよーだい

♡」

その言葉で、ワイの理性は崩壊し、目の前のおばけ達に襲い掛かっ  
た。

その後3日3晩ハーレムセックスを楽しみ、ハロウインが終わって  
た。

拝啓、母上様

10/31はハロウインです。

ハロウインは子どもがお菓子を貰うイベントだと思っていたので  
すが、いつの間にか大人たちがお酒を飲んで騒ぎ出すイベントになっ  
てしまっていると感じます。

時代の変化なので仕方がないと思いますが、私は一昔前のハロウイ  
ンの方が好きです。

今のご時世難しいと思いますが、母上様の下にお菓子を欲しがる子どもが来たら、是非お菓子をあげてください。

敬具

P・S

役場の犬の職員さん「うう…タローさんハロウインの日に可愛い魔女さんのコスプレをしたのに何で来てくれなかったんですかあ…」と涙目で睨まれたのですが、これは私が悪いのでしょうか？



ワイ、アスリート系ウマむ〇めのトレーナーになる

「……入場はまだか……」

「ワー！ワー！」と騒がしい人混みの中、ワイはひとりごつ（ちいかわ）

腹減ったし、パンでも食いてえなあ……バター塗ったやつ。

……いやいや！あいつも今日まで禁欲して頑張ってたんや！ワイだけ美味しいもん食つとつたら罰が当たる！

かと言って、このまま人混みの中でただ待つってのも暇やしなあ……グミ回の回想でもしとくか……

グミとの街デート（笑）の時、ワイとグミはホテルにてスケベをしてしまった。

いくら薬を盛られたとはいえ、ワイは年端もいかないロリリスの処女を奪い、ゴムなし射精を決めてしまった。

途轍もない罪悪感とグミのまんこから垂れるワイの精液を見て興奮している自分に嫌悪感を感じ、頭を抱えるワイ。

そんなワイの事など関係ないとばかりに『わたしの<sup>子宮</sup>ここをタローさんのオタマジャクシさんが泳いでるのを感じますう……♡この子達が赤ちゃんになるんデスね♡』と腹の下の部分を聖母のような顔で優しく摩るグミの後ろに、般若のような顔のご両親と柴犬とブルドックのポリスマンの姿をワイは確かに見た。

ああ……ワイ、幼女虐待の罪でしょっぴかれんのかなあ……

途方に暮れるワイの頬に、何か柔らかい物があたる。そちらに視線を向けると、グミがワイの頬にキスをしたのだとわかった。

『タローさん♡わたし、まだまだ小さいですけどいつかタローさん好みのおっぱいが大きいエッチな女性になります♡その時は、わたしをお嫁さんにしてくださいね♡』

そう恥ずかしげに言ったグミに、ワイの中の何かが「プツンッ！」

と切れた。

こ、この幼女<sup>ガキ</sup>があ……！なにがお嫁さんや！なにがおつぴい大きいエツチな女や！チンポに響く言葉ならべおつてえ……舐めてると犯すぞ！

ワイの脳内にキレたタ○リのようなセリフが響き、そのままグミに再び襲い掛かった（ちなみにあのセリフ、タ○さんは実際には言つとらんで！完全に風評被害やから注意や!!もつと言うなら手○治○も『尾田君……見損なつたぞ』なんて言つとらんからな!!）

ワイにチンポをぶち込まれながら『あん♡あん♡』喘ぐ姿は、男女の綺麗なお付き合いを妄想している幼い子どもとは程遠い、雄臭い子種を求める一匹の淫乱な雌であった。

結局、ケモシコ島に帰るギリギリまでワイとグミは互いを求め合い、ワイもグミを何とか言い包めて諦めて貫う術を完全に失ってしまった。

ここまでやって関係なかったことにしましょうは流石にクズ通り越して外道やんけ……そんななんいくらワイでも出来へんわ……

とりあえずグミの事については解決策が見つかるまで保留という事にして、ホテルでの出来事はワイとグミの秘密という事でケモシコ島に帰つたんや。

もちろん、流石に幼女に手を出したとバレたら今まで築き上げてきたクールでナイスガイなワイの評判が最悪になってまうからグミには強く口止めしてな（そんな評判はない）

これで一安心やな！……と思つてたら公衆トイレにグミ連れ込んでワ○ベ（意味深）してたところをちとせに見つかつて普通ににバレたで……

その後はほんまにひどかつたわ……ワイと関係持った奴らみんな集まつて裁判みたいな事したり、ロリコンは病気だからという名目で代わる代わる搾り取られたり……もう思い出すだけで鳥肌ものやわ（なお、最終的に全員チンポで黙らせてグミもめでたくハーレム入りした模様）

『さあ、本日の主役たち、選手の入場だあ!!』

その時、ワイの真上スピーカーから興奮しきった声が響いた。

ツ!! あかん、これは回想しとる場合じゃない! 回想終了や!

ワイは人混みをかき分け、観客席とパドックを分けている柵のギリギリまで身を乗り出す。

他の観客たちも、ワイと同じようパドックから出てくる選手たちを何とか見ようと目を凝らしている

説明が遅れたが、ワイは今とある町のレース大会に来ていた。

馬の獣人たちがその速さを競うレースで、馬の獣人たちにとっては神聖で、特別なレースらしい。

入場口から次々に出てくる馬の獣人たち。その中に、ワイが見知ったメンコを身に着けた影が見えた。

よし! 見た感じ調子は良さそうやな! さあて、お前には今後のワイの人生がかかってるんや! なんとしてでも勝つんやでえ!

『それでは今日のレース参加者を紹介するぞー!』

『ゼツケン1番! ケモシコ島から参戦、セントアロー!!』

「やったれセントアロー! 絶対優勝せいやー!!」

ワイの声援が届いた様で、セントアローは“ニコツ!” と眩しい笑みを向けてワイに手を振った。

セントアローはケモシコ島に住む馬の獣人の一人や。

懐かしいなくワイ、最初この世界馬の獣人が居ると聞いて『ワンチャンウ○娘的な美少女来るんやないか!』と期待していたのだが、実際に対面してみたらガチで馬顔の獣人出てきたから血の涙を流したもんやで：

そこは流行りに乗って擬人化美少女にしてクレメンスう！馬顔女とか需要内ないわツ！セルラン1位舐めんなツ!!

期待しとつたんやぞお……！もしかしたらタ○キヤド○ウみたいなおっぱいがデカい馬耳美少女ときゃつきやウフフなエチエチ生活おくれるかもしれんてチンチンビンビンやつたんやぞお……！それなのに蓋を開けてみたらこれって……あアアあんまりだアアア!!（藤原ボイス）

……まあ、ガチの馬娘（誤字にあらざ）が来てがっかりしたワイやつたが、セントアローは誰に対してもフレンドリーな元氣っ子でモニカタイプの女の子やつたからすぐに仲良くなったわ。

それどころか、馬やからなのか荷物運びとか手伝ってくる事も多くて、島の発展にめっちゃ貢献して貰ったわ。ほんまにセントアローには頭上がらんでえ……

『タローちゃん！アタイのトレーニング手伝って!!』

そんな彼女が、ある時ワイにそう頼み込んできた。

詳しく話を聞いてみると、近々馬の獣人のほとんどが一度は夢見るレースの祭典があるそうなのだ。セントアローもまた、そんなレースに夢見る獣人の一人やつた。

こいつのレースキチっぷりはやばいで……普段からメンコ着用しとるし、暇さえあれば島中走ってるし……「スプリングゆうぐ」で部屋中まで競馬場っぽくしてるのを見た時は内心引いたで……

このようにセントアローはレースは好きで今までも色々なレースに参加していたのだが、何故か戦績は振るわずに1位を取った事が無いとの事であった。

そしてセントアローなりに悩んだ末にトレーニング内容を見直してみようと考え、ケモシコ島御用聞きみたいな立場であるワイに話を

持ち掛けてきたというわけらしい。

最初は管轄外やから断ろうとしたのやが、セントアローの目指す大会が結構都会で行われると聞いたワイの脳内に電流が走った。

せや！ワイが大会優勝馬を育てた男だつて言うて美女たちをナンパしたろ！！

当日はそのレースのファンも詰めかけるし、ワイが優勝馬のトレーナーみたいな事しとつたつて言うたらモテモテ間違いなしや！

“キヤー！キヤー！”と黄色い声を上げる美女たち、話は盛り上がり、酒も進み、そしてホテルへお持ち帰りをしてワンナイトラブ……あゝ——ちんちんイライラするわあ！

そう考えたワイはセントアローのトレーニングを手伝う事にしたのだ。

……えっ？お前トレーナーとか出来んのかつて？……まあ、ウ○娘普通にプレイしとつたし何とかなるやろ！ウララちゃんを有馬で優勝させたワイに任せとけつて！

そんなこんなで、ワイのトレーナー生活が始まったんやが……最初の頃は酷かつたでえ……

セントアローの言っていた我流のトレーニングは走り込みだけ、脚質とか考えなしの大逃げで毎回スタミナ切れ、運動したからがつつり食べても大丈夫理論のスイーツ天国で若干太り気味……そりや勝てんて……

それを見たワイは、セントアローのトレーニングメニューだけではなく生活の管理までする羽目になった。

スイーツの頻度を減らしてなるべく禁欲するように言い聞かせ、脚質を研究し、走り込みだけのメニューを改善し筋トレや水泳、瓦割りからボクシング、コサックダンスまで幅広いトレーニングをさせた（後ろ3つに意味があるかは知らん！）

そうしてセントアローは正しく鍛えられ、次々に地方レースで勝ちがついていき、とうとう目標のレースに出場するまでに至ったんや。

「ぐへへ…計画通り」

レースが終わり、ワイはホテルの自室にて新世界の神の様な表情を浮かべていた。

レースはどうなったかやて？そんなんセントアローの圧勝に決まっとるやん。

最終コーナーでは余裕の表情を浮かべる強者っぷりには流石のワイも震えたで…たぶんあいつUG9くらいはあるわ（確信）

表彰台上ったセントアローはまさに王者という感じやったわ。

記者とかもいっぱい群がったから、明日のナンパで知名度上げるためにわざとらしくセントアローに抱き着いたりして写真に写り込むように動いてやったわ。ワイの頭脳プレイにはLも脱帽やるなあ！（ガバガバどころかスカスカ）

おまけに副産物として裏でやっとなら博打でもセントアロー一点賭けしとったからウハウハや。これでナンパした女の子もワイにメモメロやろうし、最悪ナンパに失敗しても高級風俗で豪遊するとう選択肢もできた。まさにセントアロー様様やで!!

……そういえば、このレースに出場する前に『優勝したら、アタイのお願い聞いて!』とかほざいとったな……モチベアップの為に了承したけど、何お願いされるんやろ？

……まあ、あいつの事やしスイーツバイキングのパクパクですわあ!とか新しいランニングマシンが欲しいとかそんなもんやろ!ええでええで!博打で大もうけしたワイにとってははした金や!

レースの後はゆっくり休むという名目でこの街にはあと3日滞在するように予定組んだんや。ワンナイト用にコンドームも用意済みや!明日からの3日間、性欲の向くままに行動するでえ!!

“ピンポーン!”

ワイが明日からの性活を想像して心とちんちんを高ぶらせていると、ワイの部屋のインターホンが鳴った。

なんや？ルームサービスは頼んどらんし、ドアノブに札も下げたから清掃員も入って来ないはずやが……

「タローちゃん……アタイだけど、入っていい？」

ワイがインターホンを鳴らした人物について考えていると、ドアの向こうからここ数日聞きまくった声が届いた。

なんやセントアローか……今日はレースで疲れてるやろうからもう寝たかと思つとつたわ。あいつとホテルに戻った時に『ご、ごめん！アタイ先に戻るね！』と顔を赤らめながらそそくさと一人でホテルの中に入つてつたから具合悪いのかとも思ったが、大丈夫やったんかな？

「おう、今開けるでー」

ワイはそう言つてドアへと向かう。

にしても何用やる？……もしかして、例のお願い事の件か？流石にケモシコ島に帰つてからにして欲しいんやが……

そんなことを思いながら『ガチャツ』とドアを開けると、そこには先程一緒に喜び合つたセントアローの姿があつた。

「どうしたんやセントアロー……つてなんちゅー格好しとんのや!？」

用件を聞こうとしたワイの言葉は、途中で止めざる負えなかつた。

何故なら、セントアローの恰好があまりにもこの場に適していなかつたからである。

セントアローはホテル備え付けのバスローブ姿でワイの部屋の前に立っていたのだ。おまけにバスローブの隙間から少し肌が見えたのだが、その下は何も服を身に着けていない様なのである。

ちよ!?!確かに部屋同士の距離はそんなにないけど、ここまでその姿で来たんか!?!完全に痴女の恰好やんけ!明日の朝刊で『レース優勝者、ほぼ全裸姿で徘徊し逮捕か!?!』とかニュースになるやつやん!?!

今のお前、ただでさえ今年度のレース覇者という有名人なんやぞ!?!「どうしてそんな格好……ええい、今はどうでもええ!?!とにかく一回

部屋に入れ!!」

「きゃっ♡」

セントアローはワイに腕を引つ張られて短い悲鳴を上げるが今はそんなん気にしてられん!こいつが公然わいせつ罪とかでしょっぴかれたらナンパどころの話じゃなくなつてまう!

ワイは何かセントアローを部屋の中に連れ込み、ドアに備え付けられている鍵を全部ロックする。これでパラッチも入つて来れんやろ、残念やつたな!

ふうー、これで安心やで……というかセントアローの奴がバスロブ姿でうろつくのが悪いやん!嫁入り前の娘が何やつとるんじやこのバ鹿!!

これはトレーナー(笑)のワイがガツンと言つてやらんとあかんナツ!!

「セントアロー!何考えとr「んちゅ♡」むぐう!」

ワイの言葉が続くことはなかった。

何故なら、セントアローがワイの口を塞いだからであつた——  
セントアローの唇で

……ファツ!?これつてももしかしなくても接吻やんけ!

「んじゅる♡にゆるううう♡コポポツ♡じゅるん♡」

セントアローの舌が口内へ入り込み、ワイの舌を、歯を、口全体を犯していく。

馬の舌は意外と長く、人間同士では考えられない様な範囲を舐めまわすことが可能であり、ゾワゾワとした感覚の未知の快感だ。

長い舌でのキスはカエルのレイニーで経験済みだが、カエルとは比べ物にならない厚みのある舌は「プルプル♡」しており、頬粘膜に当たるだけで気持ちがいいと感じる。

……つて実況しとる場合かツ!?なんでワイはセントアローとキスしとんねん!?

「……つぶはあ♡……えへへ♡チューつて気持ちいいねタローちゃん♡」

やがて長いキスが終わり、セントアローは今にと蕩けそうな熱い視



線をワイに向けてきた。

「せ、セントアロー！何しとんねん!？」

「何って……レロお♡タローちゃんが悪いんだよ？『レース前は禁欲しろ！』だなんて言って……ペロペロ♡アタイ、大好きなご飯やおやつも我慢したし、毎日5回のオナニーも我慢したんだから……もう我慢できなくなっちゃったよお……ペロお♡」

セントアローはワイの頬を愛おしそうに舐めながら囁く。

…確かに『禁欲せえや！』とは言ったけどそれは食欲であってオナ禁せえなんて言うたらんはこのバ鹿!!…っかオナニー5回って性欲強いなこいつう!？」

つ、つまり……こいつは今禁欲が解放されて色々我慢できなくなってる……ってコト!？（ハチワレ）

や、やばい……この部屋に今食べ物はないから食欲を満たしてやることもできん……買いに行こうにも、セントアローに完全ホールドされとる今のワイには無理や。

おまけにセントアローの目を見たらわかるが、この目は狩人の目や。ワイの事を捕食対象にしか思っていない、少しでも動いたらやられる（意味深）！そう感じさせる「スゴ味」があるツ!!

「タローちゃん♡アタイ、レースに勝ったよ？だからさあ……♡」

我慢した分、いゝゝゝゝゝゝゝゝつぱい気持ちよくして♡♡♡♡♡

こいつら、うまびよいするんだ……♡